
魔法少女リリカルなのは～聖王と魔装機神～

黒彗星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは～聖王と魔装機神～

【NNコード】

N4679N

【作者名】

黒彗星

【あらすじ】

聖王オリヴィエは仲間の供養のために地球の日本に来ていた。その日本で仲間の兄と出会い結婚した。その後、オリヴィエは家族達に見送られてこの世を去った。それから約250年、聖王の血を受け継いだ一人の赤子が生を受ける。これはそんな赤子、高町なのはが仲間と共に復活した邪神ヴォルクルスや組織の闇と戦う物語である。

(注意1) チート作品でオリジナル設定やキャラ崩壊もあり原作とはだいぶかけ離れてしまいます。

（注意2）この作品の作者は文才や文章力の無い初心者です。

（注意3）この作品が処女作です。

（注意4）デバイスは全て日本語で会話します。

プロローグ（前書き）

始めまして黒龍屋です。文才と文章力の無い初心者ですがよろしく
お願いします。

プロローグ

事の始まりは、古代ベルカ一の国家である聖王家に多くの国々が同盟を組んで攻めて来てからでした。

同盟軍はそれぞれの国から進軍を開始しました。勿論、聖王家も黙つているわけも無く

それぞれにベルカ最強の騎士団である聖王騎士団を各地に派遣しました。

戦況は騎士団を派遣してからは徐々に押し返し、とうとう元の国境にまで押し返すことに成功しました。

その戦いで殆んどの兵力を失った同盟軍は切り札を使うことにしました。

その切り札とは破壊神の封玉の封印を解き、かつてラ・ギアスと言う世界を恐怖に陥れた破壊神、ヴォルクルスを復活させる事だったのです。そして、とうとう復活してしまったヴォルクルスですが、邪神は人に扱いきれるような物ではなく敵味方関係なく殺戮を繰り返したのです。

しかし、聖王家には今までの戦いにより既に僅かな兵と騎士しか残つていません。

そこで、聖王は聖王家最強の4大騎士を派遣することにしました。けれども邪神の進行は止まらず、4大騎士に疲れが見え始めたその時、4人の前に光が差し込みました。少しして光が消えるとそこには4つの魔道の器がありました。4大騎士はそれぞれの魔道の器と契約を結びました。魔道の器を手にしてからの4大騎士は疲れていたとは思えないほどの動きと力で邪神を圧倒していきました。

そして、とうとう止めの時が近いと感じた4人は止めの刺そうとした時、一人の神官らしき男が現れ邪神に取り込まれたのです。すると邪神も力を増し、4人にやや押されているものの再生を始めました。

それを見た4騎士は止めを刺そうとしましたがその隙をつか一人ずつ邪神の攻撃を受けて倒されてしまいした。

ですが、最後の一人が己の最強の一撃を放つことに成功し、邪神は倒されたかに思われましたが邪神はなんとか最後の力を使い最後の一人に向けて攻撃を放ちながら消滅しました。最後の一人も攻撃がよけきれず絶命しました。

そのことを知り怒りと憎しみに染まつた聖王は遺体や遺品を生き残つた騎士と兵と共にベル力最強の戦船いくさぶねである聖王のゆりかごに載せ同盟国を攻撃しました。

兵力の無くなつた同盟軍はなすすべも無く滅びの時を迎えるました。聖王が自分を取り戻した時に見たのは荒野となつた変わり果てたベル力の大地でした。既に人が住めるような土地ではなく、生き残つていた人達は絶望に包まれていました。それを見た聖王は自分がした事に対し後悔し、せめてもの償いにと、聖王家と同盟を組んでいた国々やミッドチルダ等の人の住める土地にベル力の民を移住させました。聖王はゆりかごを封印し、仲間の遺骨と遺品を持ち何人かの従者と共に姿を次元世界から消えてしまいました。その後、聖王達を見た者は誰もいないとされています。

その聖王の名はオリヴィエ・ゼーゲブレヒト。歴代聖王の中でも最強の力を持っていた女性である。

プロローグ（後書き）

短くてすみません。初めての小説なので色々難しいです。意見やアドバイスをもらえると助かります。ちなみに会話が無いのは詳しいことは過去編に書くからです。まずは、現代編からの執筆？です。次回は、オリヴィエ達が地球に降り立ちます。少し変更しました。

プロローグ2（前書き）

少し文の言葉使いを変えます。それと日本語や改行がおかしいとは
思います。が許してください。

プロローグ2

聖王オリヴィエ工と従者達が姿を消して半月の時が経つた。その頃、オリヴィエ工とその従者達は魔法文化や大した化学文明の無い150年後の未来で出来る時空管理局が第97管理外世界と呼ぶ地球に来て御神家と不破家という家の本家にお世話になっていた。地球に転移した場所は御神・不破の本家であつたが彼らに警戒されたが不破の当主が御神家と不破家は特殊な一族で御神家は護衛や拠点防衛を、不破家は暗殺や不穏組織の殲滅等を家業とする家だという事をオリヴィエ工に話した。そのことは4大騎士の一人であつたランドール・ザン・ゼノサキスから聞いていたので驚かなかつた。驚かなかつた事に疑問を持ち、不破家の当主でありランドールこと不破正樹の兄でもある不破騰樹はそのことをオリヴィエ工達に聞くと彼女らは彼ら御神家・不破家にとつて驚くべきことを口にした。

「不破正樹から聞きました。」と・・・・・。

周りが騒然となつたが騰樹の一聲で大人しくなつた。周りが落ち着いた所を見計らつて騰樹はオリヴィエ工達に詳しい話を求めた。オリヴィエ工達もそれに頷き、自分のこと魔法や戦争、邪神の事を話してから本題に入った。その時にまた周りが騒がしくなつたが騰樹に止められたのを見計らつて彼女は話を続けた。その話は、周りを絶句させるのに十分なほどの内容であつた。4年前に不破正樹は何故かベル力に召喚されて始めて会つたのが彼らの目の前にいるオリヴィエ工であつた。オリヴィエ工はそんな彼に対し事情を聞き、衣食住を与えたのだと言う。正樹はそれに対し働くことで恩を返そうとした。オリヴィエ工は良いと言つたが本人が気が済まないと言う事で仕方なく了承した。そこで彼が戦う人間である事と、魔力が多いことに目をつけたオリヴィエ工は文字と魔法を教えた。才能があつたようで正樹はそれらを1年でマスターし、オリヴィエ工もそんな正樹に騎士爵とランドール・ザン・ゼノサキスと言うベル力での名を贈つた。そ

の後、様々な任務をこなしていった正樹はとうとう聖王家最強の4大騎士の一人に数えられるようになる。それから一年、遂にあの戦争が起こってしまい、あの戦争での出来事や正樹が他の4大騎士と共に邪神と戦い最終的に相打ちに近い形で亡くなつたことを話した。更にはオリヴィエがその事で憎しみで暴走してしまい、ベルカの地を人の住めない不毛の大地にしてしまつたことを後悔したオリヴィエは民を人の住める土地に移住させたこと、この世界に来た理由も正樹の供養の為だと言うことまでも話してしまつた。

オリヴィエ達はそれらのことを話してから、謝罪の言葉と共に深々と頭を下げた。そのことには流石の騰樹も慌てて頭を上げるように言い、更にはそんなことしても正樹は喜ばないと諭した。

どうにか頭を上げたオリヴィエに騰樹が正樹のことを許し、この家に留まる事を勧めるも周りの人間とオリヴィエが難色を示したが、周りの人間には弟である正樹を保護して衣食住の面倒も見てくれて、更には職を与えてくれたオリヴィエに恩を返したいと答えて周りを黙らせてから、オリヴィエに対しても正樹もきっと望んでいふと言つた。こうしてオリヴィエ達は御神・不破家に住む事が決まり、家事の手伝いをするようになつていて。

あの話の後、二人で色々と話をしたらしくそこから騰樹とオリヴィエの二人は互いに惹かれ、愛し合うようになつていて。それから一人は結婚したり、子供が生まれたりと大変ではあるが幸せな日々を送つていた。

その50年後、オリヴィエの隣には既に騰樹の姿は無く、オリヴィエも病氣で倒れてしまい、自分の死が近いことを察したオリヴィエは一族全員を集めて遺言書を残しそれらを渡すとオリヴィエは安らかに息を引き取つた。

オリヴィエ・ゼーゲブレヒト 享年75歳

ちなみに、オリヴィエが残した遺言書は250年後にテロ組織の龍ロンが爆弾テロで御神・不破を滅ぼすまで守られていたと言う。しかし、御神・不破に生き残りが存在し、その生き残りの一人が正樹の生ま

れ変わりで、その妹が聖王オリヴィエの生まれ変わりであることや、
オリヴィエの魔道^{デバイス}の器達だけが消えていることにもまだ誰も知らない。

プロローグ2（後書き）

やはり、難しい。

それと前話を少し変更や改良しています。読みやすくなっているかは微妙ですが、文才や文章力の無い初心者の処女作ということで見逃して貰えたらなと思います。

次回はなのはが産れます。なのはが産まるる年などは違つてるかもしれませんのがご了承ください。文章も会話が入ります。はつきり言って表現などがかなり難しいですが頑張ります。ちなみに過去編は不破正樹がベルカに現れる所から始まり、オリヴィエが死ぬ所まで書く予定です。遺言書の内容も書くかもしれません。

序章1話 「誕生」（前書き）

どなたか私に文才と文章力や日本語力を下さい。

序章1話 「誕生」

オリヴィエが死去してから250年後、御神・不破が滅んでしまった。理由は御神・不破の結婚式の日に起きたにテロ組織龍による爆弾テロによるものだつた。それでも4人が生き残り、その内の一人である御神美沙斗は復讐のために生き残つた幼い娘の美由希を同じく生き残つた兄の不破士郎に預け裏社会に身を投じ、後の3人は比較的穏やかに暮すことを選んだ。そんな矢先、士郎は親友のアルバート・クリステラの依頼により護衛の仕事を受けた。結果としてアルバートや側近達は無事に帰国したのだが、士郎は巻き込まれた童顔の女性、高町桃子を庇つて重症を負つてしまふ。責任を感じた桃子は士郎の入院する病院に行き、看病していたのだがその時の看護婦さんの一言が切つ掛けで士郎がプロポーズし、桃子もそれを受け一人は結婚することとなつた。その際に士郎は、婿養子として生き残りの一人で息子の恭也と義娘の美由希と共に不破姓から高町姓に変えた。

その後、桃子が子供の頃から夢だつた、喫茶店を開くことになつた。喫茶店を始めてしばらく経つて、士郎はアルバートの依頼でイギリスに行つたのだが、そこでアルバートの娘であるフィアッセ・クリステラを狙つた爆弾テロが起きた。士郎も巻き込まれたが、士郎の胸ポケットから光を放したのを驚きながらもフィアッセを庇おうとした士郎とフィアッセを謎の青色の光が一人を守るように包み込み、士郎は怪我をせず平行世界のように死んだり、瀕死の重傷を負わなかつた。その時に、士郎が胸ポケットの中に入っていたのはこの仕事中は必要かもしれないと急に思い、お守り代わりに持つてきていったいた銀色の一本の小太刀をクロスさせたアクセサリーだつた。ちなみにそれは不破の秘宝の一つであつたが焼け残つた屋敷の中から見つけ出し他の秘宝と共に士郎が海鳴の家に持つてきた品物であつた。

その仕事が終わって無傷の士郎は帰国するアルバートに「店のこともあるし、何より娘が生まれるからしばらく休業する。」と言つた。その数カ月後の3月15日、待ちに待つた女の子が生まれた。そして、3月22日はそんな母娘と士郎達の面会の日であった。

場所：海鳴大学病院・204号病室

サイド：桃子

娘が生まれて一週間が経ち、今日はそんな娘と士郎さん達が初めて会う日であった。ただ、皆は驚くかもしない。なぜならその子の髪は金色で目が翠と赤の虹彩異色だったからだ。

医者や看護婦さんは珍しさから驚いて、かく言つ私も驚いた。我家系には無かつたはずだし、士郎さん達は黒髪だったからだ。もしかしたらかなり前の先祖のものかもしないと思つていたその時……。

コンコン（ドアをノックする音）

「はい、どうぞ。」

ガチャ（ドアを開ける音）

「桃子、入るぞー。」

「入るよ、母さん。」

「おか～さん、入るよ～。」

3人がそう言い終わるとバタンとドアが閉まった。

「ええ、じつちに来て。」

それに対し私も三人をベットの所まで誘つた。

「調子はどうだい？」

「問題ないわ。」

「そうか、よかつた。」

その言葉に私は頷くと隣で寝ている娘の方を向いて

「それより、皆が会いたがつてた子よ。」

それにつられて士郎さんや一人の子供達は赤ちゃんを見て、美由希が

「かわいい！～」

と少し大きめの声を出してしまった。

「美由希、もう少し声を小さくしよう。赤ちゃんが起きちゃうから」

「うん。」

と士郎さんは軽く注意し

「うそ、『めんなさい。』

美由希も素直に謝った。

「起きなかつたからいいよ。ついにえは髪が金色なんだな。」

「ええ、そうよ。それにこの子、今は寝てるから分からないけど瞳が翠と赤の虹彩異色なのよ。」

士郎さんは驚きながらそれについて何か思い当たるよひうで

「ほひ？ そつなのか？」

と聞いてきた。それに気づいた私も

「ええ、それよりも何か知つてそつね。」

と聞き士郎さんから事情を聞こうとした。

「まあな。けど、確定したわけじゃないから考えがまとまつたら話すよ。」

「分かつたわ。この子の名前はひうある？」

この子の名前については色々と候補があつたのだがその中でも

「前から決めてた菜ノ葉でいいんじやないか？」

そう、菜ノ葉と言つ名前が一番気に入つたのだが少し硬い感じがしたので

「やうね。けど漢字じや硬い感じがするからひらがなにしまじょひ。

「わかつた。じゃあ、市役所には高町なのはで登録しておくよ。」

「ありがとね。それと・・・・・。」

とこう風に娘の名前が決まってから少し別の話しおしていの間に、面会の時間は終わつてしまつた。

まあ、店のこともあるから仕方ないことだけれどもと思つ苦笑しながら私は産まれてから一週間しか経つていない我が子を見た。

視点終了

なのはが産まれた翌日

場所：？？？

サイド：？？？

「「ん~～～。」」

何処かの屋敷にある一室に銀髪と金髪の二人の少女が悩んでるかのように唸っていた。それを不思議に思ったメイド服を着た二人より年上

らしきの銀髪の少女が

「今朝から如何したのですか？」

と朝から気にしていたことを訊ねた。それに対し一人は「少し前から主そつくりの魔力を感じたのだけど、反応が小さいのよね。」

と銀髪の少女が答え、さらに

「うん、まるで赤ちゃんみたいに。」

金髪の少女もそう言うと

「そうですか。・・・・・では、オリヴィエ様の生まれ変わりが産まれたのかもしれませんね？」

メイドも理解し、その理由について答えた。

「かもね。まあ、ある程度大きくなつたら何処にいるかわかるはずだし、その時に探ししましょう。」

「そうしますよ。お姉さま。」

「お一人がそう言つのでしたら間違いないでしちゃうね。レミリアお嬢様、フランドールお嬢様」

二人の判断に間違はないと思いメイドはそつ言つて部屋を出ようとしたときに

「そうね、それはそつと咲夜？」

と銀髪の少女、レミリアが咲夜といつメイドを止める。

「はい、なんでしょうか？」

それに答え、レミリアの方を向く咲夜に対し

「お茶の時間にしましょう。」

ヒミリアが言った後に金髪の少女、フランドールがそれ続き

「じゃあ、あたしはケーキが食べたい。」

と注文をした。

「はい、恐りました。お嬢様方。」

と言い咲夜といつ少女は紅茶とケーキを用意するため部屋を出て行つた。

余談だが、その5分後に咲夜が一つのショートケーキと紅茶を持つてきた。

視点終了

序章1話 「誕生」（後書き）

遅れていますません。
駄文ですみません。

デバイスが発動したのは本作中で明らかになりますのでそれまで待つてください。

それと東方キヤラを出してみました。三人ともオリヴィエの従者だった方々です。咲夜についてはいずれ能力と共に明らかにする予定です。原作では吸血鬼姉妹だった二人の姉妹ですがこの作品ではなのはユニゾンデバイスとなります。過去編ではオリヴィエが主です。次回は士郎と美沙斗の兄妹が再会してなのはや美由希について話をします。

日本語や何か文章的に変な所があつたら勝手に改正していくのでご了承下さい。

序章2話「不破兄妹」

桃子となのはが退院してから一週間が経っていた。桃子はなのはの育児に翠屋にと大急がしである。

そんな中、夫の士郎は妹の美沙斗と一緒に美沙斗が拠点としている廃ビルの中にいた。

「よう、久しぶりだな。美沙斗」

「ええ、兄さん。でもどうして此処が？」

「知り合いが教えてくれた。それよりお前、香港警防に睨まれてるらしいじゃないか。」

と話す士郎に対し美沙斗は

「それも知り合いが？」

と驚きながら聞いた。

「ああ、それより今日はそんな話をしに来たわけじゃないんだ。」と別件で用があるようにいつ。

「どうしたことですか？」

と美沙斗が聞いた。

「家の桃子に子供が生まれたんだが、その子に少し問題があつてない方をする。

「なんですか？」

美沙斗も気になつたようで聞いてくる。

「お前も不破の人間だつたなら聞いたことがあるだろ？聖王という異界の魔法使いの王の話をな。」

と言い本題に入り始める。

「ええ、その話なら母さんに聞いたことがあります……ってまさか……」

と美沙斗は途中で士郎が何を言おうとするのかが分かり、それに対

し驚きの声を上げた。

「ああ、その可能性が高い。髪と田の色が一緒だつた。」

士郎は頷きながら理由を言った。

「これで虹色の魔力光なる物が出たら完全に聖王の復活ですね。」

「ああ、それとこれは俺と恭也に關することなんだが。」

と次の問題に入りました。

「兄さんと恭也にも何か？」

「ああ、俺は約一年前にある護衛の仕事をしてましたんだがな。その時に妙な現象が起つたんだ。」

「妙な現象？」

「ああ、護衛対象のいるホテルに爆弾を仕掛けられていた。で、それが爆発した時に対象の娘さんが爆破に巻き込まれそうになつたんだ。俺はその時、その娘さんと一緒にいて、その子を庇つたまでは良かつたが、そこに胸ポケットに入つていたこれが光つたと思つたら青色の光の幕が現れたんだ。」

と言つて士郎はあの時、自分とフイアッセを救つた小太刀がクロスしたアクセサリーをポケットから取り出して美沙斗に見せる。

「光の幕？ それに、これは不破の秘宝の一つじゃないですか！？ 何故それを？」

と驚きを隠せない美沙斗が何故持つていつたのか聞く。

「ああ、なぜか持つて行つたほうが言つてな。これが無かつたら今頃は墓の下か重症を負つていただろうな。」

と言つ理由ともしもこれが無かつた場合の事も語つた。それに対し「そんなん！！」

「しかも、その後に恭也に渡してほしいって言つ声が頭の中でしたんだ。それに、周りには俺とその子しかいなかつた。」

と驚く美沙斗に士郎は頭に声がし、そこには自分とフイアッセしかいなかつたことを語る。

「つまり、これが兄さんの頭の中に声をかけたと？」

そこで落ち着いてきた美沙斗はアクセサリーを指しながら士郎が考

えていいるであらう推論を語る。

「そうとしか考えられない。」

とその推論しかないと答えた。

「まあ、それは兄さんが一番分かっているのでしょうか、それだけではないのでしょうか？」

「流石は俺の妹の事だけはあるな。実はこれを恭也に渡そうと思つんだがお前にも一応は意見を聞いておこうと思つてな。」

「異論はありませんよ。それより今の私は御神ですよ？その私に不破の秘宝のことを聞くのもどうかと思いますが。」

と自分も問題ないといい、更には自分には関係ないのではと語る。

「それもそうだな。…………それより、お前はこれから如何するんだ？」

と納得し、美沙斗に今後のことを聞く。

「奴らを滅ぼします。その為に裏社会に身を投じたのですかい。」

「美由希に会わないのか？」

と士郎は美由希に会いたいであらう美沙斗に聞くが

「今更ですよ？兄さん」

と言い会わないと告げる。

「どうか、じゃあ『写真は？』

「それも遠慮しておきます。」

士郎は写真も進めるがこれも拒否した美沙斗。

「どうか。…………何か有つたらこの番号に連絡くれ。」

と言い士郎はメモを取り出してそのメモに自分の携帯の番号の書いてその部分だけを切り取つて美沙斗に渡した。

「分かりました。」

とメモを受けとり返事をする。

「じゃあな。」

と言い踵を返しながらいつ士郎に

「はい、兄さんもお元氣で。」

と返し、互いに挨拶を済ませると士郎は美沙斗がいる部屋から出て

行つた。

士郎が出て行つた部屋では美沙斗が悲しそうな顔をしていた。

数時間後

高町夫婦の寝室で士郎は桃子に美沙斗と会つたことを話し、更には美沙斗に語つたようになのはが魔法使いではないかという推論とその根拠を語り、あの事件で自分やフィアッセに起きた異変なども話した。そのことについて桃子はなのはのことはまだ分からぬけど、二人とも無事でよかつたから気にしないとだけ言つていた。

序章2話「不破兄妹」（後書き）

相変わらずの遅さと駄文です。

次回は恭也がある年上の少女と出会います。

序章3話「不破の秘宝」

士郎と美沙斗が再会した翌日

場所：高町家の道場

視点：士郎

早朝の鍛錬終了後俺は道場を出て行こうとする恭也を呼び止めた。

「恭也、少しいいか？」

「何？父さん。」

それに振り向いた恭也に

「実はこれをお前にやろうと思つてな。」

と俺は言いつつポケットから取り出した一本の小太刀の交差したア

クセサリーを恭也に渡した。

「これは？」

その渡されたそれを見ながら俺に尋ねる。

「これは不破の秘宝だ。」

その問い合わせることが分かつていたかのように俺は答えた。

「不破の秘宝？これが？」

不破の秘宝と言うのは実は恭也も聞いたことがあつたがてっきり小太刀の類だと思っていたのでかなり意外だつたのだ。

「ああ、秘宝自体が存在していることはお前も知つていただろうが、どういう由来でどんな形かはまだ知らなかつたはずだ。」

と言つ俺の言葉に頷く恭也を見た俺はさらに言葉を続ける。

「その由来は今から250年前にまで遡る。」

と言い俺は語りだした。内容は以下の通りである。

これらの秘宝は元々その時の不破の当主、不破騰樹の奥さんであるオリヴィエと言つ人が持つていたもので、そのオリヴィエと言う人は異世界の住人で聖王という魔法使いの王だったと言つ。そしてこれらの秘宝はその王に仕えていた者達の遺品であり、生前のその者

達を補助した相棒であり「魔法の補助具だつた」ということらしい。そしてその従者の一人に当主の弟がいたらしく、元々オリヴィエが不破に来たのも供養や家族に報告と謝罪をするためだつたと言つ。そして、オリヴィエが死去する前に遺言状にこれらを売らずに家宝としてくれと言うものがあつたのだといつ。

「とまあ、こんな感じだな。」

「それは分かつたけどどうしてこれを俺に？」

「実はな、これを前のイギリスの仕事のときに持つていつたんだ。」

「どうしてだ？」

「さあな、俺にもわからん。何故か持つて行かないといけないきがしてな。」

「で、それと俺にどういう関係が有るんだ？」

「うむ、此処からが本題だ。」

と切り出す俺に恭也は何時も以上に顔を引き締めた。

「実はこれがなければ、俺は死んでいたか瀕死の重傷を負つていただろうな。」

「なつ！…どうしたことだ？きちんと説明しろ！…！」

「慌てるな。今から話す。」

と言い恭也を黙らせて語りだした。

俺はファイアッセと一緒にホテルのパーティー会場に来ていた。そんな中、誰かがファイアッセ宛に送つたぬいぐるみが爆発したのだった。その時、ファイアッセはそのぬいぐるみから離れていた所にいたので直撃はしなかつたが爆風や破片が彼女に襲い掛かつたので俺がファイアッセを庇つたために前に出た瞬間にこのアクセサリーが光り出したと思ったら青色の膜が俺達二人を包み込み俺達を守つた後、俺の頭の中で私を恭也に渡してくれと言う声が聞こえたのだ。そのことを美沙斗に相談した結果、頭の声の通りの恭也に渡す事を決断したのだと語る。

「ま、そんなわけで受け取れ。」

「ああ、分かった。」

と頷き、返事をする。

「と、そろそろ飯の時間だ。いくぞ。」

と言いつつ道場を出る俺の後を

「ああ。」

と返事をしつつ恭也は道場を出て俺の後についていった。

その後、朝食を終えた恭也と美由希は一緒に何時も通り小学校に向かつた。

視点終了

その数時間後

場所：駅前

視点：恭也

学校が終わり、俺は帰宅した恭也は夕飯の買出しに行く。母さんに命令されて今は駅前にいたのだった。そんな中、俺は一つの人ばかりを見つけた。その中心にいたのは、ピンク色の髪の女性とあからさまに柄の悪い若い男であった。聞いていればナンパをしているようでその男はしつこく付きまとつていた。

恭也が見たところその女性は少し具合が悪そうに見えた。

（あの男、あんなに側にいながら彼女の様子に気づいてないのか？）
そしてそんなことも気にせず男は少女をお茶に誘おうとする。

「ね～ね～、良いじゃんかよ～。」

「お断りします。友人と待ち合わせていますので。」

と勿論少女も嫌なので断るが男はまだ食い下がる。

「そんなこと言わずにさ～。ちょっとお茶するだけなんだからさ～。」

「他を当たつてください。」

と言つた後、男は遂に切れだした。

「そんなことどうでも良いんだよーー。ひとつと俺に付いてくれば良いんだよーー！」

「きやあーー！」

と言い、悲鳴を上げる少女の手を強引に取り、どこかに連れて行こうとした時。

「いい加減にしたらどうだ！－！」

と俺は怒りを抑え切れずにそう叫んだ。

これが未来の聖風魔装騎士と未来の聖水魔装騎士の出会いであった。視点終了

序章3話「不破の秘宝」（後書き）

相変わらずの駄文です。

とらハーハーのヒロインのさくらさんは出しました。最後の文のようにさくらさんは夏頃に恭也と一緒に魔道騎士になる予定で、更には恭也の恋人になる予定です。

理由は単に私の好きなキャラだからです。他にもそういう好きなキャラや魔法や設定を出そうと思います。

それと恭也の嫁については裏技で一人か一人に増やすかもしれません。

序章4話「駅前にて」

視点：さくら

私は先輩であり友人の相川先輩達との待ち合わせのために駅に向かつていた。その途中、見た目からして柄の悪い男に絡まれてしまった。男は待ち合わせがあるからと言つて断わり続けても聞かず纏わり付いてきた。そんな中、私は貧血を起こしてしまった。そのことに気づかない男は怒鳴りながら強引に私を連れて行こうとして手をつかんできたその時

「いい加減にしたらどうだ！！！」

と言う怒鳴り声が聞こえたのでどうにその声の方を向けると、そこには10歳くらいの黒尽くめの美形の少年が男を睨みながら此方にやつてくるのが見えた。男も少年を見て声の主だと認識すると

「んあ？ 何だ餓鬼か。テメーなんざお呼びじゃないんだよ！！！」

と脅しをかけるが少年は気にせずに

「お前こそ、その女性から手を放して立ち去るんだな。」

と男に向けてそう挑発した。それに対し男は

「な、なんだとー！！」

と挑発に乗つっていた。そこで少年は私の方を向き、本気で心配している様な顔をして

「顔色が悪いですが、大丈夫ですか？」

と声をかけてくれる。そんな少年を安心させるために

「え、ええ。」

と返事をする。

「おい！ テメー、俺を無視すんじゃねーよ！」

と今のは会話で自分を無視したのが気に入らないらしく、そう言いながら行き成り少年に殴りかかつたが逆に男が懐に入れ一撃食らい氣絶させられたのが見えた。

「さて、何時までも此処に居る訳にもいきません。どこか行きまし

よつ。」

と気絶した男の事は気にせずこの場から離れようとした時に私は畠山に

は畠山としていたので

「え、ええ。」

と返すのがやつとだつた。

こうして私と少年は畠山としたままの野次馬に気にせずこの場から去つていつた。

その後、貧血症状が和らいだ私は駅まで来て少年にお礼を言い何か礼をしたいと言つたが、少年は当然のこととしたままで気にしないで下さいと言い受け取つてくれなかつた。それでは私の気が治まらないと言つたのを聞いて少年はそれでは喫茶翠屋を利用して下さいと言い挨拶をして去ろうとしたが私はそんな彼を引き止めます名前を名乗つてから彼の名前を聞いた。彼は高町恭也と名乗り少し話してから分かれた。私は彼に運命を感じまた会いたいと思つたが先輩達との待ち合わせ場所に急ぐのであつた。

視点終了

その後、さくらは真一郎達と合流してさつきの出来事を話した。すると皆、恭也を褒め、彼の言葉通りに皆でまた翠屋に行こうという話になつた。そして、さくらはそういうふうして翠屋なんだろうと思つながら真一郎に血をくれるよつ頼むことにしてのだつた。そのことをさくらの姪、田村忍に話したらその恭也に会つてみたいと言つた。それは直に叶つことになるのはまた別の話である。

数日後

さくら達は翠屋で翠屋の制服姿の恭也と再会し彼から翠屋は恭也の両親が経営していることを告げられて、彼女らを少し驚かせたのは言つまでもない。この事が切つ掛けでさくらと恭也は仲良くなり互いの距離を縮めることとなつたことにより恭也や高町家はさざなみ寮の人達や相川真一郎達と関わりそれらの事件にも多少巻き込まれ

ていくことになる。勿論それはお互い様で高町家が関わる魔法事件にも真一郎達やさざなみ寮の人達は巻き込まれていくことになる。でもそれは数年後の話である。

序章4話「駅前にて」（後書き）

次回は恭也が忍に会いに行きます。ノエルは次回ですが。あと少しでラブチャヤの五月の雪編を書く予定です。時間軸が違うと思いますがこの小説の設定だと思って気にしないでください。だから戦で恭也とさくらが魔道騎士＆魔装士（魔装機及び魔装機神の使い手を指します。）に覚醒します。

なんか恭也が主人公のなのはより目立っていますがそれはなのはがまた赤ん坊だかあらなのである程度なのはが成長したら完全な主役となる予定です。

春原七瀬の生まれ変わりをなのは達の妹の高町七瀬として出そつと思いますがどうでしょうか？

序章5話「月村忍との出会い～前編～」（前書き）

序章4話のあとがきの予告を変えました。毎度内容が変わつてすみません。しかし、これからもいつなるかも知れないのによろしくお願いします。

それと前編と後編に分けます。何処まで長くなるか分かりませんから。

序章5話「月村忍との出会い～前編～」

それからと血の秘密である御神の剣の鍛錬を見せれたり翠屋の手伝いをするほど仲良くなつた恭也はさくらからも自分が人ではなく夜の一族と呼ばれる吸血種と人狼とのハーフだと聞かされた。しかし恭也はそんなことは気にせずに普段通りに接していた。それだけではなく契約をし、しかも自分の血を吸うことも許したりと普通では考えられない様なこともした。そしてそんなある日の金曜日、翠屋のバイトが終わつたやうが同じく店の手伝い終えた恭也にある事を頼んだ。

「姪っ子さん達が俺に会いたいんですか？」

「そうなの。それで恭也君のことを話したらその子が会いたいんだつて。」

「そうですか。」

「それでねその子も夜の一族でしかも人見知りだからあまり友達が作れないの。」

と辛そうな顔をするさくらに

「ああ、そういうことでしたらいいですよ。」

と不器用ながら微笑みながら答える恭也に

「ありがとうね。あの子も喜ぶわ！！」

とさつきの顔が嘘みたいに明るくなりそう答えた。

「いえ、それに俺も友達は居ませんから秘密を共有できる友達が出来ると嬉しいですから。」

「そう、じゃあ日曜日に調整しどくわね。その子、割と暇だから直に合わせられると思つじ。」

「分かりました。ではその時に翠屋のシュークリームを持つていきます？」

「そうね、あの子達も喜ぶわ。じゃあ、待ち合わせは10時半に翠

屋前で良い？」

「はい。」

「それじゃあ、また日曜日に会いましょう。」

「はい。じゃあ、また明後日。」

と話し合ひ、一人はそれぞれの家に帰宅していった。

その後、忍に電話でその事を話すさくらの声は実際に喜びに満ち溢れていた。

そして日曜日の10時半前

視点・恭也

後もう少しでさくらさんが来る。しかし昨日来た連絡に寄れば来るのはさくらさんだけではなく姪っ子である忍さんの従者さんも車の運転手として来るらしい。此方は既に翠屋特製のシュークリームを入れて準備している。後は、さくらさん達が来るのを待つだけだ。と思っていたときさくらさんともう一人背の高い薄紫色の髪の女性が此方にやってきた。恐らく、彼女が従者さんなんだな。

「おはようございます、さくらさん。それで此方が？」

「おはよう、恭也君。そうよ、ノエル。」

「はい、始めて高町様。私は忍お嬢様の従者を務めるノエル・綺堂・エーアリヒカイトと申します。以後、お見知りおきを。」

と言い、優雅に頭を下げた。

「はい、此方こそよろしくお願ひします。」

と俺も頭を下げる挨拶した。

「さて、自己紹介も終わつた所でそろそろ行きましょうか。」

その言葉に俺とノエルは

「「はい、さくらさん（さくらお嬢様）。」」

と一人同時に答えたてて俺たちは月村家が所有する車が在るほうに向かつていった。

視点終了

所変わつて何処かの館

視点：レミリア

私ことユニゾンデバイス「レミリア・スカーレット」はあることを二つ悩んでいた。一つ目は正樹もといランドールの魔力とティツティの魔力が全盛期より少し小さいながら一緒にいることだ。しかも別の魔力と混ざっている。これは一人が我等が主、聖王陛下同様に転生していることを指す。しかも聖王陛下よりも前より存在し、尚且つ今は聖王陛下の生まれ変わりの近くにいるようでランドールの方は完全に一緒に暮しているように感じられる。恐らく、兄妹として暮しているのだろうか？二つ目は近くにかなり大きな魔力反応と少し大きな魔力反応の二つの魔力と魔力とは違う大きな力を三つ感じたことだ。私達姉妹のオリジナルである本物のスカーレット姉妹同様の妖気を感じるのだ。私達はオリジナルの姿と能力を模したユニゾンデバイスである。ちなみに咲夜は本来の歴史ならばオリジナルが支配下に置くはずだったが何の因果か吸血鬼ハンターであつた彼女は私達を狙つたのであつた。返り討ちにしたが、その力を欲した私は彼女の運命をえて従わせたのだ。知らない魔力と妖気の持ち主が敵対者であれば戦わないといけないが一人（なのははまだ赤ん坊なので数には入れていません。）のデバイス達が目覚めていい以上、かなり危険だと言うことになる。せめて味方が無害であればいいが・・・。念のため咲夜とフランを連れて三人を守るために三人の所へ向かおうかしら？

視点終了

序章5話「月村忍との出会い～前編～」（後書き）

地球の表にいるスカーレット姉妹が幻想郷のスカーレット姉妹の姿と能力を真似た存在ということにしました。かなり出鱈目ですがオリジナルは殆んど昼は活動できませんからその方向にしました。妖気の正体はもうじき分かりますし、かなり大きい魔力はシユウ・シラカワこと白河愁で少し多い魔力反応とは忍のことです。忍は支援重視の魔道騎士にする予定です。幻想郷メンバーや月村姉妹はなのは陣営になります。それと懐かしい勇者特急マイドガイインを見て思つたのですが超A.Iを搭載したロボットに変形するヘリや乗り物、戦艦なんてどうでしょうか？

序章6話「月村忍との出会い～後編～」

恭也達が車に乗つて月村邸に向かつてゐる頃の忍と言つと。

場所：月村邸の忍の自室

視点：忍

私は落ち着きが無く自室をうろつき回つてゐた。その理由は比較的年の近い叔母のさくらが私の一つ上の友人を連れてくるからだ。しかもその子は男の子なのだ。基本的に男性には警戒心のあるさくらが子供とは言え余程の事が無ければ男と仲良くするはずが無いからその余程の事が有つたんだろう。しかもその子にさくらは自分から自分の正体まで教えてゐる。それは私達、夜の一族や闇に属する者や特殊な力を持つ者にとつてはやつてはいけないはずのことだつた。だけどさくらはそれをやつてゐる。

だとすればそれはそうさせるだけの子ということになる。どの道、会つて見るしかない、等と考えてゐると少し離れた所から車の走る音が聞こえてきた。その音は段々大きくなつていき遂にこの屋敷の付近に停止した。そしてドアが開いた音と閉じた音が聞こえる。その後、車は車庫に向かつたようだ。その後少しして屋敷のドアが開いた音がして、直にさくらの声で

「忍～、来たわよ～。恭也君も来てくれるわよ～。」

と私を呼んでゐる声がする。その声に応じるように私は部屋を出て、さくら達のいる玄関ホールに向かつていつた。

視点終了

視点：さくら

月村邸に着いた恭也君と私はノエルに車を車庫に入れるように命じて月村邸に入つていつた。

「忍～、来たわよ～。恭也君も来てくれるわよ～。」

と忍に呼びかけると忍の部屋の方からドアの開け閉めする音が聞こえ、こちらに近づいているのが分かる。恭也君もそれに気がついたようだ。と言うよりも恭也君はやはり普通じゃないと感じさせるものであった。その理由として、私達は人より感覚神経が鋭いから当たり前なのだけれども田に見えない気配を感じ取るのは人間にはかなり難しいことである。と考えていると忍が階段を降りてきているところだった。階段を降り此方に来た忍に恭也君を、恭也君を忍に紹介するためには

「忍、この子が高町恭也君よ。で、恭也君この子が私の姪の忍よ。」と紹介すると

「始めてまして、月村さん。俺は高町恭也と言います。」

と恭也君が挨拶し忍も

「月村忍です、今日は来てくれてありがとうございます。それと高町君は私ヨリ一つ上なんだから敬語とかいいよ。私自身そういうの好きじゃないし。」

と自己紹介や来た礼に恭也君の挨拶で気に入らないことを言った。恭也君もしぶしぶながら納得し

「分かった。じゃあ、さん付けだけはさせてもらひついかな?」

「うん。まあ、初対面で呼び捨てって言つのもあれだしね。いいよ。」

と話す一人に私は

「立ち話も何だし、忍の部屋にでも行きましょうか。」

「そうだね。」

「はい。」

と忍（上）と恭也君（下）

こうして私達は忍の部屋に向かつのであった。

部屋に入ると恭也君は家のことのそなたが部屋を見て驚いていた。

その後、車を車庫に止めてメイド服に着替えたノエルが部屋に入つて来てお茶を出してる時に忍も恭也君のことを気に入つたのかノエルが自動人形だということをばらしていたりして一悶着があつたが

色々な質問会話などして楽しんだ。それから2時間が経過して恭也君も一緒に昼食をとる事になった。

食事を終えた私達はゲームや雑談等をしているとノエルが入って来て紅茶と御茶請けとして翠屋特製のシュークリームが出された。こうして楽しい時間が過ぎていったがそんな時間がずっと続くわけも無く恭也君が帰る時間になつたのだ。忍はそれに泣つたがまた遊ぶことを約束したことで手打ちとなつた。

そして行き同様にノエルに車を出してもらい、今度は恭也君の自宅まで送ることになったのだ。

これが高町恭也と月村忍は出会いであり、聖風の魔装騎士と闇の魔装士の出会いであった。

視点終了

視点・忍

「高町君・・・・か。」

確かにさくらが認めるだけのことはある。

そういうえば私と高町君が話してるとさくらから嫉妬のようなものを感じただけれど氣のせいかな？

もしかしたらさくらは高町君のことが好きなのかもしれない。帰つてきたらさくらに聞いてみよう。

そして数分後、さくらとノエルが帰ってきた。

早速、さくらに聞いてみた。さくらは顔を真っ赤にしながら否定していくが好きなのがばればれだつた。そのことをからかつたりしてさくらで遊んでいたら、この後暫くの間、口を聞いてくれなくなつた。そして、私もやり過ぎた事を自覚し、さくらに謝り倒し何とか許してもらえたのだつた。

そして私は、このことが切つ掛けで人をからかう様な事はしなくなつた。

視点終了

場所：何処かの館

視点：レミリア

「と言う訳なんだけど付いてきてくれる？」

私は我等の主達がかなり危険な場所にいると思い一人にも主たちを守るためにその地に向かうことを話し、付いてくるように要請したのだ。

「勿論です。陛下を守るのは我等の役目であり使命でもあります。」と頷きながら言つてくれる咲夜と

「そうだね、私も行くよ。お姉さま。で、場所は分かったの？」

同じく付いてきてくれるフランがその場所が分かったか聞いてくる。

「ええ、運命と地図で何とか探し当たれたわ。」

そう、私は地図で陛下たちと出会う運命が最も強いところを探したのだ。

「それで、その場所は？」

と咲夜が早く行來たそうに催促する。

「〇〇県の海鳴市で最も強い反応があつたわ。そこに行きましょう。」

「と言い二人が同時に

「はいっ！」

「はい。」

と返事をしたのであつた。〔うして一人と一機（融合機なので間違つていな）は海鳴市に向かうことになったのだった。〕

視点終了

序章6話「月村忍との出会い～後編～」（後書き）

次回はざからと雪と氷那を出します（ほぼ名前だけですが）。多分台詞が殆んど無い状態かも知れません。ざからは如何しよう。ざからを封印するんなら雪も自ら封印されるだろ（から真一郎が可哀相だし・・・。瀕死の状態にして恭也〇・さくら〇・忍の守護獣（人型にできるし戦力にも出来る）にするか、召喚獣（宝石に内包して召喚したいときに召喚して戦力に出来る）にするかな？

序章7話「人外と武と異能の力～前編～」（前書き）

五月の雪の出来事や台詞も殆んど忘れているため適当です。
時期も適当です。台詞もありません。

序章7話「人外と武と異能の力～前編～」

恭也と忍が会つて1年と少し経ち5月になつた。一人やさくらは良くなのはの面倒を見たりしたりしている。なのははとても頭がいいのか既に喋れるようになつており、普通に会話とかもしている。それだけでなく既に立つて歩いていると言う普通ならありえないことも起きている。そのことに疑問に思つた士郎は筋肉の成長具合を見たが既に神速に耐えられるような肉体をしており、御神流を習わせたいという衝動に駆られていたし、忍は忍で少し前までは面白半分で工学を教えていたが最近では本気で教えていた。

そんな5月のある日の午前、さくらを含む真一郎グループと恭也と忍とノエルはさざなみ女子寮に車で向かっていた。恭也が来たのは皆（主にさくら）に誘われたからである。

真一郎達が恭也と出合つたのはさくらが仲介したことだった。恭也達は直に仲良くなり、その中で恭也が御神の生き残りであることを知つた菟弓華トコロアは自分が元龍構成員であることを明かし、御神壊滅のことを謝罪した。その時、真一郎達は慌てたりしたが恭也は元でしかも悪意が無い為、自分達に害がないのであれば気にしないと言ひ事でなきを得た。原作で来なかつた忍とノエルが来たのは恭也が来ることが知られたからである。その事は忍と会つたことのある真一郎達からも驚かれており忍に対しての評価は前より大分柔らかくなつたというより明るくなつたと評している。ちなみに皆は十中八九、恭也のお陰であるうと思つていた。

その恭也と忍とノエルを入れた一行はさざなみ女子寮生である岡本みなみと言つ案内役を乗せたノエルの運転する車とオーナーである楳原愛の運転するグループに分かれてさざなみに向かつたいた。組み合わせは以下の通りである。

ノエル組：恭也、さくら、忍、みなみ、弓華、井上ななか

愛組：真一郎、野々村小鳥、鷹城唯子、千堂瞳、御剣いづみ、春原七瀬

と言つ組み合わせであつた。

何故これだけの人間がさざなみ女子寮に来ることになつたかと言つと、真一郎グループの瞳率いる護身部が優勝（瞳）と第3位（唯子）を取り、さざなみ寮でもの仁村真雪の漫画がコミック化してその祝いとして宴会を開こう話になつた時に、真一郎達が祝い場所を探してみたのでみなみの提案によりさざなみ寮での合同パーティーになつたのである。

それから數十分後、さざなみ寮に着いた一行はさざなみ寮に入りその住民と管理人の榎原耕介に挨拶をしてパーティーが始まった。

それから少し経つて、さくらとさざなみ寮の住人の一人である神埼薫が何かの魔の気配に気づき山の奥のほうに向かつて行つた。しかし、御神体がなくなつていた以外は何も見つからずに寮に帰つて行つた。その後、少しして瞳が寮の近くで倒れていた少女を見つけて寮にまで運んだのである。少女が目を覚ますが本人は雪という名前以外は覚えていないと言つ。その同時刻、寮の住人の一人、椎名ゆうひが大学の近くで毛玉のような生物を見つけさざなみ寮に連れて來た。その毛玉もどきを見た雪は氷那っ！！と言い、氷那という毛玉もキューと鳴きながら雪に抱きついた。その事に不審を感じた一同だつたが数分後、今まで晴天だつたのが嘘のよに行き成り雪が降り始めたのだった。

そしてこれが次の異変の始まりだつた。

雪が降つて來たことや氷那のことを雪に問いただすと自分は魔獸ざからに殺された雪女の生き残りで氷那と共にざからを封じ込めていたと言つ。雪が外に出て、その後を追う様にして氷那が外に出た為にざからの封印が解かれ始めた為であると一同に話した。それから少ししてさざなみ寮に木の枝や触手等が襲い掛かってきた。それに

対応した一行だつたが数が減らず寧ろその数を増やしていった。一行は二手に分かれて行動することにした。そして戦闘力のない人達&寮を守る防衛組みと封印&その護衛組みといつ風に決めた。組み合わせは以下の通りである。

戦闘力0&防衛組：忍、仁村知佳、薰、唯子、小鳥、ななか、みなみ、愛、陣内美緒、ゆうひ

封印&護衛組：恭也、さくら、ノエル、真一郎、雪&氷那、いずみ、七瀬、弓華、耕介&御架月、薰&靈剣十六夜、真雪、リストイ・C・クロフォード

「というメンバーになり、これから起こるであろう激戦に気合を入れるのであった。

「ええ。一人とも、スピードを上げるわよ。」

「言いスピードを最大に上げた。」

「了解です。」「ラジヤ」

「言い一人もスピードを上げて私の横につく。」

数時間後、遂に海鳴に着いた私達はそこで異変を感じた。

なんと、妖氣の近くに三つの光の柱と共に巨大な魔力反応を三つ感知したのだ。

「どうやら聖風と聖水の魔装騎士が覚醒したようです。急ぎましょう。」

「ええ。」「うん。」

とその一つの魔力反応に懐かしさを感じながら急いで魔力の柱が立った方に向かうのであった。

視点終了

おまけ

靈力と魔力の違い

靈力は体力や肉体のエネルギーなもので氣などもそれと同様と思われる。

魔力は精神的なエネルギーとされ、妖氣等（とらは3の久遠も妖怪だから妖術を使えると思われる）もそれと同様と思われる。

ちなみに両方を同時に使うことも可能である。

序章7話「人外と武と異能の力～前編～」（後書き）

次回から戦闘です。遂に恭也達が覚醒する予定です。ユービンレミリア達もあと少しで合流します。

序章8話「人外と武と異能の力～中篇～」（前書き）

どなたか私に文才を下さい。

序章7話のあとがきを少し変更しました。

それとの「人外と武と異能の力」は長いので前・中・後に分けます。

序章8話「人外と武と異能の力～中篇～」

恭也達がざからがいる湖に向かつて既に数時間が経つていた。

場所：湖付近

視点：雪

私達はざからを封印する為に湖に着いた私達でしたが、さくらさんや七瀬さんにノエルさんはまだ大丈夫そうでしたがざからの攻撃はより

激しくなり武器を持たない真一郎さんの手は既にぼろぼろで、いざみさんや恭也君といった武器を持っていた人達もざからの猛攻により武器が壊れたり、リストイさん達や薰さん達も能力の使いすぎで立っているのがやっとと言つところであった。それでも皆は立ち止まらずにざからの猛攻を凌ぎ切つっていた。そこで私はある決断をする。その決断とは・・・。

「皆さんもういいです！－！」から封印します！－！」

と言つた私に七瀬さんが

「え、何を言つてゐる？そんなことをしたら貴女が死んでしまう。」
と言つ。私がこの距離でざからの封印をすれば私が生きていないと
言つことを分かつてゐるから。

「しかしこのままでは皆やられてしまいます。」

と言つた私に反論したのは恭也君だった。

「そんなことはありません！－！諦めなければ必ず勝機があります。
それに貴女は骸さんの子孫に待つんじやないんですか！－？」

と触手を斬りながら恭也君がそう言つた。

「もう待てないんです！－！こんなに待つても来ないのに来てくれませんでした。だから・・・！」

私には絶望しか残されていなかつた

「だから死ぬんですか！－？いつか会えるかもしないという可能性まで捨ててしまうのですか！－？」

「君に何が分かるの！？私がどれだけの方を待っていたか！！」

「確かに分かりません。けど貴女はまだ数百年という時間が有るじゃないですか！！それに雪さんが気づいていないだけで骸さんの子孫には既に会つているかも知れないと、もしかしたら俺達の中にいるかもしない！！貴女にはまだ可能性があるんですよ！！それでも自らの命を捨てるつもりなんですか！？」

「恭也君の言う通りだよ。雪さん。」

「そうです。諦めるにはまだ早いです！」

と恭也君の言葉に援護をしたのは真一郎さんこそくらさんだった。そうでした。確かに私は骸様の子孫が何をして居るのかやどのような姿すら分かつて居ない状態。なのに何もかも捨ててしまつてしまいました。

それに恭也君と真一郎さんの田は骸様と同じような田をしていた。もしかしたら・・・・などとそんなことを考えながらも恭也君達に感化された私は自らの命を犠牲にすることを止め、湖まで行つて封印することを決めた。

「分かりました。もうそんな馬鹿なことは言いません。では、参りましょ。」

と言つ私の言葉に皆さんは

「応つ！！」

と一緒に答え触手に向かつて一斉に走り出した。

それから數十分後

何とか湖に着いた私達だったけど能力や体力がもう限界でした。しかし、誰も諦めることはしませんでした。

「影丸がきた。また最後にこの子が残つたか。頼んだよ、円架。」

と言ひながらいざみさんは最後に残つた武器を握り締めて思いを込めて居るのが分かつた。その時、湖が盛り上がつた。

「いけない、ざからが・・・・。」

と私が言つたその時、ざからが完全に湖から出てきました。

皆さんには遅かつたかと言ひながらも戦つてゐる。それに比べて私はまだ何も出来ない自分の無力さに嘆いた。そしてその時、恭也君も触手や枝に向かつて小太刀を振るつていたが遂に最後の小太刀が壊れてしまつた。それでも恭也君に一斉に触手やざからの炎が襲いかかるが近くには誰もいなくてさくらさんが彼の名前を呼んだとき、奇跡が起こつた。なんと恭也君とさくらさんが彼の名前を呼んだとき、色の光の柱が出てきたのだ。少しして、その光がなくなると私達は驚きを隠せなかつた。何故なら恭也君とさくらさんからそれぞれ青色と水色の光の柱が出てきたのだ。少しほとぎすの音が聞こえていていたからだ。恭也君は白銀の鎧、さくらさんも青い鎧を着けていて手には槍を持つていた。その時から一人とも気配が変わつた。まるで歴戦の戦士のように。そして、さくらさんは

「来て、アイスシュヴェルト。」

と叫び片手を空に向けた。すると何処から跳んできたのか青い指輪が現れ、さくらさんの手に収まつた。恭也君も何処からか一本の小太刀がクロスしたアクセサリーを取り出して

「行くぞ。影牙、光牙。セットアップ。」

と言つ。するとアクセサリーが光り、一振りの小太刀になつていました。ただ、その小太刀は普通の小太刀ではなく機械的なものでした。一方、さくらさんも

「行くわよ、アイスシュヴェルト！ 形態・アイン！」

と言つと指輪が光る。直に光が収まると銀色の両刃の剣が付いた青を基調とし、ラインが殆ど金色という三角形の盾がさくらさんの右手にあつた。その武装も恭也君の影牙、光牙と言う小太刀と同等に機械的なものであつた。

視点終了

一方、その頃

恭也達に異変が起きた時、

場所：さざなみ寮

視点：忍

防衛組と封印組に別れて、もう数時間が経過していた。それでも向こうは封印できていないようで、まだ触手が襲つてきていた。

その時、私は夜の一族なのにまともに戦えない悔しさでいっぱいだった。私も皆を守れる力が欲しいと思った時、私から黒い光が出てきて、それは寮の天井を突き破り、空に向かっていった。そして、黒い完全に光が私を包むと何処からともなく男の声がした。

「汝、力が欲しいか？」

「えつ？ なに？」

「もう一度言う。力が欲しいか？」

「うん、皆を守れる力が欲しい」

「そうか。なら我と契約を交わせ。汝に力を与えよ。」

「分かった。」

「ただし、この力は強大であると同時に人であることを捨て精霊と言つ存在になるがいいな？」

「私は元々人じやないよ。だから精霊になつてもあんまり変わらないよ。」

「・・・分かった。では契約を。我的言つた言葉をそのまま言つだけでいい。わかつたな？」

「うん！！」

と私は頷く。それを見計らつたように謎の男の声は契約の言葉を紡ぎ、その後に私も続く。

「我、正しき闇の力を従えん。」

「我、正しき闇の力を従えん」

「我、正しき闇を滅ぼす為のものなり。」

「我、正しき闇を滅ぼす為のものなり。」

「故にその力、正しき心の者の中に現れん。」

「故にその力、正しき心の者の中に現れん。」

「今こそ目覚めよ。」

「今こそ目覚めよ。」

「ディアクス、セットアップ」
「ディアクス、セットアップ」

という契約の言葉が終わる同時に私の体に金色の爪が生えた膝まである金属製のブーツと同じく爪の付いた肘まである籠手に一枚の黒い羽が付いた黒い鎧が装着されていき、両刃の大剣が出てきた。私はその大剣を握ると私は自分の姿を見て驚きを隠せなかつた。

契約の言葉を口にした途端に鎧が付いたのだ。驚かない方がおかしい。

とそこで先程の声の主が

「此処に契約は完了した。我が主よ。」

と言つた。その言葉に

「あ、主！？」

と私は素つ頓狂な声を上げた。更に謎の男の声は

「そうだ。汝はこの闇の精霊タナスによつて選ばれたのだ。では、これからよろしく頼むぞ。主」

と言つた。それに対し私は

「わ、分かつた。これからよろしく。タナス」と戸惑いながらも返事をするのであつた。

「うむ。」

とタナスが返事をすると周りの黒だけの景色が割れるように崩壊していった。

視点終了

序章8話「人外と武と異能の力～中篇～」（後書き）

相変わらずの駄文ですみません。
大分オリジナルが入っています。

忍のデバイスの元ネタはイスマイルです。ただ、忍にはそんな名前は似合わないからオリジナルの名前に改名しました。オリジナル設定も入っています。タナスも同様です。由来や設定などはデバイス設定などを書く予定なのでそちらを参照してください。書くのは無印に入る前ですが・・・。

序章9話「人外と武と異能の力～後編～」

場所：さざなみ寮

視点：知佳

忍ちゃんが黒い光に飲み込まれてしまった。私はサイコバリアの展開で精一杯で手を出せずにいたし、他の皆も同様で光に迂闊に触れないで手を出せずにいた。そんな中、忍ちゃんを覆っていた黒い光の柱が割れるように壊れていき、中から忍ちゃんが出てきた。だけど目の前にいる忍ちゃんは荒々しい鎧を着けていた。そして、忍ちゃんは寮から出てきた。そこで私は注意をする。

「忍ちゃん、外に出ちゃ危ないよ。」

と言つが

「大丈夫です。私も手伝います。」

と私に返す。そんなことを黙つてられない私は

「何いつてるの…？危険よ…！」

と反論するが忍ちゃんは

「大丈夫です。」

と自信を持つて言い、私の横に来て

「エリアガード」

と叫ぶと黒い光の膜が寮を覆つていった。この現象について忍ちゃんに

「忍ちゃん、これは一体。」

と聞いてみる。そこで帰つてきたのは超ド級の言葉であった。

「これが終わつたらちゃんと説明します。何でも私と同じようになつた人が向こうの組にいるみたいですか～。」

「つ…！」

と言つとさつきの青色と水色の光もこれと同じなのか。だとすると向こうでも忍ちゃんと同じことが？等と思考の海に浸つていると忍ちゃん

んが声をかけてきた。

「それよりも此処は私に任せて知佳さんは体を休めてください。」「で、でも・・・。分かつたわ。後はお願ひね。」

と反論しようとしたが忍ちゃんの目を見てやめた。その目には強い意志が宿っていたからだ。

「はい、任せてください。」

と忍ちゃんは笑いながらそう答えると直に前を向き真剣な顔つきになっていた。

視点終了

場所：湖

視点：全員

恭也とさくらの二人が鎧を着けそれぞれ武器を出した後、二人は空を飛ぶと直に大量の風の刃や氷の矢でざからを攻撃するとざからの体には傷が付いていった。そしてざからは倒れこみ、暫くすると恭也が自分の守護獣にして助け、更に人型にできるので知識を与ればいいと言つと策を出した。その事にさくらは自分がすると言い出したが自分の言い出したことなのでと言うとさくらも引くしかなかつた。こうして守護獣にすることに決まつたざからの下には魔法陣が展開されるとざからは光に包まれた。光がやむとそこには少年となつたざからがいた。そこで「さてとっ！・・・そろそろ降りて来たらどうですか！？レミリア、フラン、ジエシア」と言い、恭也とさくらが何か気がついたらしく空を見上げる。それにつられて全員が上を見上げるとそこには三人の少女が飛んでいた。そして、その三人は徐々に降りていき、とうとう恭也達の目の前に降り立つたのだった。

視点終了

視点：レミリア

妖気の大本が倒れて、少ししてからランドールの生まれ変わりが魔物を守護獣になると上空にいる私達の方を向いてから

「さてとっ……そろそろ降りて来たらどうですか！？」レミリ

ア、フラン、ジェシア！」

と言った。この様子だと一人とも記憶を持つたまま覚醒したみたいねと思いながら彼らの前に降り立つ。そして

「久しぶりね。ランドールにティッティ。その様子だと覚醒したみたいね。」

と言った私にティッティの生まれ変わりが

「ええ、でも私が継承したのは記憶と力だけよ。今の名前は綺堂さくらだから。」

と返して来る。それにランドールの生まれ変わりの少年も

「俺も同じです。俺は高町恭也とあります。ちなみに2代目ランドールである不破正樹の兄の不破騰樹の血を引いています。」

と返し、自己紹介もしてくれる。それに対し今度は咲夜が

「そうですか。私も今はジェシアでは無く十六夜咲夜と名乗っていますのそちらでお呼びください。恭也様。それから恭也様、私は敬語はやめていただけだと助かります。」

とそれに返し、自己紹介する。

「ああ。よろしくな、咲夜。では、皆さんも不思議がつてるので一度さざなみ寮まで戻りましょうか。色々とお話しますから。咲夜、レミリア、フランも行こうか。」

とランドールの生まれ変わりの恭也が言い喰然としている他の人間達に話しかける。他の人間達も頷くと山を下りて建物のある方に向かっていったのであった。そして私達も呼ばれたので付いていくこととなつた。

視点終了

その數十分後、さぞなみ寮に着いてから忍を含めた6人で魔法や理由等について話すことになるのであつた。

序章9話「人外と武と異能の力～後編～」（後書き）

無理終わらせました。と言うよりこの話（前、中、後含めて）が一番駄作な気がします。二人の覚醒時とざからとのまともな戦闘と守護獣にする理由等を次回から何話かに分けて説明をします。それとざからと雪が如何するかも説明が終わつた後にします。

序章10話「11つの魔と説明～前編～」（前書き）

サブタイトルの「11つの魔」については魔法と魔物と言つ意味です。

序章10話「一いつの魔と説明～前編～」

場所：さざなみ寮

視点：全員

気を失っている人間形態のざからと先程海鳴に文字通り飛んで来た咲夜とユーブンスカーレット姉妹を恭也達封印組が連れて帰つてきた。勿論寮組に聞かれたが、後で話をするといった。ざからについては守護獣にしたことや、ミツドチルダ式やベルカ式魔法や守護獣について話した。寮側も話さないといけないことがあつた。忍の覚醒のことである。忍は自分の知る限りのことや光の中での出来事などを全員に話した。

「そう、魔力反応がしたと思つたらやつぱり忍だつたの。それにしても忍もラ・ギアス式の適合者とはね。やつぱりこれだけのデバイスとなると殆んどの術式が使えるかもしれないわね。」

「ラ・ギアス式？」

とさくらの言葉に恭也と忍以外の全員が反応し、一斉に聞く。

「そうです。かつて滅んだラ・ギアスという世界の名をとつてそういわれています。ちなみに私と恭也君の前世は元はベルカ式魔法の使い手でしたが、ウォルクルスとの戦いの最中でラ・ギアス式のデバイスを手に入れました。しかし、その戦いで私達の前世は死んでしまいました。」

と語るさくらの後を続くように恭也も語りだす。

「ですがその時、俺の前世が相打ちの状態で奴を倒すことに成功したんです。その後はどうなつたのかは、なのはに聞いた方がいいかもしれません。」

といい終えると、そこで真雪が気になつたことを聞く。

「少年、ウォルクルスってなんだ？それになんでお前ん所の赤ん坊に聞くんだ？」

その間に恭也が答える。

「ヴォルクルスと言うのは破壊神で、かつてラ・ギアスの3柱神に数えられていました。実際には破壊神ではなく、大昔に存在した巨人格の怨念等の集合体だと言われていますが……。なのはに relate てはまだ確証はありませんが十中八九、俺達の前世での主、聖王オリヴィエの生まれ変わりです。まあ、記憶はまだ覚醒していないみたいですけど。」

「そうか。でもなんで一人は前世の記憶を持っているんだい？」

耕介も気になつたことを聞く。

「それも話します。」

と恭也が答えた。そして今度は知佳が
「じゃあその時の話をしてくれる? 一人とも。まず恭也君からお願
いできる?」

と言う。それに対し恭也は

「分かりました。」

と答え、恭也は語り出した。

「俺が覚醒したのは・・・・・。」

視点終了

視点：恭也

「俺が覚醒したのは・・・・・。」

そういうと俺は回想に入った。

回想

場所：湖

ざからとの戦いの最中、俺は全ての武器を失つてしまつた。けれども尚迫り来るざからの攻撃に成す術も無くやられるの待つかなかつたその時、急に体から青い光が出てきた。その事に驚きつつも俺は眩しさで目を閉じた。光が止むとそこは青い空間だつた。そこにいたのは

見知らぬ男の人が一人立つていた。

「あなたは?」

「俺の名は2代目ランドール・ザン・ゼノサキスであり不破正樹でもある。君の前世だ。」

「どういふことです？それになぜ俺の前に？」

「時間が無いから、簡単に説明させてもらひ。まず俺が君の前に現れたのは君が死にそうになつてゐたので助けたのと君に俺の力と記憶を受け継いで欲しいからなんだ。」

「何故、力と記憶を？」

「詳しいことは記憶を受け継いだら全部分かることだから省かせてもらひよ。時間が無いことだしね。勿論拒否権は無いよ。」

そういうと俺の頭に手を載せた。すると急に頭痛がして次の瞬間、色々な情報や正樹さんの記憶が流れ込んできた。更には膨大な量の魔力が俺の中に入つて行くのが分かる。

「ふう、これで終了だな。じゃあ、俺は行くから後は頼んだ。」

「あ、ちょっと……。」

流し終わると正樹さんはそういうて俺の言葉も聞こえさせずに俺の中に入つて消えてしまった。

「は～、このままじゃ皆を助けられないし此処から出るか。」

と言つと前世で死ぬ前に相棒となつたデバイスを呼ぶことにした。

「来い！…サイバスター！…」

すると何も無いところから白銀の腕輪が出てきた。そして、

「汝が我が新しい主か？」

「そうだ！俺の名は不破恭也だ。よろしくな、サイバスターにサイフイス。」

「良かう。此方こそよろしく頼むぞ。」

「ああ。それでは…・・・・行こう。サイバスター、セットアップ

！…」

「了解。」

会話が終わると俺の体に白銀の鎧が装着されていき二枚の白い羽が生えてきた。装着し終わると急に辺りの青い景色に輝が入り、割れるように消えていった。そこはさつきいた場所だった。すぐ近くと

さぞなみ寮付近から魔力反応がしたが今はもう一つの相棒を取り出しど

「行くぞ。影牙、光牙。セットアップ。」

と呼びかけデバイスを起動させる。すると念話で

「はい、新しい我が主。」

「了解、新しいマスター。」

と答えてきたので俺も

（ああ、俺の名は不破恭也だ。よろしくな、光牙に影牙。）

と念話で挨拶をする。

「はい、よろしくお願ひします。」

「よろしく頼む。」

と光牙と影牙が答える。

こうして覚醒した俺は同じく覚醒したさくらさんと共にざからと対峙するのであった。

回想終了

そして俺は記憶の中の主な出来事や彼がどう思いどう感じたのかなどを俺に何を託したかったのかを話した。例えば何故か発生した次元震のせいで空間が歪みそこに入ってしまった後、当時の聖王であつたオリヴィエに拾われてからのことから俺の最後の記憶であるヴォルクルスとの戦いのことまでのことや、なのはがその聖王オリヴィエの生まれ変わりだと言うことも感じ取つていたらしいと言うことも話した。まあ、まだ話していないこともあるけど、それは個人と言うか俺たち一族についてのことだったのであえて話さなかつた。リストイさんはそのこと話さないのかと聞いてきてそれを聞いた皆も聞いてきたけどこれからは一族だけの話なのでと納得してもらつた。ちなみに寮側の人に俺の魔装機姿を見たいとせがまれたがそんな理由で戦闘形態は出来ないといい、どうしても見たいのなら教導をする為にまだ記憶も知識も持つていらない忍と模擬戦を後にするからその時にと言つた。

「と言うわけなんです。それとだからこの二人についてはさくら

さんの話が終わってから詳しく述べよう。

「そうね。じゃあ、今度は私ね。」

と言つとさくらさんは語りだした。

視点終了

おまけ

ラ・ギアス式

アルハザードやミッドにベルカとは異なる進化を遂げた魔法体系を持つ。

使い手のことは魔装士と呼ばれ、ベルカ式とラ・ギアス式の二つのときは魔装騎士でミッド式は魔装導師、アルハザード式は魔装術士ちなみにアルハザード式は魔術師と呼ばれている。

違う所其の1：鎧型デバイスが殆んどであり、武器型や杖型は存在しない。仮にあつたとしても既にラ・ギアスと共に消滅している。違う所其の2：デバイスに精霊や神と契約させる。精霊は魔法制御や魔力制御をAI以上にしてくれるので魔法に詳しくなくてもある程度使えるので初心者向きとも言えるがそれは下位クラスだけの場合であり中位や上位となるとかなり扱いにくくなっている為、上級者向きともいえる。尚、魔装機神と契約している精霊には意思があり、自らの認めた人間にしか扱えない。ちなみに上級クラスの精霊と契約を交わした場合その使用者も精霊となり誰かに殺されるまで永遠の時を生きることとなる。

違う所其の3：小型の高出力魔力炉を持つている。特殊なデバイスにはそれに擬似リンクアーコアも存在する。魔装機神にそれ以上の能力を持つた超魔装機やディアクスがその特殊デバイスに該当する。それぞれ擬似リンクアーコアの数が異なる。ただしグランゾン系は魔装機系には入らないが擬似リンクアーコアがある為にここに記す。

擬似リンクアーコアの数

魔装機神が4

グランゾンと超魔装機が8

デイアクスが12

ネオ・グランゾンが16

極稀に全ての体系に適応した人間がいるがその数はあまりに少なく過去に確認されているだけでも200人いるかいなか程度だったと言われている。魔装機神のマスターがそれに該当し、魔装機神の精靈がマスターの資格を選ぶ基準の一つであるという声もあつたがが定かではない。また、精靈の契約に頼らないで魔装機神より強力なデバイスを造ると言う超魔装機計画も存在し、忍のデバイス「デイアクス」はその超魔装機と魔装機神のデータを元に造られた。超魔装機は魔装機神を遥かに上回る性能を持つていて、デイアクスはその超魔装機を更に凌駕するデバイスである。

序章10話「11つの魔と説明～前編～」（後書き）

魔装機系や鎧型バイクはまだ出でてくる予定です。なのはの鎧型バイクも無印編に出てきます。まあ、無印編とA、S編の事件自体は早く終わりますがそれ以外に時間を費やす予定です。次回はさくらじゅからについてです。

序章1-1話「「」の魔と説明～中編～」

場所：さざなみ寮

視点さくら

恭也君が話し終え、遂に私が話す番となつた。

回想

場所：湖

「恭也君！－」

恭也君がさからの攻撃により窮地に瀕していたとき、私は自らに向かつてくる触手を相手にしながらのそつ叫んでいた。そして恭也君を救えない自分に無力さを感じた。

（「）のままじや恭也君が・・・・。恭也君や皆を守れる力が欲しい。）

と思つてゐると何処からか

「その願い、聞き入れましょう。」

と言つ声がした次の瞬間、私の体から水色の光が出てきて私を包み込みこんだ。その光が一層強くなると私はその瞬間目を閉じた。その光の輝きが収まつたのが分かると私は目を開けた。そこは水色の空間だつた。

「「」は？」

と言つがここは誰も居ない空間であつた。なので誰もその間に答えられる者は存在しないはずだつた。しかし

「「」は貴女の魔力で出来た世界。」

と言つ誰も居ない空間で私以外の声が聞こえた。そして周りを見渡しながら

「だ、だれ？」

と問う。それに答えるかのように水色の光の粒が集まり、それは段々と人の形を作つていつた。そして、そこにいたのは金髪碧眼の女

性だった。

「始めてまして。私は、ティッシュティ・ノールバック。貴女の前世よ。」
とその女性は名乗った。驚きつつも
「えつ！あ、始めてまして。綺堂さくらです。それにしても前世ですか？」

と答えると何故私の前世が今ここに？と思つた。

「そうよ。だけど驚いている所で申し訳ないけど、時間が無いか説明はなしよ。どうせ私の記憶を継承するときに分かるから。それよりも貴女は誰かを救える力が欲しいんでしょう？」

とティッシュティさんの問いに

「はい。」

と頷きながら答える。それに対しティッシュティさんは私に近づきながら
「そう。なら、今から力を与えるわ。」

と言ひ。そして、私とティッシュティさんの距離は60cm程にまで近づくと彼女が私の頭の上に手をのせた。すると彼女の過去らしきものや力の使い方、それに魔力が彼女から流れ込んできた。

「これで私の役目は終了ね。・・・・それじゃあ私は貴女と融合するけど、貴女は貴女のまで居なさい。貴女、彼の事が好きなんでしょう？なら早めに言つた方がいいわよ。私みたいに後悔したくなかつたらね。」

と言つと私の中に入つていつた。私はまだ聞きたいことも言いたいことがあつたのにと思つたが本人が居ない為、言つことは出来なかつた。それよりもこの空間から出て恭也君や皆を助けなきゃ。その為に私は前世での相棒の一つを呼び出すことにした。

「来て、ガッデス。」

と言つと一つの青い腕輪が私の前に現れた。そしてそれを左手で取ると

「貴女が新しいマスターですね。」

「ええ、綺堂さくらよ。よろしくね。ガッデスにガッド。」
と挨拶するとガッデスのコア部分が光り

「はい、此方こそ。マスターさへり」

と返事をくれる。

「じゃあ、いくよ。」

と言いガッデスの真の姿を現す準備をした。腕輪を持った左手を上に掲げる。

「はい。」

ガッデスもそういう。戦闘がいつでも可能と言つことだ。そして「ガッデス、セットアップ。」

と叫ぶと私の体に青いオリハルコン製の鎧が装着されていく。そして、装着が完了すると今度は三つ又の槍「グングニール」が現れた。グングニールを手に持つと周りの景色に輝が入り、それが徐々に大きくなる。そして最終的に割れるように消えていった。青い空間が消え

るとそこは元の場所だった。皆、驚いていたし、恭也君の方から覚醒状態の魔力反応が感じ取れた。恐らく彼も覚醒したのだろうと思いま

がらも私はもう一つの相棒を呼ぶことにした。

「来て、アイスシュヴェルト。」

と私は叫び、片手を空に向けた。すると何処から跳んできたのか青い指輪が現れた、私の手の平に収まつた。そして

「行くわよ、アイスシュヴェルト！ 形態・アイン！」

と自らの相棒に呼びかけた。すると指輪が光り、それが収まると銀色の両刃の剣が付いた青い六芒星が描かれた三角形の盾が私の右手にあ

つた。そして恭也君も私同様に前世での長年の相棒を取り出して起動させたようで、彼の両手には影牙と光牙という恭也君の前世の正樹さ

んが持っていた二つの小太刀型デバイスがあった。こうして私と恭也君は目を合わせると大地を蹴つて飛びながらざからに向かつていった

のであった。

回想終了

私も精霊（恭也も精霊）になつたことや恭也君みたいに過去や彼女の思いをある程度は口にした。心や頭の中が読めるリストイさん（知佳

さんも出来るが彼女はイヤリングでその能力を封印しているし無、暗に聞いたりしない。）に何か聞かれると思ったが、恭也君の時みたい

に他人にはいえない事情があるんだろうと思つたのか、聞かないで居てくれた。

「これで私が覚醒した時の話は終了です。次にざからについてなんですが恭也君がしてくれます。」

と言つてゐる途中に

「その必要はない。なぜなら・・・。」

と言つ声がざからを寝かせてあるソファーの方から聞こえた。恭也君以外は驚いていた。そこに立つてゐたのはなんと、氣を失つていたは

ずの人間形態のざからだつたからだ。ちなみに恭也君はこのことこ
氣づいていたらしい。

視点終了

視点：ざから
視点：ざから

「その必要はない。なぜなら・・・。」

と一区切りしてから私は

「我が家直々に説明してやるからだ。」

と言つてゐた。恭也とか言つ我を使い魔にした小僧以外は我が驚いたらしく。そのことをさくらとか言つ小娘が

「貴方、起きてたの？」

と我に聞く。我は仕方なく答えることにした。

「ああ、お主が説明している最中からな。」

と雪が言つた。

「だから、もういこのか？それにこの体はきついだろ？が我慢してくれ。」この世界ではお前の本体は立たちずかるからな。」

と恭也が言つた。

「ふん、分かつてあるわ。それよりも、我が封印されずに立つて居られるのはお主のお陰であるからな。恭也とか言つたな、小僧。不本

意ではあるがお主に使えることにあるが。目的を果たしたことだしの。」

と雪が。そこで恭也や他の人間共に雪が驚いた。そしてそのことを恭也が

「どういふことだ？ もしかして骸せんの子孫がこの中にいるのか？」と聞く。それに対し我是

「その通り。しかもその者は骸の生まれ変わりらしい。」

と言い私は女顔の小僧の方を向き

「会ったかったぞ。骸の子孫にして生まれ変わつよ。」

と言つた。

「え、ええ。俺が！！見間違いとか勘違いじゃなくて？」

と聞かれた。それに対し我も腹が立ちながらも

「そうだ。我的魂を見る耳は間違いないのだ。骸の魂を見間違えるはずがない。」

と自信を持つてそう答えた。

「真一郎さんが骸様の子孫で生まれ変わりだったなんて……どうして今まで気がつかなかつたのかしら。」

と雪が言つた。

「お主ら雪女はそこら辺は弱いからね。仕方あるまい。」

「では、何故恭也の守護獣になつたのか話すとするかの。」

と我是本題を切り出した。

回想

精靈化した小僧が近づき攻撃を加えようとしたが我は小さな声で「何故だ、何故。貴様らは骸の子孫に会うのを邪魔をする。」と言った。それを聞いた小僧は

「それはお前の姿が問題だしお前は害があるみたいだからな。だから封印しなければならない。」

と言い、今にも攻撃しそうな勢いだった。しかし

「今更そんなつもりはない！！我はただ骸の子孫に会いたいだけなのだ！！」

と言つと我は涙を流した。暫くして小僧はある提案を持ちかける。「だから、お前が暴れたり無暗に人を殺さないと言つ条件で何とかしよう。」

そんな方法があるのかと小僧に

「なんだと！！そんな方法があるといつのかー？」

と聞く。小僧も頷き。

「ああ、今の俺とあそこそこ会へうさんなら可能だ。」

「で、ではその方法とはなんだ？」

と聞く。すると

「ああ、俺かさくらさんの守護獣になることだ。この場合は言つた俺だな。」

と訳の分からぬ言葉が出てきたので聞いてみる」とした。

「守護獣？何だそれは！」

それはとんでもないことだった。

少年説明中・・・・

「なんだと！－！」の我に奴隸になれと言つのか？と怒鳴る我に

「あくまで形式的だがな。」

と小僧が言つ。

「何！－どつこつことだ－！」

「守護獣や使い魔になれば人間形態になれるからな。それでお前の目的を果たせる。」

と言つことだつた。その方法だけなのかと思い

「ほ、他に方法はないのか？」

と聞いてみた。

「ない！」

そつきつぱりいわれるとショックだなと思つていながら

「分かつた。お主の守護獣とやらになつてやるとしよ。」

小僧の守護獣になることを決めたのであつた。

「そうか。では手順を説明する。」

少年説明中・・・・・

「これしかないから仕方がないか。」

「ああ、では俺はさくらさんに作戦を説明する

と言い我から離れた。その後、小僧はさくらと呼ばれるものや他の者に作戦を説明した。その作戦は以下の通りである。まずは小僧とさくらが威力の低い攻撃を加え弱らせる。後は小僧が何とかするといつ作戦である（守護獣にすることは伏せた）。

回想終了

「その作戦は成功し、我は恭也の守護獣となつて今に至る。と言つことだ。しかし、ただの人間が言つても我は信じられなかつただろう。しかし、こやつの目には骸同様にそれだけ信じさせる何かがあつたからこそ受け入れられたのだ。」

とだけ言つと我が守護獣になつた理由の説明を終えた。ちなみに恭也についていく理由には「恭也といふ方が大暴れ出来そうだしの」と言う理由もありそれを言つたら、その場に居た者達全員に呆れられたと言つことも記しておぐ。

視点終了

おまけ

アルハザード

ラ・ギアスとほぼ同時期に滅んだとされる。理由は不明ではあるが内戦が原因であると言う説が今のところ有力であるが定かではない。魔法技術がラ・ギアスとほぼ同等であるとされ、ミッドチルダやベルカよりも発達していたとされる。その代わり機械技術や魔力の使わない質量兵器などの発達はミッドやベルカ、それにラ・ギアスよりも劣っていたとされている。

アルハザード式の使い手の呼び名：魔術師

デバイスの種類は多種多様であったとされている。

序章1-1話「一いつの魔と説明～中編～」（後書き）

次回は三人組みの説明と雪についてです。

序章1-2話「一いつの魔と説明～後編～」（前書き）

物語の大半は思い浮かぶのに文字にするのが難しいです。

序章1-2話「一つの魔と説明」後編～

視点：レミリア

ざからの説明が終わり、次はとうとうレミリア・フラン・咲夜の番がやってきた。

「さて、次は私達ね。でもその前に一人の姉妹の話をする必要があるわ。」

と前置きをして話しう出した。

「その姉妹はね、共に特殊能力のせいでもルモットにされていたの。その力とは姉が運命操る、妹がどんな物でも破壊してしまうと言つものだつた。そして姉妹はある日、その研究者達への恨みと月の魔力によって姉妹は吸血鬼として覚醒し、その晩の内に研究所を滅ぼして何処かへ行つてしまつたの。」

「まあ、仕方ないね、自業自得じや。」

と薰が言つ。

「そうね。酌量の余地はないわね。」

と瞳が相打ちを打つ。

しかし、それだけではなくそのデータが別の研究所に送られてその成果が姉妹方のユニゾンデバイスであり、私達だと言うことを話した。ユニゾンデバイスのことを聞かれたのでユニゾンデバイスは融合機とも呼ばれ主と融合することで絶大な力を發揮するが融合に失敗すればユニゾンデバイスに人格を乗つ取られ最終的に死亡してしまい、それが融合機の少ない理由とされていると答えた。そこで新たな疑問が生まれそれを聞かれた。なぜ一人はクローンではなく融合機なのかと、それについては私の予想ではあるがクローンだと寿命があるから長期の実験には期待できない事とオリジナルが暴走したことなどが関係しているのではないかと説明した。実はそれだけでなくかつてどこかに消えてしまつた究極の魔道書型デバイスの能力の一つの能力に見ただけでその人間の特殊能力や魔法、それに魔力と

身体能力＆知能をコピーし、更に強化して自分の主の能力にそれをプラスすると言う物があり、その能力の再現するというのもあった。今、その魔道書はある人物と共に完全覚醒の時を待つてているのだがそれが誰であり何処にあるのかを知っているのは私、フランドール、咲夜だけだつたりする。話を戻すが、私達二人がオリヴィエ工様と出会つたのは戦争中で聖王軍が私達が居た研究所にやつて来た時だつた。聖王軍が来る直前に研究者達は私達を置いて研究所から逃げ出していつた。そしてその聖王軍を指揮していたのがオリヴィエ工様で、手術台に縛られた私達発見して救つてくれたのもオリヴィエ工様だつた。その後はオリヴィエ工様や正樹達4騎士が人間らしく扱つてくれたと言うところまで話した。

そして咲夜については吸血鬼ハンターだつた彼女が吸血鬼と思われる私とフランの二人（正確には2機）を狙つたときに私の能力によつて運命を変えられてオリヴィエ工様の従者になつたということを咲夜が自ら話した。

それから、この世界に来た理由やベルカについても恭也とさくらも知らない事なので二人に聞かれたので説明した。その内容とは・・・。

オリヴィエ工様が復讐心によつて暴走したこと。その結果がベルカの消滅であつたこと。その時に生き残つたベルカの人々を別の星に移住させたこと。4騎士の一人であつた正樹の供養のために地球に来た時にその兄の騰樹と出会い結婚したこと等、驚愕するのに十分な威力であつた。事実、オリヴィエ工様と共にしていた記憶を持つ恭也とさくらですら驚きを隠せないで居た。無理もない、自分の前世が死んだのが原因で復讐心を抑えきれずに戦争を仕掛けてきた連中を故郷の国と共に滅ぼしてしまつたのだから。それからオリヴィエ工様の結婚後は、三人は結界を張つてそこに館を魔法で作りそこに250年の間住んでいたと言つところまで説明した。こうして私達三人の話は終わつた。

視点終了

そこで今まで黙っていた恭也の使い魔であるだからが声を出す。

「ところで雪は如何するつもりなのだ？」

「え、どうことと？ ザカバ。」

とぞから言葉に反応する雪に

「既に骸の子孫が分かつておるのだ。約束は果たされたも同然だろう。だから、これから如何するのかと聞いておるのだ。我と共に恭也の元に来るか、それともそこの骸の子孫についていくのか。」

とぞからは聞く。それに対し雪は

「そんな、二人に迷惑がかかるんじや？」

と言つが当の二人は

「そんなことないですよ。寧ろ妹や家族も喜ぶと思います。」

「そうだよ。だから気にしないで。」

と恭也と真一郎がそれぞれ言つ。

こつして少し考えた上で雪が選んだのは・・・・。

「じゃあ、恭也君お願い出来る？」

「ええ、分かりました。」

と恭也が返事をする。その一方で選ばれなかつた真一郎と恭也が好きな忍とさくらガツカリしていた。真一郎は可愛い子と一緒に住めないから、忍とさくらはライバルが増えたこととそれぞれガツカリした理由が違つていたが・・・・。それに引き換え真一郎が好きな人達

は喜んでいたが。理由は言つまでもなくライバルが増えずにするんだからである。こつして雪の居場所も決まつたことと既に夕方になつたので解散することとなつた。帰りもノエルの車と愛の車で途中まで帰ることとなつたのだが、今回はメンバーが少し違つていた。

ノエル組：忍、さくら、みなみ、弓華、ななか
愛組：真一郎、小鳥、唯子、瞳、いずみ、七瀬（行きも帰りも位牌の中で小鳥が持つてゐる。）

と言つメンバーだ。

恭也や雪にざからは恭也の転送魔法で家に直接転移していくからだ。レミコア、フランドール、咲夜はそれに同行する事が決まっている。ちなみに恭也が直接転移できるのは他の仲間の物だったデバイスの反応やなのはの聖王魔力の反応を辿る事でピンポイントで転移できるのだ。いつして転移した恭也達がついたのは高町家の物置小屋付近だった。

家に着いた恭也達は家族に経緯を説明した。結果、全員が高町家の住人になつた。ただし、来た全員に戸席がなかつたのでアルバート経由で偽の戸席を作る事にしたのだった。

こうして今までの中で一番長かった（勿論、前世とは関係なしに）恭也の一泊は終わりを告げるのであつた。

おまけ1

高町勇吾

ざからの高町家に入つたときに付けられた名前であり、ざからの名前だと魔物だと気づかれてしまう可能性もあると士郎が考えたから。現代知識等を教えてから恭也と共に学校へ行くことが決定。容姿はどちらかの赤星勇吾を参照（その代わりに赤星くんには存在しないことになつて貰います。）

転川雪

むくりかわと読む

苗字は本人の希望で骸とその子孫の真一郎の苗字を合体させたもの。ただ、漢字的に骸だとまづいと士郎が感じ、此方の転に変更した。

高町家のメイド長（一人しか居ないけど）で翠屋のフロアチーフとして働くことに。

レミリア・スカーレット

小人形態でなのはの世話係兼護衛1として働くことに。
戸席は作っていない。

フランドール・スカーレット

なのはの世話係兼護衛2として働くことに
戸席は作っていない。

おまけ2

if

真一郎が選ばれた世界

こうして少し考えた上で選んだのは・・・。

「真一郎さん、お願ひできますか？」

と雪が言った瞬間、忍とさくらは喜び、真一郎が好きな女性達は皆ガツカリしていた。理由は語るまでもなく忍とさくらはライバルがこれ以上増えなくて良かつたと言う喜びで、真一郎が好きな女性陣はその逆でライバルが増えたことに対するガツカリだった。

「え？いいの！？勿論、OKだよ」

と真一郎、それに対し

「ありがとう」¹ぞこます

と雪が言つ。

「あ～、気にしないでいいよ。君みたいな可愛い子が家に来てくれ
るっていうんだもん。」

その言葉に雪は真一郎の顔を赤くさせる。

こつして雪は真一郎の家で暮すことになったのであった。

ちなみにその後、真一郎は彼の事が好きな女性によつて袋叩きにされたのであつた。合唱・・・チーン

それから数年後

真一郎と小鳥が共同で開いたレストランには真一郎とその妻である相川雪の夫婦の姿とそれを微笑みながら見守る小鳥の姿があつた。

if 終了

序章1-2話「一つの魔と説明～後編～」（後書き）

魔道書の持ち主は、原作で管理局の悪魔、魔王、冥王と名高いの方です。大体の方は既に分かつてしまつたかと思いますが・・・。雪は恭也と歩むことにしました。真一郎×雪の方には申し訳ないと思つたので申し訳程度ではありますがエフも書かせていただきました。

それにも人数が増えると難しいです。なんか方法はないでしょうか？と思っている今日この頃であります。

それにしても強引に話を進めたような。

序章13話「説明と暗躍する者」

場所：さざなみ寮

視点：全員

魔獸ざから改め高町勇吾達が高町家の住人となつて2年の月日がたつた。

3歳となつたのはは高町家長男である恭也と咲夜とレミリアとフランのユニゾン姉妹に連れられてさざなみ寮へと来ていた。なはとさざなみ寮陣営の人間を会わせるである。レミリアと同じく2年前に高町家の住人となつた雪は翠屋で働いている為、この場には居ない。ざから改め高町家次男（あくまで戸席上である）の勇吾も現代知識やひらがな、カタカナ、漢字等の文字の勉強中であるため今は高町家で勉強中だからである。ちなみにさくらや忍は予定があるらしくこれないらしい。

なのははリストイと会つた時から心を読み取れるよつになつた。最初はHGSを疑われたが翼が出ていない為、別の可能性が高いという結論に達した。そんな時、意外なところから質問がくることになる。

「失礼ですが、この中のどなたかに心や思考を読む能力の方は居ませんか？」

と何かを考えるような仕草で咲夜が聞く。

「ああ、それなら僕と知佳が読めるよ。条件付だけどね。それがどうかした?と言つより何故僕達が心を読めることが分かつた?」リストイが咲夜の質問に答え、不思議に思い、どうしてそんなことを聞くのか理由を聞く。それに対しその質問に答えると思いまや「その前に、皆様はなのは様が聖王オリヴィエ様の生まれ変わりだと言つことは覚えてますね?」

と咲夜は聞く。そこでリストイが

「覚えてるよ。でもそれと今回のこととどう関係していくんだい?」

と聞く。そして咲夜は本題に入りだす。

「はい、オリヴィエ様はある魔道書の転生能力によりなのはお嬢様へと転生したのですが、その魔道書には他にも能力があります。今回の事はその能力の一つが働いたのではないかと。」

「その能力つてのは何なんだ？」

と真雪が聞く。

「人間を見ただけでその人間が持つてる特殊能力等をコピーし、強化や改造をして主にその能力を与えると言うものです。これは、先程のリストイ様の何故分かつたかと言つ質問の答えでもあります。」

と咲夜が答える。

「なるほど、そういうとか。」

とリストイが納得する。

「そういうことです。」

「じゃ、じゃあ、靈力とかもコピーしているのかい？」

と耕介が咲夜に聞く。それに対し咲夜も

「その可能性は高いです。その理由として2年前のぞからや私達が来た日から急激に身体能力や魔力が上がつていています。」

と仮説ではあるが答え、その理由を語る。

「つまり、他人の力を自分に上乗せできるってこと？」

となのはが咲夜に聞く。

「恐らくは。それに、知能に関してもかなりのものとなつておりますので知識などもコピーしているのでしょうか。」

と咲夜が言うとなのはが

「そういう自覚はないんだけどな~。」

と言つた。

「ちなみにその魔道書つて言うのは何処にあるんだ？」

「それは、まだ眠つているのよ。主の中でね。」

「どういつこと?どうして私の中にそんなものがあるの?」

「それはね、なのはの前世のオリヴィエがこの世界に来る前に手に入れた物なんだけど、ランドール達が死んでその後に手に入れた魔

道書だから。」

真雪、レミコア、なのは、フランがそれぞれ言つ。そこで
「どうりで、前世の記憶を辿つてもなかつたのか。」
と恭也が言つ。

「そういうこと。でもね、私とお姉さまはオリヴィエと出合つ前か
ら知つていたんだけどね。」
と言つフランの言葉に

「どういうことだ？」

恭也は聞く。そして

「私達がスカーレット姉妹の能力をコピーしたユニゾンデバイスだ
つて事は2年前に話したよね？」

その間に真雪が

「ああ、どうやつたかは知らねーけどな。」
と言つ。

「つまりやり方が分からなければ私達はただのユニゾンデバイスと
して存在しているか、廃棄処分になつていたはずだよ。そこで問題
だよ。どうして2体でも成功しているんだろうね。」
「…………」

とこの場にいる全員が気づいたのである。そして

「データか資料があつたと観るべきね。勿論、成功データがあるは
ずよね。」

と知佳が言つとそこでなのはが気づいた。

「まさか！ それが私の中に眠る魔道書？」

「うーん、半分正解だね。実はその魔道書のデータをコピーされて
から何冊かの魔道書やいくつかのデバイスになつたんだよ。そして、
その魔道書は……。うーん、魔道書と言うのはおかしいね。能力
を記録する記録書と言つことでいいかな？」
とフランの説明にはは

「そうだね。私もそれでいいと思つ」

と相槌を打つとその場にいる全員が頷いた。

「他にも機能があるんだけどそれを使うには主が覚醒しないとダメみたいね。まあ、魔力を糧にしての覚醒だと思うわ。まあ、覚醒云々は気にしなくてもいいけどね。だって、この世界には魔法文化がないから魔法関連の危険が訪れるはずがないから使う必要がないもの。妖魔や妖怪もこの世界にうようよいるわけないから恭也やさくらみたいな目覚め方はないでしょうね。」

とレミリアがそういう言つ。しかし、その数年後に妖怪や魔法関連の事件等が起きて、それになのはが巻き込まれることなど、今のは達は知る由もなかつた。

一方その頃・・・・・。

場所：第147管理外世界アルファード

第147管理外世界アルファード、かつて繁栄していたが数百年前に滅んでしまった世界である。

そんな世界で黒紫の鎧を装着した少年と異形の者が戦つていた。戦況は少年が圧倒的に押していた。

視点：？？？

広がる荒野で少年である私と一体の異形の生物が戦つていました。私は黒紫の鎧くグラソソンゝを着けていて全くの無傷でした。それに対し、異形の方は既にボロボロであった。そこに黒紫くグラソソンゝを装着している私は

「さて、止めを刺す前に力を奪つて差し上げましょ。ヴォルクルザシユツ・・・・・ウイ――――！」

と言い、私は真・ウイゾールの鎧部分にその手に持つていてる巨大な大剣を突き刺すと真・ウイゾールの力を奪い始めた。そして、全ての力を奪いつくすと私は

「これで最後です。滅びなさい。」

と言い、私の鎧くグラソソンの胸の装甲が開き黒みがかった紫の光を胸元で集めるとそれをさせて片手で真・ウィゾールに投げつけ。するとその巨体を貫き後ろで止まると全ての物を吸い込み始めた。その力にさしもの巨体も吸い込まれるしかなく、とうとう吸い込まれていった。

「さて、これで一体撃破ですね。既に分身の内、私の前世と融合したヴォルクルスの分身は300年前に彼らによつて倒されてしまいますからね。後3体ですね。」

と言つ。そう、私はかつて一代巨ランドール達が戦つたヴォルクルスと融合した神官の生まれ変わりでした。容姿も同じと言うのはいささか驚きましたがそんな事は些細なことなのです。しかし、そんな私がどうしてこんなことをしているのかと言つと

「これからが私を操つて利用してくれた者達やヴォルクルスへの復讐が始まりです。さて、次はどうやって復活させて倒しましょうかね。クッククッククックク。」

と言い、私は笑いながら何処かへと転移していった。

視点終了

序章13話「説明と暗躍する者」（後編）

サフィーネさんは台詞もなく早々に退場してもらいました。それと
ようやくショウ様出てきました。次にヴォルクルスが出る時はある
作品とのクロスになります。

なのはの能力が一部だけ分かって3年後、なのはは2年前に親友となつた月村忍の妹、月村すずかやなのはの護衛役のスカーレット姉妹と共に名門である聖洋大付属小学校に入学していた。スカーレット姉妹の戸席はなのはの護衛する為に1年前にアルバート経由で作つたものだ。入学してから次の日、クラスで自己紹介を含めた親睦会が開かれたのだが、注目はなのは、レミリア、フラン、すずか、それから金髪の少女アリサ・バニングスが注目の的となつていた。特に注目されたのは綺麗な金髪に翡翠と紅色のオッドアイのなのはであつた。その時に

「その目、すごいね。」

「コントラクトじゃないよね？」

等と言われたが、その時のなのはの回答は

「私の先祖にはドイツの貴族がいて、その人が私と同じ髪と目の色だったらしく。私はその人の血をかなり濃く引いているらしいの。」であった。勿論、ドイツと言うは嘘であるが本当のことが言えるはずもなくこういう回答となつてしまつた。レミリアとフランのスカーレット姉妹との関係も、

「親戚だよ。」

と答えて納得させた。

事実を知るすずかやレミリア、フランのスカーレット姉妹は苦笑していだが・・・。

それを見ていたアリサ・バニングスは不審そうな顔をしていたがこの場では何も言わなかつた。

ちなみになのはは3年前の時に兄の恭也やスカーレット姉妹の頭（心や記憶）の中を読んだ為、自分が何者であるかを知つてしまつた。そして、自らや周りの人間に危険が訪れるかもしれないと思え、家族やさざなみ寮等の人々から剣術や武術、妖術や靈力技、魔法等を

習い始めた。とは言つてもなのはの能力の為、模擬戦程度しかしていなかつた。しかし、それでも前世の記憶が無いので実戦不足であることは変わり無い為にそれなりに充実していた。そして、3年後の現在では新しい技の開発したり、新しい戦術や戦い方（例を挙げると御神流と魔法等や御神流と靈力技等）の組み立て等を試す為の模擬戦へと変化していった。それに、この3年で頭の中を読む能力は自分で制御できるよう今までなつていたので精神的な苦痛も大分緩和されていた。

話を戻すが、親睦会でなのは達はそれなりに会話を楽しんでいた。しかし、なのはは親睦会が終わるとクラスメイトなどの前では隠していた疲れた顔をしていた。理由は言つまでも無く質問攻めによるものだ。もし頭の中を見る能力を制御できなかつたらもつと疲れた顔をしていただろう。そして、なのはは気を取り直し、3人と一緒に会話しながら下校する為に下駄箱の所まで来ていた。そんな時ある少女に呼び止められたのであつた。

場所：下駄箱付近

視点：なのは

普段会話をしている私とレミリアとフラン、それに昨日久しぶりに会つたすずかと一緒に歩きながら会話をしていた。内容はすずかの家で子猫が産まれたので見に来ないかと言うものであった。今日は何も予定が無いので

「いいよ。今日は予定ないし、久しぶりに忍さんと模擬戦出来るからね。二人は如何する？」
とレミリアとフランに聞いた。

「あはは、相変わらずね。私は行くわ。」

と相変わらずの私のバトルジャンキーぶりに苦笑しながら返事をして、フランも

「じゃあ、私も。」

と言い、一人とも行くことが決まった。

「じゃあ、それで決まりだね。着替えたら準備したらすずかの家に行くな。」

「うん、じゃあ待ってるね。」

等と普通の会話をしていると

「ちょっとーー！あんた達、待ちなさいよ。」

と言つ声が後ろからしたので振り返るとそこには金髪で翠の目をした少女、アリサ・バニングスが

いた。そして

「あんた達に聞きたいことがあるの。でも多分、あんまり人には知られたくないことでしきから校庭裏に行きましょう。」

と言い勝手に校舎裏の方に行つてしまつた。私達も余計な面倒を起こしたくない事と彼女の言葉が気になつたのでついて行くことにした。その時に私は前を歩いている彼女の心を読むことにした。結果、親睦会の時のことを怪しんでいたのと不器用ながらもどんな秘密があつたと友達になりたいと言つことが分かつた。そして、私は彼女の内面を知り、そんな不器用で意地つ張り、だけども優しい彼女と友達になりたいと思つた。そして校舎裏について私達にアリサは單刀直入に

「はつきり聞くけど、あんた達何か隠してない？特に高町なのはの先祖の出身地について。私の勘はそういうてるわ。」

「そんなわけな「良く分かつたね。その通りだよ。」・・・ちょっと、主！？」

とレミリアが否定しようとしたが彼女は諦めてくれそうも無いので私はレミリアの言葉を遮り、肯定の答えを出した。そしてその時、何時も口癖である主と言つ言葉が出てきてしまつた。それを聞いたアリサ・バニングスは

「主？どうやらあんたにも聞きたいことが出来たようね。全部、話してもううわよ。」

とレミリアの言葉で更に私達に対する疑問が増えたようである。そこでフランは

（如何しようつ！このままじゃばれちゃうよ！）

と念話で言つてきた。そしてそれ続くようレミリアが

（そうね。でもなんで、話す気になつたの？いくら鋭いとは言つても拒絕されるかも知れないし、何より皆に言いふらされるかもしないのよ？）

とレミリアが念話でそういう。そして私も

（彼女なら大丈夫。まあ、聞いててよ。）

と自信を持つて念話を返す。その言葉にレミリアは

（主がそういうなら。）

と念話でそういう、フランも

（そだね～。最悪、記憶消せばいいから大丈夫だね。）

等と納得してくれた。最後の言葉には少し疑問を持つたが。そして「分かった。じゃあ、話すね。でもその前に・・・・・。バーニングスは魔法つて信じる？」

と私は言った。それに対し

「は～！？」

とアリサは素つ頓狂な声を出した。まあ当然だらうね、行き成り魔法を信じるかなんて言われたらね。

そして、私は全てを話した。

私が魔法使い兼剣士であること、記憶を持つていらない転生者でその転生する前は自分の先祖にして魔法使いの国の王様であったこと。レミリアとフランのスカーレット姉妹は私の前世からの従者であり、人間ではなくユニゾンデバイスと呼ばれる意思を持つ魔法の補助具であること。

すずかにも始めて言うがすずかとバーニングスにも魔力があり練習すれば魔法が使えると言つこと。すずかに關してはさくらさんや忍さん、それに私達高町家組がそのことを黙つていた理由をすずかに話した。魔法と関わつて居ないすずかに魔法がらみで危険な目に合わせたくなかつたからだよと。そして今まで黙つていたことを謝つた。それに対しすずかは気にしていない、寧ろ心配してくれて

ありがとうございましたと言つて許してくれた。そして、私とのそんな会話が終わるとすすかはアリサに対して、自分の姉も魔法使いであり精霊であることと自分が夜の一族と呼ばれる吸血種であることをバーニングスに話した。バーニングスはそれを黙つて聞いていた。そして、すすかの話が終わると

「は～、確かにこれは普通の人間には話せないわね。でも、なんで私に話したの？」

「それはね。すすかちゃんもだけど私はバーニングスと友達になりたいんだよ。」

といつた。それを聞いたすすかは聞いた瞬間に驚いた顔をしていたが直に納得の表情を浮かべた。レミリアとフランも同様だった。すすかの心を読んだことが分かつたのだ。バーニングスはと黙つと驚いてはいたが直に持ち直し

「ふん、いいわよ。なつてやろうじゃない！…」

と言つた。それに対し

「ありがとう、バーニングス」
と礼を言つた。

「私のことはアリサでいいわよ。その代わり、あんた達も名前で呼ばせてもらうからね。」

と言つた。そして私は

「うん、いいよ！！」

と返事をした。それを聞いた皆も

「私もいいわよ。」

「私も～。」

「うん、私もいいよ。」

とレミリア、フラン、すすかの順に言つのであった。

そして私達とアリサは次第に仲良くなり、親友と呼べる間柄になつていくのだった。

ちなみに携帯のアドレスと番号を交換し合いその時はずすかが子猫が産まってきたことを言い、アリサも誘つたが、習い事があるから

来れないと言われて断わられてしまった。

まあ、あれだけ習い事をしていれば仕方ないかなど（すみません、記憶読みました。）と思いつつも残念そうにしている3人を苦笑しながら見るのだった。

その後、私達はアリサ誘いでアリサの家の車に乗ることになり、途中まで送つてもらうことになった。

そして、これが当たり前になつていいくのであった。

家に着いた私達は着替えが終わると直に転送魔法を使って、月村邸に転移するのであった。

視点終了

序章14話「友達」（後書き）

なのはには少し悪党になつてもらいました。心を読むのはやつてはいけないことですから。でも物語が進む上で必要だと思いこういう決断にしました。フェイトとヴォルケンリッターの時もそうしようと思つています。次回はアリサが誘拐されてしまします。果たしてアリサの運命はいかに。

序章15話「誘拐、そして覚醒」前編」

場所：月村邸の庭

視点：なのは

私達が転移魔法を使って月村邸に着いた。まだすずかは帰つていない為、中で待つ為に玄関前に立ちインター ホンを押す。出て来たのは、月村邸のメイド長、ノエルであった。

「いらっしゃいませ、聖王陛下、レミリアお嬢様、フランドールお嬢様。」

と挨拶をした。そう、今の言葉通り、ノエルは私の正体を知つている。何故つて？それは5年前のだから事件の時に一緒に居たからだよ。あの時のメンバーの何人かは会うと必ずと言つていいほど私をそのネタでからかつくるのだ。今日の前にいるノエル同様に。そういえば真雪さんが私の前世をモデルにした漫画を書いてるつて言つていたなどと思いながら

「あの、ノエル。聖王陛下は止めて。まだ襲名と言つたが継承もないのに。」

とまたかといふような顔をしながら反論する。

「失礼いたしました。なのはお嬢様。」

とノエルは笑いながら言つ。本当に分かつているんだろうかと思いながらも

「すずかはまだ帰つてきてないと思うから中で待たせてもらつて良い？」

と言い案内させることにした。

「畏まりました。では、どうぞ」ちらく。

と言つ会話を交わして屋敷の中に入り部屋に案内される。相変わらず月村邸は大きいね。家も普通の家に比べたら大きい方だけ月村邸は洋館なので普通の家や私の家よりも遥かに大きい。何せ、ゲーム部屋だけで私の家の庭と同じくらいの大きさなのだ。

さて、それはさておき部屋に案内された私達三人は出された紅茶を飲みつつ庭にいる猫達を見ながらすずかを待っている。

それから10分後

すずかが帰ってきたようで私の気配を感じる範囲にすずかの気配がした。ちなみに私の気配を感じる技能、御神流・心の範囲は魔法で強化されているのでこの田村邸（庭全体を含む）全域である。

更に数分後

「なのはちゃん、レミコアちゃん、フランちゃんいらつしゃい。」
と言いながらなにやら小さい鳴く声がする何かの籠を持ったすずかが私達のいる部屋に入つて来て挨拶してきた。私達も後に続き

「うん、お邪魔してるよ。すずか。」

「お邪魔してるわ。」

「すずか、お邪魔してるね。」

と挨拶する。

「うん、それでね。この子達が昨日生まれてきたんだ。」
と言い籠の中を見せてくれる。

その中にいたのは4匹のまだ小さい猫の赤ちゃんだった。それを見たフランは

「可愛い！！」

と叫んだが直にレミリアに

「こら、静かにしなさい。」

と怒られた。子猫や他の猫たちをたつぱりと見て癒された私達は対戦用のゲームをした。

時には2対2の対戦だつたり1対1だつたりした。それから数分後、忍さんが帰つて来た。そして、忍さんもゲームに加わることになり、5人で遊ぶことになった。その時にアリサのことを話した。忍さんも彼女に対し興味が出てきたとのことで会つてみたいと言つていた。なんせ、魔法が存在しないはずの世界にこうも頻繁に魔力を持つた人間がいるのだ。研究者肌の忍さんが興味がわかないはずがない。あれこれ話したりゲームをしていると時計の針が既に7時を回つて

いた。それを見た私達は急いで帰ることにした。私達転移するために庭に出ると月村家の皆に見送られながら足元に転移魔法の魔方陣を開け、別れの挨拶をした後、転移していった。

ついたのは勿論、高町家の倉庫付近だった。

そして、家に入った私達は家に入り、既に出来ていた夕食を待つていてくれた家族と一緒に食べるのであった。

視点終了

それから数日後

場所：海鳴臨海公園

視点：アリサ

私と最近友達となつたのはとすずかは学校の帰りに寄り道をしていた。

なのはの護衛であるレミコニアとフランは翠屋の手伝いがあつたのをそのまま翠屋に向かつていった。

寄り道で海沿いを歩いていると急になのはが「ごめん、ちょっとトイレ言つてくるから先に言つてて。」と言つた。そして私は

「早く帰つてきなさいよ。」

と言い、それになのはが

「うん。」

と言いながらトイレの方に向かつていた。そして

「じゃあ、なのはちゃんが来るまであそこのベンチで待つてようか。」

とすずかが言つた。私もそれに

「ええ。」

と頷き、ベンチに向かう。

ベンチの前に着くとすずかと一緒にベンチに腰を下ろす。そして、1分がたつたその時急に後ろから布で口と鼻を塞がれ、意識が段々

と無くなつていいく。恐らく布には薬がしみこませているんだろう。
そしてそんな意識が朦朧とした中、隣のすすかの方を見ると私と同じように布で口と鼻を塞がれていた。私達は何にも抵抗も出来ずに氣絶させられていった。

視点終了

それから5分後、なのはがトイレから帰つてきた。しかし回りには二人の姿は無く。先に言つたんだろうか?でもあの「一人が先に行くはずがないし等と思考しながら周りを見る。するとベンチには二人の鞄があつた。

それを見たなのはは直に理解した。

(そんな、二人が誘拐された? !)

思い当たる節が有る。

なぜならアリサもすずかも大財閥の娘だ。だとすると金銭目的がライバル企業やそのすずかアリサの家が経営している企業に恨みを持つ人間や組織の犯行と言う線が見えてくる。

そこまで思い浮かぶとなのはの行動は早かつた。

すぐさま念話で高町家の人間や忍にさくらにアリサとすずかが誘拐されたのでこれから助けに行くと報告すし、検索魔法で二人の魔力を探つた。そして

(待つててね、二人とも。今、私が助けるから無事でいて。)

と願いながら反応がある方向に向かつて走りだしたのだった。それでも相手は車らしくどんどん距離が離れていくのが一人の魔力を通して分かる。

それから10分後

今まで動いていた二つの魔力反応が止まつたので犯人のアジトに着いたと判断し最大速度でその場所に向かうのであった。

序章15話「誘拐、そして覚醒～前編～」（後書き）

相変わらずのグダグダで駄文で申し訳ありません。次回はアリサが魔装騎士＆精霊になります。

序章16話「誘拐、そして覚醒（後編）」

アリサとすずかが誘拐されて10分が経過していた。2人の誘拐犯は廃ビルの真下に車を停車させると眠らされた2人を誘拐犯の親玉のいる4階へと運んでいった。そして

「ボスー、搔つ攫つてきましたぜ。」

「無茶苦茶楽勝だつたつすよ。」

とアリサとすずかを担いだ誘拐犯が扉を開けて部屋に入していく。その部屋は何にも飾り下が無くただ机と椅子があるだけであった。最もその椅子には

「当然だ。こんな子供を攫うのに時間をとられてたまるか。」

「そうだぜ。」

「それにしても可愛いんだな。早く犯りたいんだな。」

とボスと呼ばれる親玉とその部下達が3人程座つていて2人の誘拐犯にそれぞれ言っている。

そしてアリサとすずかは一人して廃ビルの柱に縄で縛り付けられていった。

2分後、二人は目を覚まし

「「んん（ん）、此処は？」」

と一斉に言つた。その間に答えたのは

「お田覚めかな？捕らわれのお姫様方。」

と言うボスと呼ばれる黒スーツの痩せ型の男だった。そんな男に対し

「んで、なにが目的？身代金目的の誘拐？それともパパ達が経営する会社への妨害？ならすずかは関係ないでしょ！！だつたら今すぐ開放しなさい！！」

とアリサが勇気を振り絞つて言つ。

「目的は身代金目的と君のパパの会社の妨害の両方だよ。でも、彼女の開放についてはそういうわけにはいかないのだよ。何しろ、そちらのお嬢さんも攫つてくれつて言う依頼が来てたんでね。まあ、

何でかは知らないけどな。」

と言つとアリサに近づく。それに反応したアリサは

「近づくんじゃないわよー！」

と叫ぶ。それに反応したボスが

「ふん、少々喧しいな。黙らせてやるか。おいつーー犯つてやれ。」と太つた男に命令を下す。

「ひつひつひ、待つてたんだな。じゃあ、早速犯つてやるんだな。それを聞いた太つた男が目をギラつかせ、そう言いながらも近づいてくる。それに恐怖と自分の貞操の危機を感じたすずかは

「い、いやーー！ー来ないでー。」

と叫び、アリサは叫びはしないものの

「く、来るんじゃないわよーー！」の変態ーー！」

と顔を悔しさで歪ませてそう言つた。そして内心は恐怖と自分の無力さでいっぱいだつた。そして、力が欲しいと思つた。その時

「え？ 何？ 何なの？」

と何故かそう言つた瞬間、アリサの体から赤い光が漏れ出し、やがてそれは光の柱となつて天高く伸びていつた。

一方その頃

なのははアリサとすずかの魔力反応を辿つて廃ビルへと向かつていった。そこへ向かつている方向から赤い柱が立つのが見えた。それを見たなのは

（あれはアリサの魔力。アリサが兄さんたちみたいに覚醒するの？）そして、なのはがしたことは封時結界を張り、周りの一般人から見えないようにして飛行魔法を行使するのであつた。

場所：廃ビル
視点：アリサ

私達が太つた変態が近づいて來た。それを見たすずかは
「い、いやーー！ー来ないでーー！」
と叫び私は

「く、来るんじゃないわよ……」の変態……」と怒鳴った。

私は無力を思い知った。そして、こうも思った。力があればこんな奴ら。力が欲しい、自分自身を守れる力が欲しい、すずかを助けられる力が欲しいと。

本来な叶えられずに何も起きるはずが無い筈の願いに（ならば目覚めさせる、我が力を。）

と声が聞こえ私は

「え？ 何？ 何なの？」

と言った時、私から赤い炎の様な光が私から出てきた。そして、その光は私を包み込むと光の柱になつた。それに巻き込まれたのは私を襲おうとしたデブだった。私はただその光の眩しさに目を閉じるしかなかつた。

場所：異空間

目を開けると周りが赤い光の空間にいた。そこへ炎の人気が現れた。それに驚きながらも

「へ？ あ、あんた誰よ！ 此処は何処なのよ！！」

と聞く。そしたら、私の斜め上を言って答えを言つてきた。

「我が名はグランバ、炎の精霊を束ねる精霊の長の一人だ。此処は我が精神の内部だ。」

それにもうろたえながらも

「せ、精霊？」

と聞く。

「そうだ。選ばれし者よ。」

「選ばれし者？」

「そうだ。我ら高位の精霊は人を選ぶ。そして選ばれたのがそなただ。」

「私？」

「そうだ。我と契約できる者。それはすなわち強大な力を持つに相

応しき者であり、我が力と同調できるものだ。」

私が何で？どうして？

「何で私なの？」

「それはあなたの魔力の波長が我が魔力の波長と酷似しているのが大きいのだろうな。同調できなければ選ばれぬのだしな。それに危機だったのだな。」

「そ、そななんだ。」

「そうだ。では、仲間を助けたくば、我が器を叫びながら呼べ。我が器の名はグランヴェール。」

「分かった。」

そういうとグランバは消えていった。その後、直に景色も光だしたので私は目を閉じた。目を明けるとそこには驚いた様子の4人とすかがいた。あれ？ サっきのデブは？ とそんなことを気にしながらも私は力を得る為に

「来て！！グランヴェール！！」

と叫んだのだ。すると何処から現れたのかは知らないが炎のように赤いブレスレットが跳んできたのだつた。そのブレスレットは私の右腕に装着された。それを見た男達やすずかは驚きのあまり硬直し言葉も失つたようだ。そのブレスレットは

「では最後の仕上げだ。」

と言つた。つていうかこの声つてグランバじゃない。

「あ、あんた。なんでブレスレットから声出してるのよ。」

「これは我が器の待機状態だ。詳しくは後で説明する。」

「分かったわ。で、如何すればいい？』

「グランヴェール、セットアップ。ただこれだけを叫べば良い。」

それを聞いた私は

「分かった。」

と頷いてから

「グランヴェール、セットアップ」

と叫んだ。そして、私はまた赤い光に包まれていき、赤い装甲の鎧

が次々と装着されていく。装着されている時に体を作り変えられる
いるような激痛を感じた。

装着が完了すると赤い空間は割れるように消えていき、廃ビルの一
室に戻つていつた。

ちなみに私に絡まつた縄は最初の光に包まれた時に燃えて消滅して
いる。

「な、なんだお前は？その格好は？それに何で腕輪が喋つてるんだ
？」

と震える声で犯人グループのボスが聞く。でも、私も知らないので
「そんなの！こっちが聞きたいくらいよ！！」

と叫んだ。その時、人の形をした何かが窓の硝子を突き破つてこの
部屋に入つてきた。その何かを見て私は硬直してしまつた。なぜなら

「大丈夫？一人とも。」

と言う親友の姿があつたのだから。

視点終了

序章16話「誘拐、そして覚醒」後編「（後書き）

次はアリサに魔法の説明と犯人達やその大元をやつつけます。
駄文ですみません。頑張つてはいるんですがなにぶん文才がないので。

序章17話「すずかの決意と黒幕逮捕」

場所：廃ビル

視点：なのは

廃ビルに着いた私は魔力の反応が有る部屋に文字通り飛んで硝子を蹴り飛ばして来た。ちなみに魔力で体を保護したので硝子の破片に気を遣う必要はない。硝子を突き破った後に

「大丈夫？二人とも。」

と私は親友に言う。それに対し、一番に口を開いたのは、魔装騎士に覚醒したばかりのアリサだった。

「な、なのは！？なんて現われ方してるのよ。危ないじゃない！！」
と私に怒鳴りつける。

「大丈夫よ。魔力で保護してるから、それよりも目覚めたみたいね。ん・・・・でも、記憶は目覚めてないね？アリサは転生者じゃないのかな？」

と心配無用と言い、アリサの頭の中を読むが魔法関連の記憶は私達が話していた事と契約した以外の記憶がなかつたので疑問を口にしていた。そこへ硬直していた誘拐犯の一人が

「てめえ、何者だ！」

と言う。

「さあ？何者だろ？？それよりも・・・・。私の友人を攫つたんだ。」

と言い。そして、

「貴様ら、覚悟は出来るんだろうな。」

と鋭い殺氣を放ちながら冷たく低い声で言う。それに恐れをなしたのか、何人かは逃げ出して下の階へと行ってしまった。しかし、その逃げた奴らはコテンパンにやられてしまう事だろう。下で待ち構えているある存在によつて。

残つたリーダー格も殺氣で動けなくなつっていた。そのリーダー格も

直に私が手刀で気絶させた。

私はすすかの縄を解き、私とアリサの魔法に関しての記憶を記憶操作系の魔法で消して都合の言い記憶に変換した。一人を連れて1階まで降りると倒れ付していいる男達と兄さんの使い魔であるざからが見えた。そして

「お疲れ様、ざから。」

私達が勇吾をざからと言つ時は事情を知つてゐる時か、仲間だけの時である。私の言葉になんでもないようになつた。

「この程度の奴ら、どうと言つこともない。それよりも魔法使つたのだろう?」

と言つ。それに対し私も

「うん、だから今から記憶操作するよ、」

と言つた。そこへすすかが喋る。

「それよりもなのはちゃん。」

どうやら聞きたいことがあるらしい。

「ん、何?如何したのすすか。」

とりあえず聞いてみることにした。

「どうしてざからがいるの?」

どうやらざからがいることに驚いてゐると不思議がつてゐるようだ。なので

「それは念話で皆に一人が攫われた事を話してね。それで兄さんが念の為にと思って、応援を出してくれたんだよ。」

と答えた。その答えに納得したよう

「そつか~。」

と笑いながら言つた。そついえばすすかも兄さんを狙つてたな。と思ひながら話を変えることにした。

「さて、話は変わるけど。アリサ、貴女はこれから如何するの?グランバと契約したんだから貴女もう人じやないでしょ?」

そこへざからも話に加わる。

「そうだな。主も高位精靈サイフィスとその器のサイバスターと契

約したことで精霊となつたのだし、ほぼ同等の力を持つ高位精霊ならば同じように精霊化することになるだろ？」

と頷き説明をする。アリサは人外になつたことで落ち込んでいるのかと思いきや

「う～ん、とりあえず気にしてないわ。それよりも魔法や戦い方を覚えたいわ。さつき、気づいたんだけど、私って魔法とか戦闘の知識がないからさつきの戦いで戦闘経験がないから無暗に動けないことに気がついたのよ。」

どうやら、本気で気にしていないみたいで、それよりも魔法や戦い方などを知りたいと言つてきた。

私もそれには反対しないので私が教えることにした。兄さんやここにいるぞから、それに忍さんやさくらさん達では会える時間が少ないので多くを教えられる私が適任だと判断したからだ。なので「わかった。私が教えるよ。他の皆より私の方が長く一緒にいるからね。」

と言ひ。それを聞いたすずかが何か考え事をしているように見えた。多分、自分も戦えるようになりたいとか思つてているんだろうなと思つていると

「私もそれに参加していいかな？」

とすずかがそう言つた。それにはアリサが驚いたようだつた。だけども直に

「ああ～、なるほどさつきのことね。」

と納得して言ひ。すずかはアリサに答える。

「うん、また今回と同じように誘拐が起これば、私は足手まといになるから一人や皆に迷惑がかかるかもしねないから。」

と言つた。私はすずかの目を見ると、彼女の目には決意とやる気に満ち溢れていた。こんな目を見たら断られるわけないじゃないと思いながら

「いいよ。ただし、忍さんやさくらさんにも許可貰つてね。多分、家では忍さんやさくらさんが教えるだろうから。遊ぶ時や下校後と

かは私が教えるね。
と言い、すずかも

「分かった。」

と言った。

こうしてアリサとすずかは私から魔法を教わることになるのだった。
ちなみに皆にそのことを話したら、暇などがあればざからや兄さん、
それに咲夜にユニゾンスカーレット姉妹も手伝ってくれるという。
視点終了

数日後、初めての魔法練習の時にはアリサにかつての仲間で
あつたホワン・ヤンロンのデバイス「炎龍人の爪」を渡した。理由
は、なのはアリサがヤンロンの生まれ変わりかどうかを確かめる
ために渡したのだ。

結果はアリサはヤンロンの生まれ変わりであった。つまり、記憶や
知識も手に入れたので魔法を習う必要がなくなつたわけである。し
かし、すずかに魔法を教える為になのはの助手として練習場にはつ
いて来ている。

ちなみにアリサとすずかを攫つた誘拐犯達は失敗したことを依頼者
に報告した。その依頼者は次にそれなりの戦闘集団を使っての誘拐
をしようとしたが失敗し、今度は上位クラスの戦闘者数名と依頼者
自らが誘拐の実行をすることになった。なのはは態とアリサに誘拐
されることを念話で提案して依頼者と会うことに成功し、依頼者は
跳んできたなのは達により気絶させられて、その間に警察に通報さ
れて、逮捕された。勿論、魔法の記憶は消してからである。その後、
リストイの能力により黒幕が判明し、その逮捕された。黒幕はアリ
サの家が経営している会社のライバル企業であるワガクトクア社の
社長である悪徳川久信と言う男だった。警察が調査した結果、悪徳
川久信が他にも様々な犯罪を染めていたことが分かり、それについ
ての追求もされたとのことだった。こうして、アリサの危機は去つ

ていった。しかし、すずかを狙っていた黒幕については判明しなかつたと言つ。それもそのはずで、すずかの方の黒幕は吸血鬼が関係してたのでなのはが記憶を消去して改変されたからである。その後、黒幕は夜の一族からの追放と力の封印という罰を受けたといつ（忍談）。

序章17話「すずかの決意と黒幕逮捕」（後書き）

黒幕の名前が・・・。ネーミングセンスも無くてすみません。
次はなのはが覚醒する前段階に入る為にある世界に行ってしまう予定です。

序章18話「異世界ハルケギニア」

すずかが魔法を習い始めて、三日程経過していた。すずかは姉譲りの魔力と才能でどんどん腕を上げていき、今ではマルチタスクを5割程習得している。

そんな中、教師役兼親友の高町なのははあることを悩んでいた。それは・・・・・。

「はあ～、如何すればデバイスが出て来るんだろう。」

と溜息を吐きながらそう言った。

そう、なのはの場合はデバイスが完全に無いすずかと違い、自身の中にあるのだ。しかし、彼女は困っていた。それはなのはが漏らした溜息と共に出した言葉通り、デバイスの取り出し方が分からぬからだ。そんな中、一人の青年が通りかかった。なのはの兄、恭也である。彼はなのはの様子を見て

「如何した？落ち込んだ顔をして。何か困ったことがあれば相談に乗るぞ？」

と真剣な顔をして聞いた。

「う、うん。実は、デバイスの出し方が分からないの。」

となのはは自身の悩みを打ち明けた。なぜなら同じ転生者であり既に覚醒した存在だからだ。それを聞いて納得したように

「ああ、そういえば咲夜達が言つてたな。オリヴィエが持つていたデバイスも一緒に転生したって。」

と言つた。それに対しなのはは

「そ、うなんだよ。だから如何して良いのか分からなくて。」

と落ち込んだ声で言つた。すると恭也は

「なら、心から願えば良いんじやないか？もしくはそうならざる事態に陥るとかな。まあ、お前のことだから前者の方が楽だろうな。後者だと、お前でも対抗できる存在は殆んどいないからな。」

と言つた。それを聞いたなのはは

「そつか、そうだよね。ありがとう、兄さん。」

「言い元気を取り戻していた。

「いや、気にしなくて良い。」

と恭也は顔を赤くしながらもそう言った。照れてるのだ。

しかし、なのはの覚醒は、前者ではなくある意味で後者になつてしまふ事はそれから数時間後になるまで誰もわからなかつた。その数時間後、なのはと咲夜とヨニゾン姉妹は歩いている時に急に現われた鏡もどきによつて何処かへ消えてしまつた。なのはが鏡もどきに吸い込まれた時、咲夜とヨニゾン姉妹が助けようとしたが一緒に吸い込まれてしまつたのである。その時、一緒に歩いていたすずかやアリサが一人+一機が鏡もどきに吸い込まれて消えたことに驚き、慌てながらそのことを皆に報告した。

一方、鏡もどきに吸い込まれたなのは一行はハルケギニアのトレステイン王国にたどり着いていた。

場所：トレステイン魔法学園

視点：ルイズ

私達は今、使い魔を召喚する為に学園内の草原に來ていた。皆それぞれ使い魔を召喚していき、最後に私の番となつた。隣国のゲルマニア出身で我がヴァリエール家にとつて倒さなければならぬ敵（色氣沙汰が多い）のチャルプストー家のキュルケはサラマンダー（火蜥蜴）を召喚したので、それ以上に強力で尚且つ神聖で美しい使い魔を召喚してやろうと意気込んだ。しかし

「宇宙の果てのどこかにいる私のしもべよ！神聖で、美しく、そして強力な使い魔よ！私は心より求め、訴えるわ！わが導きに、応えなさい！」

と杖を振り上げて声高に呪文を唱える。すると何時ものように爆発が起つた。

私は、何故かどんな魔法も爆発してしまつ。どうしてかも分からなければそのことをネタに

「おい、ゼロのルイズ。お前は何度失敗させれば気が済むんだよ！」

「本当ね。勘弁して欲しいわ。」

などと馬鹿にされる。それを見返そつと努力するが、その努力は全て無駄になつてしまつていて。

そして、今回も爆発したので馬鹿にされていた。ムツとしたが今は使い魔を召喚できたかどうかという事が気になつた為、爆発後の煙の中を見ようとした。すると人らしきものが見えた。それも一人ではなく4人もいた。煙が晴れると、そこには金髪で翡翠に紅玉の瞳をした平民の格好をした少女と貴族の娘らしい銀髪赤眼の少女と金髪赤眼の少女、それにその二人の従者らしきメイドがいた。その4人の中で一番存在感を放っていたのは平民の格好をした少女だった。なぜか雰囲気が自分より上の方だと思つてしまつたのだ。皆それは同じようで、硬直していた。すると4人の中のメイドが

「あの、すみませんが此処は何処なのでしょうか？」

と聞いてくる。その声に硬直が解けた私は
「ここはトレステイン魔法学院よ。平民でもその位は知つていて
しょう？」

と言つたが

「トレステイン？知らない地名ね。何処かの辺境の世界かしら。」
と周りを見渡しながら銀髪紅眼の少女が知らないと言い、由緒あるトレステインを田舎扱いし、更には異世界などと言つ単語を発したのだ。それにムカついた私は

「何よ！？トレステインを知らないなんて、そつちこそ田舎なんじやないの？それに、何よ！？異世界つて！！」

と言つたが、4人は驚いた顔をしながら私を見つめた。そして、四人は

「似てるね。」

「ええ、似てるわね。」

「うん。性格まで似てそうだね。」

「やうだね。」

と口々にそう言つて。そして、4人揃つて

「「「アリサ（お嬢様）に声がそっくり（です）。」「」「」

と言つた。

「アリサって誰よ！？そんなに似てるって言つの！？」

と言つ。それに対し金髪で翡翠と紅玉の眼の少女が

「うん。それにプライドが妙に高い所と気が強い所も似てるよ。そうそう、さつきの質問なんだけどね、少なくとも此処よりは都会よ。それに、異世界は違う世界のことよ。」

と答える。私がその発言に対し、色々と突つ込もうとした時に

「取り込み中申し訳ないが、話を進めさせてもらつても良いかな？」

とミスター・コルベールが会話に割り込んできた。そして

「自己紹介が遅れたね。私はジャン・コルベール。こここの教諭を務めている者だ。」

と挨拶し、それに習い

「「」丁寧にどうも。私は高町なのはといいます。」

と挨拶を交わした。そして

「この子は私専属の護衛を勤めるスカーレット姉妹の長女、レミリア・スカーレットです。」

となのはと名乗る少女がレミリアといつ少女を紹介すると貴族らしい挨拶をしてきた。どうやら本当に貴族みたいね。と思つていると

「この子はその次女のフランドール・スカーレットです。」

今度はその妹を紹介した。すると姉の様に優雅に挨拶するのかと思ひきや

「よひしく～。」

と笑いながら言つただけだつた。そして

「この彼女は、高町家のメイドの十六夜咲夜といいます。」

と顔をメイドの方に向け言つとメイドは一礼した。

そして、私を無視して勝手に話を進めだしたのだ。

コルベールが使い魔になつてくれと頼むが4人はそれを拒否した。

そして

「これ以上言うのなら力ずくとさせてもらいますが？」

と恐ろしい殺氣が私達を襲つた。コルベールは怯みながらも

「それは…………。しかし、さつきの話が本當だとするとあなた方は帰れないので？ でしたら帰るる方法が分かるまではミス・ヴァリエールの使い魔となつていただくと言うのは？」

と説得する。それに対しレミリアが

「くどいわね。それに使い魔と言うからには洗脳効果みたいなのがあるはずよ。そのことは頭に入っているのかしら？」

と言つ。そういうえばあつたわねと思いながら私は眺めていた。そして、その言葉にミスター・コルベールは思い出したようであつた。

「あつー。」

と言つ。どうやら氣づいてなかつたようね。そこへレミリアが「心当たりがあるのね？ それでよく使い魔になれと言つてくれる！」

！ そんなことが本当に許されると思っているのか？

と途中で切れだした。コルベールはそれでも抵抗しようとする。すると

「それに、私達を使い魔にするといつのなら、エルフ達や精靈達を敵に回すことになるわよ？」

となのはが言う。そこへ私は

「ちよつと！ どうこうことよーー！」

と叫んだ。すると

「私の友人に精靈がいるよ。風、水、火の精靈のね。」

と言つ。つまり異世界とはいえ、精靈の友人を攫つたことになるのだ。それはとても不味い事だつた。何しろこのトレスティンは水の精靈と契約して成り立つてゐるといつても過言ではない。もし、このことが精靈たちに分かれれば契約は破棄され、それどころかエルフや吸血鬼等の先住魔法を使う奴等や精靈たちが一斉にこのハルケギニアに攻め込んでくる可能性があるからだ。その事を聞いたコルベールは

「なんですよ！…それは本当ですか？」

「本当よ。ただし、異世界のね。でも、このことが此方の精霊にも
ばれれば間違いなく、戦争になるでしょうね。」

と脅してくる。すると今度は、青髪の小柄なクラスマレイトがなのは
に近づく

「それ、本当？」

「ん、貴女は？ん・・・・。ふ～ん、なるほどね。確かに私が精霊
に関われば、貴女の母親を助けられるかもしないわね。」

とまるでその子の心を見透かしたような表情でいう。そして、クラ
スマレイトは

「！…！…どうしてそのことを？」

それを図星と言つような表情で尚且つ殺氣を込めて言つ。それを見
て笑いながら

「分かつたつて？簡単ですよ。貴女の記憶や心を読んだんですよ。
まあ、それよりも貴女。お母さんを戻してから如何するつもりです
？ジヨゼフ王に復讐するにしてもお母さんにも危険が及びますよ？」
と警告する。それに対し彼女も殺氣を解いて

「なら、どうすれば良い？」

と聞く。すると、なのはは私の斜め上をいく言葉を発したのだった。
「簡単なことですよ。貴女と復活したお母さんを私の世界に來ても
らいます。復讐は出来なくてもこれでお母さんは守れるはずですよ。」

「

と。それを聞いた彼女は

「分かつた。でも私は如何すればいい？」

「それは、見返りのことかな？」

となのはがそう言つとこくんと頷いた。そして

「ん～、とりあえず。貴女の屋敷に行きたいんですけど、貴女は使
い魔と一緒に来てくれます？」

となのはがそう言つと青髪のクラスマレイトは頷きくと直に口笛で使
い魔の風竜を呼んだ。青髪クラスマレイトは竜に跨つた。そして

「じゃあ、行こうか。」

となのはが言う。しかし、私の問題が解決されていない。なので「ちょっと！－待ちなさいよ！－まだこっちの話は終わっていないわよ！－使い魔は如何するのよ。」

と言つ。すると、なのはの代わりに「そんなの。もう一度召喚なさい。」

レミリアが言う。そして、なのはが

「そりそり、貴女は自分が魔法使えないと思い込んでいたけど、それは違うよ。貴女の系統は間違いなく虚無よ。」

と言つて、更になのはは

「虚無の覚醒条件は分からぬけれど、多分王家に伝わるものだと思つわ。それをどうにかして魔法の安全装置をはずせば、貴女は魔法が使えるようになるよ。元気でね。じゃあ、行くよ。シャルロットさんも案内よろしくね。」

と助言？を言い、4人+一人を乗せた1匹は飛び去つていった。そして、私達は呆然としてそれを見送つていくしかなかつたのであつた。そして、暫くして何とか気を持ち直した私は

「ああ、何だつたていうのよー！」

と大きな叫んでいた。それにしても、虚無か。調べてみる価値はありそうだと思つた。

そして、それと同時に、如何してそこまで知つてゐるんだろうと思ひながらなのは達が飛んでいった方角を向いていた。そして、私の使い魔召喚はと言つと明日に延期になつた。

視点終了

場所：上空

視点：レミリア

私達は飛んでいた。そして、私、フラン、咲夜は重大なことを忘れていた。それは、私達は青髪少女の名前を何も知らないことだった。主は記憶や心が読めるから名前を知つていたが私達はそんな芸当は

出来ない。それに気づいた私は

「そういえば、直接の自己紹介がまだだつたわね。私の名前はレミリア・スカーレット。あなたの名前は？」

と聞いてみた。すると

「タバサ。でも今日からはまたシャルロット・エレーヌ・オルレアン。」

と自己紹介をしたが、気になる発言をしたので

「どうということ？」

と聞いてみた。しかし、

「シャルロットは私の本当の名前。ある理由でタバサに変えていた。ただそれだけ。」

とだけ言つと黙り込んでしまった。

「そう、これからよろしくね。シャルロット。」

と言つとシャルロットは無言で頷いた。

それから、フラン、咲夜も自己紹介し、シャルロットの名前を知つていた主も改めて自己紹介したのだった。

それから数時間後、オルレアン邸前に着いたのであった。

視点終了

おまけ

なのはがルイズを虚無だの使い手だと判断した理由

なのはが記憶や心を読む能力があるが、その時に何をやつても爆発してしまつことも読み取つており、呪文が間違つていないのに違う現象が引き起こされていた。その時に同じく名前だけで効果などが分からぬ虚無のことも読み取つた為、虚無に目をつけた。そしてルイズが虚無ではないかと推測を立て、それをルイズに話したのだ。何かが必要だと言つたのも強力な魔法なら安全装置があるかもと推測した為。

序章18話「異世界ハルケギニア」（後書き）

やりたかつたネタをやってみました。次回はシャルロットの母親の救済となのはが覚醒します。

序章19話「オルレアン親子救済と聖王の完全覚醒」

なのは達がオルレアン邸について、執事などの歓迎などがあった。それから直にシャルロットの母親に会った。その時に暗殺者と間違えられたが眠らせて大人しくされた。そして、なのは達は彼女の心の病を治す方法を二つ提示した。一つ目は精霊の力を使うこと。二つ目は、なのはの時間操作の能力を使うことである。

結局、シャルロットは二つ目を選択した。その時、シャルロットもその頃に戻すという案もあったが、それはシャルロット本人から否定されることとなつた。

結果は成功し、屋敷にいた全員を喜ばせた。そして今までの事をシヤルロット達は地球に亡命することも含めて説明し、オルレアン親子は一緒に地球に亡命することとなつた。勿論、その時になのは達によつて助けられたことも説明され、シャルロットの母親がなのは達に感謝したことも記しておく。

そして、翌日

場所：オルレアン邸の庭

視点：なのは

私は元の世界に返るためにデバイスが必要となつた為、デバイスを呼び出すことにした。

私のデバイスはかなり特殊で今は私の中にある状態だ。そして今、それを取り出そうとオルレアン邸の庭を借りていた。

オルレアン親子、ユニゾン姉妹、咲夜が見守る中、私は精神を落ち着かせていた。そして

「我が胸に眠りし魔の器よ、今こそ姿を我が前に現し、我が力となれ。」

とアルハザード式の魔方陣を展開しながら唱える。何でも、ユニゾ

ン姉妹が言つには、これが魔道書を呼び出す為の呪文らしい。今まで黙つていたのは、単に聞かれなかつただけであると言われた。先代のマスターであるオリヴィエが言われたら教えるよつと言つていたらしい。

唱え終わると私の目の前に虹色の光が目の前に集まり、それは段々と魔道書の様な形をしてきた。そして、光が収まるとそこには太い一冊の魔道書が目の前に現われた。この魔道書こそ、古代のアルハザード、ラ・ギアス、ベルカ、ミッヂチルダが共同で開発した次元世界最古の魔道書、法の書である。この魔道書は特殊な暗号を正しく解読した者に強大な力を与えると言つものである。事実、私はこの魔道書の機能の一つである「コピー能力 + 追加能力と強化 & 改良能力を無意識に使用し、様々な能力や能力、更にもつと強大な魔力を手に入れられるようになつたと3人の記憶にはある。レミリアとフランが作られた技術も元はと言えばこの魔道書を参考にして作成されたに出来た一冊の技術書に書かれていたものである。そして、その魔道書には魂の鼓動を感じる。その魂の鼓動を感じつつ、私は宙に浮かんでいる法の書に手を触れた。すると眩い光が私と法の書を包み込んだ。

場所：虹色の空間

私は法の書を持ったまま光に包まれて、気がついたらこんな虹色の空間にいた。聞いた話によると兄さんたちもこれに似た様な空間で前世の記憶を手に入れて覚醒したんだつけ？と思つていると

「そうです。あの子達もこの空間を通して覚醒したのですよ。」

この声は？でも、なんで私の考えていることが・・・つてまさか！

「そう、そのまさかですよ。なのは。」

と言い、次の瞬間私と同じ髪の色と瞳の色をした女性が現われた。この人こそが私の先祖にして前世の

聖王オリヴィエなのだろうと確信した。

「そうです。そして貴女にも私の全てを受け継いでもらいます。」

私の答えは決まっている。

「元よりそのつもりです。説明は不要ですのですで始めてください。」
と言った。説明不要と言ったのは彼女の全てを受け継げばどうせ全てが分かるから。

「そうですね。では、始めましょう。」

と言いオリヴィエさんは私の頭に手をのせた。次の瞬間、頭に色んな知識が流れ込んできた。それだけではなく、彼女が生前持っていた能力や集コピーした魔力も受け継ぐことが出来た。

そして、全てを与えると私に

「貴女は私と違つて正しく力を使ってください。」

そういうと、オリヴィエさんは私の中へと消えていった。そして全てを継承した私は

「出て来て、インテックス（以後アイテ）、レイジングハート・エルトリウム（以降エル）、ライトブリングガー（以降ライト）、アルテマウェポン（以降アルテ）。」

と呼ぶ。すると法の書からは管制人格兼融合機であるアイテが現れて、エル、ライト、アルテがそれぞれ待機状態で現われる。それらに私は

「始めてまして、皆。これからはよろしくね。」

と挨拶し、アイデも

「うん、始めてだね。よろしくね、マスター。」

と挨拶を返してくれて、続いてエルも

「始めて、新しいマスター。」

と挨拶をしてくれる。そして、それに続き

「これからよろしくな。」

とライトが気軽に挨拶してくれた。そして最後のアルテは

「うむ、これから宜しく頼む。」

と渋い男性の声で挨拶してくれた。

そして、私はそれぞのデバイスを起動させる為に
「皆、セットアップするよ？準備は言い？」
と呼びかける。すると

「「「了解！」「」」

と言ひ声が一斉に出て來た。

そして、私は

「OK、じゃあ行くよ。セットアップ。」

と三つのデバイスを着けた左手を上に向かへ叫ぶのだった。

そして、叫んだ私は虹色の光に包まれ、白と青を基調としたドレス型の騎士甲冑が着けられ、その後に両刃の剣と片刃の剣になつたライトとアルテを私はそれぞれ手に取り、エルは右腕に盾として装着されるのであつた。

それが完了すると私を包んでいた光が消えた、その後、周りの虹色の空間も消えていった。私が完全に聖王として目覚めたからだ。

そして、目の前にある光景は元のオルレアン邸の庭だった。
こうして私は聖王として完全覚醒を果たしたのであつた。

視点終了

おまけ

能力説明

なのはの時間操作について

なのはの能力は咲夜の能力のコピーである。しかし、オリジナルの能力とは違い、壊れた物も元に戻るというチート能力である。しかも、心が壊れいたら、それを以前の状態に戻すことや死んでいる人間に対しても蘇らせることが可能である。

ただし、完全に白骨化したものなどには使用できないといった欠点がある。

序章19話「オルレアン親子救済と聖王の完全覚醒」（後書き）

レイジングハートを早めに出しました。そのため、ユーノには別の超高性能どころか究極クラスのデバイスと聖遺物を持たせます。後、なのはと出会った後にユーノはパワーアップする予定です。それにしてもグダグダで駄文ですいません。rz。

何とかしようとは思つてはいるんですが、次は地球に帰る前にミッドに寄つてある人物に会います。原作では悪役として登場していたあの人たちです。その人たちはある理由でなのはを神として崇めます。更には改心して良い人になり、味方陣営に加わります。

序章20話「さりば、ハルケギニア」

なのはと法の書＆アイデが元の空間へと戻ってきた。しかし、なのはの姿と今までいなかつたなのはの右隣にいる小人状態のアイデを見て、オルレアン母子は驚きのあまり固まってしまった。それはそのままに、行き成り何もないところから本が現われて、それに触つたら虹色の光に包まれたことだけでも驚きなのになのはの服装が変わつたのと白い法衣を着た小人がいたことは相当の驚きだったのだろう。そんな中、レミリアがなのはに

「へへ、この甲冑はオリヴィ工様の色違いね。オリヴィ工様の色は黒が主だつたものね。こうして前世の甲冑を着けてるつてことは、完全に目覚めたと判断してもいいのかしら？」

と聞くレミリア。その問いになのはは頷き

「うん。記憶も全ての力も継承したよ。」

と肯定する。そこへなのはの右隣で飛んでいた小人形態のアイデが

「久しぶりだね。レミィ、フラン、咲夜。」

と2機と1人に向かつて挨拶をした。挨拶された2機は居たのかという表情をしながら

「えつ？ アイデ居たの？ 久しぶりね。」

「あつ！ アイデだ！ 久しぶり。」

と挨拶し、1人は驚きの表情を見せたが、直ぐに持ち直し笑顔で

「お久しぶりです。アイデお嬢様。」

と挨拶する。その反応にアイデは

「三人とも酷いよ。」

と怒理ながら言つ。そんなアイデだつたが

「まあ、いいや。それよりも、そこに居る一人は？」

と怒りを収めてオルレアン母子の事を聞く。それに対しなのはが

「ああ、この人達は・・・つて固まつてる！…」

とオルレアン母子の方を向きながら紹介しようとするが、見事に固

まっていた。そんな一人になのはは溜息を吐ぐと一人に声を掛けながら揺さぶりだす。

数分後、ようやく正気に戻つた一人になのははアイデとオルレアン母子の互いの紹介をし、なのはの騎士甲冑についての事などを説明した後、屋敷に居る全ての人間に別れと感謝の言葉を告げると4人と3機と1匹は咲夜の転移魔法でトレスティン魔法学院へと向かつた。理由は別れの挨拶などを済ませていない事とシャルロットの本を取りに戻るためであつたのだが、それは不可能となつたのは現地についてから思い知る事になる。なぜなら・・・・・。

場所：クレーター

視点：なのは

咲夜の転移魔法で座標ではトレスティン魔法学院があるはずの場所に到着した私たちだつたが、目の前に広がっていたのはクレーターだつた。そのクレーターには魔力反応があり、その反応により魔法で消滅した事とその魔法を使つた魔法使いがかなりの魔力を持つてゐる事が分かつた。私はその犯人を見つけるためにハルケギニア全體に索敵魔法を発動させる。すると、その魔力反応はシャルロット曰く、トレスティンの王都であるトリスター二アの方にあつた。私達は早速、その方向に向かつた。

数分後

場所：クレーター2の上空

急いでトリスター二アがあると思われる場所に着いた私、アイデ、ユニゾン姉妹、咲夜（シャルロットの使い魔である風竜のシルフィードとそれに乗つているオルレアン親子は私達が飛ぶよりもかなり遅いため後から来ることになつた。）が見たのはクレーターとなつたトリスター二アとそのトリスター二アを破壊したと思われるグランゾンのデバイスを装着したクリストフそっくりの姿をした白河愁だつた。

なぜ彼のことを知っているのかと云うと、兄さんが

「俺の前世」が300年前に倒したはずのクリストフがそのままの姿で白河愁として転生している可能性がある。」

と言つて、いた事を思い出したからである。その事を兄さんがそれとなく聞いてみたりしたのだが、邪魔が入つたり、誤魔化されたりした為に分かつていなかつた。しかし、記憶を読んではつきりと分かつた。この人物はクリストフの転生者、白河愁だと。すると白河は私達の方を向き

「お久しぶりですね。聖王オリヴィエの転生者とその従者達」と不気味に笑いながら挨拶をする。それに対し私も

「久しぶりだね、クリストフ。うん、今は白河愁だつたかな？兄さんから聞いてるよ？」

挨拶する。何故、記憶を読んだことを黙つているのかと云うと、彼がそういうことを嫌つていてるからである。

「兄さん？ああ、成る程。そういうことでしたか。」

「どうやら、私が誰なのかが分かつたようだ。それに対し私は「なに考えてるのかは知らないけど、多分貴方の考へてる事であつてると思つわ。」

と言つ。それで完全に分かつたのか

「やはりそうでしたか。この世界に来たのはルイズと云う少女に召喚されたからですか？高町さん？」

と聞いてくる。それに対し私は

「そうよ。やっぱり、アレの復活が目的？」

と肯定し、襲つた理由を聞くために質問をする。答えは

「ええ。しかし、学園を破壊した理由はそれ以外にもあります。」

と答えた。

「それ以外？もしかして使い魔と関係があるのかな？」

と聞く、すると素直に

「ええ、よく分かりましたね。まあ、貴女方もルイズに呼び出されたようなので分かつたと言う事ですか？」

と答え、私に分かつた理由を聞いてくる。

「そういうこと。で、どうするの？今此処で戦う？」

と肯定し、戦うかどうか聞くと

「いいえ、止めておきます。勝てる気がしませんし、貴女方と戦う気はありませんから。」

と言つと愁は魔力で大量の重力の塊「グラビトロンカノン」を作り出すとそれを私達に向けて投げた。そして、転送魔法の準備をしました。

「さよなら。そして、またお会いしましよう。」

と言ひ、私達が「グラビトロンカノン」を防御している間に術式を完成させて転移してしまった。

ちなみに避けなかつた理由は後ろにシルフィードに乗つたオルレアン母子がいたからだ。恐らく、愁もそれを計算して魔法を使つたのだろうと思いつつも2人と1匹を待つた。

数十分後、ようやく着いた母子に逃げられた事を話した。

そして、ようやく地球に戻れるかと思いきや、今度は私のデバイスのエル、ライト、アルテがミッドに寄ろうと言ひ出したのだ。理由を聞いてみると、何者かにミッドに封印したはずのゆりかごの一部が動いる事がわかつたといつことだつた。なぜ、分かつたかというとエル、ライト、アルテの3機にはゆりかごの封印が一部でも解けていたら自動的にその事が分かる機能があるのだ。それに危険を感じた私は直ぐにその事を皆に説明し、今度は私の転送魔法でミッドのゆりかごのあるはずの場所の近くに転移するのだった。

視点終了

ミッドに転移したのは達は会議の結果、なのはだけでゆりかごに向かうことになつた。魔力を持ったまま近づくと警戒されてしまい、迎撃の準備を与えてしてしまつし、ゆりかごにはAMFアンチマギングフィールドがあるので魔法を使えなくても戦闘が行えるなのはが行く事になつたのだ。なのはが洞窟の中に入り、しばらく歩いているとゆりかご内部にあ

る筈の迎撃用の4足歩行の機械兵がやって来た。しかしなのはの敵ではなく、その機械兵達はただの鉄くずと成っていくのだった。こうして、倒しながら奥に向かっていると、広い空間がなのはの目の前に広がった。しかし、その空間の左右には、多くの番号付きの生体ポッドが並べられており、その中には裸体の女性が入っていた。なのははそれに怒りを感じるが、それは近づいてくる気配に気づき直ぐに戦闘体制に入る。そして、なのはの目の前に現れたのは白衣を着た男とその護衛らしい4人の女性だった。その中の白衣を着た男が

「我が研究所にようこそ、聖王陛下。まさか、存在しているとは思わなかつたよ。」

と言つ。しかし、それをなのはは無視して自身の能力を使い、その男の頭を覗き込んだ。そして

「成る程、お前は時空管理局とかいうの組織の最高評議会なる奴等の命令で作られた。それを知つたお前は発狂し、このような事をするようになつたのだな？ ジェイル・スカリエッティ。」

と白衣の男「ジェイル・スカリエッティ」の過去を口に出す。するとジエイルは

「……何故それを？ それに何故前まで知つてゐる？」

驚いた表情で聞いてくる。それに対しなのはは

「貴方の記憶を読んだんだよ。無限の欲望さん。」

と言つ。すると今度は落ち着いた様子でジェイルは「成る程。それで、我々を如何する積もりなんだい？」と聞いてくる。その質問になのはは

「そうだね。とりあえず、貴方達には眠つてもらつよ。」

と答え、直ぐに

「眠りよ。」

と唱える。すると、ジェイル達は眠つてしまつた。ジェイル達が完全に眠つた事を確認すると、なのはは待機している仲間達を念話で呼び出すのだった。

おまけ

技術・魔法紹介

AMF

正式名称はアンチマギリングファイールド

効果範囲内の魔力結合を解いて魔法を無効化するAAAランクの高位の防御魔法で、ファイールド系に分類され、その効果範囲内では攻撃魔法や移動系魔法もほぼ無効化される。しかし、無効化するのは魔力の結合だけであり、魔力によって加速された物体や魔力以外のエネルギーは防御出来ない。また、強化が成された物体にも充分な防御はできないという欠点を持つ。

グラビトロンカノン

グラントンの両腕に付いている重力制御装置で大量の重力球を作り出し、それを打ち出して使用者の周囲の物体を押しつぶすという広域攻撃魔法。この作品ではゲーム同様の使用方法以外にも、この話で愁が使用したように敵の居る方向にだけに打ち出すということも出来る。

睡眠術

眠りよというだけで発動する魔法で、それを聞いた人間が眠ってしまう。ただし、使用した人間には効かない。

元ネタ：「眠りよ」と唱えただけで周りが眠ってしまう魔道具。ただし、3回ぐらいしか使えない使い捨て。（スパロボEXのマサキ

の章で人質救出前にティツティがショウに渡したアレの事)
尚、元ネタの魔道具とは違い、何度も使用可能な上に強力。

序章20話「さりば、ハルケギニア」（後書き）

遂にやつてしまつた、眠りよネタ。
それにしてもグダグダで駄文だ。
次回はとうとう地球に戻ります。

序章21話「地球への帰還」

なのはがジェイル達を眠らせてから数分後、3機の融合機と3人がそれぞれ、なのはの居る生体ポッドの並んである空間までたどり着いた。そして、なのははジェイル達が目覚めるまでコニゾンデバイスや咲夜と協力し、生体ポッドに入れられている女性達の救出と処置を行つた。

それから3時間後、ジェイル・スカリエット・ティ達が目を覚ました。目を覚ましたジェイル達に、なのは達は生体ポッドの中にいた人物全員を救出し、蘇生や回復処置を行つたことを話した。そして次にジェイル達に対して如何するかを話し合う事になり、なのはが「貴方達はどうして人造魔導士や戦闘機人の作製といった非人道なことをするようになったの？それについて何か感じかつたの？」と聞くが、

「最初は依頼されたからだつたが、心が壊れてからは次第に楽しくなつていつてね。まあ、非検体については大事な実験体といった程度の感情しか持ち合わせていないよ。」

とジェイルが答え

「私は実験体については同情はするし仲間意識もある程度は持つてゐるが、ドクターの意思こそが私達の意志だ。」

とナンバーズの長女であるウーノが答え

「あら？ウーノ姉様つたら、お優しいことですわ。私からしたら人間なんてどうでもいいですもの。何とも感じてないですわ。」

とナンバーズの4女、クワットロが答え

「私も基本的にはウーノと似たような意見だ。」

とナンバーズの3女、トーレが答え。

「私にはそんな事はどうでもいい。」

とナンバーズの5女、チングが答えた。

その後もなのはは質問をするのだが全ての答えにおいて危険な思想

が感じられた。そして、最後の質問となつた。

「じゃあ、これが最後の質問。もし管理局を倒したとして、その後は如何するの？」

この質問には

「そうだね、取り合えずは支配とかは考えていないよ。私達は実験できればそれでいいからね。」

「その通り、その後の事など、何処かの企業や組織が支配するでしょう。」

「そうですわね～。私達にはそんな事どうでもいい事ですものね～。」

「「そうだな。」」

というそれぞれ答えが返ってきた。それから数分後、会議を行つて、彼らに対する処遇が決めた。そして、それ実行するために、またあの呪文を使う。

「眠りよ。」

と唱えるとジェイル達はまた、夢の世界へと旅立つて行つた。

それから数分後、なのはは彼らの精神と記憶を操作する事となつた。ハツキリ言つて彼らの思想はかなり危険で下手をすれば地球にもその脅威が訪れるかも知れないからだ。そんなことさせる訳にはいかないと思いこの判断を下すのだった。ハツキリ言つて殺してもいいかと思つたが、ジェイルの知識は殺すには惜しいし、優秀な助手も付けたいということでこういう判断になつたのだ。

こうして精神と記憶を操作されたナンバーズ達はその後、普通の人間と同じような体に戻された。

数時間後

ジェイル達が目を覚ましたが、数時間前の様な性格ではなく真面目で優しい名医と助手と成つていたのだ。しかし、そこへ警報が鳴り響く。ジェイル曰く、管理局員だと言つ事だらし。しかし、襲撃してくるのはもう少し後だつたらしい。

なのははジェイルに機械兵を出させないよう指示を出し、そして

「私が言つて説得して来る。」

と言つて、洞窟の外側へと向かおうとした。それに対しジヨイルは「ああ、よろしく頼む。」

と後ろ向きのなのはにそう言つた。なのはもそれに答えるように頷きた。

「任せて。」

と自信を持つて言い、襲撃者である管理局員の元に向かうのであった。

場所：スカリエッティアアジトの洞窟内部

視点：ゼスト

我々は今、戦闘機人プラントと思われる場所にいる。本来なら、数日遅くに突入する筈だったのだが、上司であり、親友のレジアスによつて妨害され、焦つた俺達は、今日突入する事になつたのだ。

「それにしてAMFが展開されている以外は迎撃の意思が有りませんね。ゼスト隊長。」

と部下の青髪の女性、クイント・ナカジマが言つ。それに対し俺は

「そうだな。メガーヌ、お前は如何見る?」

と頷き、同じく部下のメガーヌ・アルピーノにこの状況について何かの罷ではないかという意味で聞いてみる。しかし、彼女から驚くべき言葉が発せられた。それは

「少なくとも罷の可能性等は無いと思います。罷であるならば、此処まで迎撃が無いのはおかしすぎます。恐らく、既にこのプラントが破棄されているか、抵抗する気が無いのかも知れません。」

という返事が返ってきた。そこへクイントが何か言おうとした時

「その通りですよ。管理局の皆さん。」

と言つ幼い少女の声が俺達の前からした。その声の主は岩陰から姿を現したのだが、その声の主の容姿を見て俺達は愕然とした。それもその筈で目の前に居るのは、今や伝説の存在である古代ベルカの聖王家の証を持った少女だったのだ。その聖王家の証を持った少女は「ドクターが待つてます。全て話しますので、着いて来て下さい。」

と言つと踵を返し、歩き始めたのだった。俺達はこの少女の言つた事が気になつたので着いて行く事にした。そして、その少女から恐ろしい事を耳にする事になつたのだ。

曰く、ジェイル・スカリエッティが最高評議会によつて作られた存在であり、戦闘機人や人造魔導士もその最高評議会によつて依頼され、作らされていた事。

曰く、さつきまでは自分の出生を知つてしまつた為、狂つていたが、目の前に居る聖王なのはにより今では眞面目で優しい名医だと言う事。

曰く、俺達が来ることはレジアスや最高評議会がリークしていた為に知つていた。

との事だつた。そして、それに関するデータも見せらたり、ジェイル・スカリエッティと会つたら、そのことを信じせざるを得なかつた。そして、それらを知つた俺達は重大な決意をする。

視点終了

その後、ゼスト隊はなのは達やジェイル達に協力する事を約束し、クインントも同じく管理局員である夫のゲンヤにそのことを伝え、夫婦共にジェイルやなのはに協力することを約束し、メガーヌは生まれたばかりの娘のルーテシアを連れて、ジェイルのアジトに住むことを決め、ゼストもレジアスに会いに行きレジアスの目を覚まさせた後、メガーヌとルーテシアと共にジェイルのアジトで暮らす事を選択した。

そして、ジェイル一味はなのはの技術協力により、小型魔力炉搭載型の自動人形の開発を始め、管理局と聖王協会に潜入しているナンバーズの次女、ドゥーエには聖王の遺伝子は必要が無くなつた事と、一時戻るようになると命令し、他のナンバーズ同様になのはが普通の人間へと戻し、精神や記憶も改竄してから再び最高評議会の秘書としてスパイとして送り込むのだった。

そして、なのは達一向は、ジェイルのアジトでの4日程の滞在が終了すると、ジェイル一味や管理局組みから見送られて地球へと帰つ

ていった。

こうして、なのは達のハルケギニアから始まつた5日間もの異世界の旅は地球に帰還した事によつて終わりを告げるのだつた。

序章2-1話「地球への帰還」（後書き）

地球に帰還するといつても家族や友人への再会はあえてしませんでした。再会や色々な手続きは次の話からある程度やる予定なので。それが終わつたら、無印編の始まります。もしかしたらその間に、キャラ設定やデバイス設定なども入るかも知れません。

それと、ナンバーズは人間に戻しましたし、ジエイルを真面目に変更し、研究対象も完全な機械に感情や思考を持たせ、尚且つ戦力にするという研究に変えました。

序章終了「帰還後」（前書き）

すいません。本当は前編と後編に分けるつもりだったんですが、思いの他文章量が一話で収まる範囲でしたので、サブタイトルと一緒に変更させていただきました。

序章終了「帰還後」

なのは達はミッドチルダから地球の月村邸の庭へと転移した。地球では既に夜と成っていた

月村邸に転移した理由は、シルフィードを匿えそうな所が綺堂邸と月村邸しかなかつたからである。

本当なら綺堂邸でも良かつたのだが、自宅からも遠かつた為に月村邸にしたのだ。

月村邸のインター ホンを鳴らすと返事が返つてきただのほどという事を伝えると直ぐにノエルが出てきた。そして、居間に通されるのだった。通されたなのは達は何処にいたか、オルレアン母子の事を聞いてきた。なのは達は素直に事情を説明すると、月村邸の主である忍の判断によりオルレアン母子やシルフィードは月村邸に住む事になつたのだ。その後、月村邸に住む事になつた2人と1匹以外のなのは、アイデ、ユニゾン姉妹、咲夜は家族に顔を見せる為に、転送魔法で帰宅へする事になつた。

帰宅したなのは達は真つ先に美由希の抱き付きという洗礼を受けた。その後、アイデを紹介し、家族にハルケギニアに使い魔として召喚したが断つた直後に、父親を殺され、母親まで心を壊された少女を見つけ、その母親を助けるという願いを叶え、そのままにしてもまた狙われるだろうと判断したなのは達が母子と娘の使い間の竜を連れてこの世界に戻つてきた事を話した。もちろん、愁がクリストフの転生者であり、そこで生け贋の為に多くの人を殺した事や地球に戻る前にミッドに行き、そこで管理局という組織の存在の事や、その組織の闇を見てきた事も話した。もつとも、愁を知る恭也はやつぱりかという表情をしていたが、ちなみにこの話しあは月村家で話した内容とほぼ同じである。

翌日、送迎バスの中でアリサにも念話で高町家や月村家で話した事と同様のことを話した。

なのは達にとつては5日振りの学校が終わると、なのはとすずかとユニゾン姉妹は直ぐにアリサを月村邸に連れて行き、アリサとオルレアン母子を会わせたのだった。その時、シャルロットが亡くなつた級友とそつくりの声に驚いたのは言つまでも無い。

一週間後、なのははミッドチルダに来ていた。理由は魔導式自動人形の実験機の動力炉に必要な聖遺物を探すためだ。

なのは達と分かれたジェイル達は直ぐに自動人形の製作に着手した。この5日で何とか起動して動けるようになつたものの、肝心の心がある魔導兵器ではなく、普通の電力での動作なのと心が生まれていないので完成には程遠いといえた。その理由として、超小型の新型魔力炉の作成が難航していたのとAIやプログラムが未完成だからだ。そんな時、なのはから激励の通信が着たのでついでとばかりにジェイルはなのはに相談した。そして、その答えこそが聖遺物の使用である。そして、そのジェイルから相談されたなのはは2日後、特に用事も無かつたのでその封印場所であるミッドチルダのエルセアの森林にある遺跡に行く事にしたのだ。

場所：ミッドチルダの上空

視点：なのは

私は、あるロストロギアを見つけるためにミッドチルダのエルセアの森林の上空を飛んでいた。

このエルセアの森林にある遺跡には、前世のオリヴィエ工が封印して隠したロストロギアがあるのだ。

それは人間が使う場合は聖王家の人にしか使えない代物で、それ以外の人間が使用しようとすると死ぬという物だ。

名を虹の欠片といい、レリックと呼ばれる聖王家で使用されていた物の改良型で安全かつ、更に高密度の魔力を内包しているという代物で、見た目は虹色のレリックといった感じで聖王家以外の人間の体に埋め込むと間違なく死んでしまう。理由は聖王の魔力にだけに正常作動

しそれ以外には適性が無いために暴走して死んでしまう（「魔力光の問題で融合機と似たようなもの」）。

オリヴィエはそれを自らの体内に入れて、ゆりかごを制御していたのだが、今回は別の物に内包されるのだ。ちなみに、対象なのは人間や生物といった生きている者だけで、それ以外の無機物は対象ではない。

その内包される物の名は試作型魔導自動人形1号機【JX-01ウーノ】。の通りジエイルが製作した物で名前だけは戦闘機人だつたウーノが元になっている。ついでに旧ウーノを始めとした元ナンバーズは名前を変え、ウーノはステラ・スカリエッティ、ドゥーエはタリア・スカリエッティ、トーレはルナ・スカリエッティ、クワットロはフレイ・スカリエッティ、チンクはラクス・スカリエッティとなっている。スカリエッティ姓なのは、5人ともジエイルと結婚したからだ。

そして、私はその虹の欠片をウーノに付ける事を提案したのだ。ミッドに転移してから15分、遺跡付近まで来た時

「マスター、近くで戦闘が起こっています。」

とエルが教えてくれた。私は驚いたが、直ぐに持ち直した。そして、正確な場所が分からないし、鉢合わせる可能性もあるので

「場所は？」

と聞いた。すると

「丁度遺跡の上空です。このまま行けば鉢合わせますが、如何します？」

と聞いてくるエル。正直、あんまり関わりたくないんだけどな。

なので

「ちなみに、そこから動く気配は？」

と聞く。しかし

「無いよ」です。どうやら、管理局員と犯罪者が戦っているようですね。」

と返つてくる。なので

ジエイルエックス

「は～、仕方ない。もしなんかあれば助けよう。」

と言つ。するとエルが

「よろしいのですか？聖王が復活した事がばれますよ？」

と聞いてくる。しかし、私にはオリヴィエから受け継いだ、記憶を操れる能力があるので

「問題ないと思うよ？記憶消せばいいわけだし。」

と言つた。それなら安心したと見たエルは

「マスターがそう判断したのならば私達はそれを全力でサポートします。」

と言つてくれた。そして私はそのエルの言葉に不敵な笑いを浮かべ

「ふふつ。それは心強いね。じゃあ、速度上げるよ。」

と言つと速度を上げて戦場へ向かうのであつた。

視点終了

場所：エルセア森林の遺跡上空

視点：？？？？

僕は、航空武装隊の一員としてロストロギアを密輸犯を追つていた。しかし、その密輸犯の実力は高く、既に傷を負つてゐる。向こうもほぼ同等の傷を負つてゐるが、それでも実力は向こうの方がわずかに高く、少しでも油断してしまえば間違いなく僕は死ぬだろう。

そこへ、犯人はある物を取り出した。それは・・・。

「実弾銃・・・。」

と僕は呟いた。そして次の瞬間

ドーン・・・・・・・

僕に向かつてをスラッグ弾らしき弾を撃ち込んできた。僕のシールドではスラッグ弾は受けきれないで、シールドを張りながらも僕は覚悟を決め、目をつぶる。しかし・・・。

・・・・・シユツ・・・・カキン

今まで経つても撃たれた痛みは無く、何がおこったのかを確認

するために目を明けるとそこには一刀の剣を持つた金髪の少女が犯人と向かい合っていた。しかも何故かその少女を見て密輸犯は驚いた顔をしていた。そして、その少女は犯人の方を向きながら

「大丈夫ですか？」

と僕に言つた。そして、僕も

「ああ、大丈夫だ。ありがとう」

と礼を言つた。しかし

「まだ全て終わつたわけじゃないです。礼を言つなら犯人を捕縛してからにして下さい。」

と言つて來た。正論だつたので僕は頷いて

「そうだね。でも如何するつもりなんだい？」

と返した。すると

「こうします。」

とだけ言つと、少女の体が消えて気がづいたら密輸犯の懷に入り、目にも止まらぬ速さで密輸犯を切り刻んだ。しかし、防護服が破れているだけで、血が出ていないという事は非殺傷で攻撃したようだ。それにしても早すぎて太刀筋が見えなかつた。だけど、防護服に4つの傷があるということは4回は切られているという事になる。

その密輸犯を倒した少女は此方を向いた。そして、さつき密輸犯が驚いていた理由が分かつた。なぜなら、その少女は伝説でしか存在しない筈のベルカ聖王家の象徴である翡翠と紅のオッドアイの目をした少女だったからだ。そして、僕は驚きながらも

「申し訳ありませんでした、聖王陛下であるとは知らずにご無礼をいたしました。そして、先程は助けていただき、真にありがとうございます。」

と畏まつて謝罪と礼を言つた。しかし聖王陛下は

「いいですよ、別に。それに私は公式に聖王をついでいませんから。それに今、この密輸犯の心を読んだ所によると、元々は管理局の依頼でこんな事をしていったようですね。」

と氣にもしないように言い、更にはとんでもない事が聖王陛下の口

から飛び出してきた。僕は陛下が嘘を付く様な人間では無い事が会話をしている内に分かつたのだが、念のために聞く事にした。もしそれが本当ならば管理局は犯罪に加担している組織だと言つ」とである。そして、その疑問は僕が聞く前に答えられる事になる。

「本当ですよ。しかも、管理局が犯罪に手を染めている証拠もあります。」

とこう陛下に

「な、何故僕の考える事が分かつたのです？僕は口に出していくにははずなのに。しかも証拠つて？」

と言つた。すると

「言つたはずですよ？心を読んだ所によるとつて。つまり私は心を読めるんですよ。ああ、それよりも証拠の方が気になりますよね？」

と聞いてきたので、素直に頷き

「はい。見せてもらえるのならお願ひします。」

と返事をしてから頬んだ。しかし

「まあ、貴方は眞面目でまともな局員ですから見せても良いんですけど、本当にいいんですか？」

と言い、確認してきた。僕はどうしてこんな事を聞いてくるのかが分からなかつたので

「といいますと？」

と聞く。そして返つてくる答えは

「じゃあ、はつきり言わせてもらいます。もし全ての証拠や証人を見たら貴方は間違いなく管理局に絶望します。それでも良いんですか？」

と言い、再度確認してきた。恐らく覚悟を試すためだと思い、僕は完全に覚悟を決めた。最悪、管理局を辞めて敵対することも考えて。そして

「怖くないといえば、嘘になります。しかし、知らないで管理局で働くよりは知つてから辞めるなり、敵対した方がマシだと思います。

「

と答えた。すると陛下は

「そうですか。じゃあ、貴方はこの密輸犯を地上本部へ連れて行ってください。そしてその後、何かしらの理由をつけて、直ぐにこの場所に来てください。全てをお話しますから。それと、管理局には私のことは内密にお願いします。ちなみに、この犯人には記憶を弄つたので、私の事を喋る事はないですから。」

と言い、僕は陛下って何でもありだなと思いつつも頷き、密輸犯を連れて地上本部へと向かつていった。そして、その時僕は重大な事を聞くのを忘れていた事に気が付いた。それは・・・

「あつ、陛下の名前を聞くの忘れてた。」

そう、名前を聞くと言つ基本的なことを忘れていたのだ。しかし、後で会うことを約束したのでその時に聞けばいいと思い直したのだった。

視点終了

場所：遺跡内部

視点：なのは

管理局員の男性、ティーダさんと一時分かれた私はそういうえば名乗つてなかつたなと思いながらも地上に降りて、遺跡の入り口に差し掛けた。その遺跡の入り口は扉で守られており、その扉には特殊な方法が使われていて、扉を開けるには聖王家の虹色の魔力(^{カイゼルフルベ})を流すしかない。無理に抉じ開けようしたり、破壊しようとすると警報が鳴り、扉の両隣にある石造に偽装した2機の迎撃用のロボット兵が動き出し、その相手を攻撃するというシステムとなつていて。ちなみにその戦闘力は管理局でいう所のSSランク相当と封印した、当時のオリヴィエでも苦戦していた相手である。私はその扉に自身の虹色の魔力を流すと何も障害なく遺跡に入り込んだ。

そして、幾つもの仕掛けを解除して、奥の虹の欠片が安置してある部屋へと着いた。私は直ぐに虹の欠片を回収すると部屋を閉じ、また罠を復活させてから封印した後、ティーダさんを待つために上空

へあがるのだつた。封印する理由は、もしも、この場所が発見され、聖王家の魔力でしか解けないと分かつた時に聖王が復活した事をばらさない為である。もちろん、念のために罠を復活させたのも同じ理由だ。

管理局なら聖王協会から聖王の遺品を奪い取つて、そこに残つた遺伝子からクローンを作り出し、そのクローンに扉を開けさせようとする可能性もなくはないので、そういうた罠も必要となるのだ。まあ、奥に行つても何もないし、もしクローンが作られていたら、私が攫うんだけどね。と私は考えながらジェイル達に虹の欠片を回収した事と管理局員の客が来ることを連絡した後、ティーダさんを待つのだつた。

それから、50分が経過し、ティーダさんは私より小さい妹を連れてやつてきた。理由を聞いたら、妹にも聞かせたいとの事だつた。そして、私達は互いに自己紹介をした後に私は一人をジェイルのアジトに連れて行き、そこで私はジェイルに虹の欠片を渡し、ティーダさんの治療をした後、元管理局員のゼスト隊の皆やスカリエッティ一家と共に最高評議会の正体や管理局の悪事等を証拠のデータや映像と共に話した。結果、二人共管理局との戦いの時に協力してくれる約束してくれた。そしてその後、私はジェイルの自動人形製作の手伝いと私自身の従者となる魔導式自動人形の基本フレームを製作した後、地球へと帰つた。その翌日、ティーダさんは管理局を辞め、住んでいた自宅も売り払い、ジェイルの研究所で兄妹ともども住む事になつたと言う連絡がジェイルからあつた。因みに、ティーダさんやティアナが私を呼ぶ時に陛下と呼んでいたのだが、私はそれを否定して名前で呼ぶように言つた。すると、ティーダさんはのちゃん、ティアナはなのはさんと呼ぶよになつた。

視点終了

その一週間後、桃子のお腹の中に新しい命が二つも宿つてゐる事を知つたなのははオリヴィエの記憶を辿り、第42管理局外世界【ポツ

ケ】に向かつた。理由はダイヤモンドの原石を採掘してから加工し、それを生まれてくる一つの命に贈る為だ。こうしてダイヤモンドを2つ掘り出した後に、ジェイルから工房を借りてなのはが加工したのだ。因みに、この第42管理外世界【ポツケ】は、聖王家が先祖代々使つていた鍛錬場所だつたのだが、それ以外にも宝石の類や鉱石等も豊富にあつたので、オリヴィエは鍛錬以外でも良く行つていたのだ。

それから更に、1年が経過した。

4月になるとなのは、すずか、アリサ、ユニゾン姉妹は、聖洋付属小学の2年生に進級した。そして、その一ヶ月後には、桃子のお腹の中にいた双子の姉弟が生まれたりした。その時に、なのはが自分で採掘して加工したダイヤ2つを双子達にと桃子に贈つたのは、言うもでもない。

それから一年後、21の青い結晶から始まる出会いと新たな力がなのはの運命をえることになるとは、本人であるなのはも含めて、誰もが予想出来なかつた。

おまけ

ハルケギニアを去つた後の白河愁

なのはに邪魔をされてハルケギニアを去つた白河愁だつたが、4日後には再びハルケギニアに行き、一方的な虐殺を行つた。そして、ハルケギニア中の人間や人外を全て殺した後に邪神の宝玉に向けて復活の言葉を唱えると直ぐに愁はその宝玉を地面へと投げつける。地面に当たると、宝玉は割れて、5体の異形の化け物達が現れた。そう、破壊神と呼ばれるサーヴァ・ヴォルクルスの分身である。その分身ヴォルクルス達は、それに空と陸がそれぞれ2体とそし

て両方の特性を合体させたような物が1体といった感じである。一
体だけでも、普通の魔導士や達や並みのエース達では太刀打ちでき
ない代物だったのだが、今回は相手が悪かった。なぜなら世界を一
日で滅ぼす事ができるような存在が相手なのだ。そんな相手に流石
の邪神の分身達も勝てるはずもなく、縮退砲で全て葬られていった。
因みにこの縮退砲、実はまだ威力と使用魔力に問題がある。本来な
らそれらを解消させてからグランゾンを進化させたネオ・グランゾ
ンに取り付けるはずだったのだが、なのはと戦うためにはどうして
も必要だったのである。そして、今回使う必要がない縮退砲を使っ
たのは、威力や使用魔力の調整の為である。分身ヴォルクルスを葬
った愁は威力や使用魔力で何かを?んだようで成る程と呟いた後、
不気味に笑いながらハルケギニアを去つたのであった。こうして残
りのヴォルクルスの宝玉は、後2つである。

序章終了「帰還後」（後書き）

次は魔力ランク表です。その後に無印編スタートとなります。

魔力ランク値表

この作品での魔力設定です。
因みに魔導士ランクや技能ランクもこれに準じます。
ただし、適当です。

測定不能 = 1500万

EX+ = 1400万 ~ 1499万9999

EX = 1300万 ~ 1399万9999

EX- = 1200万 ~ 1299万9999

SSS+ = 1100万 ~ 1199万9999

SSS = 1001万 ~ 1099万9999

SSSI = 900万 ~ 1000万9999

SS+ = 860万 ~ 899万9999

SS = 780万 ~ 8599万9999

SSI = 700万 ~ 779万9999

S+ = 660万 ~ 699万9999

S = 601万 ~ 659万9999

S - = 550万 } 600万 9999

A A A + = 490万 } 549万 9999

A A A = 356万 } 489万 9999

A A A - = 300万 } 355万 9999

A A + = 260万 } 299万 9999

A A = 200万 } 259万 9999

A A - = 150万 } 200万

A + = 120万 } 149万 9999

A = 76万 } 119万 9999

A - = 50万 } 75万 9999

B + = 35万 } 49万 9999

B = 20万 } 35万

B - = 10万 } 20万

C + = 7万 } 9万 9999

C = 3万 } 6万 9999

C- = 1万 ∽ 3万

D+ = 9800 ∽ 9999

D = 5200 ∽ 9799

D- = 5000 ∽ 5199

E+ = 4800 ∽ 4999

E = 1101 ∽ 4799

E- = 1000 ∽ 1100

F+ = 8000 ∽ 999

F = 201 ∽ 799

F- = 100 ∽ 200

こうした理由は、アニメでアースラ側がなのはとフェイトの戦いを分析した時に、平均値がなのはが127万、フェイトが143万で、最大発揮値がその3倍以上と言っていたので大体この位かなと思って、設定しました。値もEXと測定不能も含めてこの作品でのオリジナルです。

それと測定不能以外のランク後に付いてくる+は固有技能や特殊能力があつても付きます。

例は

Sの技能や魔力+固有技能や特殊能力=S+

といった感じです。

魔力ランク値表（後書き）

次は、序章にてきたキャラの設定です。その次が、デバイス設定です。

高町家や地球にいる人々

高町なのは（不破なのは）

年齢：8

容姿：なのはの髪と瞳の色を金髪と翡翠と紅のオッドアイにして、髪型はポニーテイル。

魔力光：虹色

魔導師ランク：測定不能（少なくとも1億以上はいつている）、ス

クエア

妖気：SS

靈力：SS+

騎士甲冑：白と青を基調としたドレス型にマントとマントの大人形態ヴィヴィオの物と同じ物。

能力：聖王の鎧、高速学習、運命操作+、完全破壊+、時間と空間の操作+、超能力+（テレポートや読心等のHGSが使えるもの全て）、記憶と精神の操作+、生きている存在を見ただけでその力を自分にプラスして改良する能力、?????、?????。

デバイス：杖型のレイジングハート・エルトリュウム、長剣型のライトブリングバー、変幻自在型のアルテマウェポン、魔導書型の法の書、?????、?????

管制人格・ユニゾン：インテックス、レミリアとフランドルのユニゾンスカーレット姉妹

術式や適正：古代ベルカ式、古代と近代ミッドチルダ式（近代はまだ適正のみ）、アルハザード式、ラ・ギアス式、4系統と虚無（ただし、虚無はルイズの様な爆発だけで、それ以外は他の虚無の担い手と一緒に手順が必要なので事実上使えない。）

この小説の主人公で、聖王オリヴィエの生まれ変わりで、直系の子

孫でもある。

また、生まれた時で既に魔力がSSS+級という恐ろしい力の持ち主で、現在では運動能力や寿命も人間離れしているが、まだ遺伝子的には人間である。

性格は原作とかなり違い、いつもは冷静である。しかし、敵対する者や仲間や家族を傷つける者に対しては容赦がない。実は結構な努力家で時間停止してから魔法や武術の鍛錬をする為、咲夜以外に見られる事はない（ただし、特殊な結界を張っているため、咲夜にも見られるとはない）。ただし、料理の練習等は普通にやっている。

十六夜咲夜

年齢：不明

容姿：東方の十六夜咲夜

魔力光：銀色

魔導師ランク：SSS

能力：時間と空間の操作

騎士甲冑：スカートの丈が少し短いメイド服（要は仕事服と同じ）

デバイス：銀ナイフ型のダキアーシュ

術式：古代ベルカ、古代ミッドチルダ式

高町家のメイドで、偶に翠屋の手伝いをさせられる。

その正体は、敵国の依頼でオリヴィエとある意味勘違いでレミリアとフランドールを暗殺しようとした暗殺者であったが、敗北。その後はレミリアの運命操作により、オリヴィエ達の配下となり、オリヴィエ達と共に敵と戦つた。それから300年の間、自らの体内時計や細胞等に時間停止を掛けてたので、そのままの姿をしたままでなのはの従者として再び聖王家の人間に仕えることになる。

高町恭也（不破恭也）

年齢：18

容姿：とらはの高町恭也より

魔力光：白みがかつた青

魔導師ランク：SSS

能力：魔力変換【風】、?????

騎士甲冑：?????

デバイス：鎧型のサイバスター、小太刀型の光牙と影牙
術式や適正：古代ベルカ式、ミッド式（適正だけ）、ラ・ギアス式、
アルハザード式（適正だけ）

現在の聖風の魔装騎士で、聖王オリヴィ工直系の子孫にして前聖風の魔装騎士【不破正樹】の生まれ変わり。序章前編の主人公とも言える人物で、なのはとは、母親の違う兄。今は人間ではなく、風の精靈でほぼ不老不死である。本来なら高校3年なのだが、一年間の武者修行の為に一年遅れているので高校2年。

ざから

偽名は高町勇吾

年齢：400年ぐらい

容姿：とらはの赤星勇吾

魔力光：黒みがかつた青

妖氣：SS

魔導師ランク：S+

騎士甲冑：なし

デバイス：なし

術式：古代ベルカ式、妖術

元々は国守山の湖に封印されていた魔物だったが、封印が弱まつていた事と、封印の要である氷那が御神体から出てしまつた為に復活。

しかし、恭也とさくらによつて瀕死の状態にされ、形だけとはいえた事と、真一郎よりも恭也に興味を持った為、そのまま恭也の守護獣となつた。因みに、今では魔物形態でも小型化できるようになつたので、最近ではそちらでいる方が多い。名前は、ざからだと怪しまれるのと戸席を作る為である。

因みに、高校では主の恭也、主の前世を殺した愁と共に風校の三大美男子と呼ばれている。尚、本人と主の恭也は自覚なし。正に、使い魔（守護獣）は主に似るとはこのことである。

転川雪

年齢：400年ぐらい

容姿：原作の雪と同じ

妖気：S -

国守山にいた雪女の生き残りで、仲間を殺したざから（今の勇吾）とは同じ目的であった為に友情が芽生える。しかし、目的だつた真一郎よりも恭也に惚れた為、高町家に住む事になつた。尚、戦闘能力は殆どない。名前は、雪の意見を参考に土郎がつけた。

氷那

容姿：原作と同じ

年齢：400年ぐらい

妖気：A A A +

謎の獣でざからの封印の要であつたが、雪が外に出てしまつた為、彼女を追つて外に出た所をゆうひに見つかる。ざから事件後は雪と一緒に高町家でお世話になつていて、高町家のマスコット的な存在となつてゐる。因みに、戦闘力が全くない。

原作と違い、士郎は光牙と影牙の加護によりテロから無傷で帰っている。更に住人が増えたので騒がしくなっている。それに伴い、人数が多くなったので家を改装して部屋等を増やした。その時に月村邸でお世話になつたのでオルレアン母子とは会つていて、復讐のことについてもなのはに頼まれた士郎が話している。

今現在の住人は、高町なのは、インデックス、高町恭也、高町士郎、高町勇吾、転川雪、永那、高町桃子、レミリア・スカーレット、フランドール・スカーレット、十六夜咲夜、高町美由希、高町？？、高町？？の14人である。因みにどちらで喧嘩して、なのはに止められる例の二人組み（レンと明の格闘家コンビ）は原作と違い、親との関係が良好だつたり、心臓に病がないので海鳴や高町家にはいないし、会つた事もない。ただし、桃子だけはレンの母親が友人なので、名前だけは聞いている。

月村忍

年齢：17

容姿：原作と同じ

魔力光：黒

魔導師ランク：測定不能

デバイス：鎧型のデイアクス

騎士甲冑：なし

元夜の一族で、今は闇の精靈となつた天才科学者で資産家の当主。ただ、夜の一族ではなくなつたのと恭也の方に嫁いでも良い様にと

月村

家の当主をすすきに譲る予定である。因みに、ジェイルとは気が合うため、共同で開発などを行う事もある。

因みに恭也と勇吾ことざからとは同じ学校でクラスメイトである。ノエル・綺堂・エーアリヒカイト

年齢：不明

容姿：リリカルなのはの方の原作と同じ

月村邸のメイド長であり忍の専属のメイド。自動人形であり、その力は人間を遥かに超える。

ドジな妹に手を焼かされてはいるが、それをどこか楽しんでいる節がある。

さくらの屋敷で壊れていたまま眠っていたが、忍が独学で不完全ながら直した。しかも、メンテナンスの時に次いでとばかりにワイヤー式

のロケットパンチを搭載している。改造と小型魔力炉かレリックの搭載する予定がある。恐らく次は武装にドリルが付くでしょう。自爆装置？そんな物はガジェット系にでも付ければいいんです。

月村すずか

年齢：8

容姿：原作同様

魔力光：白

魔導師ランク：EX+

騎士甲冑：なし

デバイス：なし

月村家の次女で、夜の一族と呼ばれる吸血鬼（もしくは吸血種）であり、なのはやスカーレット姉妹とは幼少の頃からの友人である。魔法を習い始めた理由は、誘拐の時に何も出来なかつたことが原因。

ファリン・綺堂・エーアリヒカイト

年齢：15（実は7か8）

容姿：原作同様

ノエルの妹であり、すずか専属のメイド。姉と同じく自動人形ではあるが、ファリンの場合は忍がすずかのお世話の為に1から製作した。

しかし、バランス部分に問題があるのか、何もないところで良く

転ぶ。姉と同様に改良と小型魔力炉かレリックの搭載予定あり。

綺堂さくら

年齢：23

容姿：原作同様

魔力光：水色

魔導師ランク：SSS

騎士甲冑：?????

デバイス：アイスシユベルト、ガツデス

聖王家に仕えていた小国第2王女で聖水の魔装騎士だったティツティ・ノールバックの生まれ変わり。更に月村姉妹の叔母に当たる人物で、人浪と夜の一族の混血雑種だったが、今は水の精靈として生きている。

アリサ・バニングス

年齢：8

容姿：リリカルなのはの方の原作同様

魔力光：赤

魔導師ランク：SSS

騎士甲冑：?????

デバイス：鎧型のグラングエール、爪と盾の一体型の炎龍人の爪現聖炎の魔装騎士にして、前聖炎の魔装騎士であるホワン・ヤンロンの生まれ変わり。

バニングス家の跡取りだが火の精靈となつたことを親にを話し、早く妹か弟を作るよう進言しているらしいが、今だ進展はない様子。なのはとすすか、それにスカーレット姉妹とは一年からの付き合い。覚醒はアリサとすすかの誘拐事件時だったが、アリサ自身の戦闘経験不足となのはの介入で結局、誘拐犯を自力で倒せなかつた。

シャルロット・エレーヌ・オルレアン

メイジランク：トライアングル

容姿：原作のタバサに表情が柔らかくなつた感じ

術式：系統魔法の風

なのはがルイズに召喚された時に心を読まれたのとなのはの精靈に知り合いがいる発言が縁でなのはに母親の救出を依頼。そして、見事に母親を救出。その後は母の心を狂わせたり、父を殺した伯父でありガリア王であるジョゼフに敵討ちをしようと決意するも、なのはによつて説得させられて地球の月村邸に住む事になつた。性格面については最初は無愛想、無関心だったが、次第に良く笑い、会話するようになつた。

シユリア・フローヌ・オルレアン（名前等がオリジナル）

メイジランク：ライン

容姿：原作のオルレアン婦人を健康的にしたような感じ。

術式：系統魔法の水

シャルロットの母親にして、今は亡きオルレアン王弟のシャルルの妻だった人。原作同様、心を壊されていたがなのはによつて助けられた。非戦闘組み

さざなみ女子寮の住人達については原作のとらハとほぼ同じ設定なので省かせていただきます。

相川ラバーズ（さくらは恭也ラブなので入らない）やその友人達も原作とほぼ同じ設定です。

格魔装機神の騎士甲冑は前世と同じものを使用。なので、過去編で書きます。

+ は強化されている事を示す。

オルレアン親子については、月村家やバーニングス家といった日本でも有数の大企業の権力により、戸席が作られた。

プロフィール～序章編～（後書き）

次はスカリエツティ一家やなのは陣営側の管理局員達です。

管理局関連

レジアス・ゲイズ

年齢：43

容姿：原作同様

管理局地上本部の中将で、精神と記憶を弄られる前のジェイルと最高評議会と手を組んでいたが、ゼストの説得により最高評議会とは手を切る。それからはなのは達と共に管理局をより良い形にしようと思っている。魔力なしだが、頭はかなり優秀。因みに、娘のオリスも同様である。

ゼスト・グランガイツ

年齢：43

魔導師ランク：S+

容姿：原作同様

デバイス：原作同様

騎士甲冑：原作同様

術式：古代ベルカ式

レジアスの右腕的存在でストライカーリー級騎士。戦闘機人プラントを見つけたので報告をするも、レジアスに止められる。しかし、それを怪しんだゼストはレジアスの命令を無視して、部下のクイントとメガーヌと共に突入する。だが、なのはが道中に現れ、彼女によりジェイルと最高評議会の正体と管理局やレジアス達がしてきた事を聞かされて部下の二人と共になのは達に強力を約束し、管理局を離反。その後はレジアスと和解して共に管理局を変えていこうと誓う。今は部下達と共にジェイルのアジトを住処としている。

クイント・ナカジマ

年齢：26

容姿：原作のギンガを大人っぽくしたような感じ。

魔導師ランク：A

術式：近代ベルカ式

デバイス：籠手型のリボルバーナックル（原作のナカジマ姉妹が着けている物を両腕に装備）、ローラ型のロードキャリバー（ナカジマ姉妹のキャリバーズに酷似している。）

騎士甲冑：原作でギンガの纏っていたバリアジャケットの色違いで、

白い所が黒で、黒い所が白で薄紫の所が青。

自身の所属するゼスト隊と共に管理局の裏を知つてしまつた為、管理局を離反。

現在は、ジェイルのアジトで暮らしている。尚、そのことは夫のゲンヤと娘のスバルとギンガには全て説明済み。

メガーヌ・アルピーノ

年齢：27

容姿：原作同様

魔導師ランク：A

デバイス：グローブ型のアスクレピオス（原作でルーテシアが着けていた物）

バリアジャケット：紫のジャケットに薄紫の腰マントと紫色のズボンといった紫で統一された甲冑

術式：ベルカ式ベースの召喚術、近代ベルカ式

召喚獣：ガリュー

ゼスト隊のフルバッカ担当の召喚師で管理局の裏を知つてしまつた為、上司のゼストや同僚のクイントと共に管理局を離反する。

召喚獣のガリューについては、原作同様。

原作のルーテシア・アルピーノは、彼女の娘。因みに、ルーテシア

は0歳

ティーダ・ランスター

年齢：17

容姿：原作同様（ティアナの持つている写真参照）

魔導師ランク：S

デバイス：原作同様の銃型（原作のティアナの引き出しにあるものがそうでないかと思われる。）で、名前はミラージュガン
バリアジャケット：白を基調とし、オレンジのラインが入った上着に白いズボン

首都航空隊の隊員で一等空尉だったが、密輸犯を追っている時にはに救われる。その後、その密輸犯が、管理局による回し者だとなのはから教えられて、管理局を離反。その時に妹のティアナと共にジェイルのアジトに住む事になった。尚、執務官の夢は諦めている。

ティアナ・ランスター

年齢：5歳

容姿：原作同様（原作でティーダと一緒に写っている写真を参照）

魔導師ランク：C

デバイス：なし

バリアジャケット：なし

兄のティーダと一緒に写るのは話を聞いて、管理局を許せないと想い、ティーダと共に写るのは陣営に加わる事を決意する。

スカリエツティ一家

原作と同様の性格だったがなのはにより精神と記憶等を操作された。その時に戦闘機人組みは体を1日で人間に戻されている（なのはの時間制御能力を使えば余裕）。因みに、戦闘機人の6番から12番の人間は存在しない。それと、元ナンバーズは、新ナンバーズ作成が決まった際に名前を変えている。何故かジェイルの妻兼研究の助

手（娘なのに）になつている。尚、元戦闘機人組みはISが健在だが、戦闘には参加しない。尚、タリア以外は白衣を着ている。

ジエイル・スカリエッティ

最高評議会によりアルハザードの技術で作り出された存在で、コードネーム【アンリミテッド・デザイア】。ある時、そのことを知つて発狂した。反乱の準備が整うまでは評議会の命令に従う氣でいたが、なのはの精神操作や記憶操作により、正氣に戻り、立派な医者兼科学者として再誕する。

元ナンバーズ

ステラ・スカリエッティ

元ウーノ

容姿：原作同様

魔導師ランク：A

特殊能力：原作同様

タリア・スカリエッティ

元ドゥーエ

容姿：原作同様

魔導師ランク：S

特殊能力：原作同様

ルナ・スカリエッティ

元トーレ

容姿：原作同様

魔導師ランク：S

特殊能力：原作同様

フレイ・スカリエッティ

元クワットロ

容姿：原作同様

魔導師ランク：A

特殊能力：原作同様

ラクス・スカリエッティ

元チング

容姿：原作同様だが、ゼストと戦っていない為、目を負傷していない。よつて、眼帯もしていない。

魔導師ランク：AAA

特殊能力：原作同様

6～12は生まれていないので存在しない。

新ナンバーズ

元ナンバーズが人と機械の融合なら、新ナンバーズは完全な機械である。しかし、機械といつても思考や感情があり、魔法の使える自動人形がコンセプトである。因みに、尚、開発当初予定していた魔力炉については、人間サイズに入るほどに小型化が出来ていない為、不採用となつた。このことが切欠でジェイルがレリックを探すことになる。

ウーノ

年齢：1（見た目は17ぐらい）

正式名称はJX-01ウーノジェイルエックス

容姿：とらはのイレインと同じ顔立ち

魔力：SSS

バリアジャケット：なし

デバイス：なし

魔導式自動人形の試作機の1号機。

動力には魔力炉ではなく、聖遺物の1つである虹の欠片を使用。感情や思考についてはまだ赤ん坊状態だが、ユニゾンデバイスと同じAIを積んでいる為、いづれは意思や感情を持つことになる。尚、服装はたらはのイレインと同じ。

密輸犯

年齢：20代後半

容姿：とらは1に出てくる氷室遊の田をきつくした感じ。

魔導師ランク：S+

ロストロギアを渡す所を、見張っていたティーダに見つかり、逃亡。ティーダと戦闘に入る。その最中になのはが介入したことでティーダを殺しそこなう。その後、なのはにより倒されて、ティーダにより地上本部に移送される。この時、なのはに一部記憶を改ざんしている。

ちなみに、ロストロギアを買った闇商人は、既に捕縛されて、先に地上本部に移送されている。

なのはの能力で分かつた事は、管理局が依頼した犯罪者の1人という事らしい。

尚、とらはの遊とは違う人間である。

オリジナル設定が多々あります。

ゼスト隊は公式には死んだ事になっています。

プロファイル～序章編～（後書き）

次はデバイス設定1です。

デバイス設定1

序章編時での設定

レイジングハート・エルトリュウム

種類：インテリジェント

待機状態：赤い宝石のついた指輪

形態：盾（手持ち式ではなく、腕に装着するタイプ。エクシードモードの槍頭部分を大きくして、柄部分が無い状態。しかも、盾の先端部分からエクセリオンモードACSみたいに魔力刃が出てきて魔力短剣や魔力剣としても使えるし、砲撃も使用できる。尚、その時は翼はない。）、突撃槍（エクシードに酷似している。）

特殊武装：ファンネルが12機（名前が違うだけで見た目はプラスター・モードのブラスター・ビット）

原作ではユーノがなのはに渡した謎のデバイス。この作品では、オリヴィエのデバイスだったが、子孫にして生まれ変わりのなのはがこれを受け継いだ。聖王家の魔力に耐え切れる様な構造をしていて、原作同様のカートリッジシステムを搭載している。素材はオリハルコンが使われている為、かなりの物理的防御力と魔法的防御力を持つている。ベルカのオリヴィエがどうしてミッドの物を持っているのかというと、当時はベルカとミッドの交流が盛んだったので、その時に原型機を試験運用で使っていたが、オリヴィエが気に入ってしまった為、そのまま聖王専用に改良されて使用されることになった。因みにエルトリュウムはガバターの戦艦の名前から。

色は金（槍頭部分）、青（柄や槍頭の一部）、白（柄部分や槍頭の一部分）、赤（槍頭の中心部分にあるデバイスコア）

ライトプリンガー

種類：アームド

待機状態：銀色の指輪

形態：両刃の長剣、小太刀

オリハルコンで出来ていて、リボルバー式のカートリッジシステムを搭載している。

本来は両刃の長剣だけだったが、小太刀はジェイルに依頼して追加してもらった。長剣型には専用の射撃魔法と長距離の収束砲が存在する。

色は刀身が白銀、鞘と柄が黒（排気装置とカードリッジシステムは鍔にある。因みに、カードリッジシステムはデバイスコアの上部にある）、金色（鍔の中心にあるデバイスコア）

アルテマウェポン

種類：インテリジェントアームド

待機状態：白い菱形の宝石のついた首飾り

形態：長剣（片刃か両刃かは選択可能）、大剣（片刃か両刃かは選択可能）、小太刀、大鎌、弓、ライフル銃、槍、短剣、鞭等

特殊能力：アルテマドラゴンという神話クラスの竜を呼び出せる（アルザスの守護竜であるヴォルテールより巨大で強力で次元世界に存在する竜の頂点に君臨する。尚、原理やどうして呼び出せるかは不明である）、形を持ち主の思考や命令で変化できる（ただし、武器限定）。

聖王家の秘宝で、先祖代々から伝わってきたデバイス。アルハザード最強の武具といわれていたが、実際のところは不明。ただ、法の書と同時期に存在していることだけはデータから分かつてはいる。しかし、どこで製造されて誰が作ったのかは不明。素材に液体金属と魔法反射の特性を持つた特殊な金属が使用されている。

無印編の1、2話ぐらいで製作者や特殊金属名が分かります。

法の書

種類：複合ストレージ

待機状態：本型のアクセサリー

形態：魔導書

管制人格：インデックス（通称アイデ）

実は法の書という名前の由来は、作った人物ではなく最初に発見した人物により付けられた物。この魔導書のデータから様々な稀少能力を持つたデバイスや魔導書が作られたともいわれている。ただ、マスターがこの魔導書や管制人格から認められなければ、完全な力は引き出せないし、改竄も出来ないようになっている。因みに、発見した人物は、途中で力を溺れた為にこの魔導書によつて殺された。その事を恐れた人間達によつて遺跡に封印された。その後、オリヴィエに発見されて彼女の物となる。彼女の死後は機能の一つである転生機能で主共々子孫であるなのはに転生した。

ハルケギニアから地球に帰るときに、この魔導書が必要だったので、なのはに覚醒の呪文を唱えられて呼び起こされた。

実は本当の名前があり、それが分かるのは無印編の1、2話ぐらいで、パワーアップもしますし、製作者も分かります。

サイバスター

種類：魔装機

待機：銀の腕輪

形態：鎧（外見と色は魔装機神のサイバスターだが、背中のスラスターが無い。その代わりに2対3枚の純白の羽がある。）

契約精霊：風の上級精霊サイフイズ

特殊武装：ファンネルが2機（見た目と攻撃方法はサイバスターのハイ・ファミリと一緒）

上位機種の魔装機で、1機しか存在しない。300年前は4騎士の1人、少しの間だけではあるが正樹のデバイスだったが、主が死んだ後にオリヴィエが他のデバイス達と共に地球に来た為に不破家や高町家の秘宝として眠つていたが、正樹の生まれ変わりである恭也の呼びかけに答え、目覚めた。

影牙・光牙

種類：アームド

待機状態：小太刀をクロスさせたようなアクセサリー

形態：小太刀、斬艦刀（元ネタはスパロボシリーズの参式斬艦刀で、ジエイルに依頼して追加した形態）

カートリッジシステムは、持ち手の方に手動で3発入るように出来ている。

見た目は機械化しただけの小太刀で、色は柄の部分は影牙が黒で、光牙が白で、刀身は銀である。

正樹がオリヴィエから貰ったデバイスで、彼の死後はこの序が持つていたが、300年後には彼の子孫であり転生者の恭也に受け継がれる。

恭也の危機により完全に覚醒。因みに、ファイアッセ・クリステラのテロ未遂時に士郎とファイアッセを助けたのは半覚醒時の彼（男性人格だから）。

ガツデス

種類：魔装機

待機状態：水色の腕輪

形態：鎧（見た目は魔装機神のガツデス）

契約精霊：水の上位精霊ガツド

特殊武装：ファンネル2機（見た目と攻撃方法はガツデスのハイ・ファミリと一緒）

300年前は4騎士の1人、ティッシュティのデバイスだったが、主が死んだ後にオリヴィエが他のデバイス達と共に地球上に来た為に不破家や高町家の秘宝として眠つていたが、さくらの恭也を守りたいと心により覚醒。三叉槍「グングニル」を常に装備している。

アイスシユベルト

種類：アームド

待機状態：青い指輪

形態：両刃の長剣（V2ガンダムのアサルトシールドに両刃の長剣をつけたようなもの）、弓（盾の部分はそのままで、剣身部分が分かれて弓となる）

特殊装備：3つのシールドビット（3つのシールドビットは攻撃は出来ないものの守る対象の周囲に展開することで大出力魔力バリアを展開しその中にいる人間を守ることが可能。）

300年前までは4騎士の一人、ティットティのデバイスだったが主が死んだ後、オリヴィエが他のデバイス達と共に地球に来た為に不破家及び高町家の秘宝として眠っていたがさくらの呼びかけに応じ、再び戦場を駆け抜けすることになる。

色はどの形態も盾部分は青と金が基本で刃や弓の部分は銀色

グランヴェール

種類：魔装機

待機状態：赤い腕輪

形態：鎧（魔装機神のグランヴェールと同じ）

特殊武装：ファンネル1機（見た目と攻撃方法はグランヴェールのハイ・ファミリアと一緒）

300年前は4騎士の1人、少しの間だけではあるがヤンロンのデバイスだったが、主が死んだ後にオリヴィエが他のデバイス達と共に地球に来た為に不破家や高町家の秘宝として眠っていたが、アリサやすずかが拉致されて、強姦されそうになつた時にアリサの願いに答え、覚醒。

炎竜人の爪

種類：アームド

待機状態：赤い指輪

形態：三本の爪が付いた盾（見た目はデジモンシリーズのウォーグ
レイモンXとノーマルWGのドラモンキラーが合体
したような形）

形通りに格闘戦が得意なデバイスではあるが、専用の遠距離魔法や
技が存在する。

300年前は4騎士の1人、少しの間だけではあるがヤンロンのデ
バイスだったが、主が死んだ後にオリヴィエが他のデバイス達と共に
地球上に来た為に不破家や高町家の秘宝として眠つていたが、アリ
サが高町家を訪れて、これの待機状態時に触り、前世の記憶を思い
出したアリサの呼びかけに答え、目覚めた。

デイアクス

種類：魔装機

待機状態：黒い腕輪

形態：鎧（見た目はイスマイル）

特殊能力：高速再生

契約精霊：闇の上位精霊タナス（由来はタナトスから）

名前と契約精霊と製作理由がオリジナルのデバイス

この作品でのイスマイルの名前で名前の由来は闇

イスマイルの名前はラ・ギアスにおいては復讐の女神の名前なので
忍にふさわしくないと想いネーミングセンスの無い作者が改名した。
元々は17番目のオリジナル魔装機（正魔装機ともいう）デバイス
として作られるはずだったが、途中で魔装機神や超魔装機を超える
為の実験機として作られた。ザムジードとグランヴェールを参考に
しているが、火力、防御力、再生能力が以上に高い。

この作品での精霊は姿無き管制人格兼融合機の役目をしている。

デバイス設定1（後書き）

次にデバイス設定2です。主になのはや3騎士以外のデバイスの説明となのはのユニゾンデバイスや管制人格の設定です

デバイス設定2

なのはのユニゾンデバイスや反管理局側のデバイスとグラランゾン

インデックス

種類：管制人格

容姿と服装：とある魔術の禁書目録のインデックス

魔力：測定不能

法の魔導書（又は法の書）の管制人格であるが、法の書の真の名称や機能については製作者によってブラックボックス化していて、管制人格であるインデックスですら分かっていない。性格はほぼ原作通りで、子供っぽい。しかし、原作のように異常な食欲は無く、食欲は普通の子供並みである。愛称はアイデ。なのはとオリヴィエにだけに適正があるので、他の騎士や魔導師等には使えない。

レミリア・スカーレット

種類：^{ユーリン}融合機

容姿と服装：東方プロジェクトのレミリアと同じ

魔力：SSS+

特殊能力：原作やオリジナルと同様

研究者が能力者の研究の為に試作した融合機姉妹の姉で、基になつた存在は、今現在幻想境にいる。

妹のフランドルと共に自身と妹を造った研究員達から実験体にされていた時にオリヴィエに助けられたという過去を持つ。性格はレミリアから貴族の誇り云々を外した様な感じ。なのはとオリヴィエにだけに適正があるので、他の騎士や魔導師等には使えない。

本物や本物を知る人物が現れたら、レミア・スカーレンと名乗る事を決めている。

フランドール・スカーレット

種類：融合機ヨウジン

容姿と服装：東方プロジェクトのフランドールと同じ

魔力：EX

特殊能力：原作やオリジナルと同様

研究者が能力者の研究の為に試作した融合機姉妹の妹で、基になつた存在は、今現在幻想境にいる。

姉のレミリアトと共に、自身と姉を造つた研究員達から実験体にされていました時にオリヴィエに助けられたという過去を持つ。その為、人体実験という言葉が出るだけで怒り出す。なのはとオリヴィエにだけに適正があるので、他の騎士や魔導師等には使えない。性格は子供っぽく、同じ性格のインデックスことアイデと気が合つ。本物や本物を知る人物が現れたら、ルーラ・スカーレンを名乗る事を決めている。

ゼストの槍

種類：アームド

待機状態：紫の腕輪

形態：槍（原作同様）

ジエイルの手により、フルドライブの反動が抑えられている。

リボルバーナックル

種類：アームド

待機状態：青い宝石の首飾り

形態：籠手（原作のスバルとギンガが使つていた物）

原作では、元の持ち主であるクイントの形見として娘のスバルとギンガが使つていたのだが、本作では死んでいない為、彼女が使つている。

ロードキャリバー

種類：アームド

待機状態：紫色をしたクリスタル型の宝石のついた首飾り

形態：ローラーブーム（キャリバーズの色違いで、灰色）
オリジナルのデバイスで、原作のキャリバーズより性能が低い。

アスクレピオス

種類：ブースト

待機状態：紫色をした宝石の首飾り

形態：グローブ（原作同様）

原作では、メガーヌの娘であるルーテシアが使っていたが、本作ではメガーヌが怪我すら負つていないので、メガーヌが使用。

ミラージュガン

種類：ストレージ

待機状態：銃の形をしたアクセサリー

形態：銃（原作でティアナの引き出しにあった物）、短剣（原作のクロスミラージュのダガーモードに似たような形態）
銃の形をしているが、射撃だけじゃなく砲撃も可能。

原作では、ティーダが死んだ事により、ティアナが形見として銃形態で引き出しの中に入っている。

グラソゾン

種類：アーマード・モジュール

待機状態：？？？

形態：鎧（魔装機神に登場するグラソゾン）

特殊機能：重力装置、グラヴィティ・テリトリー（重力バリアーで、普通のフィールド系魔法と違つて魔力を使わない）、自己修復、ワームホール発生装置

アーマード・モジュールと呼ばれる他系統のデバイスではあるがラ・ギアス系の技術やオリハルコンが使われている。アーマード・モジュールはベルカ、ミッド、アルハザード、ラ・ギアスとは違う次元世界の技術で造られたデバイスで、このグランゾンは、その世界のエリック・ワン博士と愁の前世であるクリストフが共同で開発したデバイスである。その力は、使用者の力量や魔力次第で一日でラ・ギアス等の戦力を殲滅させる事も可能とされる。ただ、それ以外は謎の多いデバイスである。

因みに、吸収した邪神の力と他の術式や技術と合わせる事でネオ・グランゾンというグランゾンを遙かに超えるデバイスとなる。

魔装機神やそれ以上の魔装機にはオリハルコンが使われている。

魔装機やアーマード・モジュールといった鎧型デバイスには兜も存在する。しかし、恭也達や愁の様に一般兵や下級仕官以外魔装士達のは

何故か着けなかつたとされている。

デバイス設定2（後書き）

次はいよいよ無印編突入です。
とはいってもいきなり原作ブレイクですが。

無印編1話「神への覚醒と青い宝石（前編）」

生まれた双子の姉の七瀬と当麻は生まれて9ヶ月ぐらいで前世の記憶を持つていたことが判明した。だが、高町家では近い前例があるのでそこまで驚きはしなかった。しかし、恭也にスカーレット姉妹、ざから、雪、咲夜は驚いたていた。なぜなら、七瀬の前世である春原七瀬とは、彼女が地縛霊時代からの知り合いだからだ。転生した理由を聞いてみると、風芽丘学園の旧校舎が取り壊される前にさくらの説得によつて成仏したらしい。その後、どうこう訳か記憶を持つたまま転生したと言う。そのことは直ぐにさくら、忍、真一郎達、さざなみ寮にも知れ渡る事になり、彼女を知つている人はさざなみ寮を含めて全員七瀬に会いに行つた。因みに、真雪がその時に宴会だと騒いだという。次に当麻だが、そちらはなのはや恭也といつた300年前の前世の記憶を持つ者や、咲夜、スカーレット姉妹が驚いた。それもその筈、なのはにとつては幼馴染であり、恭也や咲夜達から見れば、前世の主の幼馴染にして同盟国の王だつたからだ。そう、彼の前世の名は、クラウス・G・S・イングヴァルト。なのはの前世であるオリヴィエのライバル兼幼馴染にして、シユトウラ王国の王である。当麻はオリヴィエが先の戦争で生き残つたベル力の民を移住させた後の話した。その中で、ゆりかごの話題もあつたが、なのはは今は別の人達が住処として使つてている事をに話した。その時はいい顔をしなかつたが、悪い事には使わない人たちだと言つて納得させた。他にも、ベル力が滅んだ後は別の世界同士の戦争でベル力の地が完全に消滅した事もの口から出てきた。そして、なのははに管理局と言う組織の事やその組織の闇について話した。それを聞いて、当麻は人間つてどうして同じことを繰り返すのかなど呆れながら言つた。しかし、彼の幼馴染の生まれ変わりのなのはには直ぐに裏での感情が分かつた。それは、管理局への怒りであつた。それもその筈、このまま管理局が間違つた道を歩めば、いつかはか

つてのベルカや周囲の世界の様に争いだけの世界になってしまったからだ。事実、一部の管理世界は質量兵器云々、魔法云々を理由に力づくで管理局に征服されたのだ。その後、当麻にかなりの量の魔力があることが分かった。しかし、当麻には言っていない。だが、魔力については前世の記憶もあるので本人は直ぐに気が付くだろう。それから数カ月後、なのは達は9歳となり、双子は1歳となつていた。そして、そんな年の4月のある日、なのははジェイルのアジトに来ていたのであつた。

場所：ジェイルのアジト

視点：なのは

私は今、自分に貸し与えられた手術台に横になつている赤い鎧、白い鎧、黒い鎧を持つ騎士の形をした魔導人形の前に立つていた。そして、今さつと完成した3体を前に

「よし、完成したよ！！私作の魔導人形第1号と2号と3号、【TNX-1デューク】と【TNX-2オメガ】と【TNX-3アルファ】！」

と1人で喜んでいると、少し遠くから気配がした。その気配は段々とこの実験室兼手術室に近づいて来る。気配からして私の仲間の1人であるジェイル博士だからだ。彼は私の入る研究室に入ると直ぐに「どうかね？なのはくん。」

と聞いてきた。どうやらこちらの製作状況を見に来たようだ。それに対し、私は

「今、完成したところですよ。ジェイル博士。」

と答える。ジェイル博士はこちらに近づい横になつている3体の出来を確認する。確認が終わると

「ほう、素晴らしいね。流石なのはくんだ。でも何で鎧姿なんだい？」

と出来を褒めてくれる。そして、気になつたであろう彼らの外見を見て聞いてきた。

？

「それはですね。やはり、外見が人だけと言つのも寂しいので騎士型にしてみました。とは言つても最終的に人間形態にもなれる様する予定で、他にも天使型とか人外系等も造る予定です。生き物もうですけど、色々の種族が居たほうが良いですからね。」

と私は答える。すると、それに感化されたのか

「確かにそうだね。では私も何かそういう形をした魔導人形を製作するにしよう。というわけで私は失礼するよ。」

と言つと、ジエイル博士は私の研究室を出て行つた。私はジエイル博士が出た直ぐ後に3機を起動させた。3機は起きて、私の前に跪き

「「「おはよっ」」ぞいます。なのは様。」「

と口を揃えて言つた。それに対し

「うん、おはよっ。調子はどう?」

と言ひ。すると3機同時に

「「「はい、問題ありません。」」

と答える。そう。じゃあ、さつきから気になつた事を直してもらおうかな。

「そう。じゃあ、君達にお願いがあるんだけど。」

その言葉に3機は

「「「何なりと。」」

と言つが、この態度や言葉遣いを、私は直してもらいたいのだ。なので

「敬語や様付け禁止ね。私の事はなのはでいいよ。」

と言つ。3体は反論しようとした瞬間、私が発した有無を言わさないオーラによつて渋々納得した3体は

「「「……分かった。」」一デューク、オメガ

「……了解した。」一アルファ

と答えるのだった。

「うん、それでいいよ。それよりも、私以外の人間のデータも入つてるよね?」

「ああ、それなら問題ない。ちゃんと入つてる。」

その質問にデュークが最初に答える。それに続き

「「私もだ。」」

とオメガとアルファが同時に答える。それを聞いて、私は満足し、更には特に問題はないと判断して3体に立つ様に言ってから付いて来る様に言い、研究室を出る。その後、3体をジェイル博士のアジトに居る仲間達に紹介した。

その数十分後、私は3体をアジトに預けて地球に帰つていった。

私は地球に着いてから、特に用事や約束も無かつたので、直ぐに家に帰つた。

それから数時間後、もう直ぐ就寝時間だと言う時間帯に張つてある結界に何者かが転送魔法で侵入してくる反応があつた。しかも、誰かと戦闘している様子だ。しかし、その戦つている反応は人ではなく魔力の塊みたいな相手みたいだ。それにこの魔力反応からして、ロストロギアだろう。私は、何か危険な事が起ころる可能性もあると判断し、兄さん達に念話してから窓から外に出るのだった。

視点終了

場所：森

視点：？？？

「くつ、魔力が足りなくて封印できない。このままじゃ。」

と僕は呟く、しかし此処には僕と化け物しか居ない。しかも、化け物には知性が無く、無秩序に攻撃してくる物だ。そしてそれは、僕に向かつて飛び掛ってきた。僕は、構えていた自分のデバイスをそれにぶつけて跳ね返すことに成功するが、またそれは襲い掛かってきた。しかし、今の僕のデバイスにそんな耐久力は無い。さっきので大分、鱗が入っていたのだ。つまり、このままデバイスをぶつければ間違いなく壊れて化け物を封印できなくなるし、シールドを張

ろうにも封印する魔力がなくなってしまう。それに避けようにも僕にはそんな体力は残っていないつまりはジリ貧で、僕は目を瞑つた。だけど、化け物の攻撃は僕に通る事は無かつた。なぜなら、僕と同じ年ぐらいの金髪の少女が右手を突き出して、三角形をした虹色のバリアを張つて僕を守つてくれたのだ。その魔力光を見て、僕は聖王?と疑問に持つた。そして、その少女は僕の方を向いて

「その様子だと大丈夫みたいね。」

と僕の怪我の具合を見てからそう言った。そして、僕は彼女の瞳を見て、やっぱり聖王だと確信した。しかし、それを聞いたり、驚いたりする時間は無いし、助けてもらつたお礼も言つていないので

「はい、ありがとうございます。」

と僕は言うが

「お礼なんてこれが終わつてからにして……」

と言つと、御尤もだと思っている内に少女は化け物の方を向くと、魔力を左手に集めてから殴り、その後、人差し指に魔力を集中させて砲撃魔法を撃つた。すると、その砲撃を食らつた化け物は元の姿であるデュエルシードに戻つていった。どうやら、封印機能付きの砲撃だつたらしい。その後、直ぐに彼女は直ぐに槍型のデバイスを起動させて、デュエルシードに近づくとデバイスに触れさせて槍型のデバイスコアに収納した。そして、僕の方を振り向くと

「さて、これで終わりだね。出来れば詳しく事情を聞きたいんだけど、いいかな?」

と言つてきた。それに対し僕は頷き、そして

「はい。僕も聞きたいことがありますし、それとお礼をしたいのですが・・・・・。」

と言ひながら、ポケットの中を探していると、そのポケットから、2つの待機状態のデバイスコアを落ちてしまった。1つは正体不明のデバイス、もう1つは聖王家の遺産であった。その2つは少女の足元まで転がつた。それを拾おうと少女がコアに触れた時、強烈な光が彼女と2つのデバイスを包み込んでしまつた。僕はそれを呆然

と見つめる事しか出来なかつた。

視点終了

おまけ

人物紹介

高町七瀬

年齢：1

靈力：A A

高町家の3女。魔力を持たないが、結構な量の靈力を持っているので、靈が見える。春原七瀬の生まれ変わりで、生前や靈だったころの記憶を待つまま生まれた。戦いには参加しない。

高町当麻

年齢：1

魔力：S（1歳児で、此処までのレベルはかなり異常）

デバイス：なし

高町家の2男。双子の姉とは逆で、魔力はあるが靈力が少ない。その為、靈が見えない。

ベル力の王の1人、クラウス・G・S・イングヴァルトの生まれ変わりで、双子の姉同様に記憶を持つままの状態で生まれた。

魔導人形設定

デューケ

正式名称：【TNX-1デューク】

容姿：デジモンシリーズのデュークモン・クリムゾンモード（背丈も同じ）

魔力：EX+

武装：原作同様

特殊能力：なし

作者の趣味によって誕生した魔導人形で、名前はデュークだけであるがクリムゾンモード（勿論、作者の趣味）の姿をとっている。機能としては、試作型のレリック用の魔力增幅装置とツインレリックシステムを組み込んでいる。尚、この2つのシステムは、オメガとアルファにも搭載している。

オメガ

正式名称：【TNX-2オメガ】

容姿：デジモンシリーズのオメガモンX（違う部分としては、両腕が違い、人の腕に近い形になっているのと、背丈がデュークと同じこと）

魔力：EX+

武装：オメガブレード（元々はインベリアルドラモンのパラディンモードの武器）

特殊能力：なし（原作だと、オメガインフォースと言う能力を持っているが、形を真似ただけなので、能力はない。）

作者の趣味によって誕生した魔導人形で、名前はオメガだが、オメガモンX（作者の趣味）の姿を取っている。デュークやアルファ同様に試作型のレリック用の魔力增幅装置とツインレリックシステムを組み込んでいる。

アルファ

正式名称：【TNX-3アルファ】

容姿：デジモンシリーズのアルファモン（背丈はOVAのアルファ

モンと同じ（

魔力：EX+

武装：王竜剣

特殊能力：なし（原作だと、アルファインフォースと言う能力を持つているが、形や武器を真似ただけのので能力は存在しない。）

作者の趣味によって誕生した魔導人形。

デュークやオメガ同様に試作型のレリック用の魔力增幅装置とツイントレリックシステムを組み込んでいる。

TNX

高町なのはが造った試作型と言つ意味。

レリック用の魔力增幅装置

レリックの魔力を虹の欠片並みに上げて、尚且つ虹の欠片並の安定性を持たせる装置である。

ツインレリックシステム

レリックの魔力を二乗化するシステム。元ネタはガンダムのツインドライブシステムである。

靈力上位者（5位まで）

1位・・・高町なのはでSSS+（七瀬と那美の分でパワーアップした。）

2位・・・槙原 耕介でS+

3位・・・神咲薰でAAA

4位・・・高町七瀬でAA+

5位
・・・
神咲那美でAA
-

デジモンの形をした自動人形、前からやりたかったのでやってみました。とは言つても、活躍するのは裏方ですが・・・。ユーノにデバイスを持たせてみました。更に、多少は状況が分かる人にしてみました。

次はどうどうなのはが完全に人間を卒業して、法の書やアルテマウエポンの秘密が明らかになります。そして、原作では淫獸のユーノがこうなった経緯を話します。因みに、ジュエルシードは魔力が抜かれ、その魔力は後で役に立ちます。

無印編2話「神への覚醒と青い宝石（後編）」

場所：森

視点：なのは

私は、家を飛び出してから魔力反応がある所に向かった。そこには結果以内に侵入したと思われる少年と、ロストロギアの暴走体と思われる黒い何かが戦っていた。少年は既に傷だらけで、魔力も少なくなっていて、彼のデバイスにも鱗が入っていた。そこへ暴走体が彼に向かつて体当たりしてきた。それでも彼は、動かない。いや、動けなかつた。恐らく、シールドを張つても封印に使う魔力がなくなることを恐れて、デバイスでガードしようにも、あの状態では、無理だと判断したのだろう。だから動けないでいたのだ。それに、避ける体力も残つていないようだ。なので助ける事にした。私は直ぐに時間停止して彼の前に出る。そして、直ぐに時間停止を解いてシールドを張る。そして、顔だけを彼の方を向いて

「その様子だと大丈夫みたいね。」

と一応、彼の体の様子を見ながら言つ。それに対し、彼は

「はい、ありがとうございます。」

とありきたりな場面で、ありきたりな言葉を使う。そんな彼に

「お礼なんてこれが終わつてからにして！！！」

とありきたりな台詞で返す。その後、顔を直ぐに暴走体の方に戻して、魔力を空いている左手に集めてから殴り、人差し指に魔力を集中させて封印機能付きの砲撃魔法を撃つた。そして、暴走体は元の青い宝石に戻つていった。その宝石を見て、私はジュエルシードだと気づいた。ジュエルシード・・・それは、かつて存在した魔導兵器の動力源だった物で、ある程度の願いなら叶えられることと、その高密度の魔力により次元干渉が可能という副作用がある。ある意味で動力源だけでも危険な代物である。それが何故こんなところに、

と思いつつも、私は、エルを起動させて、封印したジュエルシードを収納する。そして、気になつたことを聞くために「さて、これで終わりだね。出来れば詳しく事情を聞きたいんだけど・・・いいかな?」

と言つ。それに同意したのか、彼は、頷いて

「はい。僕も聴きたいことがありますし、それとお礼をしたいのですか・・・・・。」

と言いながら、ポケットの中を探している。すると、その彼のポケットから、2つの待機状態のデバイスを落ちた。1つは正体不明のデバイス、ただ、法の書やアルテマウェポンに似た波動が感じ取れた。もう1つは、聖王家の遺産であった。それを見た時は驚いたが、そんな様子は顔には出さずにいた。そして、落ちた2つの待機状態のデバイスは、何故か私の方に転がってきた。それを不審に思いつつも、それを拾うために、その二つに触れた。その瞬間、二つのデバイスから光が出て、私を包み込み、私は目を瞑つた。その光は、私に色々な知識や能力を与え、更には、私の体に異常な痛みを感じ取つた。その前に、身に覚えの無い痛みがリンカー・コアのあたりにあつたがそれは気にしない事にした。与えられた知識によると、神の体にされてしまつたようだ。そして、目を開けたら、何故か異空間にいた。その空間には、目の前にある祭壇しかなく、それ以外は真っ白い空間であつた

場所：異空間

何故か異空間に來ていた私だが、以外に冷静で居られた。なぜなら、この空間を創り、私をこの空間に連れてきた存在を、与えられた知識や情報で、知つてゐるからだ。なので私は

「どうして私は、貴方が創つたこの空間に居るの?創造神ギゾース・グラギオス!!」
と叫ぶ。すると

「分かつていい。それと、始めましてだな。高町なのはよ。」

と前から声が聞こえる、すると私の前にある祭壇から丸い光体が現れた後、私の目の高さの所まで浮かんだ。」この丸い光こそが、創造神ギゾース＝グラギオス（以後グラギオス）の精神体だ。そして「ええ、始めまして。創造神グラギオス。それで、理由は？」と挨拶はそこそこに、此処に連れてきた理由を促す。すると

「それでは話そう。何故そなたがここに居るのかを……。」

と言つた後、続けて

「それは、謝罪の為だ。」

と言つた。私は、何の謝罪か分からず

「謝罪？」

と聞いてしまつた。それに対し、グラギオスは

「そうだ。そなたを勝手に神にしてしまつた事に対してだ。」

と教えてくれた。だけど、もうなつたものは仕方ない。なので

「ううん、もうなつたものは仕方ないよ。」

と言つ。しかし、グラギオスはまだ気にしているのか

「そうか。そう言つてくれるとありがたい。しかし、それでは我も

気がすまないのでな。そなたには、新しい能力を与え、更には、デ

バイスを強化しよう。これで、手打つては貰えぬだろうか。」

と言つ。新しい能力にデバイスの強化か、まあ貰えるんなら貰つとこうかな？と思ひ

「別に、いいんだけど。まあ、貰える物は貰つよ。」

と言つ。グラギオスは

「そうか。今回の事、そして、そなたに神の使命を押し付けてしまつた事、本当にすまなかつた。」

と言う。そして次の瞬間、グラギオスの精神体から小さな光の球体で出た。それは、私の方に向かっていき、私の中に入つてきた。恐らく、新しい能力がこの中に入つてているのだろうと推測し、私は、その光の中にあるであつて能力の解析を始めた。因みに、その解析能力は、この空間に来る直前に貰つた物だ。その解析能力は、能力

やロストロギアの名称、使い方が分かると言う能力だ。その結果、さつきの光の中に入っていたのは、やはり能力で、その能力は【幻^{イマ}ジンブレイカ^{ジンブレイカ}】という超能力や魔法、それに、靈力技や妖氣を使った技といつた異能の力を無効化する物であった。尚、この能力は、自分の意思で制御可能となつていて、その後、グラギオスが

「そなたの全てのデバイスを我が祭壇の上に。既に出しているそのデバイスは、待機状態に戻してくれ。」

と言う。私は言う通りに、エルを待機状態に戻して、残りのデバイスを待機状態のまま、ポケットから取り出した。そして、それをグラギオスの祭壇の上に置いた。すると、私のデバイス全てが、光りだした。光は直ぐに収まつたが、見た目的には、全く変わつてはいなかつた。

しかし、この創造神のことだから、内部に改良や材質の強化とかだろうと思いつつ

「終わつたみたいだけど、見た目的には変わつてないよね？ってことは、材質を強化したの？」
と聞く。すると

「ああ、そなたの魔力に耐えられるように、我が改良型のゾル・オリハルコニウム合金を使って強化したからな。神の書のような金属で強化が出来ない部分は、我的神力で強化した。それと、我が神の書とアルテマウェポンに封印していた機能を開放しておいたぞ。その機能については、後で調べてくれ。」

と返ってきた。それに対し、私は

「そつか。それで、どの位まで耐えられるの？」
と聞いた。グラギオスはそれに対し

「神力については、そなたの力を使つたので、魔力値10億までなら耐えられるぞ。改良したゾル・オリハルコニウム合金も同じくらいだ。もし、それ以上の魔力を手に入れた時は、そなたの魔力自体にリミッターを掛けるが、そなたの神力と我的神力を合わせるかをすれば何とかなるぞ。本当は、そなたのリンクーコアにも、色々

施したかったのだが、そちらの方は、能力を与えたと同時に聖王の心臓を強化したので大丈夫であろう。」

と答えてくれた。つてことは、まだ大丈夫だね。なぜなら、私の魔力値は3億位だからだ。つと言つより、いつの間にあれが私の中に？もしかして、光に包まれた時に、リンカーコアが痛んだ時？？と思ひ、グラギオスに聞いてみる事にする。私は思い切つて

「ねえ、グラギオス。聞きたいことがあるんだけど。いつの間にあれが私の中に入つてたの？」

と聞く。すると予想通りの答えが返つてきた。

「あれ？・・・ああ、聖王の心臓の事か。それなら、そなたも予想しているとは思うが、神になる前に少しだけではあるがリンカーコアの部分が痛んだであろう？その時についたものだ。因みに、聖王心臓の能力はそなた自身で、確認すると良い。」と答えてきた。私は、やつぱりと思いつつも、リンカーコアについている聖王の心臓を調べた。すると、とんでもない結果が返つってきたのだった。結果は以下の通りである。

解析開始

聖王の心臓

第12代聖王クラウゼ・ゼーゲブレヒトの依頼で造られ、彼によつて使用したデバイスではあるが、彼が戦死してしまつた為、共に棺おけの中に眠る事になる。しかし、260年後（戦史224年あたりの事で、冥王イクスベリアが生まれた時期）に盗掘に遭い、盗まれてしまつた。その後は、聖王家の人にしか使えなかつたので売られる事になる。その後、世界を転々とし、最終的には、今までグラギオスの眠つていた世界【サルデニス】の都市遺跡で、1週間前に、スクライア一族の少年に発見される事になつた。因みに、サルデニス自体はいまだに存在しており、第29管理世界として管理局に管理されている。機能としては、主の体に入り込み、リンカーコアを包み込む。そして、主の魔力を取り込んで、リンカーコアに異常や亀裂が生じた時に修復する。更には肉体の強化なども

してくれる。先程、グラギオスによつてその部分が強化された。

解析終了

と言う風だつた。

解析が終了した後は、他にも会話などをした。その10分後、「少年にも聞きたいことが事だし帰りたい」と言い了承を貰つた。そして、自分の神力で元の場所に帰ろうとしたその時、グラギオスに「いつでも来て良い。」

と言われたので、私は

「分かつた。またね、グラギオス。」

と返して、元いた夜空の森へと帰つていつた。

場所：森

自力で異空間から戻つた私は、呆然としている少年の記憶を読み、彼が異世界の発掘などを生業としているスクライア一族ということと、どうしてこの世界に彼とジュエルシードが辿り着いたかが分かつた。その理由とは、21個のジュエルシードを発掘したのは彼で、そのジュエルシードを管理局に運ぶ最中に、何者かの襲撃を受けたという。そして、何故か21個全てのジュエルシードが、この海鳴の町に落ちてしまつたらしい。それを責任を感じた彼、ユーノ・スクライアは21個のジュエルシードを回収する為に、この世界に來たらしい。その余りの突つ込み所に、私は疑問を持つた。もしかしたらこれは、作為的に起こされた事だとしたら?とか、管理局の誰かがジュエルシードを欲しがつてゐる連中にリークしたとか等、色々と考へ出してしまつた。しかし、私はその間にユーノ・スクライアを正気に戻した。その時に、名前を呼んだので、その事を正気になつたユーノに、何で自分の名前をしているのかと聞かれた。それに対し、私は正直に話した。私には人の記憶を読む能力があつて、この世界に、どうしてジュエルシードや彼が来た理由も分かつた事も話した。その後、彼の名前だけ知るのも変だと思い、私の事も自己紹介した。そして、お礼として二つの「デバイスを貰う事にし、後の

話は明日聞く事になり、私はユーノを連れて家に向かうのであった。
視点終了

こうして、なのははユーノを連れて家に帰つていった。勿論、帰る前に、ユーノに回復魔法を施して傷を治していた。なのはが家の門の前に着き、門を通る。その門の先で待っていたのは、咲夜だつた。咲夜は、ユーノのことには、特に何も言わずに家に入るよう促した。なぜなら、なのはが咲夜達に念話で前もつて連絡したからだ。なのはとユーノは、家に入ると、今に集まつてい家に事情を説明した。更には、ユーノを泊める事を頼んだ。その時に、士郎と恭也は渋つたが、桃子の圧力により黙りこくつてしまつた。こうして、高町家の住人が一時的ではあるが、1人増えたのだった。

一方、その頃

場所：幻想郷

ここは幻想郷の奥地。その奥地で、幻想郷の主神である龍が
「ん、これは・・・間違いない。我らの創造神様がお目覚めにな
られた。これは、直ちに皆に知らせなくては。」

と呴く、その後、直ぐに幻想郷全域に知らせる為に飛ぶのだった。
こうして、龍等を創つた創造神ギゾース＝グラギオスが目覚めた事
は、直ぐに、幻想郷全域に知れ渡るのであつた。そして、その後、
恭也達といった精靈達と契約した者達は、なのは+グラギオスと共に幻想郷に招かれることになるのであつた。因みに、紫も龍と同時
期に知りました。

おまけ

解説

なのはが言つていた「あれ」とは、聖王の心臓の事

神の使命

1つ以上の世界や次元を救つたり、守る事。

創造神ギゾース・グラギオスの頼み、もしくは命令を聞く事等がある。

3種の神器

神の書（法の書の真の名称で、真の力を解放した姿である）、アルテマウエポン、グラギオスの3つの事を指す。尚、3つ揃えて、一定の魔力（1億以上）があり、更にはグラギオスに認められると、その者は、人間を卒業して、神となる。

ゾル・オリハルコニウム合金

結晶型の金属で、好きに形を変更できる。ただし、アルテマウエポンには、武器だけにしか変更できない特別製で、その分強度が丈夫。更には、魔力や物理に対しての防御力が高い。

改良型のゾル・オリハルコニウム合金

スパロボで登場した、液体金属やマシンセルの機能も追加した物で、破壊されたとしても、それ以上の強度になつて元に戻る。更には、魔力や物理に対しての防御力がかなり強化されている。

人物紹介

ユーノ・スクライア

容姿：原作同様

魔導師ランク：原作同様

デバイス：管理局が使用する物と同規格の物（要は、武装局員が持つて いる物）

自分のデバイスと、2つのデバイスを持っている以外は、殆ど原作どおりの人物。

高町なのはの追加設定

魔力値：測定不能（あくまで、管理局の測定器で調べた場合）で3億

神力：測定不能

デバイス追加：グラギオス、聖王の心臓

能力の追加：イマジンブレイカー+（魔法や超能力と言つた異能の力を打ち消す事が出来る。ただ、原作と違い、不幸体質や自分の能力も使えないといったデメリットは存在しない。それに、自由に発動できるのと、バリアやシールドにこの効果を付ける事や、全身でも発動可能。）、未来予知、解析能力（ロストロギアでも、感じたり、見たるだけで、使用方法や効果などが分かる。また、破損していた場合には、修復方法や破損状況がわかる）等etc

デバイス設定

法の書について追加。

真の名称：神の書

能力や機能の追加：防衛プログラム、守護騎士プログラム（神の騎士と呼ばれる存在ではあるが、今だ未登録。）、ページがかなり増えた（これにより、多くの能力を得られるようになつた。）また、グラギオスの神力により強化された。魔力値が10億までなら耐えられる。

最強のチートデバイスの一つ。

防衛プログラム

容姿：インデックスの目を赤くした感じで、後は、インデックスと同じ容姿と服装

魔力値：EX+

インデックスとは対照的に、大人しい性格で、小食である。
夜天の書に防衛プログラムがあるのは、この魔導書を元にしたため
でもある。

アルテマウェポン、レイジングハート・エルトニウム、ライトブ
リング

追加：材質は改良型のゾル・オリハルコニウム（上記の改良型ゾル・
オリハルコニウム参照）

改良型のゾル・オリハルコニウムのおかげで、刃がある武器の場合
は切れ味もあがつた。

魔力値が、10億までなら耐えられる。

アルテマウェポンは3種の神器の一つである。

グラギオス

種類：不明

待機状態：虹色の指輪

形態：鎧（色は、白、青、金）

特殊能力・機能・武装：ファンネル×8、広域魔法無効、精神攻撃
無効（幻影なども無効）、重力フィールド、特殊AMF（登録した
特定の人物にはAMFは効かない、特定の人物は何も影響なしで魔
法が使用できる）、デバイスの強化・改良・創作、自らを契約者の
適性に応じた色や形の変化を強化することが出来る（契約者の意見
も取り入れられる）、使用者の魔力光により待機状態の色が変わる、
平行世界移動、特殊幻影機能（使用者や登録している人物の姿を隠

したり、レーダーなどに感知出来ない。両方を一度にすることもできる（）

神：創造神ギゾース・グラギオス

創造神ギゾース・グラギオスの魂を宿した肉体代わりのデバイスで、その力は正に、究極デバイスの名が相応しい。3種の神器の一つで、主を神にする鍵とされる。

最強のチートデバイスの一つでもある。

聖王の心臓

種類：寄生型（あくまで性質だけで生きとはいえない）

待機状態：虹色の丸い宝石

形態：球体

体の中に入り込み、リンクアーコアを包む、そして、魔力を一定分貰う変わりにリンクアーコアの修復や強化を行う。12代目の聖王が使用した代物で、経緯や詳しい設定に関しては、この上の解析のデータを参照。

創造神ギゾース・グラギオス

神力・魔力：測定不能

ラ・ギアスの神の1体だった存在で、幻想郷の主神である龍や、ハ雲紫といった1000年以上生きている妖怪等といった者達を作り出した存在で、ヴォルクルスを封印した存在でもある。尚、彼の本当の肉体は、その時の戦闘で、修復が追いつかないほどの重症だったので、自らの肉体として、鎧型デバイス【グラギオス】を作り出した。サポートのために、神の書とアルテマウェポンを作り出し、その3つを3種の神器とし、それらを揃えた状態、もしくは1億以上の魔力を手に入れた後に3つ揃え、最後には創造神ギゾース・グラギオスの勝手に行う選定によって合格すると、自動的に神となってしまう。尚、これは3つの内の1つが覚醒しないが、3つの内の2つや3つだと覚醒してしまう。それと、神の書が、なのはに与え

た能力、見ただけでその生物の能力を自分に上乗せするは、グラギオスには効かない。選定の基準については、眞の平和を願う心とうことだけは分かつているが、それ以外は不明。

ユーノが使つているデバイス

簡単に言えば、管理局が使つている一般的なデバイスで、入手経由は今のところは不明。

無印編2話「神への覚醒と青い宝石～後編～」（後書き）

なのはを神にしてみました。ある事を考へてゐるので。まあ、今この段階では何もいえませんが。さて、次回は説明となのはがコーノに協力することを約束します。

それと、ジュエルシードの回収が一日早まったので、原作のA、Sから登場している人を出そうと思つています。

無印編3話「協力と車椅子の少女」（前書き）

の中の言葉は念話です。

無印編3話「協力と車椅子の少女」

なのはが神になり、ユーノが高町家に居候する事が決まった次の日、なのはは何時も通りに学校行きのバスに乗り、学校へ行つた。その時に、アリサやすずかにユーノやジュエルシードの事を念話で伝える。その後、ユーノに念話で話し、その時に出たある話しを持ちかけた。それは

協力？

とユーノがなのはに念話で返す。なのはは更に続ける。

うん、アリサとすずか、それに兄さんや他の騎士組みや融合機達もそれに賛成してるんだよ。

という。それに対し、ユーノは

だめだよ。君達にこれ以上迷惑は掛けられない。僕だけでやるよ。

と言つ。勿論なのはは、ユーノがそう言つのも分かっていたのでもしゃあ何？貴方だけがやつてこの世界を滅ぼす気？はつきり言って貴方が支援型程度でしかない君が戦つても状況が悪くなるだけだよ？

その所を分かつて言つてるの？

と攻め立てる。それに対し、ユーノは反論する。

そんなつもりは無いよ！！ただ、あれは僕が・・・・。

その後の言葉を予測し、なのはは

君が発掘したせいでこうなつたから自分一人でつて言いたい訳？・

・・・ふざけるのもいい加減にして！！

と念話で怒鳴る。

なつ！！

貴方一人でどうするつもりなの！？たとえ君が管理局の連中通報していても、来るのはかなり遅くなるはずだよ。それにね、私達はね。管理局なんてこれっぽちも信用してないの。

な、なんで管理局にことをしてるので？君達はこの管理外世界の住人なのに。それに管理局が信用できなってどういうこと？その根拠はあるの？

あるよ。証拠もね。それと、これはあくまでも私の推測なんだけど、このジュエルシードが散らばつた事件。多分、管理局が関わってるよ。

な、何だつて！！！

とユーノは驚く、そして

不自然だと思わない？どうして襲撃者はその船にジュエルシードが積まれていることが分かつたんだろうね？それに、なんでこの地球付近で襲撃したんだろうね？そこで気がついたの。恐らく、襲撃者にジュエルシードあることをリークしたのは管理局で、それを捕まえる事で、自分達の評判を上げようとしてるんだろうってね。もし失敗しても、危険なジュエルシードのせいで管理外世界が滅んだよ程度で済ませられるから。連中がやりそうな事だよ。

と自分の考えを述べた。

なつ！！！

それに言葉を失つたユーノ。それを見たのははまあ仕方ないかと思いつつ

そういうの昔から有つたらしにし、今までの功績だつて自作自演が殆どなんだから。たとえば、ロストロギアを悪改して世界にばら撒いたり、違法化学者に依頼したり、その違法研究者をアルハザードの技術で造つたりね。それに最高評議会って知つてる？

となのはは管理局の悪行を話し、更には、最高評議会という存在について聞く。すると、ユーノも名前だけなら知つていいのうつでうん、聞いたことはあるけど、その実態は謎だらけだよ。

と答える。そして、更に

うん、そうだろうね。なぜなら奴らこそが、広域次元犯罪者であるジエイル・スカリエッティを文字通りに造つた張本人であり、色々と悪行を重ねている連中なんだよ。それに、管理局が創設されて、

150年が経過してゐるらしいけど、代替わりしたって聞いたこと無いよね？

と聞く。それをユーノはうん。

と肯定する。それに追い討ちを掛けるかのように

それもそのはずだよ。奴らは今も脳髄だけの姿になつても尚、最高評議会といつ管理局の最上位の地位にいるのだから。信じられないなら、証拠を全部見せようか？ それから、証人にも会わせようか？

と言つ。すると、觀念したのか

そこまで言わると反論できないな。分かった。君達にお願いするよ。

と言つた。じうして、協力するかしないかの念話での言い合ひは、なのはの勝利で決まったのであつた。そして、なのはは学校が終わると、忍に連絡し、ユーノを連れて、ジェイルのアジトに連れて行くように頼んだ。なのはは家に帰り、ユーノを連れて、月村邸に行き、忍達にユーノを紹介した。尚、忍は本来学校だったのだが、ジェイルの所へ行つてノエルの改造を行うために休んでいた。その時に、なのはからユーノの話を聞いて、なのは達が来るまで待つていたのだ。因みに、なのはは宿題の為に必要な資料をすずかやアリサ、スカーレット姉妹、それに新しく転入生として来たインデックスは探すために図書館に行つていた。

場所：？？？

視点：なのは

忍さんが、ジェイルの所にユーノとノエルさんを連れて行つた後、私達6人は、図書館に行つていた。私は、調べ物の事が載つていそうな

棚を見ていた時に

「んしょ、んしょ」

と言つ声が聞こえた。その声の方を見ると、車椅子に座つた、ボブカットの少女が本を取ろうとしていた。私は、その少女に可笑しな気配と言つか、変な反応があるような気にした。しかし、座つている少女には届かなかつたようで、それを見かねた私は、少女の方に歩み寄ると

「どれが読みたいの？」

と訊う。すると少女は

「ひやあ！！」

と叫んでしまつた。私は

「しーー」

と口元に人差し指を向けて、静かにのポーズをした。その驚いた少女は

「すいません。驚いてしまつて。」

と誤る。私は気にせずに彼女が探しているであろう本を聞いてみることにした。

「うんん、いいよ。それよりどれが読みたいの？」

と訊うと、少女は指を指して

「これや。」

と言ひ、私は指された本を棚から取り、少女に渡した。それに対し、車椅子の少女は

「おおきにな。そういうえば、名前がまだやつたね。私は八神はやでいいます。」

とお礼と自己紹介を始めた。それに習い、私も

「私は高町なのは。聖洋小学3年生だよ。」

と自己紹介するのだった。そうすると

「同じ年やね。」

という彼女も9歳か8歳らしい。それを分かつていていた私は

「そうみたいだね。はやては1人で読んでるの？」

と言い、はやてにそう聞く。すると

「 セウヤ。」

と頷いて返す。それに、たぶんこの雰囲気から察するに、親や友達が居ないのだろうと推測する。なので

「 そつか。じゃあ、友達と調べ物とか本読んでるんだけど、一緒にどう?」

と誘う。しかし迷惑だらうと思つたのか

「 そんな!—悪いです。そんな気を使わなくとも。」

と言つ。しかし、私はそんな事、気にしなくていいのだと思いながら

「 ああ、違う違う。私は、君と友達になりたいから言つてるんだよ。たぶん他の皆も君に会つたら、同じ気持ちになると思うよ?」

と本心を打ち明ける。すると、はやは嬉しそうに

「 そ、うなん? じゃあ、ご一緒にさせてもらいます。」

と頷いて言つ。そして私は

「 うん、じゃあ行こうか。」

と言い、確認を取る。彼女はそれに対し

「 うん。」

と頷く。それを見て、私ははやての車椅子を押しながら、皆の居る席へと戻つていった。

席に戻ると、皆にはやてを紹介した。皆も私と同じ気持ちになつたのか、友達になつてよといつのであつた。こつしてはやてと友達になつた私達は、調べ物をして、はやはては自分の読みたい本を読むのであつた。そして、私達は調べ物を終え、はやても読み終わると出した本や資料を元の棚に返し、私達と、はやはては家が違う方向だったので、別れるのであつた。しかし、そこに結界が張り巡らされ、そこに2人の女性が現れた。その2人は魔力を持ち、変身魔法も使っている。尚且つ、それなりの経験を積んでいる。結界を張つたのもこの2人だと、検討づけた。結界の解析をエルに頼んだ結果、ミッド式だと言つ事だつた。私は、悟られないように警戒する。そして、その2人組みは

「 ねえ、君達?」

と言ひ。私は何かいやな予感を感じたが
「何ですか？」

と答える。すると

「いえね、ちょっと忠告をね。」

と言つてきた。私は疑問に思い、頭の中を覗く能力を使いながら

「忠告」ですか？」

と言つ。そして、その2人は

「そう。忠告だよ。单刀直入に言つよ。・・・・あの子から身を引いた方が貴方達のためよ。」

「せうそ。あの事一緒に居ると、不幸になるよ。」

と言つ。それに怒つた私たちの心を代弁するかのように

「そんな事、あんた達には関係ないわ。あんた達いつたい何者なの？」

とアリサが怒り、彼女達の正体を聞く。しかし、それを

「誰でもいいじゃない。それよりも、忠告はしたわよ。」

と言つと、結界を解除した。その瞬間、私たちは通常空間に戻り、何事も無かつたかのように去つていく2人を見つめるのだった。その後、私は、頭の中で読んだ彼女達の正体等を話した。その内容は、ハ神はやはては、夜天の魔導書、今は改変されて闇の書となつている物の主として選ばれた。そして、さつきの2人の使い魔であり、主である管理局の提督であるギル・グレアムの命令で監視しているらしく、その目的は、闇の書を完成させた後にはやてごと闇の書を葬るつもりだと言つことを伝えた。それを伝えた皆の目には、怒りの表情をしていた。勿論、私も怒つていた。しかし、それには理由があり、部下が殺された事への復讐だと言つ事も伝えた。しかし、アリサは

「復讐で、ただ選ばれた身寄りの無い子供を殺そつとするの？許せない！！」

と怒つっていた。私を含めた皆もそれを同意し、何とかしようと考えるのであった。そして、家に帰ると、早速はやてと別れる前に教え

てもらつたアドレスを選択して、はやての携帯に繋ぐのであつた。どうして、はやてに連絡を取つたかと言うと、彼女の家に行つて、闇の書、もとい夜天の書の破損率を調べるためだ。そうする事で、彼女を助けようと言う事だ。因みに、ギル・グレアムに対する対策も考えないといけないが、そちらは後回しと言つ事にした。こうして、考え方をしていると、コーノが帰つてきた。私は、コーノに話しかけた。すると、コーノは

「ごめん。」

と頭を下げて謝つて來たのだ。それを何事かと思い、理由を聞いてみた。すると、次元航行船の襲撃の時に、管理局に通報してしまつていると言つのだ。ただそれだけなら誤る必要は無い。寧ろある意味、管理世界に住む者達の義務と言えたからだ。しかし、コーノは、忍と一緒にジェイル博士に会つた時に全てを聞いた。そして、証拠も見つてしまつた。なので、管理局に失望し、呼んだことを後悔したと言つ。そのことで地球や私達を巻き込んでしまうかも知れないと言つ意味で、謝つたらしい。私はそれに対し、気にしてないからと慰める。そして、今日の出来事を話した。コーノも、私たちと同じように怒りを感じ

「許せない。」

と聞きづらじ声で言つていた。その後、夕食でも、コーノに話した事と同じ事を話した。恐らく、さくらさんや忍さんにも、すずか経由で伝わつてゐるだらう。そして、夕食を終えると、お風呂に入つた。お風呂を出ると、パジャマに着替えて直ぐにベッドに潜り込むと、私は重たい田蓋を閉じるのだった。

「視点終了」

次の日、なのはが学校が終わると、ジュエルシードの捜索を開始していた。すると、八束神社の方からジュエルシード反応がしたので、直ぐ向かつた。今日のジュエルシードは、犬らしき生物を取り込んでいた。しかし、なのはの敵ではなく、バインドを掛けて最初のジ

ユエルシード同様に封印機能付きの砲撃を放つのであった。
こつしてなのはは2つジュエルシードを手に入れたのだった。そして、別の所でもアリサやすずか、それに恭也に忍、さくらも手伝つたので、なのは達は、今日だけで一気に6個のジュエルシードを手にするのだった。

無印編3話「協力と車椅子の少女」（後書き）

相変わらずの駄文ですみません。○○○
次は、幻想郷メンバーを出そうと思います。
更に、ギル・グレアムとある契約をします。

無印編4話「幻想郷と交渉、そして・・・黒い影」（前書き）

一話に收まりました。

無印編4話「幻想郷と交渉、そして・・・黒い影」

なのはが犬に取り付いたジュエルシードを封印してから、2日が経つていた。

場所：八束神社

視点：なのは

今日は、土曜日と言う事で学校が休みだつた。そんな休みの私の日課は朝5：30に起床すると、ランニングやストレッチをしてから魔法と御神流、それに御神流を元に開発した格闘術の鍛錬をし、6：50に朝食の手伝いをして、7：20に朝食を食べる。それがいつもの朝のパターンだ。そして、そこからは平日と違い、家でくつろいだり、ゲームをしたりしていた。しかし今日は違つていた。なぜかと言うと・・・・今、私とグラギオス、それにアイデは、八束神社にいる。理由は、誰かに手紙で呼び出されたからだ。そして、私の目の前には1人の女性が、多く目がある赤い空間から出てきた。その女性は

「お久しぶりで、」ぞいます。創造神グラギオス様に、インテックス様。

「ああ、久しいな。」

「久しぶり。」

と再開の挨拶をする。そして

「そして、始めて、創造神に選ばれし方。私は八雲紫と申します。以後お見知りおきを。」

と言い、私に挨拶した。そして私も、彼女の頭を読みながら「ご親切にどうも。高町なのはです。」と挨拶する。そして、紫さんは

「单刀直入にお願いがあるのですが・・・。」

とこきなり切り出した。私は頭の中を読んでいるので
「分かりました。私とグラギオス、インテックスを幻想郷に案内す
るんですね？」

と言ひ。それを聞いた紫さんは
「どうしてそのことを！－前の方は、此処まで分からなかつたのに。
・・・・・ま、まさか－！」

と驚いていた。それを肯定し

「そうですよ。私は生き物と言つたか意思の有る者の頭の中が読める
んです。まあ、知り合ひの力をコピー強化しただけですけどね。」

と言ひ。すると

「そうですか。では、早速参りましょうか。隙間能力は使えますね
？」

と言ひ。どうやら、彼女も私の能力を知つてゐるらしい。なので

「はい。それと様付けは止めてください。」

と言ひ。彼女はグラギオスに聞くと

「なのはの言ひ通りにしてやれ。」

と言ひのであつた。それを聴いた瞬間

「それではそうさせて貰います。では、なのはけやん。行きましょ
うか。」

と言ひ。

「はい。」

と言い、私達は隙間を作り出し、その中に入つて、幻想郷に向かう
のであつた。

場所：幻想郷の奥地

私たちが隙間を出ると、そこは神秘的な洞窟であつた。因みに、紫
とは隙間でいつたん別れた。そして、目の前には、大きな龍がいた。

そして、その龍は

「遠路はるばるご苦労様で」ござります。そして、お久しぶりでござります。創造神グラギオス様に神の書の管制人格インデックス様と挨拶する。すると

「ああ。」

「久しぶり。」

とグラギオスとアイデが挨拶し返す。そして、それを聞いた龍は更に言葉を続ける。

「そして、そのグラギオス様に選ばれしお方。始めまして。私はこの幻想郷の神の一つ、龍です。以後お見知りおきを。」

「始めまして、高町なのはです。貴方については龍様でよろしいですか？」

という。しかし龍様は

「いえ、呼び捨てで構いません。なのは様。」

という。なので私は

「じゃあ私も、なのはでいいです。龍さん。」

と言う。すると

「分かりました。なのは殿。」

と言う。まあ、どっちもどっちだと思い

「それでいいです。それと目的は大体分かつてます。久しぶりに会いたかつたのと私の顔を見たかつたのでしょう？それに、他の幻想郷の方達にも会わせたいのでしょうか？」

と聞く。すると

「そうです。申し訳ありません。何しろ数百、数千年も前のことですのです。」

と謝った。しかし私は

「気にしなくていいです。それよりも、幻想郷を見て回りたいのですが、よろしいですか？」

と頼み込む、するとグラギオスとアイデが私を援護するかのように

「そつだな。我もこの地の事を良く知らないのでな。一度見ておくのも悪くなかろう。」

「そつだね。」

と言つのだった。龍も、そう言われたらそつする氣だつたらしく、直ぐに

「分かりました。では紫にもそつ伝えといでください。」

と返事をしてくれたのだった。こうして、私達は龍と別れて、紫さんと合流した。その後は、幻想郷の各勢力に行き、挨拶などをし回つた。そして、私は色々な能力を手に入れることに成功するのであつた。因みに、各勢力を人達（人じゃないけど）と会いに行つた時に、かつて吸血鬼となつた、ユニゾン姉妹のオリジナルともいえるスカーレット姉妹に会つた。紫さんの記憶から性格が違つてゐるはしてはいたが、やはり戸惑つてしまつものがあつた。因みに、スカーレット姉妹に戦いも挑まれたが、速攻で倒した。とは言つても氣絶させただけだ。それと、いつたん家に戻り、ユニゾン姉妹と会わせてみた。すると、本物のレミリアの方は、レミア（これからはレミア・スカーレンと名乗る事にしたユニゾン・レミリア）と戦い挑んだり、本物のフランヒルーラ（これからはルーラ・スカーレンと名乗る事にしたユニゾン・フラン。）は結構仲良しになつてゐた。そんなこんなで、色々な妖怪や人外更には、人間達（靈夢にもあつて、その時に、小銭を費錢箱に入れたらお茶をもてなされ、もしこれからも来るんなら、できれば入れて欲しいと言われた。それを聞いた私は、この人、どれだけお金に困つてゐんだろうと思ひ、涙ぐんでしまつた。）に会つた。そして、私は、その中の上白沢慧音の能力である歴史を食べる程度の能力（人間時）と、歴史を作る程度の能力（妖怪時）に注目した。何を考えているのかと言つと、ギル・グレアムの事である。彼は、部下を失くしたせいで復讐の道に走つたならば、その部下の死を何とかすればいいと思つたのである。それを実行するために、私達は、紫さんに家に帰ると言つと、隙間で自宅へ帰つていつた。そして、私はグレアムに接触するために、2

匹の記憶の内容を思い出す。これにより、今の時間帯、ギル・グレアムが何をしているかが予想できるからだ。因みに、今の時間帯は2時半を回っている。幻想郷にいたのが午前からだから結構な時間が経っている。ついでに、昼食は向こうで済ましてきた事と家族には隙間を使って、知らせた事も追記しておく。

その内容を思い出した。それが今日も同じなら、今は彼専用の執務室で書類仕事を行っている可能性が高いと推論づけた。後は、実行するのみである。という事で、私は再び隙間に入りつて、管理局の本局にあるグレアムの執務室へ向かうのだった。

視点終了

場所：本局・グレアムの執務室
視点：ギル・グレアム提督

私は、いつものように業務をこなしていた。しかし、頭の中にあるのは、闇の書に対する復讐心と、偶然にもその闇の書の主となってしまった少女、八神はやての事だ。彼女は確かに悪くない。だが、私は凍結の杖【デュランダル】で闇の書ともども封印しなければならない。

その為に、彼女に少しでも言い思いをしてもらおうと、彼女の両親の知り合いと偽り、支援をしているのだ。偽善なのは自分でも分かっている。しかし、いまさら引けないし、あれを完全に封印するには今しかないのだ。そして、それの妨げになろうとしている存在を、私の使い魔であるリーゼ姉妹から、報告を受けた。その1人に、何故か聖王家の血筋の子供がいるという。そのことに対しても対策を練らないとならない。なぜ、聖王家の血筋が私の故郷でもある地球にいるのかは分からぬ。しかし、かなりの脅威となるのは間違

いないと言っていたのを思い出す。そして、聖王達の対策も考へていると、噂をすれば影というべきだらうか、その聖王の血筋の子供が、私の執務室に、魔法を使わずに現れた。しかも、その現れ方は、赤くて、周りには目が無数にあるような空間から現れたのだった。

そして、聖王家の少女が口を開く。

「始めてまして、ギル・グレアム提督。私は、高町なのはといいます。聖王家の人間です。私いえ、私達の事は既にリーゼロッテ姉妹から聞き及んでいると思います。」

と言う。私は、その高町なのはという少女の言動に可笑しなことを見つけた。それは、私の名前をしている事とあの2匹の名前知っているということだ。あの2匹の報告では、私や自分の名前を出していないというし、私自身もそれはありえないと確信している。なので、そのことを聞こうとした時

「ああ、それはですね。リーゼ姉妹の頭の中を覗いたからなんですよ。」

となのはという少女が言つてきた。私は今の頭の思考を読まれた事や2匹の思考や、私の思考を読まれたことに驚いた。そして

「それで、聖王である貴女が何故こんな所にいるのです？」

となのはという少女に聞いた。すると驚くべき返答が帰つて来た。それは

「それはですね。交渉をする為なんですよ。」

と言つてきた。私はそれに、啞然とした。そして

「い、交渉って何をするんだい？」

と言つのが精一杯だつた。いかんな、相手のペースに乗せられてると思いつつも、その交渉の内容を聞いてみる事にする。まあ、彼女の事だからとんでもない内容だらう、と内心決め付けてしまつた。そしてその決め付けは正解であることを彼女から口に出される。それは

「私の事だからとんでもない内容つて酷いですね。まあ、合つてますけど。」

と言い、続けて内容を言つ彼女、その内容は、やはりとんでもないものであった。それは

「交渉の内容は、はやての監視や闇の書への復讐を諦める代わりに、貴方の部下であった、クライド・ハラオウンの死を、なかつた事にしましょ。」

と、有り得ないことを言つのであった。そして、それを聞いた私は、しばらく言葉を発することが出来なかつた。

それから数分後、私は思考を復活させてから

「ば、バカな！…そんな事、出来る筈がない。」

と言つ。しかし、彼女は自信を持つて言つ。

「出来ます。ただし、此処では不味いので、地球での貴方の家に連れて行つてください。そこでやりますから。ああ、そんなに時間取らないですし、移動手段もこれがあるので心配ないですよ。いざとなれば時間操作もできますから。」

とのははという少女は、赤い空間を指して言つ。しかも、その時いまさらにとんでもない事を口にしなかつた？と思いつつも、気にしたら負けと考えるのであった。そして、彼女が赤い空間に入る。更に、私の下にも彼女が展開したのと同じ

空間が出てきて、私はその中へ落ちるのであった。

視点終了

なのははが、グレアムを無理やり隙間空間に連れてきて、10分後。なのははとグレアムは、地球のイギリスにある、グレアム邸に着いた。そして、なのはは直ぐに、上白沢慧音の能力である、歴史を食べる程度の能力と、歴史を作る程度の能力を使い、表向きではクライドは、アルカンシェルで自身の艦と共に散つたとし、裏では、その時の影響で、5分後にグレアム邸に来る歴史を改変した。

そして、それから5分後が経過した。

そうすると、設定通りにクライド・ハラオウンが現れたのだった。
ズドーン

という音と共に。

クライドがグレアム低に来た後、なのはは自己紹介をしてからグレアムと共に現状を説明した。それからなのはは更に管理局の裏の部分を、証拠を見せながら説明した。その時に、ジエイルに頼んで調べてもらった結果、闇の書もとい夜天の書も、管理局が創設時に信頼を獲る為に悪改したという事も話した。それらを話したなのはは更に

「その為には、まともな人材を必要としています。どうか私に力を貸して貰えませんか？」

と2人に頭を下げて言つのであった。結果は2人ともOKだった。因みに、なのはは、一度グレアムを本局の執務室に戻して、自身はその事を皆に報告する為に地球へと帰るのであった。

グレアムの方も自身の使い魔に、クライドがなのはによつて復活した事、なのはの計画を話した。こうして、リーゼ姉妹も、主が賛成ならとなのはの計画に乗るのであった。

しかし、なのは達は知らない。管理局を利用して、あることをしようとしている存在がいる事、そしてその存在は着実にそれを実行しつつある事を。

その夜、あるビルの頂上に1人の黒いデバイスに黒衣にマントを羽織った金髪で紅の瞳を、悲しみの色に染めた少女と狼がいた。その少女は

「 捜索対象、21個のロストロギア、名称【ジュエルシード】。早く見つけ出さないとね。」

と言つと、金色のデバイスコアは光り、狼は

「 ワオ————ン！！」

と返事をするかのように吠えるのだった。

無印編4話「幻想郷と交渉、そして・・・黒い影」（後書き）

フェイトを最後にフェイトを出しました。そして次はサッカーです。ただし、その時のジユエルシードは、既に回収しているので登場しません。そして、夜天の書の破損状況も分かります。因みに、次のジユエルシードは、正に灯台もと暗しともいうべき場所に有ります。そう、原作で、なのはとフェイトが出会ったあの場所です。

なのはがグレアムの執務室から帰還して、1日が経過していた。この日、なのはは午前に父親が監督をする少年サッカーチーム【翠屋JFC】の応援に行き、午後ははやてと図書館前で待ち合わせして、闇の書の状態を見るために、はやての家に行く予定であった。しかし、なのはとユーノは午前でのサッカーは応援ではなくなってしまった。なぜなら、チームの2人が病気と怪我で欠席になってしまった。そこで、士郎はなのはとユーノに

「代わりにサッカーをやってくれないか?」

と頼み、2人はそれに頷き、参加する事となつたのだ。

結果は、12対0という翠屋JFCの圧倒的勝利で決まるのであった。因みに、ユーノはなのはから格闘戦を習つており、基礎体力もやつてるので運動能力も上がつている。ルールについては、覚えが良かつたので士郎が教えただけでほぼ聞いた事は一度で覚えてしまつた。その事を一緒に住んでいる時にその才能を見つけたからこそユーノに頼んだのだ。なのはについてはもはや語るまでも無いであろう。その後、翠屋でなのは、スカーレン姉妹(元ユニゾン姉妹)、ユーノ、アイデ、アリサ、すずかのメンバーで、昼食を食べ、その後のデザートのケーキとお茶を楽しんでいた。そして、そろそろはやてとの約束の時間が近づくと、ユーノはそのまま翠屋の手伝いに入り、アリサは家の都合で来れなくなつたので家に帰つた。そしてなのは、すずか、アイデ、スカーレン姉妹だけで待ち合わせ場所である図書館に行く事になつた。

その数十分後、図書館に着いたなのは達ははやてと会流し、はやてが住んでいる家に、彼女の案内で向かつていつた。

場所：はやての家
視点：なのは

はやての家に着いた私達は、変わった本が無いかと聞いた。すると「あるよ。私が少し前に見つかった本なんやけどな。本の名前が無いんよ。」

と答えてから、机にある一冊の本を持ってきた。そして、はやはては「これなんよ。なのはちゃん達はこれが何か分かる?」

と言つ。その本を見たアイデ、そしてスカーレン姉妹は

「「「これは・・・夜天の書!?!?」」

と驚いた。私は知つてたから驚かなかつたけど。それを聞いたはやはては

「何や、知つてるんか?」

と聞いた。そこで私は

「うん、私もアイデもスカーレン姉妹も知つてるよ。そして、訂正があるんだよ。確かにこれは夜天の書だよ。だけどこの魔導書、管理局によつて悪改されて闇の書つて名前になつてるよ。」

と真実を言つ。すると

「「「また管理局!?」」

とアイデとスカーレン姉妹はまた驚いたのであつた。しかし、状況のつかめていないはやはては

「どういうことや? 魔導書やら管理局やら可笑しな単語が出てきてるんやけど。私にはわからへん。出来れば説明して。」

と言つて来た。まあ、そうだろつねと思つていると、すずかが

「魔導書つて言つのは魔法が載つている本のことで、デバイスつて言つのは魔法の補助具だよ。管理局つて言つのは、正式名が时空管理局と言つて、簡単に言えば治安組織なんだよ。」

と説明する。

「けど、なんでその管理局が悪改する必要があるん? 治安組織なんやろ? それにそんな組織、聞いた事も無いんやけど。」

と困つた顔をしながら言つ。まあ、そこまで聞いていたら当然の反応だらうなと思いつつも、今度は私が答える。

「聞いた事が無いのは当然だよ。異世界の組織だもん。」

その答えにはやは

「い、異世界やて！！」

と驚く。そして、更に私は続ける。

「うん、ミッドチルダって言うね。他にも有名なのがあって、既に滅んだベルカという世界やアルハザード、それにラ・ギアスがかつたんだけどね。現在でも色々な世界があるよ。因みに、この夜天の書はベルカ聖王家に仕えていた小国の王の物だつたんだけどね。300年前は間違いなく正常に動いてたよ。」

と私が説明し、レミアも

「そうよね。300年前はまともな魔導書だつたものね。」

と過去を振り返りながら言う。それに続き

「そうだよね。いつ管理局の連中が悪改したかどうか分からぬもんね。」

ヒルーラが言う。それに対しわたしは

「それなんだけど、ジェイル博士に調べてもうつて分かつたんだけど、100年ぐらい前らしいよ。その当時、管理局は信用が無かつたから信用や権力を得るために、ロストロゴニアを悪改したり、犯罪者を自ら作つたりして信用を得たらしいよ。だけど、その改悪のせいで転生機能や防衛プログラムとかが壊れて無理にアクセスしようとすると主を取り込んで転生したり、封印したとしても防衛プログラムが暴走して転生するから、管理局は手が付けられない状態なんだよ。まあ、私なら修復できるからね。」

と答え。自分なら修復できると言つた。それに心当たりがあるレミアが

「ああ、そつか。なのはにはあれがあるもんね。」

と言い、私も正解だとばかりに

「そうこうこと。（コクン）」

と頷いて言う。そこで今まで置いてきぼりにされていたはやは「あの～、何のことか分からないんやけど、あれって何や？どうし

てのははちゃんやアイデちゃん、それにレニアちゃん、ルーラちゃん
んが何で300年前の事なのに詳しいん？それにまるで、300年
前からいるような口ぶりやつたけど。どうこう」と何や？

と聞いてくる。まあ、気になつて当然だよねと思いつつ

「あれつて言つのは、時間操る事なんだよ。それに私はベルカ聖
王家の血を引いていて、更にその300年前の聖王であるオリヴィ
エつて人の生まれ変わりで記憶も持つてるんだよ。」

と私は言つ。それに続き

「私達は、ユニゾンデバイスつて言つ特殊で希少なデバイスなんだ
よ。500年くらい生きてるよ。」

ヒルーラが説明した。そして、はやてが最も驚くであらう経験を持
つアイデは

「私は、数千年以上前から存在していて、元々この夜天の書は私が
管制している魔導書である神の書の一部を、一機のデバイスにして
出来た物なんだよ。つまりこの魔導書は、私の娘同然なんだよ。大
切にしてあげてね。」

と言つ。それ聞いたはやは驚きつつも事態を重く受け止めたのか
「分かつた。アイデちゃんの想い、確かに受け取つたで。」

と頷きながら言つはやてでだつた。それから更に

「それにも、時間を操れるなんて、なのはちゃんはすごいな。
確かにこれなら、300年前の正常な状態に戻しせるな。」

とはやは続ける。それを聞いた私は

「うん、そうだね。それと、他にもあるよ。心読んだり、ロストロ
ギアの情報が分かつたり、破損状況が分かつたりね。」

と言つ。そこからさつきまで話しに入つてこなかつたすずかが

「じゃあ、なのはちゃん。今から夜天の書の解析と破損状況確認で
きるの？」

と聞いてくる。それに対し、私は

「もうやつたよ。結果は・・・破損が奥まで進んでたよ。はやての
足が不自由なのもそのせいもあるんだよ。」

と答える。それを聞いたすずかは

「じゃあ、今から直すの？」

と聞くが

「残念だけど、暴走してる部分を切り離してからじゃないとどんな影響が出るか分からないよ。因みに、切り離すには管理者権限って言うのが必要で、夜天の書を完成させてからじゃないと使用できないんだよ。ただ、その完成方法がまともじゃなくてね。他人の魔力を奪う事によつてページが埋まる仕組みになつてるんだよ。つまり、他人に迷惑掛けるつて事だね。」

と答える。すると5人同時に

「――――――なつ――――」

と驚く。そして、

「そんなこと出来る訳あらへん――」

とはやはては言つ。まあ、はやはてはやさしいもんねと思いつつ

「だけど、一つだけ人様に迷惑を掛けないで済ませる方法があるよ。」

と言つ。それに食いつくはやはては

「ど、どひしたら良いん？」

と聞く。それを答える為に私はエルを起動させ、ある物を取り出して「これの魔力を使うんだよ。」

と言つ。その物を知つている4人は一斉に

「――――ジユエルシード――？」

と驚いた声で言つのであつた。はやはてはこれが何か分からないので「これを使うと迷惑をかけんですか？」

と言つ。私はそれに頷き

「うん。ただ、これはもう魔力を抜いてるから空っぽだよ。後で管理局に渡すつもりだから。それに、まだ第1覚醒もしてないから、覚醒してからね。」

と言つ。そして、そこでルーラが

「たしか、第1覚醒つて、守護騎士が出るんだつけ？」

と第1覚醒について聞いてくる。私はまずルーラの方を向いて
「うん。そうだよ。だからはやて、覚醒する時にかなり驚きことが
起ころるから、気を確かに持つんだよ？」

と途中ではやての方を向いて言った。その後、私達はロストロギア
についてや守護騎士についての事、どうして管理局にジュエルシー
ドを渡すのかをなどの説明をし、それらが終わると、雑談をしてか
ら帰つていった。そして、それらの内容はアリサや兄さん達に伝え
すすかの方も忍さんやさくらさんに伝えたようだ。その後の私は、
いつも通りに鍛錬をしてから夕食をとり、お風呂に入つて寝るので
あつた。

視点終了

それから6日が経ち、残りのジュエルシードは7個となつていた。
原作よりも早くこんなに集められたのは、なのは以外に手伝つた人
間がいたというのがあるのは勿論の事だが、それ以外にもなのはの
頑張りが大きかつた。この一週間の間に4個のジュエルシードを確
保していたのだ。そして、それらのジュエルシードの魔力を奪い取
る。そうする事によつて、例え、管理局に渡したとしても、利用す
る価値が無くなるからである。勿論、それ以外にも目的がある。そ
れは、6日前になのはがはやてに言つたように、闇の書の覚醒に使
うのである。その事は、なのはがはやてに話しているので、後は第
1の覚醒を待つだけとなつていた。そんなこんなで、今日は月村邸
に行く予定があつた。ジュエルシード捜索の会議の為である。参加
したのは、なのは、恭也、さくら、忍、咲夜、アリサ、すずか、ア
イデ、スカーレン姉妹の7人+3機である。その会議の結果、何個
かは海にあるのではないかと言つ話になつた。そしてどうやって海
中にあるあるうジュエルシードをどうやって探すかと言つ議題名
になつたが、それは直ぐに片付くことになる。なぜなら、さくらの
能力を使えばいいと言う事になつたのだ。さくらは、水の精靈だ。
つまり、海の中にも入れるのではないかと言つ結論になつた。他に

も、ジュエルシードを暴走させてから封印すると言う案も出たのだが、それだと管理局に減らない茶門付けられる可能性があるので、その案はなしだと言う事になり、先ほどのさくらが海に入ると宣言が、さくら自身の口によつて出たのだ。そんなこんなで会議を進めていると、結構近い所、それも月村家の敷地内にジュエルシードの反応が出た。しかし、どういうことなのか、その反応には暴走の類ではなく、純粹に願いを叶えられたような反応であつた。それをいち早く感じ取つたのは、一人で行くと言い月村邸を飛び出した。その時には、AAAクラスの力を持った人間が近づいた事を感じ取つたので、急いで封印して、そちらに向かおうと思った。その後のなのはの判断は素早く、幻想郷にいる天狗、射命丸 文以上の速度で、ジュエルシードの元へと向かつていつた。

場所：月村家の敷地内

視点：なのは

私は、ジュエルシードの発動して所へ着いた。するとそこには、大型化した猫がいた。それを見た私は、大きくなりたいと願つた結果、望み通りに成つたと推測しつつ、可哀想ではあつたが、いつも通りに封印機能付きの砲撃を放ち、猫を元の大きさに戻し、ジュエルシードも回収した。そして、魔力をぬいてから、侵入者の方へと向かつていつた。

視点終了

場所：月村家の敷地内

視点：金髪紅眼の少女

私は今、母さんの命令で、ジュエルシードを探している。しかし、そのジュエルシードの反応を、見つけたのは良かつた物の、誰かに封印されたようでその反応がなくなつていた。すると、そのジュエルシードを封印して回収したと思われる魔力反応が、超高速でこちらにやってくるのを感じ取れた。私は好都合だと思いつつも、出来

れば争いたくないと思つてしまつた。なぜなら、その魔力反応が、とんでもない大きいのだ。少なくとも母さん以上である事は、遠くに離れていても分かつてしまつた。つまりそれは、私に勝機がないと同じことだつた。だけど、母さんの為に引くわけにはいかない。なので、私は譲つてもらつ交渉しようと思つた。そして、そんな事を思つていると、急にその強大な力を持つ人が現れた。その姿を見て私は愕然としてしまつた。なぜなら、見た目は私と同じぐらいに見えるのにその存在感、強さはとんでもないものだつた。そして、私は悟つてしまつた。この子は人間、それも少女の形をした化け物だと。だけど、母さんの為にジュエルシードを渡してもらつよう而言おつとしたその時

「ふうん、母親のためにね～。」

と少女の姿をした化け物は私を見てこういった。私は

「えつ！……（どうして？私は何口にしてないはずなの！）」

と驚き、思い口にしようとした瞬間

「それはね。貴女の頭の中を覗き込んだから。それと化け物つてひどくない？確かに私は人間じゃないけどそんな言い草は無いんじやない？」

と私の思考に対する答えを言い、更に、彼女は自分は化け物じゃないと言い張つた。だけど、今はそんな事を気にしてる場合じやない。ジュエルシードを確保しないと思い、彼女に

「そう。そこまで分かつてゐるのなら、さつき封印したジュエルシードを渡して。」

と言つ。しかし少女は

「ん～、どうせ、意味ないと思つよ？だつてこれ、もう魔力ないし。」

と言つ。そして

「貴女は母親の願いを叶えたいんだよね？多分だけど、私ならジュエルシードが無くとも叶えられるかもしね。私の予想通りならね。」

と言つてきた。しかし、いまだ信じられない私は「貴女の言つてる事は、まだ信じられない私は

い。」

と言つ。それも予想の範疇だつたのか、彼女は「うん。多分だけど、貴女の母親であるプレシア・テッサロッサさんは、実の娘であるアリシア・テッサロッサが死んで、その代わりを造ろうとした。それが貴女だと私は推測した。だけど、貴女がアリシアとは全くの別人だつた。だからプレシアさんは発狂してしまひ、ジュエルシードで何らかの方法で蘇らせようとした。だけど、その必要は私の能力で無いと分かるだろうね。」

と言つ。私はそれを聞いて

（たしかにそれだと私にきつくなうことの説明はつく。だけど、それでなんで目の前の子は叶えられるなんて言つたの？まるで死者を生き返らせることが出来るつていてるようになあか聞こえないんだけど、つてことはこの子の能力は人を蘇らせる力があるとでもいうの？）

と思つていると

「そうだよ。ただし、灰になつてたりしてたら出来ないけどね。だから、形が残つているのかは賭けになるかな。」

また読まれた。そして、とんでもない事を聞いてしまつた。そして、少女は続けて

「ねえ、貴女も一緒について来てくれない？もしかしたら貴女も必要になるかもしれないから。」

と言つ。それを聞いた私は考へてしまつ。だけど、次の彼女の言葉で私は頷いてしまう事になる。

「もしかしたら、貴女にも優しくしてくれるかもしれないし、お母さんだつて笑つてくれるようになるかもしれないよ？勿論、私もそれに協力するよ。貴女がこの案に頷けばね。」

と言つ甘い言葉に私は

「分かった。（口クン）」

と頷いてしまった。そして、彼女は

「あっ！！そうそつ自己紹介がまだだつたね？私は高町なのは。なのはって呼んでね。フェイト、貴女は？」

と名乗り、知つているのにもかかわらず、名前を聞いて来た。私はそんな彼女の考えが理解できず

「言う必要があるの？さつき私の名前呼んだのに。」

と聞く。すると彼女は

「やつぱりこういうのは本人から言つてくれた方がいいよ。」

と言つて来た。私は彼女の眼差しを見て、本気なんだと感じた。な

ので

「フェイト・テッサロッサ。」

と名乗つてしまつた。その後、私は彼女が開いたと思われる赤くて不気味な目が沢山の空間に落ちていつた。その時に思つたのは、こんな事まで出来るこの子、なのはなら母さんの願いを叶えてくれるかもしれないと思つた。

視点終了

次はフレシアの病気を治し、アリシアも復活させます。それからカリム達を出します。クライドは名前を変えて働く事になります。ヒントはなのはが生まれる前に土郎がやっていた事です。

場所：月村家の敷地内

視点：なのは

私は侵入者である少女のいる所についた。侵入して来た理由は、多分聞いても答えないだろうと判断し、罪悪感はあったが勝手に頭の中を見せてもらつた。すると、母親に命令されてジュエルシードを探してここにやつてきたこと、虐待を受けている事が分かつた。しかし、1番気になつたのはアリシアと名前であつた。記憶の中の彼女は、アリシアと呼ばれ、母親に可愛がられていた。しかし、その記憶が途切れると次に映し出されるのは、リニスという母親の優しい使い魔と狂つた様子の母親の姿だつた。そして、その時の母親は彼女をフェイトと呼び、虐待をしていた。私はそれを見て確信してしまつた。目の前にいる少女、フェイトはクローンとして生み出された存在で、その目的は自身の娘であるアリシアの代わりする、もしくは代わりの肉体にと思っていたのである。だからアリシアの記憶をフェイトに与えた。けれど、フェイトはアリシアの変わりになリえなかつた。だから発狂し、彼女を虐待しているのだと思つた。しかし、目の前のフェイトという少女は虐待されながらもジュエルシードがあれば昔のように笑つてくれる、愛してくれると思つてゐるのだ。偽りの記憶だとも気づかずに。けれども今の状態だとそれは絶対に叶えられる事は無いと思つた。なぜなら、彼女の母親であるプレシア・テッサロッサはフェイトを見捨てる気だと気がついてしまつたからだ。なので私は、アリシアを復活させた上で、フェイトも笑つていられる道を探し、それを導き出した。そして、それを実行するためにフェイトの力が必要になるかもと言い、協力を求めた。その時に、母親の願いを叶えた上で自分の願いも叶うかもと言ふ私の言葉にフェイトは頷いた。その後、私達は自己紹介をした。

まあ、フェイトには無理やり名乗らせたけど……。その後、フェイトと一緒に時の庭園まで隙間で行くことにし、フェイトを強引ではあるが、隙間へと落とした。そして、フェイトの一言田は

「ねえ……君。」

だつた。だから名前で呼んでつていったのにと思いつつも「ん、なに? フェイト。けど、君じゃなくてなのはつて呼んで欲しいな。」

と言つた。そして

「じゃ、じゃあ。なのは、此処は何処で何処に向かつてるの?」と聞いてくる。それに分かる所だけを答える。

「此処は隙間と言と言うんだけど私にも良くわかんない。でも、虚数空間みたいなものだと思えばいいかもね。」

と言つ。すると

「虚数空間!! それってかなり危険なんじゃ……。」

と驚いていつるが安心させるために

「私から離れなければ大丈夫だよ。」

と言い、続けて

「それに、この能力を持つてゐる存在はもう1体いるよ。ああ、そういえば私は人じやないって言つたけど、種族とかわかんないよね? それ

から、もう1体の種族も。」

と言つと、フェイトは驚きながらもコクンと頷いた。

「じゃあ言つね。私の種族は……。」

と間をおぐ。

「なのはの種族は……。」

その言葉を復唱するフェイト。そして

「神です。」

と言つた。フェイトは、それを聞いた瞬間、私を見ながら田を点にしてしまつた。そして

「……は? はあ~~~~~!」

と素つ頓狂な声をあげるのだった。まあそういうれば誰だつてそういうよね。と思いつつも

「からかってるわけでも、嘘ついてるわけでもないからね。正真正銘の神なんだよ。元人間のね。まあ、どうして神になつたのかは秘密に

させてもううけど。それから、もう1体は妖怪です。それも神に近いね。」

と言つた。そして時の庭園に着いた。そして、それをフェイトに知らせるために

「さて、着いたよ。」

と言つた。フェイトも外の場所を確認し

「うん、間違いないよ。家だ。」

と言つた。私はフェイトに

「じゃあ、フレシア・テッサロッサの所に行くなび。フェイト、覚悟は出来る?」

と聞く。すると、即答で迷いの無い声で

「うん。」

と頷くフェイトだった。それを見て頷いた。そして

「そう、じゃあ行こうか。」

と言つと私とフェイトは隙間を出るのだった。

視点終了

場所：時の庭園

視点：フレシア・テッサロッサ

フェイトに、ジュエルシードを探すように命令して数日まだあの子は帰つてこない。

「遅いわ！あの子は何をしているの……」今は時間が無いのに。

・・「ホゴホ

と独り言を言つてゐる時に血を出してしまつた。

そこに謎の空間が現れ、そこから見知らぬ只者じやなをやうな少女とフロイトが出てきた。そしてフロイトは

「母さん！大丈夫？」

と近寄つてくる。しかしそんな事よりも

「それよりもフロイト、ジュエルシードは取つて来たの？」

と語つと、フロイトは立ち止まり

「この子が持つてます。」

と見知らぬ少女の方を見て言つ。そして

「ですがこの子、なのはによつてジュエルシードの魔力を取られて使えません。」

それを聞いた瞬間、私は頭が真つ白になりそうになりながらも「な、どういうこと？直ちに魔力を戻しなさい！……」

と怒鳴る。しかし少女は

「それは出来ません。その代わり、貴女の願いであるアリシア・テッサロッサの蘇生を行いましょう。ただし、条件付ですが……。」

と言つて来た。なので私は

「出来るの？つて言つようじうして私の最終目的が分かつたのかしら？フロイトにも言つてないのに。」

と聞いた。その答えは

「はいできます。どうして分かつたかと言つと……貴女とフロイトの頭の中を見たからです。」

だつた。それを聞いた私は

「なつ……」

と声を上げて驚いた。そして今度は少女ではなくフロイトが

「本当ですよ、母さん。それと聞きたいことがあるんですけど。」

と言つ。その聞きたいこととやらに少しではあるが興味を持った私は「なにかしら？フロイト」

と言つ。そして

「私がクローンって本当?母さん。」

と聞いて来た。それを私は

「それこの子が言ったの? フェイト?」

と聞く。すると

「はい。」

と肯定の返事が返ってきた。そう、じゃあ彼女が言つてゐる事は本当みたいねと思つた。

「そうよ、その通りよ。貴女は私がアリシアの代わりに造つた。だけど、貴女はアリシアになりえなかつた。ただ、見た目だけそつくりの紛い物だつた。」

そこまで言つと、フェイトからではなく少女から返事が返つてきた。「そうですね。確かにフェイトはアリシアには成りえません。でもそれで良いぢやないですか? アリシアの願いが叶つたですか?」

と言つ。私は、アリシアの願いとはどういうことと思つ

「どうこのこと? アリシアの願いが叶つたつて。」

と少女に聞く。すると少女は呆れた顔をして

「はあ、忘れてゐるみたいですね。アリシアは生前言ひませんでしたか? 誕生日には妹が欲しいつて。」

と言つてきた。

「――――――」

それを聴いた瞬間、私は驚きつゝも、忘れていた記憶を引っ張り出だそうとしていた。

「ですから、フェイトを酷い仕打ちをするといつ事は、アリシアの妹に酷い仕打ちをする事という事なるんです。そして、そんな事をアリシアが望むとでも思つてゐるんですか!?」

と止めの言葉が来た。

「――――」

確かにそうだつた。確かにあの時、アリシアはそう言つていた。それを私はアリシアが死んだ事によつて記憶の奥底に閉じ込めてしまつた。そして、今更ながら、自分のして來た過ちを気がいた。そし

て私は泣きながらフェイトにすがり付いて

「私は、私はなんて事を…？…ごめんなさい…ごめんなさい…！」

「フェイト。私は…？…！」

と謝った。そしてその途中でフェイトは私を抱きしめて

「もう良いよ、母さん。それにアリシア姉さんももう直ぐ蘇るんだよ？」

と言つてくれる。それを聴いた瞬間、こんな良い娘に私はなんという事をと思いながらも

「本当にごめんなさい、フェイト。そうよね。もう直ぐで生き返るのよね。」

ともう一度謝り、頷いてそう言つた。そこへ

「もうそろそろアリシアの遺体を持って来てくれませんか？それに貴女の体、もう持たないでしょ？一緒に直すと言つた健康な状態に戻してあげますよ。」

「そんな事まで出来るの？それに条件が必要だつて。」

「はい。と言つよつは生き返るというより死ぬ前や病氣になる前に戻すと言つた方が正しいです。私の能力の1つに時間操作があります。その能力を使う予定ですから。勿論、貴女も若返りますよ、プレシアさん。本当はもう一つあるんですが、そっちの方が良いでしょ？それにその条件はもう満たしましたからいいですよ。」

その言葉を聞いた時、私はまたあの子とそして、今度はその妹と長い間過ごせるのだと想い涙し

「ええ、そちらでお願いしできる？」

と言つた。そして

「分かりました。それでは手術室の方に遺体を持ってきてください。

」

と少女がそう言つた後にフェイトを呼ぶ

「それとフェイト？」

「なに？なのは」

とフェイトは返事をする。少女はこう言つた。

「今から、アリシアの記憶を戻すから手伝ってくれる?」

「つと、それを聞いた瞬間、私も

「フェイト、私からもお願い。今さら私にそんな事が言える資格が無いのは分かってるわ。だけどお願い、フェイト!…」「と頭を下げてフェイトに頬み込んだ。

「分かってるよ、母さん。その為に来たんだから。」

と言つ。本当に優しくて良い娘だなと思いつつ、私はフェイトに手術室の少女の案内を頼み、その間に私は急いでアリシアの元に向かうのだった。

視点終了

その後、フェイトはアリシアの記憶を返し、アリシアはなのはの能力で死ぬ前に戻つた。そして不治の病に蝕まれていたプレシアもなのはの能力でアリシア共々病気になる前へと戻るのだった。勿論、プレシアがその時に若返つたのは言うまでも無い。

そして、なのはは家族の邪魔しないために、その時にフェイトのデバイス【バルディッシュ】に連絡先を渡し、更に伝言を頼んでから、生き返つたアリシアとフェイト、それにプレシアを置いて地球へと帰還していった。

時の庭園から戻つたなのはは、イギリスでクライドと合流し、クリステラ邸へと来ていた。なぜ、そんな所にいるかというと、クライドはミッドでは死んだ事になつてゐるし、この世界での戸籍が存在しない。それによつて働いてお金を稼ぐ事が出来ない。グレアムはずつと此処に居れば良いと言つていたが、それだとクライドは気が住まないので住む所とお金を稼ぐ場所を探していたのだ。そんな時、なのはからかなり危険だけど、良い住み込みの仕事があると聞き、なのはと一緒にその住み込みの働き先に成るであろう場所に向かうのであつた。

場所：クリステラ邸

視点：クライド

なのはちゃんから危険だけど信頼できる良い住み込みの仕事があると聞いて、なのはちゃんと共にその雇い主になるであろう方の屋敷に来ていた。ドアが開くと3人の親子が出てきて、その中の少女が「なのは！！久しぶり！！！」

となのはちゃんに抱きつきながら挨拶をした。それに対し、なのはちゃんも

「フィアッセさん！！お久しぶりです。」

と挨拶で返す。その光景はまるで中の良い姉妹のようであった。それには継ぎ

「久しぶりだね、なのはちゃん。」

「久しぶりね、なのは。」

と夫妻がなのはちゃんに挨拶をする。それもどこか自分の子供か孫を見てているかのような眼差しで言った。それに対し、やはりなのはちゃんも

「はい、お久しぶりです。ティオレさん、アルバートさん。」

とフーアッセといつ少女に抱きつかれたまま挨拶をした。どうやらかなり仲が良いようだ。

「本当にね。前に会った時はまだ小さかったからね。」

などと昔話をし始めた。そして、クリステラ親子は私の方を向き、アルバートさんという方が

「で、この方がなのが言つていた方？」
と言つ。それをなのはちゃんが

「はい。」

頷いて返事をする。そこで私は

「始めてまして、ミスター・クリステラ、ミセス・クリステラ、ミス・クリステラ。私はクライド・ハラオウンと申します。」

と自己紹介をした。その後は、仕事や給与、それに住む場所について話した結果、護衛が主な仕事で普通はクリステラ邸で住む事になった。

それと、この世界での戸席もアルバートさんの力によつて造つて貰うことになった。仕事である護衛は、管理局でもやつていていた事だったので知識はあつたが、それは魔法世界での話で、こちらでは質量兵器しか存在しない為、こちらの武器について学ぶ事や対抗策等も学ぶ必要があつた。それをなのはちゃんが暇な時にそれらに対する知識を教えてくれるという。それと魔法だけではこの世界では生き残れないでの、武術を習う事となつた。私も一応は武術は習つてはいたが、それはあくまでも魔法の補助的なものとしか考えていないかった。だが、この世界だと立場が逆転して、魔法が補助になるのだ。それもなのはちゃんが教えてくれるという。大人としては何とも情けない物だつたが、なのはちゃんはこの世界でも最強クラスの武人である父親ですら勝てないほどの武を持っているという。そこでなのはちゃんと弟子入りする事を決意し、翌日から基礎体力をつける為のメニューを、なのはちゃんの指導の下、受ける事となつた。視点終了

一方その頃、ミッドチルダのベルカ自治区にある聖王教会では、2人の少女と1人の少年が集まつていた。そして

「それで、意見を聞きたいというのはどういうことだい？カリム」と緑髪で長髪の少年、ヴェロッサ・アコース がカリムという金髪の少女に聞く。すると

「そうですね、確かに聞きたいですね。一体何があつたんです？」

とピンク髪のショートヘアの少女、シャツハ・ヌエラも続いてカリムという少女に聞く。すると

「それはですね。私の予言紙に厄介な予言が書かれているのです。」

「なんだつて（ですつて）！」

「なんだつて（ですつて）！」

と驚く2人にカリムは

「これを見てください。」

と言い、予言の書いてある紙を2人に見せた。その紙にはこう書かれてあつた。

死せる王の血を引く者と旧き結晶と無限の欲望と機械仕掛けの人形と精靈が集い交わる地、死せる王の血を持つ者の下、聖地より彼の翼が新たな力を得て蘇る。

人達や人形達や精靈達は踊り、闇に染まりし法の塔は焼け落ち、それと同時に闇に染まりし数多の法の

船も碎け散る。それを先駆けに、それらを利用して大いなる闇も滅び去る。

「というのが予言の内容ですね。」

と語りとシャツハは

「まさか、これを教会には教えたんですか？」

と聞いた。その答えは

「いえ、まだです。ですから貴方達に見せたんです。これを上層部や管理局に教えるかどうかを貴方達にも考えて欲しいの。」

と語りカリムに、シャツハは

「うーん、難しいですね。せめて死せる王と大いなる闇とがが何か分かればいいのですが。」

と返した。すると今まで聞いていたヴェロッサから

「それなら、死せる王なら分かるよ。」

と言う。そんなヴェロッサの方を向く2人、そして

「多分なんだけど、聖王なんじやないかな？」

と語り。

「「ま、まさか。それって!..」」

それに驚く一人に

「そう、聖王の血を引いている人が何処かの世界にいると言つ可能

性があるという事だね。」

と言い

「そり。では、どうするの？教会や管理局にで教える？でも、下手に管理局に伝わると聖王の血を引く存在が殺されかねないわ。それに、聖王教会に教えてもきっと聖王の血を引く存在を利用しようとするわ。」

と言つとヴェロッサが

「じゃあ、管理局の3提督以外には言わないでおこう。」

と言つ。すると2人も

「そうね。彼らなら信頼できるものね。」

「ええ、それがいいですね。」

と同意するのであつた。

「ただ、3提督にほ直接伝えた方がいいかも知れないね。盗聴される可能性が高い。」

と言つヴェロッサ。そして、2人もそれに頷いたのであつた。その後、ヴェロッサは3提督に会つて、その事を伝えて予言の事は6人だけの秘密と言う事になつた。それが原因で、予言が成就される時期が早まることになるとはまだ誰もわからなかつた。そう、聖王の血を引く者ですらも。

あと1、2話で無印編終了です。テッサロッサについての処遇なども決めるつもりです。テッサロッサ的にはハッピーエンドですが、管理局としては納得できないというような処遇をしたいと思います。

無印編「話「テッサロッサ家の選択」（前書き）

ハラオウン親子を再会せせるつもりでしたが次回にします。本当にすいません。

クライドがクリステラ邸に住み込みの護衛として住むようになつた翌日、なのははクリステラ邸に来て、クライドを鍛えていた。国が遠く離れているせいで時差があつたが、それは偏在のお陰で何とかできるのだ。つまり、その偏在を学校へと向かわせたてイギリスに来ているのだ。記憶の方は、共有できるので本体にも授業内容が伝わってくるし、偏在の方も鍛錬状況を見れると言うわけだ。どうしてなのはがハルケギニアのスクエアの偏在が使えるのかと言うと、シャルロットが実家から持ってきていた魔導書の中に書いてあつたのだ。因みに、その偏在はシャルロットも使用できる。ハルケギニアに居た時のシャルロットはトライアングル中位であつたが、今ではなのは達との模擬戦や鍛錬などでスクエア上位となつているのだ。そんなわけで本物のなのははクライドの鍛錬の指導をしているのだ。そしてその数日後、プレシアから通信が来たのであつた。

場所：テッサロッサ邸

視点：なのは

私は、プレシアさんに呼ばれてテッサロッサ邸に来た。その時に使つたのは隙間では無く、ベルカ式の転移魔法だ。今回は魔力を感知されても問題ないからだ。そして

「プレシアさん、着ましたよ。」

と言つ私に

「来てくれたのね。さあ、立ち話もなんだから座つて。」
と座るように促す。そこへ3つの足音が聞こえる。2つは子供の気配で、もう1つは大人の気配であつた。そして扉が開く。入つて来たのはフェイトと生き返つたアリシアと見知らぬ獸耳と尻尾の生えた女性だつた。私はその女性を見た瞬間にフェイトの使い魔だと分

かつた。なぜなら、主であるフェイトと使い魔の間には魔力ラインがあるからだ。それと補足になるが、使い魔はそれが切れたすぐではないが消滅してしまう。もし、主との契約もしくは魔力が切れた場合は再契約か、別の主と契約する事によつて消滅は避けられる。

部屋に入つて来た2人と1匹は私に

「あ、なのは！－いらつしゃい。」

「いらつしゃ－い。」

「いらつしゃ－い。」

挨拶した。それに対し私も

「うん、お邪魔してるよ。それよりもアリシアはもう大丈夫？」と挨拶してアリシアに復活して何かおかしなことが無いか聞く。するとアリシアは

「うん、おかげさまで生前と同じように過ごせてるよ。フェイトつて言う妹も出来てたし。私を生き返らせてありがとう。」と頭を下げて来た。それに続き

「本当にありがとう。なのはが助けてくれてなかつたら今頃、私はどうなつてたか分かれないし、地球を滅ぼしてしまつ手助けをしてしまう所だつたよ。」

「そうね。貴女が居なかつたら間違いなく私は地球を滅ぼすような事をしても平氣だつたし、アルハザードに行くにしてもフェイトを捨てて行くつもりだつたわ。だけど、貴女のお陰でそんな事をせずにするんだわ。本当にありがとう。」

「いえ、私もしたかつたからやつただけですでの気にしないで下さい。それよりも、アリシアとフレシアさんにはまだ自己紹介してませんでしたね。私の名前は高町なのは、地球人です。」

「知つてると思うけど、私も名乗るね。私はアリシア、アリシア・テツサロッサだよ。ミッドチルダ人だよ。」

「私は始まつてだね。私はフェイトの使い魔のアルフ。フェイト

達を救つてくれて本当にありがとうございました。」

「では私も改めて名乗らせていただきわ。私はプレシア・テッサロッサ。魔導師兼科学者よ。」

するとそこにモニターが映し出される。

「やあ、なのはくん。」

そこに映し出されたのはジョイル博士であった。私は「こんにちは、ジョイル博士。ちょうど良いところに。あの結果はどうでした？」

挨拶をした後、昨日頼んでいた調べ物の結果を聞こうとした。すると「君の予想通りだつたよ。それと理由は、どうやら管理局はプレシア女史の技術を盗みたかつたみたいだね。」

と言つ。どうやら当たりだつたわね。すると

「ねえ、なのはちゃん。どういうことかしら? 管理局が私の技術を盗みたかつたつて。」

とプレシアさんが聞いてくる。するとジョイル博士は驚いた顔でプレシアさんを見ていた。しかし、それには気にせず私は「ああ、それはですね。実はアリシアが無くなつたあの新型魔力炉【フュードラ】の実験にはある秘密があつたんですよ。ジョイル博士、

説明の方をお願いします。」

と言つ。ジョイル博士は私の頼みを聞き、頷くと

「ああ。でもその前に、久しづりだね。プレシア・テッサロッサ。」
と返事をしつつプレシアさんに挨拶する。それに習い、プレシアさんも

「ええ、本当に久しぶりね。ジョイル・スカリエッティ。それにしても大分雰囲気と言つて性格が変わつてゐるかのよつに見えるけど?」

と挨拶をして、博士の雰囲気が彼女が会つたときと違うと言つ。そして

「ああ、それはね……。」

ジエイル博士は自分が私によつて性格や思考を変えられたこと、自分が最高評議会の命令で作られた人工生命体であつたこと、今は生命操作の分野では手を出してもおらず、その代わりにロボット分野に集中していると話す。そして

「まあ、こんなとこかね。それでフュードラの事なんだが……。

」
と話し始めた。

管理局は、フュードラを製造していた前の製造責任者の不手際により遅れていたことを逆手にとつて、プレシアに次の責任者を指名して失敗させて、それを理由に前から欲しがつていた彼女の技術を奪おうとした。しかし、プレシアの技術力は管理局の予想を超えて完成わずかとなつていた。なので、業と実験の時期を早める事と暴走させる事によつて失敗させて彼女を失脚させようと企んだ。そして、あのフュードラの事故が起つたのだ。つまり、それは管理局がアリシアを殺した事と同義あることを示しているのである。そして、実験に失敗したプレシアはそれを理由に失脚させられて管理局に利用される事となつた。しかし、プレシアは途中で姿を消していつたという記録があつたらしい。

そして、此処からプレシアさんがジエイル博士の代わりに話し出した。

その頃のプレシアさんはアリシアの代わりにフェイトを創る為にジエイルの造つたクローンの基礎理論を発展させていた。それがプロジェクトF・A・T・E（通称プロジェクトF）であつた。しかし、それは失敗に終わり、良くて見た目が同じだけの別人、悪くて死亡というものであつた。プレシアさんはそれを知つた時に発狂し、アリシアの復活の術を自らの体を壊すまで探し続けた。そんな時、どこからかジユエルシードの情報が流れ込んで来たという。そこでジユエルシードを積んだ次元航行船を襲撃して地球に落とし、そのジユエルシードをフェイトに探すように命令し、私と出会つたという事であつた。そこまで話すと、アリシアとフェイトは怒つていた。

そして私はあるスペシャルゲストを呼ぶことにした。

「という訳です。グレアムさん、クライドさん。」

呼んだのは管理局員のグレアム提督と元管理局員のクライドさんだ。彼らを呼んだ理由は彼らにもつと管理局の闇の部分を知つて欲しかったからだ。そして

「ああ、話は聞かせてもらつた。やはり今の管理局には色々と問題があるみたいだね。」

「ええ、それは正さなければなりませんね。」

とそれぞれに感想を言つ。そして

「ああ、失礼。始めてまして、フレシア・テッサロッサさんにジェイ・スカリエッティ博士。私はギル・グレアム。管理局の提督にしてな

のはちゃんの考えに賛同する者だよ。」

「始めてまして、元管理局員のクライド・ハラオウンです。私もなのはちゃんの考えに賛同する者だよ。」

と2人はジェイ・クライド博士とフレシアさんに挨拶する。

フレシアさんは大分驚いていたがジェイ・クライド博士は驚かなかつた。それもそのはず、私が彼らのことを教えたからだ。そして私は「管理局や元管理局で私の味方をしてくれる方はまだいますよ？例えばレジアス・ゲイズ中将とかね。」

と言う。するとグレアムさんが

「レジアス中将つてミシシッピ地上本部のトップじゃないか！－それと歴史操作って何だい！？」

と驚く。クライドさんやフレシアさんも驚いている。因みに、フュード、アリシア、アルフはどうして

驚いているのかがわからなかつたので、疑問符を浮かべていたので私が念話で説明している。

「私も歴史操作なんて初耳だね。いつそんな能力を身に着けたんだい？」

とジョイ・クライド博士が聞く。その質問に私は

「最近手に入れた能力で、その名の通り歴史を操作する能力です。まあ、色々と条件があるのでそんなに融通の利く能力ではありませんが

・・・・・

と答える。するとフレシアさんが

「そうだったの。じゃあ、アリシアもその能力で復活が出来たってこと?」

と聞いてきたが、私はそれを

「いえ、条件の中には遺体がある者には使用できないとあります。」と否定した。更にフレシアさんは

「そう、そういえばあの時にもう一つの手があるって言つてたけど、もう一つの手って何なの?」

と聞いてきた。そこで

「神の書に記録されている2つの蘇生魔法です。その名はザオリク、アレイズと言い、この2つの魔法はアルハザードの時代より前から存在しています。」

と答え、更にはラ・ギアスや神の書を含めた3種の神器のこと、それに私が神になつた理由なども話す事となつた。

その後は、最初は管理局に次元航行船襲撃の件で自首しようとしたフレシアさんだったが、ジェイル博士の話いやテッサロッサ親子内で話し合いの結果、管理局と敵対する事を選び私達の同志となつた。因みに、私を呼んだのも自首するからフェイト達を頼むと言つたかつたらと言う理由も一つだったがそれはジェイル博士が調べた事を聞いた事により考えが変わつたと言う。そして、今後の事などを色々と話して今日はそれで解散となつた。私は帰り際に、友達になろうと2人に言つと、2人もそれを頷いて

「うん。いいよ。」

と言い、友達になつてくれた。その時にフレシアさんとアルフに

「私の娘(ご主人様)達の友達になつてくれてありがとう。」と感謝された。

それから数日後、管理局が来ると情報がグレアムさん経由で入つて来た。来るのはリンディ・ハラオウン提督とクロノ・ハラオウン執務官と言う事が分かり、クライドさんにもその情報は伝わっていた。そして更にその日後、その親子がやって来るのである。その2人がどんな反応をするのかが楽しみだと考えながら、私はその日を待つのであった。

視点終了

無印編7話「テッサロッサ家の選択」（後書き）

今度こそハラオウン親子が再会します。そして、ハラオウン母子やその友人のレティ提督、それに伝説の3提督にも管理局の闇を知つてもらい、協力者となつてもらいます。そして、次回で無印編が終了します。

なのはとテッサロッサ姉妹が友達になつて、数日が経過した。その数日間に、異次元からの迷い人が現れた。その迷い人は、投薬やゲーム・システムというマン・マシン・インテーフェースの影響により、体がボロボロになつていた。しかし、なのはやグラギオスの力によつてそれらの影響が完全になり健康な体へと戻つた。そして、なのははその次元に行こうと思つたので、次元発信機付きの次元通信機を取り付けた人型起動兵器型デバイス【ラピエサーデュ】を与えてからその人物を元の次元に返した。その他にもトラブルはあつたが、なのはが日常を過ごしていると、とうとうリングディ・ハラオウン提督の指揮するアースラが地球圏にやつて来たのだった。

場所：イギリス・グレアム邸

視点：ギル

私はなのはくんの指示でアースラの艦長、リングディ提督とその補佐官であるクロノ執務官に通信で現地の民間協力者達によつて、ジュエルシードは回収されて、今はこのグレアム邸にいるという理由でこのグレアム邸に呼び寄せた。そして

「グレアムさん、ご無沙汰します。」

と言うのはリングディ・ハラオウン。彼女は私の古くからの友人で、クライドの妻である。

「お久しぶりです。グレアム提督」

というのはリングディとクライドの息子、クロノ君であつた。

「ああ、2人とも久しぶりだね。それとクロノ君、今私は休暇中なのでね。そんな言葉遣いは禁物だよ。」

とクロノ君に注意する。そう、今私は休暇をとつてゐるのだ。するとクロノ君は

「しかし、僕は任務中なので「クロノ君……」ううのは時と場合

によるよ。今の私は管理局とは関係なく君達2人と話しかしているのだから君もそのつもりでいてくれ。」・・・・・分かりました。

ではそうさせてもらいます。グレアムさん。」

と反論しようとするが、私は途中で彼の言葉を遮り、そう言った。そしてそこに

「そういえば、グレアムさん。ロッテとアリアは見当たりませんが？」

とリンディが聞いてくる。それを私は

「ああ、今は教導隊の補佐をしているよ。それより中に入ってくれ。

」と答えて、屋敷の中に入るよう言う。そして、私は2人を居間に案内して、椅子に座るよう言うと本題に入る事にした。

「ああ、それよりもジュエルシードだったね。今は通信で話した民間協力者の子が持っているから、今から呼ぶよ。」

と言つと、2人して

「お願いします。」

とこうのであった。それを聞いた私は直ぐに彼女とあの2人を呼びに彼女らがいる部屋へと向かつていったのだった。

視点終了

その後、グレアムはなのは呼び、21個のジュエルシードを渡すように頼んだ。するとなのはは

「いいですよ。でもその前に・・・。御2人共入つて来て下さい。

」と言い、ドアの向こう側にいるある2人を呼び寄せた。そして、クロノとリンディは驚愕していた。なぜならその2人組の片方は「久しぶりだね。リンディ、クロノ。11年ぶりかな？」と久しぶりに再会した最愛の妻と息子に挨拶を交わした。それを聞いたクロノとリンディは「え、本当に貴方なの？」

「ほ、本当に父さんなの？」

と今だ信じられないと言つ表情をしながらそう言つた。その反応も当然といえた。11年前に死んだはずの親族が行き成り現れたのだから。

「ああ。それにしても大きくなつたな、クロノ。」

と言つと、クロノは任務中だと言う事を忘れて

「父さん、父さん。」

とクライドにしがみ付き泣き出してしまつた。リンディも抱きついたが、直ぐに落ち着き抱きつくのを止めた。そして、クロノが落ち着くのを見計らつてリンディがどうして生きているのか、どうして今まで連絡をして来なかつたと問い合わせられた。するとクライドからではなくのはがその説明をした。その説明を聞いたリンディとクロノは驚きを隠せなかつた。それもそのはずだ、こんな少女にそのような能力があるなんて誰が予想しただろうか。しかし、驚くのはそれだけではなかつた。なぜなら・・・

「失礼。そろそろ良いかね？」

と言つのは・・・

「な、ジョイル・スカリエッティ！――どうして此処に！――」

と言いながら驚くクロノとリンディ。そう、なのはが呼んだもう1人とは、管理局から広域次元犯罪者として指名手配されているジョイル・スカリエッティその人であつた。どうしてそんな人物が居たのにジョイルの事に気が付かなかつたかというと、単純に死んだはずの人間であるクライドの方にばかりに気が行つてしまつて、ジョイルの事を忘れていたためだ。そして、ジョイルから自分が管理局の最高評議会の命令で作られた人造生命体であり、その事を知り、発狂したがなのはにより性格などを変えられて今に至ると言う風に話した。クロノは

「そんなの出鱈目だ！！管理局がそんな事をするはずが無い！！」と怒鳴つていたが、なのはやクライド、それに現管理局員であるグレアムが証拠の資料などを見せてクロノは納得するしかなかつた。

リンディの方はジェイルが嘘を言つてゐるよう見えたので半信半疑だが、証拠の資料を見た事により信じるようになつた。更に夜天の書を改竄して闇の書にしたのも管理局だと知つた時、今まで信じていた物に裏切られていた事に気づく。そして、管理局を変えようと決心し、その事をこの場に居る者達に話す。すると、クロノも賛同し、なのはやクライド達は元よりそのつもりだと言い、クロノとリンディに同志になるように言つた。結果は2人ともOKだつた。更にはその事をリンディが開いていた回線で聞いていたアースラスタッフ達もなのは達に協力する事を約束した。そして数日後、その事をリンディの親友のレティ提督や3提督にも証拠を見せながら話すとレティ提督に3提督もなのはに協力するという事を約束した。

因みに、ジュエルシードとテッサロッサ家についてだが・・・。ジュエルシードはなのはが魔力を奪つた事で、価値がなくなつたのとそのままなのはがただの宝石として所有する事が決定し、リンディ達アースラ組みは管理局の上層部に現地に来ていたフリーの魔導師の力により消滅したと報告した。テッサロッサ家についてはリンディがなのは側についたので、お咎めなしであつた。襲撃事件については、依然として謎のままでリンディが上層部に報告をした。こうして、原作ではジュエルシード事件、^{フレシア・テッサロッサ}P・T事件と呼ばれていた出来事は、原作とは違つた結末で終えるのであつた。

おまけ

ある日のテッサロッサ邸で、なのは、フェイト、アリシア、フレシア、リンディ、クロノが集まつていた。そしてフレシアが突然

「ねえ、なのははちゃん。」

となのはに声を掛ける。それに

「なんですか？プレシアさん。」

と返事をするなのは。そして

「その瞳と髪の毛の色、そして虹色の魔力光の事で聞きたい事があるんだけど。」

と切り出すプレシア。なのはは内容を知っていたが、あえて質問を全部言わせることにした。なぜなら、なのはなには少し考えがあるから

だ。そして、なのはは

「はい。」

と頷き、プレシアが質問を全部言つのを待つた。しかし、そこへリ

ンディが

「それは私も聞きたかったことなのよ。もしかしてなのはさんって聖王？」

と質問の続きを言つてしまつた。その時にクロノも聖王の事を知つていた様でかなり驚いたような顔でなのはを見た。それをなのはは気に

せずに

「はい。そうですよ。その事は聖王教会や管理局には他言無用でお願いします。」

と正直に答え、更になのははその事を内緒にするよつこと、この場に居る人間に話した。それを聞いて納得したのはプレシアとリンクとクロノだつた。聖王教会は次元世界ではかなりの信者が居る。

その信仰の対象である聖王が復活したとなれば、最悪は聖王であるなのはを暗殺しようとするとするか、利用しようとする者が現れる。なので、出来るだけ知られないようにしていと考へてゐるのだ。まあ、クロノは少し考えてから納得したが。しかし、テッサロッサ姉妹は、聖王についてのことを知らなかつたのでどうしてと聞いてきたが、プレシアの説明により、その理由が分かつたので

「「わかつた。」」
と頷いたのだった。

なのはが態と全部言わせたのは、聖王を知らないテツサロッサ姉妹に聖王の事に興味を持つて、聖王についての話を貰うためである。そうする事によつて、聖王の事が知れたら政治的に不味いという事を教えられるからだ。それによつて外部に漏れる可能性が低くなる可能性があるからだ。もしこの姉妹からなのはが聖王だということが知られると厄介だからである。まあ、その心配は殆ど無いのだが、念の為の処置であった。その事はプレシアとリンディモこの考えはなのはから聞いていたのでこういう話になつたのだ。

因みにクロノはこの話しさは知らなかつたが聖王の伝説や影響力は知つていたので、内緒にしてと言われた時に納得したのだという。

無印編最終話「ハラオウン親子」（後書き）

無印編ようやく終わりました。海中のジュエルシードはなのはがフ
ェイトと出合つてから直ぐに回収されて封印されてなのはに渡され
ました。その後は他のジュエルシード同様に魔力を取られてただの
宝石になっています。

次回は番外編を書く予定です。

アンケート（前書き）

番外編1話を投稿する予定だったのですが、そちらは私の時間の都合上とPCの不調により難航しております。ある程度は書けたのですが、それでも投稿するまでには至っておりません。

アンケート

行き成りで申し訳ないのですがアンケートを行いたいと思います。

アンケート内容は、死んだはずのハルケギニアの一部の人間が何故かブラックホールクラスターのせいで地球に飛ばされ来るというものです。地球に来るハルケギニア人は以下の人物を考えてあります。トリステインからはアンリエッタ王女、ギーシュ、モンモランシー、ゲルマニアからはキュルケ

アルビオンからはウェールズ皇太子、マチルダ（ロングビル又はフレーケの本名）

を想定しております。

これらに賛成の方は1を、不賛成の方は2をお願いいたします。
因みに、1の場合はアンリエッタとウェールズは結婚します。それと、地球に来たハルケギニア組全員がデバイスを持ちます。そして、なのは達の仲間になります。因みに登場はA・S編に入つてからを予定しております。2の場合は、そのまま死んだままとなります。尚、この中の誰かだけを登場、もしくはこの中に名前の無い人物の登場と言うのは想定しておりませんので、予めご了承ください。
期限は番外編1話が更新されるまでです。

アンケート（後書き）

次回こそ本当に番外編1話です。いつになるかは分かりませんが、出きるだけ早く更新したいと思っております。それと、人数を一人増やしました。

場所：平行世界の地球のアースクレイドル内部
オウカ・ナギサのラピュサージュがアギラ・セトメのベルゲルミル
を捕らえ

「逃がしはしない・・・・」「コードATA、発動・・・・」
とオウカが言つ。するとピ・ピ・ピューと起動音が鳴り響く。そして
「口・口・口・アタマジヤヒーき、貴様！自爆するつもりか！
？」

「さしものマシンセルも完全に消去してしまえば、再生不可能でし
ょうー？」

「オ、オウカ姉さん！..」
「アラド・・・ゼオラ・・・リト・・・。これが姉として、
貴方達にしてあげられる最後のことよ・・・」

「！」

「待つてつーオウカ姉様、やめてえつー！」
「ち、ちつきしょう！俺がアギラをブツ飛ばしてやるーー！」
「来てはなりませんーー！」

「ーー！」

「来ては駄目・・・あなた達まで私と同じ皿にあつてしまつ・・・
。だから・・・」

「で、でもつーー！」

「どのみち、長らくゲーム・システムの支配下にあつた私は・・・
もう・・・」

「ね、姉さん！..」

「え、ええい！離せ！離さんか、人形めが！..」

「いいえ・・・お前は私と共に・・・逝くのですー」

「ね、姉さまつ！..」

「・・・さよなら、ラト・・・。私の可愛い妹・・・」

「そして、アラド・・・」

「姉さん！！」

「ゼオラ・・・」

「姉さま！――」

「あなた達と過ごした日々・・・・楽し・・・かつた・・・」

「そして・・・最期にそれを・・・思い出せて・・・良かつ・・・た・・・」

「オウカが妹や弟達との最期の会話を交わした後にアギラが
「や、やめろ、アウルムー！やめろおおおおつ・・・！」

と言つと、そのアギラを道連れに自爆をした。そして、その爆発で
オウカ・ナギサは死んでしまう筈だった。しかし・・・」

「
場所：地球

なのはとテッサロッサ姉妹が友人となつて2日後の早朝、なのはは
クライドの鍛錬を見ていた。そこへなのはは日本で異常な空間の歪
みが現れた事を結界で知つた。なのはは急いでその原因を突き止め
た。何者かがこの次元に来た事が分かつたので、次元逆探知を行い、
何処の次元からなのかを探つた。そしてそれは成功した。なのはは
急いで日本に戻り、異次元から来た来訪者の元に向かい、その次元
の迷子を見つけた。その迷子は女性で怪我を負つていたので、月村
家で看病する事になつた。その時には迷子である女性の体に
異常を感じ取り、それで彼女の記憶を読み取つた。すると、ゲイム・
システムというシステムや投薬や肉体改造のせいで体がボロボロだ
という事が分かつたので、その体を正常な状態まで戻しつつ、直す
前以上の身体能力を与えた。更には彼女の記憶にあつた人型機動兵
器【ラピエサーチュ改】を機動兵器型デバイスとして造つた。そし
て、後は彼女の目が覚すだけの状態となつた。

それから2日が経過した。

場所：月村邸

視点：オウカ

私は朦朧とした意識の中、目を開けた。そしてベッドから上半身だけを起こして

「ん、うんん。此処は？それにどうして私は生きているの？」

と言いながら周りを見渡す。周りの雰囲気から察するに何処かの金持ちの家らしいことが分かった。私は外の見える窓の方に目を向けていると、そこに扉が開く音がしたので扉の方を向いた。そして、その扉を開けた人物は

「目を覚ましたか。もう直ぐ覚ますだろ？とは思つていましたが意外と早かったです。それにしても驚きましたよ。転移の反応がしたと思ってそこに来てみれば、貴女が怪我をして倒れていたんですから。それともう上半身を起こしても大丈夫なんですか？」

と言つのだった。そして

「ええ、お陰様で大分良くなつたわ。ありがとう。」

「いえ、大したことはしてませんから。それに寧ろ私が謝らないといけないので・・・」

「どういうこと？」

「はい。実は・・・」

と彼女は語りだした。それを聞いた私は驚きを隠せなかつた。

なぜなら、目の前にいる少女が私の傷を治してくれただけでなく、薬やゲーム・システムの影響でボロボロだつた体を正常な体に戻しつつも強化を施してくれたと言つ。しかし、それでどうして謝られるのかが疑問に思つた。なので

「でもそれでどうして謝る必要があるの？聞いた話だと謝られる理由が無いんだけど？」

と言つた。すると彼女は

「貴女の許可無くそれらをやつてしまつた事や貴女の記憶も勝手に

見てしまったことを謝りたいんです。」

と言つ。体を直してもらつた事も驚きだがそれ以上に驚いたのは記憶を見たという事だつた。しかし私は怒る氣は無く、寧ろ感謝の気持ちの方が上回つていたので

「うんん、気にする必要は無いわ。やっぱりお礼を言わせて貰うわ。助けてくれてありがとう。」

と言つた。すると

「そうですか。でもお礼は私にではなくこの屋敷の主にしてください。此処は私の友人の家なので。」

と言つ。なので

「じゃあ、その人達にもお礼を言わせて貰うわ。でもその前に・・・」

と言つと私はあることに気が付いた。それは互いに名乗つていないと言つ事だつた。しかし、私は頭の中を見られている。つまり私が知らないのだ。なのでまずは

「そういえば名乗つて無かつたわね。私はオウカ・ナギサ。元ノイH・DC所属のパイロットよ。」

と名乗る事にした。そして

「私は高町なのはと言います。では此処の主達を呼んできますので待つて。私も行くわ。挨拶やお礼がしたいし。」・・・ん、もう殆ど調子を取り戻したみたいですし・・・分かりました。では、行きましょうか。」

と言つとなのはちゃんと私は部屋を出てからこの屋敷の主やその家族に会つて、お礼を言つた。その時に驚いた事は自己紹介の時に元ノイエ・DC所属と言つたが、彼女達はノイエ・DCやDCの事を知らない事だ。しかし、異星人に関しては驚かずに、なのはちゃんが自分は地球人とベルカという世界、もとい星の人間との間に生まれた子供の子孫だと言う事を教えられた。そして、なのはちゃんから新たに驚く事を知らされた。それはなんとこの世界は私の居た世界ではなく、平行世界の地球で、此処にはCDや連邦軍だけでなく、

PTやAMといった人型機動兵器は存在していないくて、今だに私達の世界では旧式と呼べるような戦闘機や戦車等が主流となっている世界なのだと教えられた。その事に驚きつつも元の世界に返れないかと聞いた所。なのはちゃんが

「帰りたいんですね？分かりました。では私が元の世界に返しますよ。幸い貴女が来た次元のデータを取っていますので直ぐに帰れますよ。」

と言った。それを聞いた私は

（この子、何処まで規格外なの？）

と驚いたのであった。それを感じ取ったのか、なのはちゃんは苦笑していたが急に真剣な顔をして

「オウカさん。貴女が帰りたいのであればこれを渡します。」
と言い私に黒いペンドントを渡してきた。そして私は

「これは？」

と聞くするとなのはちゃんは

「これは貴女の記憶を読んだ後にそれを参考にして造った物です。」
と言つと、私を外に連れ出して

「詳しい事に關しては、いつか貴女の世界に行つた時にでも説明しますが、とりあえず今からこれを手に持つた状態で私の言つ言葉を復唱して下さい。」

と言つた。私は疑問に思いつつも頷いた。そして

「ラピエザージュ、機動兵器モードでセットアップ。」

と言つ。私はそれに驚き

「ラピエザージュ？！それって、私の機体じゃない…！」

と叫んでしまつた。するとなのはちゃんは

「ええ、貴女の記憶から私が造りました。機体性能や武装などが強化されているので気をつけて下さい。それと、ゲーム・システムは排除しているので心配は無用ですよ。」

と言つのであった。その後、なのはちゃんからラピエザージュのモ

ードの説明を受けた。まずは先ほど私に言わせようとした機動兵器モードは、私が乗る機体も状態の事らしい。次に、デバイスマードは鎧型デバイスと呼ばれる私が鎧として身に付ける事の出来る形態のようだ。そして、最期の待機モードは、今の黒いペンダント形態の事でいつでも持ち運びできるようにした形態らしい。そして、ある程度の説明を受けた後に私は先ほどなのはちゃんの言つていた言葉を口にする。

「ラピエザージュ、機動兵器モードでセットアップ。」

すると、待機状態のラピエザージュが、私の手を離れて光りだした。私はその光の眩しさに目を瞑つた。そして、光が収まるとそこにはかつての私の愛機であるラピエザージュを少し大きくして武装が増やしたような機体が立っていた。私は機体になる事は知つてはいたけどここまで完成度の高い機体に仕上がつているとは思わなかつたので驚いてしまつた。そして、私は彼女達に別れを告げてなのはちゃんの力で元の世界へと転移をするのだった。

視点終了

オウカが元の世界に戻つた時、そこはヘルゲートの内部であり、ハガネ&ヒリュウ・改がデュミナスと対峙していた。そして、オウカの登場でジュミナス達に隙が出来て、ハガネとヒリュウ改はヘルゲートより離脱できた。その後、オウカはハガネに招かれて、スクールの弟や妹達と再会を果たした。その後、なのはと出会う前はゲーム・システムや投薬により体がボロボロだつたのでその事を調べたのだが、異常は見られなかつた。それを驚く者と喜ぶ者がいた。更には機体も調べられ、オリジナル以上の性能となのはが言つた通りゲーム・システムが見当たらぬ代わりに、ハガネ&ヒリュウ・カイの技術者達曰く、未知の動力源（擬似リンクアーコア）が追加されている事や性能が変わらずに鎧に変化する事や次元通信と次元発信機等が搭載されている事に驚き、その事を聞いた。するとオウカは「私を助けてくれた少女が造つたので詳しい事は分からぬのです。

ですので機体の事や私の体の事に関しては彼女に聞いた方が良いかもしません。幸い、次元通信機も付いてるので聞いてみます。」と言った。そして、その後オウカは直ぐに通信を開き、なのはを呼び出した。オウカはなのはにその事を聞いた。すると返事は

「此方も今は厄介な事にかかわっているので直ぐにとは言えませんが、必ず行きますので待っていてください。そうですね・・・・・」

6日後位に連絡します。」

と返ってきた。その事は直ぐにクルー達に伝わり、そのクルー達はその日が来るのを待つのであつた。

おまけ

オウカ・ナギサ

スクール出身のパイロットでその腕は一流だが、アギラ・セトメにより精神や肉体等を操作されていたが、アースクレイドルでの対ハガネ戦で記憶を取り戻し、精神操作も解けた。その後は洗脳していたアギラ・セトメ諸共自爆した。しかし何故か聖王なのはがいる平

行世界の地球に流れ着き、そこでなのはに救われる。その時、正常な状態ではあるが肉体強化が施されている。尚、スクールでのコーデネームはアウルム1でスクールで初期からいた披験体だった。他のスクールメンバー同様にスクールよりも前の記憶は完全に無くなっている。

ラピエサーチュ改

通称：ラピエサーチュ

魔力量：EX

アサルトドラグーン

基本的にA・Dラピエサーチュを模しているが、少しだけ大型化しているのと機体の重量が重くなっている。性能と武装は強化されており、スプリットミサイルH以外はそれぞれ2つに増えている。ただし、スプリットミサイルHの積載量も増えているので、その分多く撃てる。また、防御面や機動性もパワーアップしており、オリジナル機であるラピエサーチュよりも強力になっている。ただ、その性能をフルに活用する為には操縦者兼マスターであるオウカの肉体を魔力で強化しなければならない。それと、自己修復機能や自己補給機能なども有しており、長期の単独行動も可能。内部にもインテリジェントデバイスにも積まれているAIが補助の為に組み込まれている等の強化がされている。製作者であるなのはとグラギオスの意向により、ゲイム・システムが外される代わりに、次元発信機と次元通信機が組み込まれている。特殊防御に魔力フィールドを追加しているが、オウカが魔力を持つて無いので、擬似リンクカーボアをその為の動力源としている。尚、実弾系の武装面の補給に関しては魔力で実弾を造れる。更には、2挺のオーバー・オクスタン・ライフル（O・Oライフル）はビルトファルケンのオクスタンライフル級にまで小型化された状態ではあるが、威力が変わらない。尚、デバイス同様に待機状態にする事や鎧化する事が可能。

ラピエーサージュ

アサルト・ドラグーン

ノイエDCの改良型A・Dで、アースクレイドルで自爆した機体。アースクレイドルで造られたアシュセイヴアーをベースとしたカスタム機でATXチームのアルトアイゼンとヴァイスリッターのデータが流用されている為、武装に共通点がある。操作系にゲイム・システムが使われている。名称の意味はフランス語で「継ぎ接ぎ」である。

おまけ2

「アンケート結果発表」

ハルケギニア組みの登場についてのアンケートの結果、登場することができ決まりました。

ご協力ありがとうございました。

無印番外編1話「異次元の迷子」（後書き）

遅れてしましました。次は無印番外編2話です。この2話が終われば、いよいよA・S編が始まります。

ルシをよひやく換えました。とはいっても父のお下がりの物ですが。
・・・

なのはがオウ力を元の世界に送り返した後、直ぐに次の異変が起つた。それは・・・・・

場所：月村邸上空

視点：アクセル

「ここか!? 転移反応があつたのは?」

と俺はアルフィミィに話しかける。そして

「そうみたいですね。しかも、目的地は私たちがキヨウスケやエクセレンと分かれた次元に似て非なる世界のようですね。」

と答える。俺はそれに驚くことなく

「そうか。まあ、何かあつても向こう側のベーオウルフやラミアビもが何とかするだろうな。まあ、俺たちの知っている奴らに似ている性格や力ならな。」

と言つ。それを頷いて

「はい、それは信じるしかありませんの。」

と答えてくる。そして、俺はそこで気になつたことがあつたので

「しかし、妙だな。」

と口にした。するとそれに反応したアルフィミィが

「何が、ですか?」

と聞いてくる。そして、俺はそ

「考へても見ろ? ! さっきこの世界の町並みを見る限り、此処はかなり昔の時代だ。なのに何故このような次元転移が出来る技術が存在す

る! ! これはどう考へてもおかしいだろ! ! -? -

と理由を言つ。そう、俺達はアスレスを展開しながら、この近辺の町を見ていたのだ。そしてアルフィミィも

「確かにそれはおかしいです。ではこれから調べますの? アクセ

ル。」

と聞いてくる。俺はそれを

「ああ。」

肯定して、更に言葉を続ける。

「まずは転移反応があつたこの辺から探す。」

と言つと突然、下から高エネルギー反応を示すソウルゲインの警戒音が鳴つた。それを意味する事は即ち、転移をした人間が居る可能性を示していると言う事だ。すると、現れたのは空を飛んだ金髪に翠と紅の瞳をした小娘だつた。その小娘は

「先ほどの転移について調べに来たのですね？それなら、下に降りて話をしましょ。」

と言つて来た。どうやらこの小娘は誰がやつたのかを知つてゐるらしい。それに罠も無さそつだつたので

「ああ。」

とソウルゲインのスピーカーから返事を出した。アルフィミイも異存が無い様で

「分かりましたの。」

と同じように小娘に聞こえるように返事をした。そして俺たちは空を飛ぶ小娘の指示通りに下に降りた。そして、俺は機体からも降りたが、アルフィミイは降りられない体らしく、降りられないと言つのであつた。すると

「分かりました。では降りられるように貴女の体を人間にしましょ。それからそこのお兄さんも人間に戻しましょう。」

と言つて来たのだった。アルフィミイは半信半疑で

「本当にそんな事が可能なんですか？それに何故私達が唯の人じやないと分かつたのですの？」

と俺も思つた疑問を口にした。すると

「出来ますよ。何故分かつたのかと言つと、私には生き物の記憶や心等を読む事が出来るのです。」

と返してきた。そして更に

「それに私も人ではありません。そこのお姉さん、アルフィミイさ

んになら分かると思いますが。」

と言つて来たそれをアルフィミイが頷き

「はいです。確かに彼女は人ではありません。しかも、かなり高位の存在ですの。」

と言つ。それを小娘は

「よくそこまで分かりましたね。その通りです。私は聖王教と言う宗教の神にしてラ・ギアスと言つ嘗て滅んだ世界の3神の1柱である創造神グラギオスと契約して完全な神となつた存在なのです。」

と苦笑しながら言つて来た。しかし俺達の知つている地球上にはそんな宗教が存在しないはずだと言おうとした時に

「まあ、他の世界と言うより他の星での神ですから信者は地球上には全く存在しません。居るとしても1人か2人でしょうね。」

と言つて来た。その後、小娘はその理由を話した。何でも、この世界に紛れ込んだりこの地球出身の騎士が居るからだそうだ。因みに騎士というのは、ベルカという嘗て滅んだ世界での優れた魔法使いの事らしい。そして、目の前に居る小娘こそその頂点に君臨する存在だと言つのだ。俺はオカルトには興味が無かつた為、無視した。その後、本当にアルフィミイを人間にしてペルゼインのコックピットから出られるようになり、俺も身体機能を向上させた状態で人間に戻つた。因みにペルゼインやソウルゲインにも強化が施されて、性能が向上したとの事だつた。確認してみると、本当に上がつていたので驚くしかなかつた。さすがにそこまでされると神だと言う事を信じるしかなかつた。

視点終了

視点：アルフィミイ

神だということを納得した私達はそれぞれ自己紹介をして、ようやく転移の事を話せると思ったその時、次元の歪みが私達の上空に現れました。その次元の歪みは、人を2人放り出すとすぐに消えてしまつた。どうやら何らかの理由でこの世界に来てしまつた、人らし

いです。しかし、高高度からの落下してくる為、ここのまでは2人は死んでしまうと判断した私はペルゼインに乗り込もうとした時、なのはが既に動いていた。アクセルも私同様にソウルゲインに乗り込もうとしていたのですが、なのはがその2人を素早く助けた為、必要がなくなつてしましました。それにしても物凄い速度です。機体も無いのに良くここまで速度を出せるものと感心している間になのはが2人を抱えて降りてきました。そして。そんななのはは

「は～、さつき別の人を送り返したのに、また別の世界から人が迷い込んでくるなんて・・・これは調べる必要がありそうだね。」と独り言を喋っていました。その独り言は私達の耳に届いていて、それに過剰に反応したのはアクセルでした。

「おい！！貴様！！今なんて言つた！！」

となのはを問い合わせました。するとなのはは

「質問の答えはちゃんと答えます。でも、その前にこのお2人を屋敷の中に運ぶのが先決です。質問の答えを聞くつもりなら貴方方も来てください。」

と言い、私達2人は怪我を負つて気絶した2人を何かの力で浮かせたまま屋敷の方に向かうなのはの後に着いて行くのでした。

視点終了

視点：なのは

私は怪我を負つた2人を魔法で浮かせて運んでいた。その後ろには、アクセルさんとアルフィミィさんが着いて来ていた。そして、その間に話せる事だけを話そうと思い

「このお2人を運びながら、貴方方の機体についての話をさせて貰います。」

と言い、私はまずは彼らの機体に施した改造についての説明をした。

その説明が終わつた頃には空いてる部屋、それもさつき元の世界に返したオウカさんが寝ていた部屋であった。そして、私はドアを開けてから2人を寝かせて体の怪我を治した。勿論肉体強化付きで。傷を完全に治した後、アクセルさんとアルフィミイさんの方を向いて「では、ある程度落ち着いたので先ほどから聞きたがつていた転移の事をお話ししましょう。」

と言つた。そしてオウカさんがこの世界に怪我を負つた状態でこの世界に来て、それを見つけた私が怪我を治し、序に肉体強化した事、彼女に機体を与えたことを話した。そして、彼女が元の世界に帰つたがつたので、元の世界に帰したと言つことを話した。勿論なぜこの世界に存在しないはずの次元転移の技術を持つてゐるかと言うのも「確かにこの世界には存在しません。しかし、私は転移魔法が使えますし、装置を造る事もこのグラギオスの力を借りてではありますができます。」

と首に架かつてゐる虹色の宝石を触りながら教えた。因みに、アクセルさんはオウカさんの事を、平行世界の事とはいえていたので、信用してくれた。そして、それを黙つて聞いていたアクセルさんは

「それは分かつたが、貴様がこいつ等に使つてゐた力は何だ? それに、こいつ等もアールムー・・・いや、オウカ・ナギサ同様に元の世界に帰すつもりか?」

と怪我をして寝てゐる2人、レイ・ザ・バレルさん(以降はレイ)とタリア・グラディスさん(以降はタリア)を指してこう言つた。勿論この2人の名前は記憶を読んで分かつたことである。そして私は「私がさつき使つたのは魔法です。そして、彼らを送り返すかについては彼ら次第です。」

と返した。それに対しアクセルさんは「そうか、あれが魔法か。」

と言つ。もつとも興味がなさそつではあつたが・・・・。そして更に私は

「はははっ、でもこれから貴方はどうするんですか？また、居場所を探す為に旅を続けるんですか？」

と聞く。すると

「ああ、そのつもりだ。・・・って貴様！！また記憶を読んだな。」

と言つ。

「またではなく先ほど記憶を読んだ時に貴方の思考パターンも理解したので、こう考えているのではと読んだだけです。」

その答えにアクセルさんからではなくアルフィミイさんから

「・・・・・正直、何でもありで、神を超えていると思いますの。」

と呆れた様な声と表情でそうこぼしていた。

そしてこの後、直ぐにアクセルさんとアルフィミイさんは田村邸から出て、機体に乗り込んで飛び立つた後、直ぐに転移していった。私は2機が転移して消えるまで見送ったのであつた。

視点終了

アクセルとアルフィミイが異世界又は異次元に旅立つてから5時間が経過した。

レイとタリアの2人は目を覚まし、なのは達は自己紹介をしてから、此処が違う世界の地球であり、C・Eの世界コスミック・イラでは無いと教えてから、2人の怪我を治した序に肉体を強化したことを話した。更にレイの寿命を怪我の治療や肉体強化と共に普通の人間の寿命まで引き上げた事を話した。その後、レイとタリアになのはは元の世界に戻るかと聞いたが、2人とも元の世界では死んだことになっているからこの世界で平穀に暮らしたいとつたので、なのはの知り合いの経由で、戸籍と仕事先を用意して様子を見ることとなつた。勿論、日本語は出来なかつたので、なのはが先生となり日本語や法律、更には一般常識なども教えたが飲み込みが早く、なのはが暇つぶしに開発していた機械の1つ、睡眠学習装置の使用も手伝つて4日で教えたこと全てをマスターした。そしてその後、バーニングス家が用意

していった仕事に付き、2人仲良く働き始めるのであった。

おまけ

キャラクター紹介

アクセル・アルマー

なのはにより人間に戻った。その後なのは達と別れて、また別世界へ旅立つ。

アルフィミィ

なのはにより、アクセル同様に強化された状態で人間にされる。その後、また別世界へ旅立つ。

レイ・ザ・バレル

なのはに救われた後、なのはにより普通の人間と同じ寿命を手に入れる。そして、例のごとく身体能力が強化されている。次元の歪みが現れたのが殆ど一瞬だったので、なのはやグラギオスの力を以つても逆探知が出来なかつたが、時間操作により何とか元の世界へ帰れるようになったと言わたが、自分は死んだことになつていると判断し、聖王なのはの居る並行世界の地球で平穏に暮らすことを選択する。

タリア・グラディス

死に掛けていたので治す序に強化された。レイ同様の理由で、聖王なのはの居る地球で平穏に暮らすことを選択する。

尚、4人共聖王なのはがいる地球に来るまでの経緯は原作を参照。

機体設定

ソウルゲインとペルゼイン・リヒカイト

全ての性能が向上し、尚且つラピエサー・ジユ同様に魔力フィールドが展開でき、次元通信等を出来るようにした。更には、ラピエサー・ジユには搭載していなかつた別次元や時空を自由に転移できる転移装置も内蔵されている。もちろん、デバイス形態や待機状態にも変化できる。

起動パスワードは、ラピエサー・ジユのパスワードと同様に「— (機体名)、— (形態名) モードでセットアップ。」である。

因みにこれはなのはがアクセルとアルファイミーに説明した内容もある。

無印番外編2話「アダムとイブと蛇」（後書き）

なんとか今年中に書き上げることが出来ました。来年からはこよい
よA, s編に突入します。

来年はもっと頑張りますので、今後も宜しくお願ひ致します。
それでは良いお年を。

明けましておめでとう御座ります。今年もよろしくお願い申し上げます。

管理局のリンディ提督とその息子のクロノにクライドを会わせてからかなりの時間が経ち、6月になつていた。そんな中、なのはは聖王騎士3人を連れて管理局の穩健派である伝説の3提督＆ハラオウン家族＆グレアム提督＆レティ提督と無所属のプレシア・テッサロッサと管理局に犯罪者指定されているジェイル博士と聖王教会の穩健派であるカリム＆シャツハ＆ヴェロッサと会つていた。勿論、その3人の聖王騎士とは、なのはの兄にして聖風の魔装騎士の高町恭也、夜の一族内での名門である綺堂家の次期当主である聖水の魔装騎士の綺堂さくら、地球で経済を牛耳るバニングス家の令嬢にして聖火の魔装騎士であるアリサ・バニングスである。何故、こういったメンバーが集まつたかと言うと、自己紹介を兼ねた顔合わせと管理局と聖王教会の闇についての今後における対策についての話し合いである。勿論それは秘密裏に行われ、なのはの隙間で行われる程の徹底振りだつた。なのはの隙間に自力で入れるのは、同じ能力を持つ八雲紫だけである。つまり、他の存在はなのはや紫の隙間には入れないのである。これ以上に機密性の高い会議室はあるだろうか？否、在る訳がないのだ。つまりそれほどの機密性を持たなければならぬ会議なのである。会議では、以下の事が議題として挙げられた。

どうやつて戦力を集めるのか、民間人の避難について、破壊神ヴォルクルスや信者達に対する対策、戦後の事後処理について等であった。

この第1回で決まつた事は、戦力については聖王のゆりかごの強化とガジェットや自動人形の新型開発や戦艦や空母の新規製作等兵器関連だけに留まつた。

民間人の避難については、なのはが暇つぶしで開発していた空間転移装置”リュケイオス”を使用することが決まつた。この空間転移

装置”リュケイオス”は、仮想空間に対象の人物や物を送り込んでその空間で生活をしてもらうと言うもので、細かい設定が可能で、クラナガンの都市部分だけを切り取り、地上本部周辺だけを現実の空間に残すと言う事も可能だ。何故地上本部を潰すかと言うと、単に管理局の地上のシンボルを潰すことが目的である。勿論、理由もある。それは、怪しくもシャドウミラーが平行世界の地球に行く時に使用した物と同じ名称ではあるが、機能は大分異なる。なのはがこの名称にした理由は、なのはが名称について困っていた時にアクセル達が来て、その時に彼の記憶を読んで、ピンと来たのがこのリュケイオスだつたという訳である。

ヴォルクルスや神官達への対策は、風の遍在を行つた後の本体の聖王なのはが指揮する3人の魔装騎士（4人目が目覚めれば4人）となのは付きの自動人形であるアルファ＆オメガ＆デュークと現在秘密裏に製作中ではあるが、4機目のなのは付きの自動人形で挑むと言つ事が決まった。

戦後の事後処理などについては、管理局を解体して8つの組織に分割する事が決まった。解体する内容は以下の通りである。

- 1つ目は司法組織（裁判所等）
- 2つ目は軍事組織（そのまま軍）
- 3つ目は警察組織（簡単に言えばタイムパトロール）
- 4つ目は保護組織（環境や自然、野生動物の保護等で、分かり易く言えばSTTSのエリオやキャロが所属している自然保護隊を、部隊ではなく、大掛かりな組織にしたもので、ボランティア活動等も行う。）
- 5つ目は政治組織（国家元首については、アメリカなどの大統領制を予定している。ミッドの最高権力者は、管理局の最高評議会なので、大統領や国王等といった国家元首は存在していない為。作者の見解で言わせてもらうと、もし管理局の上に国家元首や政治組織が存在していたら原作であそこまでの腐敗はしていないはずだと思う。理由としては、まともな政治家が1人でもいれば、絶対に誰かに気

づかれる可能性があるから。もし、仮に政治家がいたとしてもそれは多分、腐った政治家か無能な政治家のどちらかか両方。)

6つ目はロストロギア管理組織（名称とおりロストロギアを安置組織で、他の組織が手に入れたロストロギアを預かる所である。また、それらを組織が無断で使用したり、隠したりしていないかの調査をする事が出来る。自分達で手に入れた場合も、他の組織に連絡をしなければならない。)

7つ目は監視組織（上の6つにそれぞれに不正な事をしないかどうか監視を付ける。勿論その逆もあり、監視組織もそれぞれの組織に不正を行っていないかを監視される。)

8つ目は民間には知らされることのない組織（世界が危機に晒されると動く組織で、主なメンバーは、なのは、恭也、さくら、アリサ、まだ覚醒していない人で構成される。)

因みに、聖王教会については、なのは、紫、さとり（幻想郷にある地靈殿の主で心や意識を読める能力がある）、リストイ、フイリス、知佳が協会に所属する全員に会つてから判断すると言う事で決まった。こうして会議は終わり、それぞれの場所に戻るのであった。

その翌日、なのはは交渉の為にさざなみ寮と病院に行き、更には幻想郷に行つて該当者と会つた。その結果、全員がOKを出し、なのはそれに深く感謝を込めながらそれに対してもうと頭を下げてお礼を言つた。その時、幻想郷に来たなのはは、ついでとばかりに、にとり&詠林に会つて、それにある依頼をしたのであった。

更にその翌日の日曜日、なのはは朝方から、なのは付きの3機&咲夜と紫、幽々子、レミリア、フラン、ルーニアといった幻想郷の者達と共に、ある所に行つていた。

視点：なのは

私は薄暗い室内で、2人の内1人の男を切り殺した。

「ぐわ～！！」

と悲鳴が聞こえるがそんな事は気にせず、もう1人の男を殺氣を込めて睨み付けた。その男の右腕には刺青が彫つてあり、その刺青には龍という文字があった。そう、此処は私の親戚である御神家と不破家人達を殺した組織”龍”のアジトだ。しかも、その總本山である。つまり、私は今いる所に龍の頭がいるのである。他のアジトには、実践訓練を兼ねて私付きの自動人形3機、つまりアルファ、オメガ、デューケの3機も参加していた。ただ、移動手段は紫さんに頼んだ。更に、その3機が担当している場所以外には幻想郷の住民が参加しており、全ての龍のアジトは、もう直ぐ壊滅という状況であった。因みに幻想郷の住民は、外の世界では力が弱まってしまふので、紫さんや私の境界操作のおかげで幻想郷と同じように戦えるようになつた。今さつき切り殺したのは、龍の最高幹部にして最強戦力の黒龍である。そして、まだ五体満足の目の前にいる男こそ、龍のボス”神龍”である。その神龍が私に向かって

「き、貴様！！御神の生き残りか！！」

と言つ。それに答える義理はないが、とりあえず答える事にした。

「そうだ！！貴様らに殺された一族の敵、今此処で討たせてもらう！！」

と言つた私に対し、神龍は

「フハハハハハハ、やはり生き残つておつたか！！人食い鴉が生きていた事で、ある程度は予想は付いていたが・・・。そうか！！はははははははは！！」

と狂つたように笑い出した。因みに人食い鴉とは私の叔母である美沙斗さんの異名である。そして

「私は今すぐ貴様を殺して、他の御神も殺さなければならぬ！しかし、私には貴様を倒す術がない。」

と言つ。私はある程度奴の考えを読んでいたので

「じゃあ、自爆で私と一緒に死ぬの？」

と余裕の態度で聞く。すると

「はははは、よく見破ったな。では共に朽ち果てようぞ。」

と狂ったように笑いながら私に向かつて走り出した。それも予想の範囲内だったので、私は直ぐに時間停止をしてから風の遍在を使用する。そして、本体の私は遍在を置いてから隙間に入つていった。その後、時間を戻した。すると、神龍は私の遍在に組み付いてから爆弾とライターを取り出してから爆弾の導火線に火を付けた。導火線に火が付いて、その火が爆弾に辿り着くと爆発した。その後、神龍の死を確認した後、私は

「これが本当の無駄死にね。」

と神龍の焼死体を見ながらそう言つと、仲間達と待ち合わせ場所に向かつていった。

視点終了

おまけ

このA、S編1話における色々な補足事項

この会議に出席できる筈の忍とレジアスとゲンヤは、予定が入つていた為に参加できませんでした。なので会議での参加は、第2回以降になると思います。それと、本来は会議に入る事が決まっていたゼスト隊とティーダ元一尉は、会議出席を自分達は戦場の方が合っていると言つ理由で辞退した事になっています。因みに、第一回でカリムの予言詩も読まれている為、内容は第1回会議に出席した人間全員が知っています。その後はその会議に出席した人経由で予言や会議内容が伝わるでしょう。

民間に知られる事のない組織については、まだ名称が決まっていません。存在目的は上記に記してあります。何故このメンバーなんかは、なのはは神で、世界を守るという義務がある。勿論、それは魔装機神のマスターも同様の使命を持っているからです。その義務の代わりに男性は一夫多妻制で、妻を何人も持つ事が可能である。女性は決めた男性を妻が居ようが居なからうが強制的に夫にする事が出来る。その時の男性には、例え魔装機神のマスターであっても同じ組織に所属していたとしても拒否権は存在しないという決め事もあります。それを決めたのはなのはで、その決まりに眉を潜めたのは恭也で、喜んだのはさくらとアリサ（アリサにも好きな人が居ます。）である。因みに、他の人達は苦笑や暖かく見守つたりしていました。

なのはがにとり&詠林に依頼した内容はまだ秘密です。ただ、管理局用の秘密兵器や対抗策だと言う事だけは言っておきます。

龍壊滅時に、原作で美沙斗を騙して利用していた龍の構成員も、デュークによって殺されています。

神龍が狂ったのもなのはが部屋に入った直後に時間停止と精神操作の能力を使用して精神を狂わせて冷静な判断を出来ないようにしたからです。その為、遍在のなのはが何かしらの行動を取らなくても不信には思わなかったのです。

恭也のハーレムフラグが立ちました。次は後編でいよいよ夜天の書が覚醒の日を迎えます。でもその前に美沙斗さんが登場します。それにある人たちも復活します。ただし、復活した人々は本編では殆ど登場しません。登場するとしても番外編です。それと、もしかしたら管理局を利用している闇も動き出すかもしれません。

なのは達が龍を完全に壊滅させたのを皮切りに、その他のテロリスト集団や大規模犯罪組織が壊滅した。勿論、なのは達の仕業である。なのはは、龍の事も含めて香港國際警防隊に伝えた。その事が理由でスカウトされたが、他にやる事があるからと言つて断つた。それから数日後の土曜日、なのははある廃ビルに来ていた。

場所：廃ビル付近

視点：なのは

「此処・・・だね。」

と言いながら私は目的の廃ビルの中に入り、私は完全に気配を消しつつ、気配を探りながら奥へと向かっていく。そして、目的の気配の主がいる部屋へと辿り着くと、一気にその部屋の扉を開けた。それに対応したの気配の主は

「誰だ！！」

と女性の声でそう言つた。その声の主こそ私が探していた目的の人

物。

「始めてまして、御神美沙斗さん。」

そう、私の叔母の御神美沙斗さんである。その後、私は

「龍への復讐は、もうしなくても良いですよ。」

と言つた。すると、龍が壊滅した事を知らない美沙斗さんは

「何故、私が龍へ復讐している事が？それに、なんで復讐しなくて良いなんて言つ？」

と言つてきた。私は仕方ないなと言つような顔をして

「それはですね。・・・私や私の仲間が龍を壊滅させたからなんです。」

と言つと

「本当だろ？ でも、なんで君みたいな子が……「龍を倒したのかつて？ それに、何故龍を倒したのか理由も知りたいと……ほつほづ。」つ……！」

と美沙斗さんが喋っている途中で、私は心を読んだことを口に出した。それに驚く美沙斗さんに私は

「ああ、心を読んで意ことが分かりました？」

と笑いながら言うと彼女から普通の人間や武人が卒倒しそうな殺気を出して

「そいやつて人の心の中に無断で入り込むのは……感心しないな！」

と言つと私に向かつて小太刀を抜き、居抜きの構えを取つた。しかし、それに臆することなく私は懐から待機状態のライトを取り出してから小太刀形態にしたライトを構える。ライトを小太刀にした事には驚いていたが、直ぐに私に向かつて神速を使つてきた。しかし、それは丸見えであり、直ぐにライトと彼女の小太刀をぶつける。パワーもスピードも私の方が圧倒的に上だつたので押し返してから「は～、此方としては話し合いがしたかつただけなんですけどね」と溜息を付いた後にそう言いながら彼女を見つめ

「どうして私が龍を討つのか……。それは私の目と髪を見てもらえれば分かると思いますが？」

と言つた。その言葉で私の顔を見る。すると、私が何者かが分かつたようだ

「確かに……龍を倒す理由はあるな。でも、どうして兄さんの娘が此処に？」

と言つた。その言葉に

「それはですね。貴方に龍を壊滅した事を知らせたかつたんですよ。それにある人達に会せよつと思つたからなんです。」

と言い、更に私は

「一旦此処を出るので、お互に、武器はしまいましょう。ああ、それとですね。誰に会わせるかはお楽しみです。それでは、一名様

隙間に「」案内。」

と言つと、隙間が現れて

「なつ！！！！！」

と驚く美沙斗さんを余所に飲み込んでいった。それを見届けると私も隙間の中に入つていった。

視点終了

隙間に入つたなのはと美沙斗が着いた場所は、月村邸であった。美沙斗はかなり怒っていたが、何とか宥めた。そして、なのはに「会わせたい人つて誰なんだい？」

と聞くと、なのははクライドの時同様に能力を使つた。すると、クライド同様に空間に歪が出来た。ただ、その大きさがクライドの時よりも大きくその大きさがある程度まで固定されると、そこから多数の人間が落ちてきた。そして、美沙斗はその全員に見覚えがあり「静馬さん！－母さん！－父さん！－一臣！－それにみんな！」と大声で叫んでいた。それをなのはが

「落ち着いて下さい。彼らを安全な所に置くのが先決です。」

と宥めた。その後、なのはは静馬＆母さんこと御影＆父さんこと勝＆一臣＆琴絵を高町家に送り、咲夜に面倒を見るようにと念話で命じた。

その他の御神や不破の人間はそれぞれに月村家＆バーニングス家＆綺堂家の別荘や部屋を借りて寝かせた。その御神と不破の人間が寝ている間に、なのはは美沙斗に龍が彼女を利用して、龍の敵対者や邪魔者や暗殺対象を殺させたとつことを話した。それを聞いた美沙斗は深い絶望と後悔を感じて、自分を責めた。なのははそんな彼女に「もし、関係のない人達を殺してしまった事に後悔をしているのなら、その人達の分まで生きて、その人達の分まで幸せに生きて、その人達の為に働けばいいんです。」と諭した。すると

「直ぐには無理だけど。そう出来たらいいな。」

と何とか持ち直した。そこへなのはは

「なり、私達と一緒にある組織を潰しませんか？」

と言ひ。それに対し、美沙斗は

「組織を・・・潰す？」

と聞く。その質問にはは

「はい。今、私は時空管理局と言ひの組織相手に戦争を仕掛けようとしています。その組織は、表向きは真っ当な組織ですが、裏では彼らが

禁じている違法実験等を行つていてなのです。」

と言ひ。すると

「なつ！」

と驚く美沙斗。しかし、なのはは無視して

「美沙斗さんはそんな組織聞いた事がないと思つていますが、それはあくまでも地球上のことです。」

と言葉を続ける。そこに美沙斗が

「じゃあ、どこの組織なんだい？まさか宇宙人が作った組織だなんて言わないだろ？ね。」

と言ひ。その言葉にはは

「正解です。そして、その組織の名前は、ニッシュ・チルダと言ひ星に存在しています。宇宙船については、今は建造最中ですので、大分先になります。」

と言ひ。下手に次元世界の事を話すと頭が混乱するので宇宙といふ事にした。それに対し

「でもどうして私なんだい？私にはたいした力が無いのに・・・。」

と言ひ。それを聞いたなのはは

「向こう側での戦力は、殆ど魔法です。つまり、剣士がいることによつて混乱が生じるのです。それに・・・」

と途中で言葉を止める。それに不審に思い

「

「それに？」

と聞く。そして、なのはは

「それに貴方にも魔力があるのです。それも、管理局側で言うSSSランクのね。ああ、魔法使いには実力や魔力によってランク付けされま

す。そして、美沙斗さんの魔力値は、管理局でも一握りしか存在しないAAAランクの更に上のSSSランクなのです。」

その後、なのははランクについての説明をしてから、魔法を覚えて、共に戦ってくれるかと聞いた。結果は、恩返しと罪滅ぼしの為と言う理由でOKだった。その事は恭也達にも直ぐに伝えられ、歓迎された。こうしてなのは達は、新たな仲間を手に入れたのであった。因みに、土郎や美由希とは再開して、理由を話して美由希とは和解した。その後の美沙斗は、家を買ってから静馬と美由希、それに臣と琴絵の夫婦と一緒に暮らしだした。

そして、なのはは、その日の夜の0時半頃にはやてから夜天の書の守護騎士プログラムが起動したとの連絡を受けた。その連絡により、なのはは急いでハ神家へと向かうのであった。

一方その頃、ある場所では2人の男が会っていた。その一方は白河愁そしてもう1人は暗い緑の髪の色を持つ老人であった。その老人に愁は

「お久しぶりです。ルオゾール。300年ぶりですね。」
と挨拶をした。それに対し、ルオゾールと呼ばれた男も
「ええ、本当に久しぶりですね。クリストフさま。」
と挨拶をした。そして

「さて、再開の挨拶はそのくらいで良いでしょう。それよりもお伝えしたい事があつて此処にきました。」
と愁が言つ。それに反応したルオゾールは
「何でしちゃうか？」

と聞く。すると愁は

「地球と言つ世界で闇の書が覚醒をしました。ヴォルクルス様の復活の為に、それを利用しないではありませんよ。」

と言つ。すると、それに食いつき

「ほう？確かにそうですね。しかし、何故そのような事が分かつたのです？」

と聞く。その問いに

「それはですね。私の転生先が地球だからなのです。」

と愁は答える。それに納得したのか

「なるほど、では早速向かいましょ。」

と言つるオゾールを止めて

「待つてください。迂闊に動いては危険です。時期を窺いましょう。」

と言つ。それに不審に思つたルオゾールは

「何故です？」

と聞き、その答えは

「少しばかり厄介な人達がいましてね。貴方も300年前に何度も会っていますよ。」

と言つと、心当たりがあるのか

「まさか！？」

と驚く。それに頷き

「そうです。魔装機神の何人かが覚醒しているのです。更には、聖王も復活しています。」

と言つ。それに対し

「な、なんと。それは確かに厄介ですね。では、下準備は念入りにしてから動くとしましょ。」

と言つと、ルオゾールは何処かへと転移していった。それを見送つた愁は

「さて、此方は歸らざりました。では向こう側にもこの事を教えるとしましょうか。」

と並んで、転移を使って地球の海鳴市へと向かっていた。

次回はなのはと愁が再開します。更にその後は、なのはがはやて&ヴォルケンリッターに会つて色々と話をします。

はやてからの連絡を受けたのは、高速ではやての家に向かつていった。しかし、なのはは途中で止まつた。なぜならば、白河愁が真つ直ぐなのはの方に向かつてきているからだ。

「ようやく見つけました。お久しぶりですね。聖王陛下。あの世界以来ですね。」

と愁は、なのはから6メートル位の所で止まるといひ声を出した。なのはは

「ええ、久しぶりですね。でも、世間話をしに来た訳じゃなぞいつですね。単刀直入に聞きます。目的は何ですか？」

と挨拶を返して、なのはの前に現れた目的を聞く。すると

「流石ですね。では此方も単刀直入に言わせていただきます。取引をしませんか？」

と褒めてから目的を言ひ。なのはは頭の中を読んでその目的を知つてはいたが、この目の前にいる男がそれを知つたら怒り、どんな手を使つてもなのはを殺そつとするだらう。下手すると地球や他の世界を巻き込みかねないと判断してあえて愁の手の平で踊つているのだ。そして、愁の言葉に

「取引? 何を考えてるんです?」

と真意を聞き出そうとする。勿論目的や真理は知つてはいたがあえて芝居を打つてはいるのである。そして、愁は

「何、そう難しいことではありませんよ。ある情報を渡す代わりに、力を貸して欲しいのです。」

と言つてきたのだ。その言葉に

「で、その情報と力を貸すといつのは?」

と聞くと

「力を貸して欲しいと言つるのは私のグラソゾンの真の力を引き出す為の協力をして欲しいのです。」

と言つてきた。そしてなのはは
「情報つていうのは、それに協力すると約束しなければ教えてもら
えないんですね？」

と聞くと愁は頷いて

「そうなります。で、返答は？」

と聞いてきた。なのははその問い合わせに答える。

「分かりました。お引き受けしましょ。ただし、条件が一つあります。」

と条件付きで了承したのだ。愁はその条件を聞く為に

「何でしょ？」

と言ひ。するとなのはは

「強化する場所は私達で用意しますから貴方も来てください。罷は
ないですから安心してください。」

と言ひ条件を出したのだ。それに

「・・・分かりました。その言葉を信じましょ。それで、場所と
いつのは？」

と少し考えてから答える愁に

「少し厄介なことが起きたので今は無理ですが、兄さん経由で場所
を指定しますので火曜日には学校へ来てください。」

となのはは今すぐには無理だから恭也経由で場所を知りせると言ひ
のであった。

「分かりました。それで、厄介」ととこつのは・・・闇の書絡み
ですか？」

その条件に頷くと厄介」とこつのはは大げさに
「つー！よく分かりましたね。その通りです。」

と驚いて見せた。勿論これも芝居である。その答えに

「フフフ、なら都合がいいですね。」

と笑いながら言ひ。それをなのはは知つてはいたが
「どうこつのことです？」

と聞く。正直、なのはは内心腸が煮えくり返つていた。しかし、そ

んな素振りを見せずに愁の答えを聞く。

「私が交換条件に出した事なんですがね。闇の書絡みなんですよ。その言葉にオーバーに反応しつつ

「なつ何ですつて！…と、いうよりビリービリービリ」と？」

と聞く。すると愁からとんでもないような言葉が出てきた。恐らく、管理局の表側しか知らない人が聞けば卒倒するような内容でもあった。

「ルオゾールが闇の書を利用してヴォルクルスを復活させようと企んでいます。彼は万全に事を起こすつもりです。更に、管理局も関わってくるでしょう。」

と言つ愁に冷静に

「といつことは管理局と貴方以外のヴォルクルス信者は手を組んでるんですね？」

と聞く。それに不審に思いつつも愁は

「はい。というよりは管理局の創設者である最高評議会に管理局を造るよう仕向けたのは他でもないルオゾールなのです。」

と管理局設立にルオゾールが関わっている事を話した。なのははその言葉で態と今更真理に気づいたと言つような表情で

「といつことは管理局を利用しているということですね？」

と言つた。そして愁は此処にいる用がなくなつたので

「そういうことです。では、目的は終わつたことですし、そろそろ失礼させていただきます。」

と言つから去ろうとしたが、なのははそれを止めて

「はい、情報有り難う御座いました。火曜日は絶対に学校に来てくださいね。」

と言つのであった。愁はその言葉に頷き

「いえいえ、お互い様ですよ。学校の件、分かりました。では失礼します。」

といつと、愁は転移魔法を使って何処かへ行つてしまつた。

その後、なのははまた急いでハ神家へ向かっていった。

それから2分後、なのははハ神家についてかつて共に戦った夜天の書の守護騎士達と再会したが、聖王の事すら覚えていなかった。なのははその事を覚悟はしていたが、実際にその事を突きつけられると、辛いものがあった。しかし、直ぐに気持ちを持ち直して自己紹介をしてからはやてにも話していた計画を守護騎士に話した。

「そんな事になつていたとは！！」

「でも、信用出来るのか？」

「そうねえ。でも、この子が嘘をついてるとは思えないですし・・・」

「そうだな。それよりも主にどうするべきか聞くべきであろう。」

とそれぞれの意見を口にした。そして、彼女達は、自分達の主であるはやてに任せた事にした。それはやはては

「そうやな。私としてはなのはちゃんの意見に賛成や。私はシグナム達とずっと一緒に暮らしていきたいしな。だとしたらなのはちゃんの考えた方法が一番ええと思つんや。」

と自分の意見を言った。それに対し、守護騎士達はそれぞれ「それが主のお決めになつた事ならば。」

「我等に異存はありません。」

「そうだな。あたし達のやる事ははやてを守り、支える事だからな。」

「そうねえ。考えてみたらそれが一番手っ取り早い方法でしょうね。でも、大量の魔力はどうするの？なのはちゃん。」

と言い、泉の騎士シャマルが完成に必要な魔力について聞く。するとなのはは

「それについては大丈夫ですので心配しないで下さい。」

と言つ。それに剣の騎士シグナムが

「まさか、高町。お前は自ら収集される気か？」

と聞いてくる。その質問になのはは以外が驚くが、それを無視してな

のははそれを

「違うよ。実は少し前に21個のロストロギアがこの世界に現れたんだけど、その魔力量が合計で690ページ分位あるんだ。」

と否定してジュエルシードから取り出した魔力を使うと言つた。すると鉄槌の騎士ヴィータが

「じゃあ、なんで今から使わねえんだよ！？今、それを持ってるんだろう？」

と言つ。なのはは

「気持ちは分かるけど、焦つたら碌な結果にならないよ？物事には時期とかがあるからそれまで待ちなさい。」

と焦るヴィータを落ち着かせる。そして

「実はね。今開発中の兵器があるからその実験もその時にやるつと思うんだ。だからそれまで待つってね。」

と言つのであつた。

こつじてなのはは本来起きるはずの魔導師襲撃事件を未然に防いだのであつた。

それから火曜日に愁は約束通りに学校へ来て、学校が終了すると恭也と共になのはが用意した施設へと転移で向かつていつた。勿論、転移魔法を使用したのは恭也である。そして、着いた先はなんとコテージだつた。実はこの場所、バーニングス家が所有している別荘の1つを改造して、地下にかなり高度な開発施設を創設たのだ。因みに此処は、S+Sサウンドステージで六課の拠点となつた場所である。そして、2人は地下室に入るとそこで待つていたのはなのはと忍だつた。愁は忍が居る事に多少は驚きながらも

「聖王陛下、來ましたよ。それにしても田村さんまでいるとは思いもしませんでしたよ。」

と言つた。それに対し忍は

「まあね。私も魔装士だし、趣味は機械弄りだからね。それにしても

もなのははちやんから貴方が来ると聞いた時は驚いたよ。」

と言ひ。そこをなのはが
「まあ、そんな事より早く済ませましょ。愁さん、グランゾンを
渡して下さい。」

と言ひ。それに愁は

「はい。では私も手伝いましょ。」

と言ひた。なのはは頷くと、愁に指示を出した。

それから約3時間が経過し、グランゾンは完全に完成した。

「出来た。これでこのグランゾンは完全に本来の力を引き出せます
よ。はい。」

となのはばがと言いながら愁にグランゾンを渡した。そして愁はそれを受け取つて

「有り難う御座います。では、機能や性能を試したいので模擬戦をお願いできますか？」

と言ひた。それに名乗りを上げたのはなのはだつた。

「じゃあ、私が相手をしましょ。ああ、全力で掛かつて来て下さい。じゃないと死にますよ？」

と言ひた。それに対し愁は

「分かりました。貴女の力を見ておきたいですし、丁度良いですよ。」

となのはの言葉に賛成してから

「グランゾン・・・いえ、これからはネオ・グランゾンと呼ぶ事にしましよう。」

と言ひと、それに反応してネオ・グランゾンの「アガ光つた。そして
「ネオ・グランゾン、セットアップ！」
と叫び、愁は黒い光に包まれたのだつた。

なのはがオウカを元の世界に返して6日が経過した。なのはは約束通りに連絡をよこし、その12日後に入れる事が決まった。しかし、ハガネやヒリュウ改は任務の最中だったのでその作戦になのはも秘密裏に参加する事になり、なのはとはハガネとヒリュウ改の予定航路の途中で合流する手筈となっていた。そして、その場所に、出迎えと偵察を兼ねてATXチームとオウカが来たのであつた。

「オウカ、この辺か？」

そういうのはキョウスケ・ナンブ中尉。ATXチームの隊長である。

「はい。キョウスケ中尉」

と返事をしたのは、なのはに助けられたオウカ・ナギサである。

「それにしても、なのはちゃんってどんな子なの？オウカちゃん。と聞くのはエクセルン・ブロウニング少尉。ATXチーム1の狙撃能力を持つ機体”ライン・ヴァイスリッター”を駆る美女である。そして、そのエクセルンの問いにオウカは

「そうですね。人の心が読めて、機体を数日で開発できる可愛らしい9歳の少女で、金髪で翠と紅の瞳が特徴です。それと、此処に来る時に実験機に乗つてくると連絡がありました。」

と言つ。しかし、そこへ警戒音がなり、敵が現れた事を知つた。それに直ぐに反応したキョウスケが

「ちつ！仕方がない。各機、散開して各自敵機を迎撃！！！」

と各自に指示を出して自らも敵機に向かう。今回の敵には、指揮官クラスであろう槍を持つた蒼い機体がいた。そう、デュミナスの勢力が攻撃を仕掛けて來たのである。

「どんな装甲だろうと、討ち貫くのみ。」

と言いながら、キョウスケの愛機”アルトアイゼン・リーゼ”がバンカーで装甲を打ち抜き、時にはプラズマホーンで敵を撃破してい

く。更には

「ハウリングランチャーEモードつと、いざ。」

と言いながらライン・ヴァイスリッターのハウリングランチャーからビームが連續で発射され、それに当たった敵機は次々に落とされていく。そしてオウカも

「なのはとの再開を・・・・ジャマするな！！」

と言いながら、なのはから貰つた機体にして愛機”ラピエサーデュ改”が持つてている2挺のオクスタンライフル改をEモードで発射して敵を撃破していく。それに続き

「行こう、クスハ。」

「うん、ブリット君。」

と言いながら敵機群に向かうのは、龍虎王を駆るクスハとブリットである。そして

「九天応雷声普化天尊！！！」

とクスハが叫ぶと、符から雷が出てきて敵を次々に落としていく。こうして敵はあつと言う間に減つていき、最後には槍を持った蒼い機体だけが残つた。しかし、ピキーンつとクスハとブリットは何かを感じ取ると

「クスハ！！！」この感じは！！！」

「うん。何がが来る！！！」

と言つとオウカも

「皆さん気をつけて下さい。敵が0時方向から転移してきます。しかも、かなりの数です。」

と言つ。すると、オウカの言う通りにかなりの数の機体が転移して現れた。その数は約40機、そして更にその先頭にいるのは

「遅いから着てあげたわよ。」

「助けに来たよ。」

と2人の少女が乗るシュガテールとエレオスの2機が現れた。

その声に安堵を覚えたのか

「ティスにデスピース？！助かつたよ。流石に僕一人じゃきつい相

「ティスにデスピース？！助かつたよ。流石に僕一人じゃきつい相

手だったから。」

と言つ少年。それに

「 そうだね。でも、間に合つてよかつた。」

と言つテスピニス。そして、そんな暢気な2人に

「 そうね。でも話は此処までよ。ラリアー、テスピニス。奴らを倒さなきや。」

と言つのはテイスである。そのテイスの言葉に

「 「了解!!」」

と言つと3機は連れて來た約40機と一緒にキヨウスケ達に向かつていつた。しかし、彼女達は知らなかつた。上空から來る圧倒的な力を持つ存在が現れるのをまだ知る由もなかつた。そして、その圧倒的なりから前の前に3人は恐怖する事になるなど、この戦場にいる誰もが予想出来なかつた。

A, s 編第3話「取引と守護騎士と強化」（後書き）

やつぱり、かなり駄文ですね。r_nまあ、私の文才は小学生の低学年にすら負けますから仕方ないんですけどね。さて、次か次の次でようやくアンケートで出て来た名前の人方が地球に来ます。その他にもハッシュドにも誰か出す予定です。

なのはと愁はネオ・グラントンの完成度と機能を確かめる為に「テージの上空で模擬戦を行う事となつた。勿論、結界魔法を発動させて。そして、なのはと愁は

キン・・・・キン・・・・ガキン！－！

つと大剣と2本の小太刀で激しい速度で切り結び合つている。その戦いを見ている忍はその速度を見て

「何これ、愁つて本当に人間！？あのなのはちゃんと手加減していふとはいえ、あそこまで戦えるなんて！－！」

と驚く。それに対し恭也は

「それは多分、愁が限界まで身体能力や感覚を強化しているからだろ？だから、あそこまでやれるんだ。愁は接近戦の技術では俺よりも低いからな。」

と分析をする。そして、その分析で疑問を思った事を聞く。

「つて事はかなりギリギリのところまで強化してるつて事？」

そして、恭也はその質問に答える。更に、なのはについても分析をしだした。

「そうなる。そしてなのはも手加減しているので精一杯と言つ事も関係しているだろ？がな。」

と2人の戦いを冷静に分析していた。それに対し

「へえ、じゃあ私も接近戦習おうかな。」

と驚きながらそんな事を言つ。それに興味を持ったのか

「誰にだ？」

と聞くが、その質問は地雷だと言つ事に気づいてしまつた。なぜなら、恭也を見て悪意のある笑顔見ていた。そして

「勿論、恭也によ。」

といった。それを反論しようと

「あのな・・・家の剣は「部外者に見せたり教えたりする物ではな

「いつて言いたいんでしょ？」「……ああ。」

と恭也が何か言おうとした時に忍がその言葉を先に言い、更に「それなら、心配しないで。私、恭也の妻になるから。あ、そういうばさくらも恭也と結婚した言つていてたよ？あの会議の事をさくらから聞いたんだけど、なのはちゃん曰く、「兄さんの事が好きな人が多いから、もしそのことを知った兄さんはかなり迷うし、もし誰かを選んでも、その人達が悲しむ。私は知り合いが悲しむのを見たくないから。」って言つてたわ。ああ、それは錯覚だとそういうことは私達みたいな本気で恭也が好きな人達を悲しませるだけだから止めてね？今までだつてかなりきつかったんだから。」

と言つ。その言葉に忍やさくらの気持ちを知った恭也は「本当にすまなかつた。お前達がそこまで俺を思つていてくれていたとは気づかなかつた。」

と言つと忍を抱きしめる。そして

「分かつた。お前がそこまで言つのなら剣を教えよ。その代わり、今までの事は許してくれるか？」

と言つた。その言葉に涙を浮かべて

「うん、うん！！」

と恭也の胸に顔を埋めながら頷いた。その目には薄つすらと涙が流れていった。そしてそこへ

「「いちゃついてる所悪いが、2人が戦いが終わらせて此方を見ておるぞ？」」

と言つ声がする。その声の主は恭也のデバイスであるサイバスターの精靈”サイフィス”と”ティアクスの精靈”タナス”であった。そして、戦いが終わつたと言う言葉にハツと気がついた。そう、此処には恭也と忍、そして模擬戦をしていた2人しかいないので。それはつまり

「中々、面白いものを見せてもらいました。」

「あはは、まだ続けていても良かつたのに。」

と愁となのはに見られていたのだ。それを照れながら隠すかのよう

に恭也は

「そ、そんな事より模擬戦はどつたんだ？」

と言ひ。それに続き、忍も頬を赤く染めながら

「そ、そうよ！ 結果はどうなつたの？」

と誤魔化そうとした。その問いに

「ああ、それなら私の負けでした。いや、それにしてもお強かつたですね。かなり強化された上に新たな武装を手に入れたネオ・グランゾンが、本気を出した状態ですら手加減された状態で負けるなんて思いませんでしたよ。」

と愁が答えた。そしてその後、愁は2人をからかい始め、それをなのはが止めるというハプニングが発生したが、それは直ぐに收まり、その後直ぐに愁は

「お世話になりました。では聖王陛下、恭也、忍。またお会いしましょう。」

とお礼と挨拶を言つと、転移魔法で去つていき、それをなのは達3人は黙つて見送るのであつた。その時に恭也は（あいつが礼を言つなんて・・・明日は槍か何かが降つてくるのか？）

と思つたのは秘密である。勿論それはなのは心を読んで知つていたが、黙つている事にした。それから、恭也はなのはに「なあ、忍がさくらさんや他の人が俺の事を好きだと言つていたが、誰が俺の事は好きなんだ？」

と聞くとさくら＆雪＆那美＆知佳＆フィリス＆美由希＆フィアッセだと教えた。そして

「だけど、本来はそういうのは自分で氣がつくべきだけどね。」

と言い加えた。それからの恭也は皆と結婚するのは満更でもなく、更には、皆を悲しませたくないと言う理由で、該当者（全員、なのはの時間停止のお陰で來ても大丈夫なようになつていて）を同じ場所に呼び出して

「俺なんかで良ければ、管理局との戦争が終わつた後に結婚していく

ださい。」

と対象者に言つたのであつた。その言葉に最初は戸惑つた彼女達だったが、最終的には

「「「「「「はい！...」「」「」「」」

と頷いたのであつた。何故、こつも話が良い方向に進みすぎるのかと言つと、第1回管理局対策会議についての内容は、高町家やさざなみ寮にも伝わつており、更にはなのはや恭也の母親である桃子や祖母の御影の鶴の一聲があつたのも原因である。こうして管理局との戦争後は、高町恭也はミッド限定ではあるが、一夫多妻という何とも羨ましい状況となる事が決まつた。これは完全に余談ではあるが、恭也が告白してから、地球でも数カ月後に何らかの力により歴史が大きく動かされる事になるが、それはまだ先の話である。

この模擬戦から4時間が経過した。既に、周りは暗くなりかけていた。

そんな中、又もや次元に歪みが出来た。しかも、今回は幾つかの歪が出現し、その全ては何故か海鳴市に集中していた。1つは月村邸の庭に、1つは国守山に、1つは八束神社に現れた。そして、その時にちょうど散歩をしていたシユルロットが、月村邸に出来た次元の歪が発生した所を偶然見かけ、その場所に興味半分、警戒半分の気持ちで向かつて行つた。すると、そこには死んだはずのハルケギニアでの友にして同じクラスだったキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルブスやただのクラスメイトであつたギーシュ・ド・グラモンやモンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシ、それに学院長のオールド・オスマンの秘書だったミス・ロングビルことマチルダも横たわつていた。それを見つけたシャルロットは驚きながらも放つてはおけず、急いで自分の使い魔の風韻竜”シルフィード”を口笛で呼んだ。シルフィードが到着すると、直ぐに4人をシルフィードの背中に乗せて月村邸に向かつていった。そして、他の所にも次元漂流者が流れ着い

ていた。

おまけ1

外伝 オウカが帰ってきた世界～中編～

約40機（正確には42機）と指揮官機である3機と戦わなくてはならなかつた4機はその圧倒的な数に驚きながらも戦つていた。しかし、指揮官もいたのでその戦いは一方的にATXチーム+オウカは追い詰められていく。しかし、そこへクスハとブリットが上空で何者かの強大ではあるが優しい念を感じ取つた。そして、その後直ぐにオウカからATXチームに向かつて通信で

「皆さん、なのはちゃんが来ました。」

と言つ。すると彼女の言葉の後に上空から白くい機体が姿を現す。その機体は、通常のPT又はMSのサイズと特機サイズの中間位のサイズであつた。そしてその白い機体から通信が入る。

「此方、高町なのは！ そちらを援護します。」

そう、その機体のパイロットはオウカの待つていた高町なのはであり、その白い機体は試作型のゴッド・グラギオスと言う機体であつた。そして、その機体はデバイスであるグラギオスと瓜二つなのだ。それもそのはずで、本来はグラギオスに機動兵器の機能を持たそうとしたのだが、なのはは別の方法を思いつき、同じ形状をした別の機体を作つた。それがゴッド・グラギオスである。このゴッド・グラギオス、性能的にはグラギオスと同等なのが、特殊機能がエネルギー・フィールド、自己修復、自己補給しかない為に総合的にはグラギオスに劣つてゐる。しかし、それでも高性能なのは確かで、そこの機体どころか、この世界にも存在するグランゾンやネオ・グラソンゾンですら手を出せない代物となつてゐる。そして、この機体の

ゴックピットにはグラギオスを填め込む穴があり、そこにグラギオスを入れると性能が向上し、更にはグラギオスの機能も完全に使えるようになるというものだ。しかし、今回はグラギオスは填め込まずそのまま運用してデータを取ろうという訳だ。特に今回は1対多を想定していたので、大威力、又はMPW（簡単に言えば、広範囲の敵を纏めて殲滅するのに使う兵器の事）の性能を確かめたかったのだ。その時に任務の事を耳にしてそれに参加すると言い出したのだ。そして今、友軍機が数的に不利な状態で危機的な状況に陥っていた。なので、宇宙から降下すると直ぐに通信を送り、敵軍に自身で突撃する。それに怒りを感じたのか

「ふんっ！たった1機で何が出来るつていうのさ……やつちまいな！！」

と言つ指揮官機の命令で、残りの31機がゴッド・グラギオスに向かつて来た。しかし、なのはの狙いはMPWの威力と距離の実験である。つまり、この状況は、なのはの狙い通りなのである。そして

「掛かったね！！！」

と敵指揮官に言つ。それに対し何が掛かったのか分かれない指揮官の少女は

「何！！」

と驚くだけだつた。それが最大の隙となつた。既にエネルギーの充填は完了している。その為、ゴッド・グラギオスから途方も無いエネルギーがあふれ出していた。そこへなのはが

「行くよ！ゴッド・フラッシュ！？」

と叫ぶ。すると、今まで溜めていたエネルギーが一気に周りに溢れ出した。そして、それは残りの31機のみならず3指揮官機+1機（パテールで途中で呼び出した。）や味方のATXチームやオウカ機をも巻き込んだ。31機は全て撃墜され、指揮官機3機と1機はかなりのダメージを追つた。そうなると、味方の方にも被害がでたかに思われた。しかし、なのはが使つたのは敵味方識別型の兵器なので、サイバスターのサイフラッシュと同じような物である。な

で、味方には被害は無かつたし、前もつて敵側だけ時間停止して、その時に通信で知らせていたので驚く事も無かつた。因みに、時間停止したのは「此方、高町なのは！！そちらを援護します。」と言つた直ぐ後である。こうして敵は撤退していき、なのはとオウカは再開を果たすのであつた。

おまけ2

機体・デバイス設定

ゴッド・グラギオス

創造神グラギオスが宿つていらないただの機体で待機状態にはなれるが、デバイス形態にはなれない。

性能はおまけ1に書かれている通りで、グラギオスに劣つている。しかし、待機状態のグラギオスを填め込む事により性能がそのグラギオス分向上する。ただ、この機体は試作段階であり、完成に至るまではもうしばらく時間がかかる。因みに、完成型の名称はソル・グラギオスで、この機体は3機存在しているが、その内の1機は完成型のソル・グラギオスに改造し、もう2機はそのままの状態運用される予定で、その内の1機は平行世界の地球のテスラ研にグラギオスとの融合機能などの重要な所をオミットしてから研究材料として渡される事になる。それとグラギオスシリーズ3機で融合という計画がある。また、待機状態でデバイス形態のグラギオスとも融合が可能で、融合状態でもゴッド・グラギオス分の性能が上がる。オリジナル武装として、ゴッドブラスターとゴッドランサーが搭載されている。勿論、ファンネルもグラギオスと同じ数ある。

ソル・グラギオス

ゴッドグラギオス同様に創造神グラギオスは宿つていなただのデバイス。

ゴッド・グラギオスの完成型で、ゴッド・グラギオスに聖王なのは側のグランゾンやネオ・グランゾン等のデータを使用して完成する。また、グラギオス同様にデバイス機能や他のグラギオスとの融合機能を持つている。この機体とゴッド・グラギオス、そしてグラギオスと融合する事でカイザー・グラギオスとなる。尚、デバイス形態や機動兵器状態は、オリジナルのグラギオスよりもネオ・グランゾンの方に近い。耐えられる魔力値は10億。

オリジナル武装としてソルブラースター・キヤノン、ブラックホールクラスター改、縮退砲改、ソルワームソード、ワームスマッシュヤー改、グラビトロンカノン改等を搭載する予定。勿論、ファンネルもグラギオスと同じ数ある。

アルティメット・グラギオス

グラギオス同様に創造神グラギオスが宿つて いるデバイスで、グラギオスという名を冠するデバイスや機体の中でも最強の性能を誇る。管理局やその他勢力との決戦用に使用予定のデバイスで、グラギオス、ゴッド・グラギオス、ソル・グラギオスが融合する事で完成するデバイスで、グラギオスの3倍以上の性能を予定している。耐えられる魔力値は1000億を予定。

グラギオスシリーズの攻撃や機能が全て使える。ファンネルは3機の合計分また、新たな攻撃方法として神の舞を使用予定（某勇者王に出てくる天龍神の攻撃である光と闇の舞が元ネタです。）更に、別の神との連携による神々の舞も予定している。（他の神が出ればの話ですが・・・。）

ネオ・グランゾン

種類：鎧型デバイス

待機状態：黒い宝石

特殊：強化型重力フィールド、ドラグーン（暁ガンダムのドラグーンの色をネオ・グランゾンと同じ色である黒にした物を6機）、魔力吸收、魔力反射、魔力回復、自己修復。

主な改造者は高町なのは（元になつたグランゾンの製作者にして、マスターである愁はあくまで手伝つただけである。）

原作のネオ・グランゾンには無い魔力ライフル（ビームライフルの様なもので、暁ガンダムと同じ形で、魔力サーベル又はグランワームソードを繋げて銃剣形態に出来る。）魔力サーベル&内蔵型の魔力か実弾選択できるマシンキヤノンを初めとした武装が搭載され、特殊な物もグランゾンの時にあつたもの以外に追加されており、武装の数が多くなり、攻撃や戦術の幅が広がつたといえる。シャイニングフインガーと言う特殊なクローパークを取り出して腕にはめる事で、超高出力の魔力サーベル兼クローアームを使用できる。また、ラ・ギアス、アルハザード、古代ベルカ、近代&古代ミッヂチルダの英知に結晶である。更には、装甲には改良型のZ・O合金が使われている為、かなりの強度と再生能力を持つ。また、ある程度の魔力吸收や反射も可能。

愁さんをかなり強化してみました。少し子安さんネタがあるのは気にして下さい。これぐらいないと愁さんが、最強の力を持ちながら、オールラウンダーであるなのはにあつけなくやられてしまうので・・・・。

さて、闇の書は何時覚醒させて助けようかな～。もうそろそろ頃合いなんだけど、何か足りない気がするんですね。

おまけ2にある神の舞はずっと前から暖めていた案でした。もつとも、考えていた時はオリジナル同様に光と闇の舞と言つた前でした

が・・・・。

八束神社に出現した歪から出で来るのはウホールズで、国守山に現れた歪から出で来るのはアンリエッタを予定しています。

因みに、結婚については、アリサも恭也が好きだけどまだ幼いので、成長してから自分で何とかしてもらおうと考えていたので、なのはは懲とアリサの名前を言いませんでした。

シユアルロットが、級友達を見つけて月村邸に戻つて来る前、恭也となのははいつもより遅い鍛錬を八束神社でしていた。そんな時、その鍛錬していた所に、次元の歪が現れた。それに気づいたなのはと恭也は、その歪の中から出てくるであろう者と何時でも戦えるようになると、自らの得物を構えていた。しかし、その必要がなく王侯貴族が着る様な服を着た金髪の美少年が気を失つて倒れていたからだ。なのはと恭

也は互いに顔を見合わせて

「とりあえず、さくらさんの所に行く？」

と言つ。それに恭也が頷いて

「ああ、月村の屋敷はもう入らなそうだからな。」

と言つ。そしてそこへ

「あつ！もう一つ割と近くにこの歪と同じ物が現れたから、私はそっちの方に行くね。」

と言つるのは恭也は

「分かった。じゃあ、そっちの方は頼んだぞ。」

と頷いてからそう言つ。それに

「分かつて。じゃあ、さくらさんの屋敷でね。」

と言い、恭也も頷いて

「ああ。」

と返事してから、恭也は氣絶している美少年を連れて転移した。そして、それと同時に隙間でなのはは国守山で発生した次元の歪が発生した場所に向かつていった。そしたら、予想通りに人が倒れていった。その人物は今度は美少女ではあるが、王侯貴族の様な服装をしていた為、先ほどの美少年と関係があると判断しながら、綺堂邸に隙間を使つていくのであった。そして、綺堂邸に着いた時には既に恭也が着いていて、例の彼は客室のベッドで寝かされていた。なの

はとさくらは、その美少年が寝ている部屋を出て隣にある別の客室になのはが隙間を使って寝かせた。それから、その美少年と美少女が何故この世界に来たかという事を調べる為に記憶を読んだ。すると、あの2人がなのはが密かに気に入らないと思つていたハルケギニアの住人で、美少女の方はハルケギニアでなのはが呼び出され、更には愁と会った場所。そう、トレスティンの王女だということが分かつた。確かに、愁はなのは達と別れた後にまたハルケギニアに現れた事を、取引の時に愁の記憶を読んで知つた事だが、この世界に来るとは思わなかつたし、こんなに遅く転移するとは誰も思つていなかつたのである。そして、そこへ忍から通信が入つた。その内容は、次元の歪から現れたのが、トレスティン魔法学院の関係者であると言つ事だつた。忍が知つてゐる理由は、シャルロットが教えたからである。しかし、もう遅いと言つ事もあり、なのはと恭也は自宅へと帰り、その事を家族に説明した。勿論、その事を聞いた人間の殆どがどうして?と考えていたが、なのはと恭也はなんとなくではあるが、何か近い将来良くない事が起こるのではないかと感じずにはいられなかつたのであつた。なので、なのはは未来予知、恭也もラプラス・デモン・システム(サイバスターや他の魔装機神に搭載されているシステムで、最近恭也がサイバスターを使いこなせるようになつた事で使用できるようになつたのである。その機能は、原作のラプラス・デモン・コンピュータとほぼ同じである。)を使って未来を見た。その事がきっかけで、第2回対管理局会議が行われる事になるのは、そう遠くはなかつた。

それから翌日

なのはは、朝5時に起床して、1人で八束神社で鍛錬をしている時、ジエイルから通信が来た。

「なのはくん、少し良いかね?」

と言つジエイルの顔はいかにもすまなそうな顔をしている。それには気にせず

「何ですか？ジエイル博士。」

となるのはは聞く。すると

「実は、例のデバイスと兵器が完成した。」

とジェイルから報告が来た。それに対し、領きながら

理学の歴史

「ああ、それで、河合計画を決行するのだね？」

と聞く。あると

「うん、とりあえず早めに助けたいので、6月25日を予定しています。」

と答える。それに頷き、ジエイルは

その言葉に、彼の心がまたまた震ふ。

「何ですか？」

ひなのせせ驥ぐ。あぬ

「管理局の艦隊が、地球に来る事が判明した。その中にはリンディ提督、レティ提督、グレアム提督といった稳健派のリーダー格の人達が指揮する艦や、稳健派の殆どの艦隊が集結するそうだ。」

と聞くジエイル。それに対し

「そうですね。恐らくアルカンシェルが全艦に搭載されるはずです

「どうしたのかね？何か良い案が浮かんだのかね？」
と聞く。するとなのはは
「うーん、その最中何か思いついたようだ。その事を不思議に思い

「なるほどね。それなら可能だね。それなら、その為のエネルギーはどうするのかね？」

とその計画を認めるよつた態度で言ひジエイル。そして、その計画に必要な物について聞いた。すると

「それに、一しても問題ありません。協力者達を連れて行きますので

と心当たりがあるようで、なのはは笑顔のまま言つた。それに関心を持つたのか、「ほつ。」と漏らしてから

「君がそう言えるほどの者達ならば大丈夫だろう。では、私はこれで失礼するよ。」

「おお、その辺の正解かな？」

「分かつた。」
「言こと シュイ川に詠してから

「あれは向こう側では既にプロトタイプが完成してるから、そのデータと私達の知識や力を加えれば、あの計画は完成したも同然。」
と言い、更に

イージスの盾を。「

「ああ、言い忘れていたよ。実はね、ミヅダの耳の長い女性が転移してきたんだよ。」

と書いて来た。なのほはそれを聞いて、ハルケギニアに住んでいたエルフではないかと推論を立てる。しかし、今の段階では何も分かっていないので、詳しく聞く事にした。

「それで？」

と聞くのはに

「一応、私の方で保護しているのだけども、その転移の仕方が変なんだよ。」

と言う。それを聞いた時、なのはが自分の仮説は間違いじゃない事を確信した。そして

「もしかして、魔力反応がない代わりに、重力反応があつたとか？」

と聞いた。それを驚きながらも

「そうだ。よく分かつたね。」

と答えるジエイルにはは

「実は・・・・」

同じ現象が地球でも起こり、何人かが次元を超えて来た事を教えた。その偶然に疑問を抱きつつも、2人はハルケギニア組の事を話し合つた。その話し合いは、そのハルケギニアから来た異邦人の話を聞いてからと言う事になり通信を終えた。

それから数時間後、ハルケギニアから来た綺堂邸にいる2人は目を覚まし、月村邸でもハルケギニアから来た人間達が目を覚ましたと言つ。

その後、なのは達はハルケギニアに住んでいた者たちが全て死んでいる事を教えた。最初は信じるものが居なかつたが、なのはによつて現在のハルケギニアに連れて来られて、その事を信じるほかなかつた。そして、ハルケギニアが消滅した最大の理由も明かした。それは、ルイズの召喚魔法によつて連れて来られた愁が、その事を怒つていた事と自分の目的であるヴォルクルスの分身体を復活させる為に、ハルケギニアに住む生き物達を、例外なく皆殺しにしたことである。そして、なのはは更に

「ルイズさんは虚無だつた可能性が極めて高いのです。なので、貴方達がブリミルを信仰していると言うのなら、それは、貴方方以外のハルケギニアの行ける物全てが滅ぶ事も、貴方達の神の意思だと

「 いふことですね。」

と言つ。その言葉によつて何人かがブリミル信仰に絶望して止めた。そして、地球で生きる事を決意した。けれども、それでも割り切れないいらしく平民がどうとか言つギーシュも、この世界に生きる事を決めたモンモランシーの説得によつてこの世界に生きる事を決めた。因みに、なのはが聖王という王族で、聖王教会の主神である事を知つて、驚いたのは言つまでもない。その後、ハルケギニア組はなのはに恩返ししたいので一緒に戦うといった。こうして、なのは達に新しい仲間がまた出来て、戦力が増えた。尚、ハルケギニア組にはデバイスがなかつたので、フレシア、ジェイル、忍に依頼する事となつた。それと、シャルロットもデバイスを欲しがつたので、一緒に造る事となつたのだった。

おまけ1

外伝 オウカが帰つた後の世界（後編）

なのはが敵部隊をほぼ壊滅させて数分後、なのははATXチーム+オウカによつてハガネに案内された。その時に、機体は待機状態にして首に掛けた。その時に、出迎えとしてオウカのスクール時代の弟と妹であるアラド・バランガ、ゼオラ・シユバイツア、ラトウニ・スウボータがやつて来て、それぞれがなのはにお礼を言つ。しかし、気にしないでと言つた。そして、彼らや偵察に出ていたATXチーム+オウカによりなのははハガネのブリッジに案内され、今回の戦闘についての報告が行われた。そして、遂に今回の作戦についての話が始まつた。その作戦とは、最近現れた修羅という勢力に制圧された、香港基地の奪還である。しかも、そこはかなりの重要

拠点と言つ事もあり、かなりの部隊が展開されているとの事だつた。そして、作戦会議にはなのはも参加した。そして、今回の作戦ではなのは、この世界のサイバスターの操手であるマサキ・アンダー、敵味方識別型殲滅兵器を持つヴァルシオーネのパイロットであるリューネ・ゾルダークの3人で行くことになつたのだ。最初は皆渋つたが、時間が限られている事と、多くの殲滅向きの兵器を持つているのはの「ジド・グラギオスとサイバスターとヴァルシオーネが適任とされ、ハガネとヒリュウ改は後方で待機となつた。そして、香港基地へ向かう途中、なのはがマサキに話しかけた。

「マサキさん、少し良いですか？」

と通信で聞く。

「ん? なんだ?」

とマサキが返事をすると

「白河愁つて知つてますよね?」

と聞くと頷いて

「ああ、ただこつちではシユウ・シラカワだけだ。それがどうした?」

と言つ。すると、今度はマサキではなくリューネから

「もしかして、シユウとは知り合い?」

と言つ質問が来た。それに対しなのはは

「ええ、向こう側の……ですが。」

と頷いた。それにマサキは

「そうか。」

と小さく言つ。なのはは彼なりに思う所があるのだろうと思つ、その事には触れなかつた。その代わりに話題を変える事にした。

「それと、もうひとつ聞きたい事があるんですけど……。」

と言つなのはにマサキが

「なんだ?」

と反応する。そしてなのはが

「破壊神ヴォルクルス、創造神グラギオスつて知つてます?」

と聞いたその瞬間、マサキの顔と声の質が変わり
「何故その名を知っている?」

と聞いてきた。しかし、ラ・ギアスの事を殆ど知らないリューネは
驚きながら

「ええっ!! 何? そのヴォルクルストかグラギオスって?」
と聞いてきた。それにマサキは

「ああ、ヴォルクルスって言うのは、俺の第2の故郷のラ・ギアス
では破壊の神として恐れられていてな。創造神グラギオスって言う
のは大分大昔のラ・ギアスでの主神だ。もつとも、その信仰は既に
精靈宗教に変わっていて、その信仰者は殆どいない。だが、シユウ
みてえにヴォルクルスと契約している奴もいるから、少なからず居
るんだろうな。」

と答えた。それに

「へえ~、つてシユウも信者なの? 信じられない!!」

と驚いて聞くリューネ。その質問に

「ああ、向こう側ではわからねえがな。」

となのほの「ハッド・グラギオスも方を向いて答える。それに対し
「私達の次元では、既に信者ではありませんが、自分を操ったヴォ
ルクルスを倒す為に復活させようとしています。」

と答える。それに納得したようにマサキは頷くと

「なるほど、でも復活させようとしているのは一緒なのか。」

と言つ。

「そうみたいですね。因みに、私がこの2柱の神を知っているかと
言つと、私もヴォルクルスとは前世から因縁がありまして、グラギ
オスに関しては、私のデバイス、まあ魔法の補助具のことですが、
中には創造神グラギオスが入つていて契約しているからです。因み
に今私が乗つている機体もグラギオスの名を冠しています。とはい
つても名前だけですが・・・と見えてきました。香港基地で
す。」

そして、基地に着いたなのは達は、なのはの敵味方識別殲滅兵器

サイコフラークシユ”により基地に駐在していた敵機全てを殲滅し、基地内部に居た修羅たちも機体を降りたなのはによって全滅した。なのはが基地内部に居る途中、敵の増援が着たが、マサキとリューネの活躍により、これを退けた。こうしてなのはの此方側での任務は終了したなのは達3人はハガネに帰還してテツヤ艦長に報告した。なのははこれから元の世界に帰ると言い、艦長に小さな箱を渡した。その時にテツヤ艦長が

「これは？」

と聞いた。すると

「この中身は、私が乗っていたゴッド・グラギオスと同型の機体です。詳しい事やデータは、この箱に入っている取り扱い説明書と端末を見て下さい。テスラ研とマオ社に渡して参考にして貰えば、そちらの世界の機体性能がかなり上がりりますよ。」

と言った。そして

「もしかしたら、私も貴方方に力を貸してもらひかもしだせんので、その前払いとお考え下さい。では、私はこれで……。」

と言つと、なのはは踵を返し、ブリッジを後にした。その後、オウカやハガネクルーやヒリュウ改クルー達に別れの挨拶をして、元の世界へと帰つていった。こうして、今代の聖王である高町なのはの第1回目の平行世界の旅は無事に終わりを迎えた。そして、なのはは3度この世界へ来る事となる。1回目は協力して貰いに行つて、2回目は対ソーディアン攻略戦での増援として、3回目はこの戦争が終わつた後に、双子を見に浅草に行つた時である。（因みにその世界では、デスピニースだけでなく、ラリアーやティスもなのはによつて助けられて3人共人間になつていて、一緒に浅草に来ています。）

おまけ2

なのはの魔力と寿命

なのはは神である為、本来は2000歳しか生きられない。（この小説での設定上）しかし、幻想郷の不老不死の人達と会う事によつて、完全な不老不死になつた。魔力においても今現在は6億を超えている。

用語

イージス計画：かなり莫大なエネルギーを消費すると同時に、地球やその周辺をある特徴を持つたバリアで守ろうと言う計画で、そのバリア発生装置の事をイージスの盾と呼ばれる事からその名が付いた。因みに必要なエネルギーは地球全体で使用される電力の2日分である。その為、なのはは異次元からの助けを予定している。なのは達、反管理局側の力でも間に合う量なのだが、その後の戦いなども考慮し、こういう計画になつた。必要魔力は7億である。

地球に来たハルケギニア組のデバイスフラグ確定しました。

この外伝でのラリアーの機体はヒュポクリシスではありますが、武器や腕の数が違います。（武器が剣ではなく槍になっていて、腕も4本から2本になっている。因みに、アポストレーの時は正反対に剣を回転させながら投げて、刺さつたら剣が爆発します。パラディソスも使用する武器が逆になります。）

ティスの性格が卑怯ではなくなり、気が強いだけの設定です。3人共デュミナスに対しては不信感を持っています。ただ、生み出してもらった恩があるので、従つていに過ぎません。つまり、原作のようにデュミナスに忠誠を誓っているわけではありません。尚、デュミナスに取り込まれなかつたのは、なのはがデュミナスを取り込まれる前に一時的に別の場所に移動させたからです。なので、人間にしてくれた事も含めて、なのはにはデュミナスの時以上に感謝をしています。3人の機体については、エレオス（デスピニスの意向）だけ自爆させていて他の機体は健在です。イージス計画の時にも出てくる予定です。因みに、無印番外編第2話で海鳴に来たアクセルとアルフィミィは、この外伝世界から來たのではなく、原作のスバルボOG外伝から來たという事になっています。次回は第2回対管理局会議が行われます。

シャルロット達にデバイスを依頼されて数日後、なのは達は2回目の会議を行なおうとしていた。

場所：ゆりかご内部の玉座の間

視点：なのは

私は皆をゆりかごの玉座の間に集めて知らないメンバー同士に挨拶や自己紹介をさせてから席に座らせた。主に、前回出席できなかつた人やしなかつた人達も参加している。勿論、夜天の書の主であるはやてとヴォルケンリツター達もだ。因みに本来、ゆりかごの玉座の間には、会議室の様な机や椅子は無いのだが、一番広いと言う事で此処に会議用の椅子と机をスキマで持つてきたのだ。全員が席に座ると

「では、これより第2回会議を始めたいと思います。」
と私が言い、続けて

「今日此処に集まつて貰つた理由は二つあります。一つ目は、夜天の書の改ざんによつて起きた悲劇を終わらせる為の準備が出来たので、その作戦会議。もう一つは、夜天の書の闇を求めてヴォルクルスの手下と管理局がやつてくるので、その対応やどうするかを決める大切な会議です。では、意見のある方はどうぞ」

と言つ。こうして会議が始まつたのだが、誰も手を上げずにいたところを私が作戦を提案した。すると。作戦は私が考えた物で直ぐに決まつてしまつた。私が計画した作戦と言うのは、で、管理局やヴォルクルス教にの人間には地球に入れずに、夜天の書を完成させてから、管理者権限を使用して、オリジナルのデータを上書きするというのだ。前考えていた作戦は、止めて此方の作戦にしたのだ。因みに、地球に入れないための策は、イージスの盾を使おうと提案した。既に、イージスの盾発生装置は全て完成しており、いつでも

準備は万端となつてゐる。もし入られたとしても、魔導師相手なら改良型AMFで一方的に潰せるから問題ない。とはいっても、管理局の艦隊もリングディ提督達の裏切りによつて降りてくる前に全滅させられるだらう。そう、この作戦で、リングディ提督達は完全に表立て管理局と戦うと言うわけだ。問題はルオゾールなのだが、そちらも兄さん、さくら姉さん（婚約している為そう呼んでいる。）、アリサ、忍さんで対応する事になった。本當は、愁さんも警戒する場所に入れるべきなのだが、私の能力により、此処には来ない事が判つてゐる。とはいっても警戒しないわけではなく、念のために私の遍在を待機させる。そして、イージスの盾には膨大なエネルギーが必要となつてくる。なので、仲間の魔力を温存させる為に、並行世界の力を借りる事となつた。その交渉も私が担当となつた。

こうして会議は終了したのであつた。

会議の翌日、並行世界に行つた私であつたが、ハガネ・ヒリュウ改・クロガネに居た戦力の内、SRXチーム、ATXチーム、教導隊（オウカさんも教導隊に所属している。）、シャイン王女、テスラ研、マオ社にいる人達にしかOKは貰えなかつた。なので、エネルギーが不足という状態になりかけたが、幸い、テスラ研に預けていたゴット・グラギオスがまだ解体されずにいたので使用される事となつた。そのお陰で、エネルギー不足という危機からは脱した。因みに、ゴット・グラギオスの機体制御や出力制御は、シャイン王女がやる事となつた。

そして、更に3週間後、リングディ提督達からもう直ぐ管理局の艦隊が到着するとの報告があつたので、私は2日後に作戦を決行する事を仲間達に連絡した。

仲間達に連絡して数時間後、私は幻想郷の永遠亭に居て、詠琳と会つていた。目的は、少し前に頼んでいた代物が出来たので取りに来たのだ。

「はい。頼まれていたものが出来たわ。」

と言つと、詠琳さんは私にビンの入つたケースを渡してくれた。そのケースはかなり大きく、普通の人間では持てない重さだったが、私は既に人間を捨てた身、この程度は朝飯前だつた。それから、にとりさんの所に行くと、12隻の新型次元航行戦艦を建造している最中であつたが、声を掛けて依頼していたデバイスを受け取つてから海鳴に帰つた。

視点終了

その2日後、なのはは仲間達に連絡したように作戦を開始した。まず手始めに、なのはが、予め呼んでおいた並行世界の機体にエネルギーケーブルを繋げてバリア発生装置にエネルギーを送りバリア”イージスの盾”を発動させた。そして、はやてにある特殊なデバイスを持たせてから、夜天の書になのはが前もつてジュエルシードの魔力やその他の魔力を利用して作り出していた擬似リンクカーコアを、収集させる。そして

「闇の書、起動!!」

とはやてが言つと、はやての体が光りだした。因みに、守護騎士達は、記憶や感情のデータを「コピー」してから蒐集した。そして、光が止むと、そこにははやてではなく、銀髪の成人女性が立つていた。そう、彼女こそ、夜天の書の管制人格ある。そして、その銀髪の女性が

「では、主がお目覚めになるまで、戦おう。」

と言つとなのはは頷いてから

「わかった。じゃあ、海上まで行こう。」

と言った。そして、なのはは、海のある方角を向くと、高速で海へと向かつていった。そして、それに続く管制人格。

2人が海上に着くと、2人は激しい戦いを繰り広げていた。

そして、管制人格が、なのはに向かつて殴りかかる。しかし、それは紙一重にかわされて逆に膝で蹴られる。すると今度はディバインバスター（弱）で管制人格を吹き飛ばした。するとそこへはやての声が聞こえて、目を覚ましたと報告があつた。それに喜ぶ仲間達であつたが、なのはは渡したデバイスを使うように言った。それに従うはやはてはデバイスを起動させて、デバイスに記録されているシステムを起動させ、同じく記録されていたオリジナルデータを使って元の夜天の書に戻した。因みに、そのシステムとは、防衛プログラムによつて、管理者権限を制限、又は使用不可能な状態になつた時に発動させる事ができるもので、防衛プログラムの全ての機能を無視してデータを書き換える事が出来る代物である。こうして、ハ神はやはては真の夜天の書の主として覚醒を果たしたのであつた。そして、それと同時に、管理局によつて改変された事で始まつた闇の書事件も終わりを告げた。

しかし、問題は残されている。そう、管理局と、沃尔クルス教徒の事だ。

先ず、沃尔クルス教徒についてなのだが、なのはの予想通り、データ書き換えが終了して2分後、ルオゾールが部下と死靈兵を連れて地球に現れた。しかし、事前に待機していた恭也達の活躍で、撃退する事が出来た。そして、管理局の艦隊についてなのだが、リンク提督率いる穩健派の裏切りによつて消滅した。その後、並行世界から来た人達にお礼を言つてから、時間操作でエネルギーを元の満タン状態にして、元の世界へと返した。こうして、管理局との戦いはなのはたちの勝利で終わりを迎えたのであつた。しかし、そこ

で異変が起きた。

それは・・・・・八神はやでが倒れてしまつたのだ。

A, s 編6話「闇の終焉」（後書き）

ジエイル特性の兵器は、あくまでなのはの作戦が失敗した時に暴走した防衛プログラムのバリア（A, s の物理と魔力の複合四層バリア）を、魔力を殆ど使わずに破る為に使用するはずでした。まあ、後付設定ですが見逃して頂ければ幸いです。
それと、グダグダ＆馴文ですみません。

はやてが倒れて心配する仲間たち、しかし、なのはははやてに触れてから

「うん、ただ、初めて魔法を使ったことで疲れたのが原因だね。これなら明日には目を覚ますよ。」

と言った。その事に安堵した仲間達であった。そして、なのははアースラの医務室ではなく、病院に連れて行くことを提案するのであつた。

なのは曰く

「はやての足の麻痺は、夜天の書が真っ当な魔導書に戻った時にリンカーノアの侵食も止まって治り始めている。だから、このまま病院に連れて行つたほうが石田先生に迷惑がかからないし、はやても怒られない。」

らしい。しかしはやはは病院に連れて行かれる事になつたのであつた。

そして、翌日の晩、はやはなのはの時間操作により着実に回復を早めていき、退院したのであった。その時の石田先生の表情はとても嬉しそうであった。

それから数日後、なのは達は3週間後に管理局に攻め入る事を決意し、予定より早く管理局つぶしの為の準備を早め始めるのであった。

その計画は、順調に進み、2日後にはクイントの娘であるスバルが、大地の魔装機神であるザムジードと契約を交わし、前世の記憶をも引き継いだ。その事により、前世でザムジードと契約する前から使っていたドリルーム型の“デバイス”アルクトス”を呼び覚まさせた。こうして、聖王オリヴィエを守っていた4騎士は勢ぞろいして新しい戦力も増えた。そして、その2週間後には、ハルケギニア組のデバイスや訓練も含めて全ての準備が完了したのであった。

それから数日後、なのはは戦艦を率いてミッドチルダと管理局の本局に進行するのであった。

おまけ

ギーシュとマチルダのデバイス
ディノバースト1号機と2号機

〔冥王計画〕ゼオライマーに登場する山と地の八卦ロボの良い所を合わせて出来上がったデバイス。
見た目も、2機が合わさったような形状であまりまとまりがなく、機動力もない。

キュルケとシャルロット

火のプライストと水amp;風のランワイン

アンリエッタとウエールズ

水のガロウインと風のランヴェスター

ランヴェスターは見た目は風のランスターだが、ティーダ・ランスターが味方に居る為、名前を変えざる得なかった。

アリシア・テッサロッサと月村すずか
雷のオムザックと月のローズセラビィ

因みに八卦デバイスの見た目はスパロボMXと同じ。

ザムジード

大地の魔装機神でカーキ色である。また、スバルがEISスキルとして振動破碎を持つ為、このデバイスとの相性はかなり良い。

短くなりました。次回からは最終章突入です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4679n/>

魔法少女リリカルなのは～聖王と魔装機神～

2011年3月7日19時26分発行